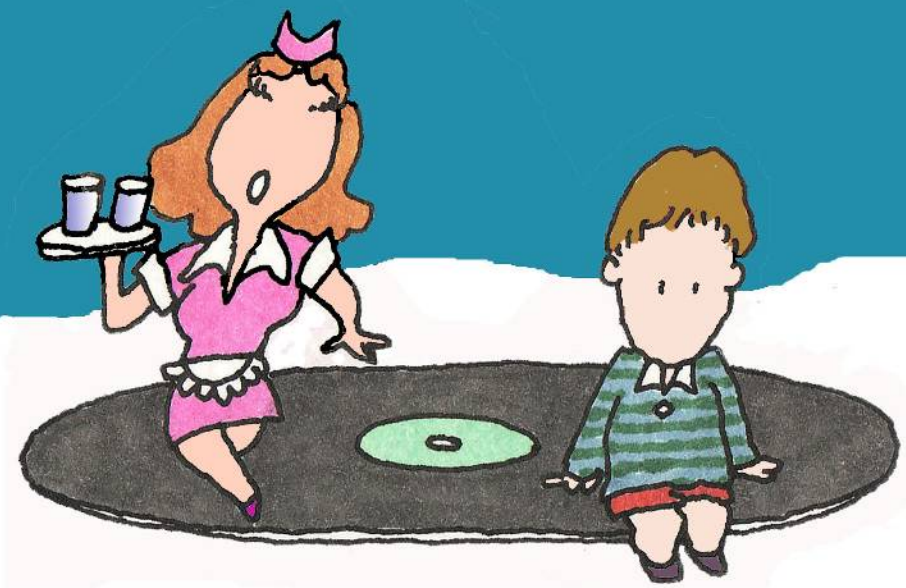
連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol.6 No.3

第23号

対人援助学会

NO. ２３　M O K U J I

目次		002
ハチドリの器	見野　大介	003
執筆者@短信	執筆者全員	004-013
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	014-018
臨床社会学の方法	中村　正	019-028
ケアマネだからできること 特別編　哀悼日記	木村　晃子	029-034
街場の就活論	団　遊	035-036
カウンセリングのお作法	中島　弘美	037-042
映画の中の子どもたち	川崎二三彦	043-044
コミュニティを探して	藤　信子	045-047
蟷螂の斧　Part2　No. 6	団　士郎	048-054
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	055-057
学びの森の住人たち	北村　真也	058-060
幼稚園の現場から	鶴谷　主一	061-066
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	067-074
先人の知恵から	河岸　由里子	075-080
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	081-084
日本のジェノグラム	早樫　一男	085-088
きもちは言葉をさがしている	水野　スウ	089-098
七日参り	竹中　尚文	099-102
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	103-104
男は痛い！「龍三と7人の子分たち」	國友　万裕	105-110
援助職のリカバリー	袴田　洋子	111-113
周旋家日記	乾　明紀	114-117
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	118-123
役場の対人援助論	岡崎　正明	124-129
新版K式発達検査をめぐって	大谷多加志	130-133
十代の母という生き方	大川　聡子	134-139
電脳援助	浅田　英輔	140-146
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	147-149
Journey to my PhD@York in イギリス　最終回	浅野　貴博	150-151
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	152-157
周辺からの記憶	村本　邦子	158-168
病児保育奮闘記	大石仁美	169-172
ラホヤ通信	高垣　愉佳	173-176
知的発達障害の家族の日々	大谷多加志	177-179
対人支援点描	小林　茂	180-182
「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	183-191
海の向こうにでて見れば	石田　佳子	192-198
清武システムズ	しすてむきよたけ	199-207
そうだ、猫に聞いてみよう	小池　英梨子	208-209
新連載　東成区の昭和・思い出ほろほろメモ	柳　たかを	210-217
編集後記	編集長＆編集員	218-220

ハチドリの器　6

見野　大介

Mino Daisuke

耐熱片手鍋：陶芸工房八鳥
鍋敷き：八鳥の嫁（家具職人歴１２年）
さんかくなべつかみ：Sewing Fu-ra
全て手作りの３点セットです。

翠釉の急須と湯呑：陶芸工房八鳥
小マメコースター：八鳥の嫁

第23号 執筆者 @短信

柳　たかを　新連載

2015 年 3 月末までの 10 年間、兵庫県宝塚市の芸術系私立大学でマンガの専任教員として学生諸君と共に学んできました。

子供の頃から手塚治虫のファンで文系の私立大学生だった 40 数年前は、おもにストーリーマンガを描いていました。手塚治虫の著書で「マンガ家をめざす人は、四コママンガはマンガの基礎、勉強しておくべき」と書いてあったので、あわてて外国雑誌のコマ漫画を参考に練習したあたりからカートゥーンに目覚めたと思います。

大阪の夕刊紙が日曜版紙面にコマ漫画の募集をしていて、腕試しに応募したところ、幸運にも採用され「来社されたし」とのハガキをもらったことが縁でマンガを描いて原稿料がもらえるようになりました。

一生マンガを描いて生きていきたいけれど、それは雑誌のストーリーマンガにかぎらないという気持ちも強く、結局なにがなんでも上京して、ストーリーマンガ家をめざす道は選びませんでした。

マンガ領域に入学してくる学生の多くは、程度の差はあれ好きな絵を描いて生きていきたいという素朴な夢を持っています。私は画力がなくても描きたい思いの強い人、授業を休まない人、そういう学生を励ますことに魅力を感じていました。

とくに 4 年生時の卒業制作の指導では、自分に何を作れるのかわからないという学生と本人が納得するまでじっくり話し合い目標をもたせ、励まし続けて取り組ませ、完成が見えるところまで応援することに教員としてやりがいを感じました。

今振り返ると、私自身がドロップアウトつまり受験競争や就職から距離をおき、マンガ道に慰めと生きがいを見出そうとした人であり、かつての不安な自分が目の前の学生とオーバーラップし、学生を励ましているつもりが心の中の自分を励ましていたようにも思っています。

新連載「東成区の昭和・思い出ほろほろメモ」は、幼い頃の迷いや不安は前に進むために誰もがくぐる壁で、おなじ苦労なら楽しむ気持ちを忘れないでという願いをもって描いていた作品です。

齋藤　清二

昨年までも、もちろん京都にくる機会はたくさんあったが、ほとんどが仕事でとんぼ返りであり、じっくりと京都の街や観光スポットを見てまわるというような機会はほとんどなかった。さらに、ここ 2, 3 年は特に観光シーズンに京都の宿を確保することが難しく、紅葉に対するあこがれはますばかりであった。今年はついに念願の京都に住むようになったのだから、紅葉の観光スポットを出来る限り見て回るぞ、と意気込んでいたのだが、(実際にいくつか行ってみたのだが)、そこで気がついたのは、モミジの樹が紅葉するのは、一斉に起こるのではなくて、場所によって、あるいは個々の樹によって大きなばらつきがあるということ。さらに同じ樹木でも、枝の先端と樹幹に近いところでは時間差があること。ある樹のある枝が、見事に紅葉しているときには、他の部分はすでに葉が落ちてしまっていたり、逆にまだ緑だったりするということ。これらは良く考えてみれば当たり前なのだが、「当園の紅葉は今が見頃です」というような標準化(？)に意味があるのだろうか、と改めて考えさせられた。こんなことを考えながらモミジを見ていると、ある意味では興味深いのだが、目の前の「今、ここ」のモミジを全身で体感するという経験からはどうしてもズレてしまうので、これも性格かなあ、とあらためて考えさせられている今日この頃です。

石田　佳子

最近、私は“早起き・ジョギング・ラジオ体操”にはまっています。これまでは夜型で運動とは無縁だった私が、これほど健康的な日課を実現しているのは、数十年ぶりどころか生まれて初めてです。というのも、持病の治療が必要になって、日本に戻って一人で暮らしているからで、良いことと悪いことは同時にやってくるのかもしれません。

今住んでいるのは、関西国際空港の近くの小さな町で、現役時代に住んでいた京都や静岡の都市部とはだいぶ雰囲気が違います。臆病な私たち夫婦は、「実際に暮らしてみなければ、マレーシアを“終の棲家”にできるかどうか、わからない」と考えたため、その見極めがつくまでいつでも帰れる(家財道具を保管しておけ、帰国時の宿代わりにもなる)場所として、この町に小さな住まいを確保したまま、マレーシアでの生活を営んで来たのです。

だから、当初は登山のためのベースキャンプのように「拠点として便利なこと」意外は期待していなかったのですが、住んでみると次のようなメリットに気づきました。

① 家賃・物価が安い。② 大型商業施設は少ないが、中小規模のスーパーと産地直送店が多い。
③ 人と車が少ないので、空気がきれい。④ 地域住人の顔つきが穏やか(大人は大阪中心部へ

働きに出ているため、昼間は老人と子どもばかり)。。。とりわけ、地元で採れた新鮮な旬の野菜や海産物などが安く手に入ることは、私にとって大きなメリットでした。ちなみに、この数か月間マレーシアでは、空気が淀んで前方が見えないほどヘイズ(大気汚染)が酷く、健康被害を避けるた

め、屋内に閉じこもる人が多かったようです。人は幸せになるために働いてお金を稼いでいるけれど、幸せに暮らすためには物をたくさん持つことや遠くへ行くことが必要な訳ではなくて、案外身近でシンプルなことが大切なのだ、と思ったりしています。

小池英梨子

先日、衝動的に自転車で姉の所まで遊びに行ってきました。日の出とともに兵庫県西宮市の家を出て、17 時に東舞鶴に到着。122 キロ、11 時間、もう二度とやりません。でも信号の少ない田舎道をただただ走るのは気持ちよかったです。

途中から未体験のアキレス腱の痛みに襲われるまでは。素敵な景色や特大の芋虫や蛇、未知との遭遇ともいえる道中はとても楽しかったです。
ハプニングさえ楽しめる心の余裕を忘れたくないなーと思った休日でした。
どうぶつ基金 HP はこちら
https://www.doubutukikin.or.jp/

しすてむきよたけ

僕は石川県金沢市を拠点とし、「清武システムズ」を運営中です。一人なので運営するというほどのものではないです。何をする会社かも決めていません。しかし、ありがたい事に数年前からいくつか仕事をいただいています。

今年の夏くらいに思いがけない依頼がありました。3、4 年ぶりに、京都で再会をし、会話の流れで東京発のプロジェクトに参加ご依頼をいただきました。そんなに長い付き合いでもないのですが、興味深い人だと思っていたこと、まさかそんな話が出ると思っていなかったので、嬉しさと驚きの出来事でした。

お話をくれた彼女は、人を探し中だったようですが、これまで計 4 時間くらいしか同じ時間を過ごしたことのない僕らですから、ほぼほぼ当時の印象と今の印象を受け、直感とタイミングで起きたことだと思います。

最初は、事務局開設にあたり、急ぎでもあったようで NPO の理事に。ところが、気付いたら、あっという間に事務局長になっていました。

適任だと思いませんが、いろいろな状況の中で決まったのだから、知り合った方々にご協力いただいている最中です。腹を括っている最中でもあります。

これも、お誘いくださった方の頑張っている姿に影響を受けたことに違いありませんでした。今はその方だけでなく、他のメンバーのそれぞれ違う役割と視点にも影響を受け、結構迷惑なこともしているだろうと思いつつ、ヤンヤヤンヤ動かせていただいています。

ということで、「清武システムズ」東京に出没中！

さらに、並行して新しいコトも進め始めています。挑戦し、形にしてみようと思います。東京話があったから、また、行うことの目的が不明な段階から話に付き合ってくれる人たちの存在が具体化させてくれているように思います。自分の動き方を振り返り、思いついただけでもありますが！

さー年度末後半、僕は大忙し、でもすっごく貧乏！でも、だからできること、知り合うこと、増える仕事がある。巡り合わせで起きていく今を楽しんでいます！

小林茂

浦河でも、日に日に寒くなりました。しかし、北海道でも本格的に雪が降るまでもなく防寒着を厚くするだけで間に合っています。この時期から楽しみなものの一つにチカ釣りがあります。今日は Mr。べてると呼ばれる早坂　潔さんとチカ釣りに行ってきました。釣れる時は半日で 200 匹くらい釣れます。チカという魚は、私が浦河に来るまで知らない魚でした。キュウリウオ目キュウリウオ科に属する魚だそうです。しかし、なぜキュウリウオなのかと言えば、形が野菜のきゅうりみたいな形であるのかというと、そうではありません。魚の匂いがきゅうりの青く臭い匂いだから、キュウリウオと言います。大きさ（成長するとイワシぐらいになる）や形自体は淡水魚のワカサギにそっくりで、味も白身でフライにすると、とても上品な味がするおいしい魚です。冬の北海道に来て、居酒屋なんかでチカのフライとメニューにありましたら、ぜひご賞味ください。おいしいですよ。

水野スウ

週に一度、わが家をひらいて、誰でもどうぞ。ただそれだけの場である「紅茶の時間」が、2015 年の 11 月でちょうど満 32 年。

紅茶の誕生月だから、ってわけでもなかったのだけど、毎水曜午後のふつう紅茶にくわえて、11 月はたまたま、ゲストのいるとくべつ紅茶が 3 回あって、私がよそに出かけていく出前紅茶が 8 回あって、平均すると 2 日にいっぺん、何かしら紅茶の時間をしているという、めっちゃ忙しく、でもたっぷり充実したひと月となりました。

ゲストの 3 人目は、娘。本の編集やブックデザインを細々と仕事にしてきた彼女が、これまで歩いてきた自分の道を、集まってくれた人たちの前で、それはそれは誠実に語りました。

きまじめで頭が四角く、その分、生きることにぶきっちょな娘が、悩み、考え、もがき、自分なりの必要最低限のルールをきめて、それを愚直に守りながら、一歩一歩。ふと気づけばそれがいつのまに、彼女オリジナルの道になっていってたんだなあ。

誇れるような結果は何もだしてない自分だけど、それでも、もしも自分がいなくなって、誰かの胸にぽっかり穴があいたとしたら、その穴をうめられる代わりの人は世界のどこにもいない。「わたし」みたいな人はいるかもしれないけれど、この「わたし」にそっくりそのままかわれる人は、どこにもいない。それはまぎれもない事実なんだ。

『ほめ言葉のシャワー』の最後のコラム、「あなたの存在は、ほかの誰ともとりかえがききません」っていう言葉は、生き悩んだ彼女ならではの、こんな想いの中から生まれてきたということ。それって、あまり深く悩むことなくハッピーに生きてきた人だったら、たぶんなかなか思いつかない哲学だったのかもしれないなぁ。

娘が生まれて、私は切実に子育て仲間がほしくて、ただそれだけの理由ではじめ

た「紅茶の時間」。あの時、0歳だった娘が、今、こんなかたちで自分の等身大の物語を、紅茶の誕生月に、紅茶で語る。

それってまるで、彼女にしかできない、紅茶の時間へのバースデープレゼントのようでした。

高垣愉佳

約1年ぶりにラホヤ村に行って来ました。いつもホームレスが居た場所からホームレスが消えていたり、バスの路線が変更になっていたり、ショッピングモールでは拡張工事が始まっていました。これらの変化景気と関連しているのだろうという事はさておいて、同じ場所でもたった 1 年でこれだけの違いがあるのだという事を今更ながらに感じました。どんな情報も人の目に触れる頃にはもう別の形に変化しています。私たちが手に入れる事が出来るのは、常に既に古くなった情報だけです。そうした情報の中から何を見出し、何を学び、自分が日々出会う現実にどう生かしていくのかが大切なのだと改めて思いました。

浦田雅夫

先日、ご縁のあった師匠がご逝去されました。個人的にいつも気にかけていただいておりました。感謝です。ありがとうございました。

早樫一男

最近、万歩計を利用し始めました。一日の目標は10000歩ですが、なかなか達成しないというのが現状です。この一カ月の平均は8600歩であり、まだまだ努力が必要な状態です。これまでも、健康管理を意識していました。しかし、「具体的な行動は？」と問われたら「何もしていません」「意識しているだけです」といった答えしか出てこないというのが、実際のところでした。

今回、目標を《数値化》することによって、具体的に動くのだということを実感しているところです。

中島弘美

対人援助学マガジン 1～18 号は「子どもと家族と学校と」を連載しました。19～22 号は「カウンセリングのお作法」を執筆中です。

2015 年 10 月 31 日と 11 月 1 日、立命館大学で開催された対人援助学会第 7 回年次大会に参加しての感想をほんの少しばかり。

日頃カウンセリングを通して家族支援をし、大学でカウンセリングや社会福祉士養成の授業を担当しているので、心理、医療、社会福祉、教育等の領域に関心を持っています。大会で取り上げられているテーマに触れていると、新たに経済の視点が加わりました。広い視野というよりも、高い視点、俯瞰でものをみるとでもいうのでしょうか、そんな見方の重要性を感じました。経営のことを考えながら仕事をしている個人事業主ではありますが、どうしてもお金の話はあとまわしになって過ごしていることにハッとさせられました。　もうひとつの発見は、対人支援をしていることの意味づけをさらに明確にすることの大切さです。なんとなく支援しているのではなく、そのことがどういう意味があり、どう影響するかをさまざまな視点で見直す必要があると思いました。

また、参加者は、大学院生だけでなく、大学の学部生の姿もあって新鮮でした。若い人たちに関心を持っていただき、彼らが育っていくと良いなと目を細める大会だったと思います。

2001 年作画

木村晃子

この 10 月に、長い療養生活を終え、父が天国へ旅立った。話すことも、食べることもできず、この数年は、ベッドから起き上がることもできずに、ひたすら横たわっている父だった。本当に、長いこと頑張ってくれたなと思う。自由にならない父の闘病を思うと、天国への旅立は安堵であるが、私は、ぽっかりと穴があいたような気持になっている。想像以上に、父の死は自分にとって大きく影響している。厳しくも寛容な父だった。幼少のころは、夜に寝転びながら、たくさんの本を読んでくれていた。抑揚のある読み口は、物語の中へ私をすぐに引き込んでくれた。読書が好きだったのは、その影響なのではないかと思う。

このマガジンの 7 号では、父と母のことを書いた。13 号では、私が子どもの頃に飼っていたひよこの話を書いた。そのどれも父由来だ。そして、今回も私的なことではあるが、哀悼日記として、25 年も前の父の書いた病床日記を重ねて書いてみた。紹介しきれないほどの、古い消印の父宛の手紙。当時の若い人の手紙のやりとりに、言葉の豊かさや、字の美しさ、そして、見えない相手に伝える心をたくさん発見した。改めて、文字の力を感じた。

対人援助学マガジンが、対人援助に関わる様々な分野からの歴史的記録になることは言うまでもない。専門性と非専門性の交差するところで私たちは日々仕事をしている。誰の役に立つのかわからない私的記録をご容赦願いつつ･･･

藤信子

今年は秋が例年よりも早くきて、久しぶりに以前のような秋らしい晴れた日が続いているうちに、また暖かくなったせいか、紅葉の色があまりよくないように感じる。今日近くの妙心寺を歩いたけれど、くすんだ色の紅葉がほとんどだった。昨年の写真だろうと思われる宣伝のポスターのきれいな紅葉を見て観光に来る人はがっかりするんじゃないかと余計な心配をした。欅は割に早く落ちて，銀杏の色は例年と変わらないようだけれど、先週の雨で葉が散ってしまった木もある。銀杏は同じ場所にあっても、先日の雨で落ちてしまった木と、まだ黄色く輝いている木があり、個性が違うように感じるのは私だけだろうか。

中村周平

先日、卒業校である立命館大学大学院応用人間科学研究科に伺わせていただきました。所属していた家族機能・社会臨床クラスターの中村正先生に声を掛けていただき、「ようこそ先輩！」ということで、在

籍されている院生の方々に「応用人間で学んだ2年間」、「修了後の私」などについてお話をさせていただきました。当日までに話す内容を考えていると、当時の記憶と現在の学びが何度も何度もリンクすることがありました。「家族クラスターで経験させていただいた修士論文と向き合ったあの時期は、今の自分の中で確実に活きている…」そんなことをあらためて感じました。当日、お役に立てたかはわかりませんが…汗。皆さんが真摯に聞き入ってくださったこと、先生や院生の方からたくさんのフィードバックをいただけたことを本当に感謝しております。「修士論文は、ただ学術的な論文ではなくて、自分の過去と向き合い、これまでの生き方を形にするもの」と言ってくださった家族クラスターの先生方の言葉は今でも心に残っております。相変わらずの中村ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

浅田英輔

電脳援助なんていう連載を始めて、もう13回目になります。意外なところから「読んでます」といった感想を聞けましたが、嬉しいものです。私は電脳ものが好きですが、家電はそれほど好きではありません。テレビも好まないので、録画予約もあまりせず、何チャンネルがどこの放送局かもよく知りません。でも掃除機は好きです。自宅には妻がセレクトした RILO（パナソニックのロボット掃除機）がありまして、これはこれでかわいいやつなのですが、本当は同じ値段のいい掃除機が欲しかったです。ヘッドの軽い、取り回ししやすい吸引力の強いやつが好みです。掃除機をかけ終わった部屋の、なんと心地いいことよ！掃除機が通ったの絨毯の模様の美しいことよ！そこに子どもたちがものを片付けずに置くことへの怒りよ！片付けろーー！！

中村正

7回目となる対人援助学会を終えた。2015 年 10 月 31 日から 11 月1日にかけて立命館大学で開催した。大会長をしていたのでホッとしている。運営をしていて思った。単純な学会にはしたくないと。まずは理事の選出。全員野球をめざしたい。選挙はするが一票でも票が入れば理事になる方式だ。自分で入れてもよい。こいつと一緒にやりたいと思う人を入れればいい。こうして理事は 100 名近くになった。学会員が 230 名程度なので半数近い人が理事となる。理事の皆さんにお願いしている。まずは学会に参加して欲しいこと。そしてポスター発表、口頭発表、企画ワークショップを主催して欲しいこと。理事会企画にも参画して欲しいこと。そしてこの『対人援助学マガジン』あるいは『対人援助学研究』に投稿して欲しいことである。もちろん毎回それだけの方々を集める理事会は開催できないので理事長が常任理事を選ぶこととし、日常の学会の執行を担当してもらうこととした。団さんがいつも言うことだけど、『対人援助学マガジン』は自走している。通常のニューズレターの発行のようなストレスが少ない。自発的だし、何を書いてもいい。学会それ自体がそうなっていけばよいと思う。理事会はやりたい人がやるようにしていき、学会それ自体もそうしたい。そしてとうめんは登録学術団体をめざさないこととした。半数が大学等の機関に所属している必要があるからだ。10 回大会くらいまでは、対人援助の実践者や若い人たちの自由な交流の場にしていきたいと思う。それでもしかしまた異なる意味で学術的でありたいと思う。実践者、当事者、企業人と研究者であることが矛盾せずに相乗効果を発揮できるように、資格ある専門職者のポイント制を作動させて集めるのでなく、さらに異なる視点から自らの専門を見つめ直すことができるようにしたいと思っている。今回もそうした人の参加が散見された。現役の医師が異なる意見交換の場を求めて参加してくださった。会員にもなっていただいた。自らを異なる視点から見つめ直すということは教養のなせる技だと思っている。そして何よりも今回は藤信子さんが主に提案し、常任理事会でも旺盛な議論となり、「お金と対人援助」「経済と対人援助」にテーマを定めた。「平和と対人援助」という案もでた。社会的な視点のある理事会のメンバーに脱帽した。いままでとは異なる視点からの基調講演も経済学者にお願いできた。理事会企画の発表者もそれに答えてくれた。幼児教育の現場と病児保育の展開からの教訓、顧問福祉士の提案等のアイディア豊かな経営者の話、障がい者の就労をとおした環-福連携の話、発達障害のある子どもへのサービスとお金の話等、貴重なものだった。『対人援助学研究』誌も旺盛に投稿ができるようにサトウタツヤ編集長（副理事長）が構想を練っている。そして望月さんのあと、学会理事長をおおせつかった。ユニークなものにしたい。

2001 年作画

牛若孝治

「今年 1 年を振り返ってみると」と口にするのはまだ早いが、考えてみれば、この「対人援助学マガジン」に連載するのは、この号が今年最後。そこで、思い切って「今年 1 年を振り返ってみると」と言いながら、早々と今年 1 年を振り返ってみたい。

一人暮らし 20 数年。17 年間住んでいた京大近くのマンションは、何かと便利だったが、さまざまな理由で引越ししたいと考えていた。そこで、年が明けてすぐに、行きつけの病院に行ったときのこと。私は、その病院系列の薬局の上にある学生マンションの 1 室に引っ越したいと思い、その学生マンションを管理している不動産会社を病院で調べてもらった。早速その不動産会社に行って、入居を希望しているマンションの状況を調べてもらうと、あいにく満室とのこと。代わりに紹介されたのが現在引っ越したアパート。礼金が少々高かったものの、台所環境や部屋の向き、それに一人では十分すぎる広さ。「視覚に障碍がある人は、家裁を出しやすいので、貸してくれるか」なんてトーンダウンしている若い担当者を鼓舞しながら、偶然であった管理会社の人が、障碍がある人やセクシュアル・マイノリティーにも理解があることをしり、管理人との話し合いで、男性として入居が決まった。不動産屋から紹介さ

れた引越し屋のサポートもあって、無事に引越しが完了した。また、やく 10 年ぶりに、マッサージの職種で再就職した。しかも、男性として。さらに、私が体・書類上の性別である女性ではなく、男性の性自認を大事にしながら生きていることを理解してくれた視覚障碍のある友人たちまで与えられた。

「俺がいろいろ動いてもなあ。視覚障碍はともかく、体の性と心の性が一致してないと、社会的にどうせいろいろ不利になるやろうから」と決めつけて、今まで重い重い腰を上げられなかった私が、引越しを期に、どんどんチャンスが広がっていった。「求めなさい。そうすれば、与えられます。捜しなさい。そうすれば、見つかります。たたきなさい。そうすれば、開かれます。誰であれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」(マタイ7章7，8節)。私にとって今年は、当にこの聖書の言葉を体現したような年であった　　。

2001 年作画

袴田洋子

人生、変わりました。いえ、変えました。自分の意思で変えました。それが、今後、幸せをもたらすのか、どうなるのかは、わかりません。でも、少なくても、「今のままでは、嫌だ」という思いのもとに、これまでのパターンを変えてみようと、これまでしなかったことをするようになりました。そうして、パターンは、変わりました。変わって、よかったです。これぞ、システム論？

団遊

ぼくは大分・別府にある立命館アジア太平洋大学というところでキャリア教育の講師をしているのですが、先日、履修登録前の授業ガイダンスで 30 分ほど話をしたら、ある学生に「素晴らしかったです。もう話が完成されていますね。ぼくもいつかああいうことを大学生に伝える仕事がしたかったのですが、もう団さんの話で十分です」と言われました。大枠では褒められているのでしょうが、ぼくは同じようなことをよく色んな人に言われます。

大学の先生と言うと「そうか、その見方があったのか！」とか「目からうろこが落ちました」とか「その知性にはどう頑張っても追いつけません」とか「ほとんど寝てました」とか、そんな感想をもらうような人な気がします。でもぼくに集まってくる感想は、「おれも思ててん」とか「先言われたわ」とか「わかる～」とか、そんな感じです。

乾明紀

前号の短信で、歯痛がやや改善したということを書きましたが、その後痛みは収まらなかったので、ついに抜歯を覚悟で歯科医を訪れました。診察の結果、痛みの原因は歯が内部で割れていたことでした。

歯科医曰く「よく我慢してましたね。歯が折れているので噛む度に麻酔なしで歯を抜いているようなものですよ(小さく笑)。」と。

「おい！もうちょっと様子を見ようって言い続けたのは誰だ！」

でもそれはそれでいい経験でした。ようやく固形の食べ物もおいしくいただけて、痛みに邪魔されず思考できる状態になりました。

大石仁美

ワンを飼い始めて、7 カ月。ワンは 9 カ月になりました。この間、ワンの成長ぶりを見ていると、いろいろ面白いことがいっぱいです。

まず、成長過程は人間の子どもとよく似ています。命が短い分、スピードは速いですが、乗り越えていく段階は同じ。生後2～3か月の頃は、なんでも口にして、舐めたりかじったり。特にタオルが大好きで、いつもよだれでびしょびしょでした。

4～5 か月のころに一番手こずったのは、トイレのしつけ。「よしよし」していると、シャーッとおもらし。トイレで排泄できたときは、ごほうび付きで褒めまくり、ほっと喜んだのもつかの間、今度は、カーペットの上でシャーッ。こんなことの繰り返しで、サークルに閉じ込めておくと、退屈したのか、トイレシーツを引きずり出して、細かく噛み砕き、辺りは紙吹雪どころか、粉じん公害そのもの。ワンも粉が鼻に入って、くしゃみの連続。毎日がこんな調子で、ほとほと疲れてきた頃、トレーナーさんから、「シーツがもったいないからサークル中に新聞紙を厚めに敷いたら」とアドバイスを受け、半信半疑で敷いてみると、高分子吸水材入りのシーツと違って吸収が悪く、サークル内は尿でびしょびしょ状態になりました。「こりゃ駄目だ！」と思っていたら、二日目から、よほど気持ちが悪かったのか、ワンはサークル内で排泄をしなくなりました。トイレがしたいときは、合図を送ってくるようになったのです。今はトイレをベランダに移し、そこで排泄をしています。こうしてトイレの自立が出来たのです。

ほんまに人間の子と一緒です。今は紙おむつがほとんどなので、吸収が良い分、気持ちが悪くないので、なかなかおむつが取れません。布おむつの子が、二歳で取れるのに対して、紙おむつの子は 3～4 歳でやっと取れるという具合。ほんまによう似ています。

6ヶ月になったとき、人間でいえば、小学一年生にあたり、学び始めるには一番いい時期ということで、入所して一か月の集中訓練を受けました。すわれ！　伏せ！　まて！　これはよく覚えて、食事の時、信号待ちの時、立話をしている時などに命じなくても、察してするようになり、感心しています。7か月には、特に階段を降りるとき、飼い主が犬に引っ張られて、転げ落ちたりしないように、厳しく仕込んでくれたおかげで、一歩一歩人の目を見ながら、ゆっくりゆっくり降りてくれるようになりました。一度に出来るようになったわけではなく、何度も何度も繰り返す中で、行きつ戻りつ、固定した行動になっていったのです。　　その後もほぼ毎日のように、訓練に通い、他のワンちゃんたちと走り回って遊ぶのが楽しくてたまらないらしく、お迎えの時間が近づくとそわそわ落ち着きません。幼稚園に通う人間の子どもと同じです。そしてトレーナーさんの顔をみると大はしゃぎしながらも、

キリッとした緊張感に満ちて、出かけていくワンの後ろ姿と、帰宅して、ひっくり返って、デレデレ甘えるワンの姿は子どもそのものです。

最近伏せをしたあと、「コロンして！コロン！」
というと、腹をみせてひっくり返るようになったので、ついでに「アーン！」で、歯磨きをするようになりました。歯ブラシは私のお下がり使い、水洗いですが、思いのほか汚れているので、驚いています。最初は歯ブラシをかじって困りましたが、数回で馴れ、今はしっかり磨かせてくれます。こんなところも人間の子どもと同じです。

道で、飼い主仲間に出会うと、「あら、ブライアンくんのママ」と声を掛けられ、「ん？」と思ったものの、そうか、私はママか、と妙な納得です。

9 か月は人間でいうと 12 歳。思春期に入りました。去勢手術を受けなかったので、立派な男の子。一人前に足を上げてオシッコをするようになりました。犬も反抗期があるとか。さて、どんな反抗をしてくれるんでしょうか。楽しみです。

村本邦子

3ヶ月の間に、札幌、福島から青森、鹿児島から熊本、南三陸から多賀城、仙台、香港、フランス、島根、宮古、鹿児島から熊本、台湾と国内外を飛び回った。この後は、沖縄、福島、富山である。いろんなことをして、たくさんのことを学び吸収したので大満足だが（残念ながら人格的な成長はなかったが、知的成長はあった）、ほとんど家にいなかったので、「ちょっと調子に乗り過ぎたな」と反省もし、年末年始は田舎に帰ってのんびりしようと思っている。好きなことしかしていないからか、それでもまったく病気にならず、元気である。ただ、「晴れ女」のパワーが翳り、「災難女」になりつつあるのでは!?と密かに心配になっている。阿蘇が噴火し、宮城では大雨特別警報が出され、フランスのテロで。単なる確率の問題だろうか？

國友万裕

対人援助学会の大会で今年も発表しました。これで4年連続です。なかには関心を持ってくださった人もいましたし、「男は痛い！」を読んでくれている人も結構いるのだということがわかりました。嬉しかったです。

しかし、その一方で、発表が終わると必ず孤独感が募ります。孤独の理由は何なのでしょう。

こういう発表をしていると、ぼくの頭のなかにさまざまな思いがわきあがってくるのです。「ほかの男は、俺ほど男として通用しないタイプではない、俺ほど過酷なジェンダー教育を受けていない、俺ほど大きなジェンダー挫折をしていない、俺よりジェンダーに苦しんだやつはいない、男性ジェンダーのなかで生きていた方が楽だから、あえて、それに抵抗しようとはせず、ジェンダーの問題を看過してしまう。大抵の男が見過ごしてしまう問題に囚われてしまった俺はなんという不幸！！！　なんという孤独！！！　ひとりぼっち！！！」

こんなふうに発表していても、世間の大きな流れとなる日が来るのかと途方にくれてしまうのです。

でも、この発表のため、中村正先生はきわめて友好的にぼくの話を聞いてくれて、ジェンダーの部分ではぼくの一番の理解者になってくれています。

だから、来年も発表したいと思います。来年は横須賀だなあー。風のふく素敵な町に再び行ける日が楽しみです。

北村真也

認定フリースクール「アウラ学びの森
知誠館」代表。（http://tiseikan.com）

あっという間に、秋が通り過ぎようとしています。10 月には親支援のためのスペース、「(社)さよなら不登校」を立ち上げました。亀岡から街中へと移動する日々が続きます。

古川秀明

シンガーソングカウンセラー

成功した時よりも失敗したときのほうが多くのことを学べる。聞きなれた言葉ですが、今回はそれを身を持って体験できました。次回にどんな話をするのかを考えるのがとても楽しくなっています。よく考えたら、話が成功するかしないかよりも、自分が楽しめているということが一番の幸せかもしれません。

西川友理

京都西山短期大学で、仏教学科仏教保育専攻講師／実習指導室担当／学生支援センター担当。いろいろと学生支援に関わる事をさせていただいています。

「実習指導」の授業は大変だけど好き、という教員は多いように思います。

実習の前後で、学生が大きく変化します。その変化を間近で見るのは、本当に興味深いのです。学生の成長を見せていただく事はもちろん嬉しいですし、学生が挫折した時には、どうやってその挫折をその後に活かしていくか、一緒に考えていく成長に立ち会えます。

社会性やパーソナリティにちょっと配慮が必要な学生については、事前に担当教員が実習先に連絡をし、どんな実習にするか、一緒に考えます。「あの一、ちょっと難しい学生なんですけど…」とおずおずと先方に申し出た時に、「本人は実習したいんですよね？だったら、一緒に実習を作っていきましょう！」と私達を励まし、学生としっかり向き合って実習指導をしてくださる実習担当職員の方に何度も出会いました。その方々に、今まで何度救われたか！

そしてまた1月に新たな実習がスタートします。たくさんの現場の職員の皆様、そして利用者の皆様に支えて頂いて、学生さん達の実習は成り立っています。

坂口伊都

NPO 法人チャイルド・リソース・センター（CRC）から親子関係再構築プログラム

の著書が出ました。大阪府等の児童相談所から委託を受けて「CRC 親子プログラムふぁり」を提供しています。このプログラムは、子どもの関りを通して、親が子どもにとってよりよい親子関係とは何か考えるよう働きかけています。子どもが自分を肯定して生きられるように、親が子どもにとって安心な存在でいられるために何が必要か、ということを親と共に考えています。

こんなプログラムですから、何を実際にしているのか上手く伝えられないという思いを抱えていました。プログラムを始めて8年が経ち、現在9年目。来年度で10年になります。一組、一組違うあり様の親子と共に悩み考えるプログラムだと感じています。ここでの経験が私自身の大きな学びになり、養育里親をする後押しになっています。人を支援するのは、簡単でありませんし、時には苦しくもなりますが、親子と一緒に喜びあう瞬間もあります。CRC が活動を通して、何に着目して大切にしてきたかが伝わる本に仕上がったのではないかと思います。よかったら、手に取ってみてください。

河岸由里子

北海道かうんせりんぐるうむ
1かかし主宰　臨床心理士

発見！！:ある小学校にスクールカウンセラーのお仕事に行った時のこと。校務技師が、校庭の枯れたアジサイの花の中に隠れていたと言って、見せてくれた。プラスティックの様な透き通った身体の中に黒い部分と金色の部分がある。何とも不思議な昆虫である。第一声は「かわいい！」

ジンガサハムシと言うそうだ。大きさはテントウムシより少し大きい位か。色々な虫を見てきたが、こんな虫は初めて。金色がまぶしい程輝いていて、金属のように見える。 まだまだ知らないことが一杯ある。本当に世界は面白い！！

団士郎

11月21-22日、台北で開催されたアジア災害後心理援助国際学術検討会で報告とマンガ展をした。

国外で木陰の物語を見てもらうのは昨年の上海、今年3月のNYに続いて三度目。台湾のお客さんが今までで一番熱心に英文の作品を見てくれた気がする。会場設置のアンケートも30枚近い漢字びっしりのものが集まった。

台北は三度目の訪問だったが、慌ただしい中、近郊の町や村を訪れた。ウーライはバスで40分ほど山の中に入った温泉場。更に山の中に、土砂災害の爪痕がそのままの自称楽園があった。

食事はあちこちの屋台店であれこれ試したが、まぁおいしかった。あまり高級なところにはいっていないからね。

30分近く乗り続ける猫空ロープウエイも試してみた。お気に入りの書店「誠品信義店」にも行けた。

そして、短期充実の台北から、午後2時40分開始の授業に間に合うようにホテルを早朝5時半に出て帰国。そのまま授業開始の12分前に立命館大学に着いた。

岡崎正明

大学時代の仲間で年に1度集まる。同窓会気分で小旅行を楽しみ、夜の宴会では何も考えずバカ話をする。くだらないけど毎年楽しみにしている。

今年は幹事をしたが、準備段階は何かと考えることが多い。場所の選定から予算的なこと、雨が降ったらどうするか、電車や船の時間はどうなっているかなど細々したことだが、みなが楽しめる器を用意するというのは、それなりに骨が折れる。まあ好きでやっているんだが。

参加者に事前に集合場所や計画を連絡しているにも関わらず、前日になって「どこで待ち合わせだっけ？」とメールしてきたり、持って来いと言ったものを平気で忘れるヤツもいたりする（たいてい同じ人だったりする）。

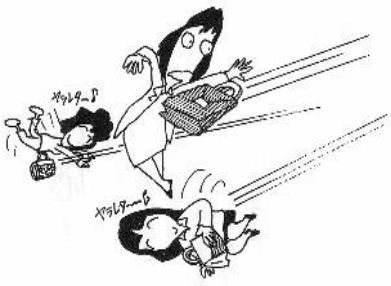
気が短い私はすぐカチンとくるのだが、そこで「まあまあ」と己に言い聞かす。相手は自分のように何カ月も前から考えたり、準備したりしていない。せいぜい1、2度来たメールをナナメ読みした程度。こちらとは当事者意識に画然の差があるのだ。怒ってもしょうがない。自分だってただの参加者のときは、そんなもんではないか。そして「飯がいまいち」だの「寒かった」だの、悪気も配慮もなく被害者面して言い放ってしまうことがあるものだ。

そんな風に考えると、与党の独善とか野党の無責任とか、社長の孤独とか部下の無力感とか、いろいろ共通する部分があるよなあ…などと派生して考えたり。でもバカ話する楽しみが勝って、その後は何も考えなくなる。

個人的にはどうせ物事に関わるなら、なるべく被害者的であるよりも、当事者的でありたいと思っている。同じように上手くいかなくても、自分の頭で考え、主体的に挑める「当事者」の方が、結果にも納得がいく気がするからだ。

本文でも当事者性に関わる話が出てくる。ぜひ一読を。

buimen0412@yahoo.co.jp



鶴谷圭一

11月1日の対人援助学会理事企画のシンポジウムでは「福祉の現場とお金」というテーマでパネリストの一人として登壇させて頂きましたが、どうもテーマとズレたことを喋ってしまい、幼稚園経営者とはいえ、自分はやっぱりお金（経営）には疎いなあ、と実感いたしました。

でも少子化の煽りを受けて、そんなことは言っていられない現実も迫ってきています。お金のことを悩まずに、好きな保育をやりた

い！と思いますが、いまの日本では難しいですねえ～。

今年度から始まった「子ども子育て支援新制度」では、待機児童解消のために国から大きなお金が動きました。それにうまく乗っていくのは株式会社の保育園だったり、保育実践より経営が好きな社福の理事長だったりします。なんだかなあ～・・・とは思いますが苦手だとばかり思っていないで、電卓をしっかり叩けるようにならなくては、と感じているこの頃です。

原町幼稚園ホームページ
http://www.haramachi-ki.jp
メール　osakana@haramachi-ki.jp
ツイッター　haramachikinder

千葉晃央

今、丁寧にノートをとりながら読んでいる本がある。この時間がとても贅沢に感じている。私の脳のスペックではノートを取らないとついていかない。それでも、鉛筆とノートという昔からのツールが深夜に鳴らす鉛筆の音が心地よい体験をしている。◆対人援助学会第７回大会に２日目から参加した。基調講演の「脱成長の時代の経済学　−対人援助者にとっての資本主義社会の現在−立命館大学国際関係学部高橋伸彰教授のお話を聴かせていただいた。理論から考える現在流行っている経済学の視点…。これは福祉現場とて同じ。福祉活動、経済活動ともに住民のところで日々行われているわけで、理論の先をいくことが今も、明日にも起こり続けていく。理論で説明することの声の大きさには気を付けた方がいい。生きているのはどっちだ！というところ。◆NPO自立サポートセンターもやいの稲葉剛氏の貧困をテーマにした勉強会に参加。普段なかなかお会いすることがなかった方々に混じらせていただいた。熱い方々、各現場最前線での実践のお話はとても刺激的。また参加したい。この社会問題に向き合うパワーがとても力強い。◆生きるというのはこういうことなんだとあらためて実感する。ある層の人が抱えてきた気持ちが以前よりみえた。生きるとはこういうことなんだ…。何かを成し遂げた人だけが偉大なのではない。生きる事実がもたらす、さまざまな事象が以前より知ることになった。

大川聡子

現在連載中の「10 代の母という生き方」が、科研費の研究公開促進費（学術図書）の助成を受け、晃洋書房から出版されることになりました。詳細は次号でお知らせします。

11 月は American Public Health Association に参加するためにシカゴに行ったり、ニュージーランドの Plunket Nurse を招へいして講演会を実施したりなど、私にとって非日常的な業務が多く、気づいたらあっという間に 12 月でした。博論執筆時がピークだと思っていた忙しさが年々加速していてびっくりです。

来年は今年より余裕がありそうなので、マガジンの原稿も〆切に遅れず、編集長のお手を煩わせることもないような気がするのですが…（願望）。

2001 年作画

大谷多加志

2015年も、残すところわずかです。年末になると年賀状の準備が気になるのが定例ですが、ここ２年、喪中が続いて年賀状を出していません。人を看取る、そういう年齢になったのだなと思います。喪中ハガキは投函済みで、一部お店のセールスのものを除けば、2016 年も我が家に年賀状は届きません。学生時代の友人、知人とのやりとりは年賀状くらいしかないことも多く、直接近況を知る機会がありません。しかし、間接的な形で多くの人の近況を知ることができています。ある人は、仕事関係者の人伝で、ある人は学会誌の紙面上で、ある人は研修会の案内で、活躍を目にする様になりました。これもまた、そういう年齢になったのだと思います。お互い、よい年のとり方ができているような気がして嬉しいです。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

20 号(2015 年 3 月 15 日発行)の執筆者短信で DV 被害者である女性のことに触れた。その後、何度か電話で彼女の思いを聞いた。なかなか決心がつかないようだった。そうしている内に、事態が深刻化しないか心配していた。夏に、突然、彼女の携帯が不通になった。私は妻と、彼女のアパートをこっそりと見に行った。生活の気配がしない。2、3 日程してから、また様子を見に行った。ズボンと T シャツの洗濯物が干してあった。また、数日して様子を見に行った。子供の洗濯物が干してない。3 歳と 0 歳の子供がいるのだから、夏に子供の洗濯をせずに暮らせるわけがない。ポツリポツリと一ヶ月程様子を見に行った。このアパートには彼女と子供はいなくて、シェルターに逃げ込んだのだろうと想像した。待つことにした。先日、彼女から電話があった。やはりシェルターにいた。お寺とおばあちゃんにだけ、無事でいると知らせてくれた。◆悲しみに寄り添うのが私の仕事である。悲しみは困難と同居することがある。悲しみに寄り添うと言うと、当事者でないのだから分からないだろうという声もある。実体験しないと分からないなら、死んだ人の気持ちは死ぬまで分からないことになる。人の死に対する悲しみ、それを共感するのは大切なことである。死に対する感情、それは悲しみや怒りや慈しみの感情が入り交じる。◆テロがあって、多くの命が失われた。命の数以上の感情がある。9･11 の時に、日系米人が「あの時と同じだ」と言った。あの時とはパールハーバーのこと。努力を重ねてきたアメリカ社会が、未だにホストソサエティーを作り上げられずにいることを露呈した。フランス社会も同様である。無宗教者と言うマジョリティーが、信仰者と言うマイノリティーを抑圧している。この構造は、西ヨーロッパほど顕著ではないが、世界に広がりつつある。私たちには、悲しみに寄り添いつつ、その悲しみを拡大しない冷静な目が必要なのであろう。

川崎二三彦

思案投げ首

前号近況欄で「右上腕二頭筋長頭腱炎」を発症したことを報告したが、幸いにも我が身の自然治癒力が勝ったのか、次第に痛みが薄くなり軽快、今では何不自由なくPCに向かう事が出来たのは良かったとして、何の因果か、次は「左足の足底筋膜炎（腱膜炎）」に襲われた。あるとき、足の裏が痛み出したのである。この症状、わかりやすく言うと、老化に伴い足の裏の「土踏まず」が、次第にぺしゃんこになっていくことで腱が引っ張られ、炎症を起こすものであるらしい。

児童虐待ゼロへ知識共有
函館児童相談所講演会
注意点のアドバイス
パワポが作動しなかった
函館での講演会
（11月7日付け函館新聞）

現在、土踏まずを維持するための中敷きを靴底に敷いて対応しているのだけれど、必ずしも十分とは言えず、ついには、人生初めて百貨店の介護フェアコーナーに出向き、5 分でできるという詳細な検査を実施、我が足に合わせて特注した中敷きを製作中である。ちなみにお値段は五万四千円也。老化悲話と言うべきであろう。

それはさておき、前号で前号で紹介したように、相変わらずのホテル暮らしが続き、9 月 12 泊、10 月 11 泊、11 月 15 泊。12 月も今のところ 10 泊する予定である。いろいろな用務があるけれど、特に 11 月は「児童虐待防止推進月間」なので、講演を頼まれることが多かった。

そこで、自慢のパワポが活躍するのだが、この間、あちこちで手痛い目に遭った。他人の PC を使うと、妙なところで文字の改行が起こったり、アニメーションの不具合が起こる虞があるので、常に愛用の PC を持参し、会場に到着して備え付けのプロジェクターと接続するのだけれど、画面サイズが合わなかったり、接続した途端にパワポが停止してにっちもさっちもいかなくなるなどして、この間、二度にわたって我がマシーンの使用を諦め、会場の PC を借りるはめに陥った。

函館でのことだ。会場 PC のパワポバージョンが 2007 だという。こっちはパワポ 2013 なので、いやな予感に包まれつつスタートさせると、あに図らんや、スライドの数枚が何も映らず真っ白になって頭も真っ白、演壇で激しく立ち往生したのであった。気を取り直し、

「ここには、かくかくしかじかで苦心惨憺した画像がある筈なんですよ！」

などと、そのすごさを熱弁するのだが、見ている方はちんぷんかん。散々の展開というほかない。

パワポの不具合と
足底筋膜炎で疲れ
五稜郭で休む筆者

実は講演終了後、連れ合いと合流して函館観光を敢行したのだけれど、大変すばらしかったこの地の様子とは裏腹に、パワポの不具合と「足底筋膜炎」で、私は疲れてしまったのでございます。

＊

ところで、連載「映画の中の子どもたち」は、今号で 22 回を数えるのだけれど、諸般の事情でそろそろ終結もしくは断続的投稿として、新しい連載を始めることに、しようかどうしようか、現在思案投げ首沈思黙考鋭意熟考迷妄瞑想真っ最中でございます。とりあえずのお知らせでした。

（2015/12/01 記）

荒木晃子

今年で 7 年目を迎えた対人援助学会に、2 本の演題を提出した。一本は、「島根モデルの取り組み」を勤務先クリニックの担当看護師が口頭発表。7 年前にスタートした筆者の研究が、島根県行政、産科・生殖医療機関、子どもの福祉に携わる児相など、各機関の援助者たちの手で地域に具現化された報告だ。でも、何よりうれしかったのは、当事者支援のための研究構想が、実際に地域社会で実現されつつあること。そして、それを実践する生殖医療の援助者から報告できたことである。取り組む研究が、机上の空論で終わらないとは、誠に研究者冥利に尽きる。これまでご協力いただいた全ての方々に改めて感謝したい。

一方、筆者といえば、「卵子提供による家族形成と対人援助」と題して、しばらくぶりのポスター発表。口頭発表とは異なり、ポスターセッションは時間制限がないので嫌いではない。ただし、見た人に関心を持ってもらえなければ、どこかから閑古鳥の声が聞こえ、最後には羊の数を数える羽目になる。しかし今回の発表では、在席時間を過ぎても質疑応答が続くほど多くの関心を寄せていただいたように感じた。足を止め、熱心に耳を傾けてくださった方々に、この場を借りて感謝したい。老若男女（年配の男性はなかったかな？）から、疑問や質問、コメントなど、たくさんのご意見をいただいた。

あたりまえのようにパートナーを得て、自然に子どもを授かり家族を形成することがかなわない多くの当事者がいること。家族形成に困難を抱え、そのための支援を必要としている人々が存在すること。そして、そのような当事者の家族形成に生殖技術を介して貢献したいと願う人々が実際に存在すること。そんな実際を知っていただきたいという筆者の願いを、みなさんに叶えていただいた気がする。

また後日、筆者のメールボックスに、先の学会に関東方面から参加し、ポスターに熱心に関心を寄せてくださった男性からの「お礼メール」が届いた。その方のご専門は高齢者福祉。メールには、「（前略）家族とは？家族のありかたとは？社会の変化から受ける影響や社会に与える影響、援助職としての在り方・・・など、何となくではありますが色々と考えさせられる部分が少しずつ湧いてきていると言いますか、刺激を受けたように思います（後略）」とあり、対人援助マガジンの読者だともしたた

められていた。こういったメールを、そう頻繁にいただくことはないだけに、とてもうれしく、また、こころにしみる一報であった。

知らない誰かが、どこかで誰かが愛読してくれる。だから今は、さらに研究に精進しよう、マガジンの連載も頑張ろうと思える。ひとは誰かに応援してもらえていると感じると、不思議に力が湧いてくる。まことに感謝である。

サトウタツヤ

学会誌 『対人援助学研究』の編集委員長に就任しました。中村正理事長と共に、学会を盛り上げていきたいと思います。学会誌、あまりに論文少ないですね。

『対人援助学マガジン』の掲載記事数と比べるのはあまりにも僭越なのですが、学会誌がそれなりの存在感を示すことができるようにしていきたいと思います。

手始めに編集委員制度、編集幹事制度を作ろうと思ってます。編集幹事になりたい若手研究志向の方、連絡ください。

そして、会員のみなさん、論文投稿ヨロシク。

学会誌アドレス
http://www.humanservices.jp/journal/journal.html

浅野貴博

9月末にイギリスから帰国しました。前回の短信で触れましたが、4年前に渡航した際は 2 人だった子供が 4 人に増えての帰国となりました。大量の荷物を抱えての移動の様子は、端から見るとさながらちょっとした民族移動のようだったと思いますが、本当にヘトヘトになりました。帰国前後は色々と忙しく、長い留学生活をようやく終えた感慨に浸る間もなかったのですが、新しい生活のペースにも慣れてきました。上の 2 人の子供は、イギリスの小学校との様々な違いに戸惑いながらも、少しずつ日本の小学校にアジャストしているところです。

本文でも触れました通り、今号をもって連載は終了します。私の拙い文章にこれまでお付き合い頂きありがとうございました。学会等でお会いする機会がありましたら、ぜひ声を掛けて頂けるとありがたいです。

見野 大介 みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

秋のイベントラッシュも無事に終えることができました。反省点も多々ありますが、最善は尽くせたかと思います。作りたいもの、作らないといけないもの、課題が沢山できたので、12月に頑張りたいと思います。

年内は予定通りに餅つきが現段階で3件あるので、体を鍛えて準備しておかないと…。

3月の京都高島屋での個展に向けて制作もボチボチ始めていきます。来年も忙しくなるので、今からとても楽しみです。

2001 年作画

今回の執筆者短信欄に掲載の漫画は、2001 年に雑誌「児童心理」にコラムと共に連載したものの中から抜粋です。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

23：　連絡帳

千葉　晃央

空を飛ぶ連絡帳

私の関わってきた通所の事業所（施設）は利用時間が終わると利用者さんは「帰る」。グループホームから通っている方もおられる。しかし、その多くはご家庭であるというのが私の経験である。

おうちの方とのコミュニケーションをする手段は複数ある。電話、個別支援計画書にまつわること等を扱う面談、家庭訪問、家族の会の集まり…。そして、日常でのご家族とのコミュニケーションの手段は連絡帳である。

連絡帳は、一人につき 1 冊準備し（事業所が準備していることも、おうちが準備していることもある）それを通所の際に携帯していただいている。事業所職員は、事業所での様子や連絡事項を記入したり、書類を添付したりすることもある。そして、ご家庭からも家での様子や伝達事項を書いてお知らせしていただいている。

そのノートに利用者さんの個性が表現されることも多い。大好きなミュージシャンの写真シールを貼っていたり、大好きな特撮ヒーローのシール、アイドルのシールを貼っていたりする方もおられる。事業所が用意したオーソドックスなノートではなく、かわいいノートを好まれ、自前で準備され利用者さんもおられる。

私のまわりでは、職員によっても事業所によっても様々なスタイルが存在する。必ず毎日書く、必要な時に一定量だけ書く等である。もちろんそれがいつも一辺倒というわけではない。状況や出来事にあわせてそれらのスタイルが様々な割合、頻度で組み合わされる。

ご家族からの連絡帳に関する声も様々である。「毎日書いて欲しいなぁ」と仰る方もおられる。一方で「毎日書かれても読んでいる暇がないです」という声も聞かれる。職員が毎日書くので、ご家族も毎日書いてこられて、数年たった頃に「もう毎日書くのに疲れ、プレッシャーに感じて負担です」という声が聞こえて来ることもある。

このようなこの連絡帳のやり取りが成り立つのは、知的障害という状況が形成している側面もある。それは、ご本人自身の文字の読解力、内容に関する理解力に起因および左右されている側面がある。そのため、当然連絡帳以外の連絡方法も存分に駆使した適切な対応が求められる。

時には、ノートを出さない、見せない（施

設での時も、おうちでの時も、その両方での時も)、連絡帳の気になる部分を破って切り取ってしまうということもあり、事業所としてはこのような事態は起こってはいけない要改善事案である。(時にはノートを職員に投げるという場面も起こってしまったことも…。)

どんなことを？どの手段で？

職員１人が約7～8名の利用者の方の連絡帳を毎日やりとりしている（担当が不在の場合は「サブ担当」が書いている。一人の利用者さんに担当とサブ担当を配置している)。ご家族との連携に関しては、ご本人を差し置いて、ご家族の意向を優先にするという知的障害者領域に起こりがちなコミュニケーションも存在しているのはこの連載でも触れてきたとおりである。あくまで、ご本人の意向を前提にしながら、どういった動きに実際の場面で落としていくかは正解が一つではなく、なかなかいつも難しく思っている。

職員も状況が落ち着いていると、連絡帳で伝えなければならない内容ではなくなる。（順調な様子を書こうとするとその方の様子を観察し、しっかりと説明をし、初めて伝わる内容になることも多い。）そして当然ながら職員にとっては文章力、語彙力など様々なものも求められる。(連絡帳で伝えることではなくお会いしたときに話した方がいいのでは？という疑問も常に付きまとう。) ただ連絡帳に何もないというのもさみしい…。毎日日課にそって、いつも通りがんばっている熱心な利用者さんの様子があればあるほど、当たり前のように頑張っておられるので、何を伝えようとしても日々同じような内容をご家族に伝えることになりそうで、また迷うことも多い。

こういったことを経験すると参考にならないかと思い保育関係の本を手に取ることもあった。そこにはこんなことが書いてあった。「今日の子どもの様子（記録）欄に、子どものマイナス面を書くと、保護者は気分を害し、トラブルが起こりやすくなる」（『保護者とうまくいく方法～日常編・行事編・クレーム編　48 のポイント～』原坂一郎　ひかりのくに　2008）という内容である。続けて、以下のような内容もあった。「…連絡帳などに書いた子どもの様子やエピソードに先生からのコメントが何もないと保護者はやがて何も書かなくなる。先生の共感が欲しいのである。おうちの方はやがて書くのが億劫になる。すると書いて欲しいことも書かなくなってしまう…」(千葉が要約) とあった。この姿勢はよく分かる。ただそれと同時に、施設での実際の様子は誰が知っていて、誰が知らない状況になるのか？という心配も付きまとう。利用者さんの情報の偏りや、情報の差がトラブルのもとになることはこれまでもこの連載で書いてきた。どのように伝えることなのか？、その伝える方法は何がよいのか？など慎重に判断されなくてはならない。このあたりは現場のベテランの先輩、責任者の方々との相談が一番役に立つ。そのために職場のチームワークも一定必要になってくる。ここでもよくいわゆる仕事論でいわれている「よくない報告こそ、はやく！」は当然であり、更にノートよりは、電話、電話よりは、直接、そしてこちらから出向く、一緒

に伺う、おうちまでお送りするなど、様々な方法を組み合わせて、誤解がないように、これからも信頼をしていただけるように取り組んでいる。

字が汚い、読めない…

連絡ノートは文字通り、文字、文章を媒体にコミュニケーションをとることになる。実際に会って話した時と文字で伝えた時とは受け取った側の印象が異なることがあるのは普段からよく起こることである。文字だけでは、誤解を生んだり、言葉が足りないこと、ニュアンスが伝わらないことも多い。「この書類は原本（ゲンポン）です」と伝えたところ、「原本（はらもと）ってどなたですか？」というようなことも…。意図していなくても読み違いというレベルですら起こるのである。プライベートでのやり取りなら笑い話となることもあるが、こと施設で、そして更に起こってしまったケガや利用者さんに不利益がある可能性を含むテーマでは取り返しがつかないことも起こりかねない。そして、この文字を用いたやり取りはそのやり取りが書面で「残る」というのも大きい。

そもそも、字を書くこと自体に抵抗がある方も職員、ご家族双方共に多い。文章を書くのが難しい、そしてそもそも「字が汚いからいや！」というところである。「ミミズが這ったような字だから」「勉強をしてこなかったとばれるような字だから」という発言をきくこともある。「職員の字が汚くて読めない！」という苦情も現場ではきこえ

てきたこともあった。この字の汚いことへのコンプレックスは様々な事務作業の過剰なデジタル化も生んでいる。そもそも、障害者福祉の領域では職員 1 台のパソコンという職場環境を実現できているところはどのくらいの割合があるだろうか。高齢者福祉の領域よりもそのあたりの整備が遅れていることは確かである。(障害者領域、児童領域は市場が狭いのでパソコン関連業者も参入は後回しになる傾向があるのではないか。) 必然的にパソコンが空くのを待ち、譲り合いとパソコンを共有しながら書類を作成している。これまで手書きで 15 分で済んだ事務処理も、パソコン入力でその倍かかってしまったり、自宅に持って帰ってしまったりとパソコンが仕事を増やしている側面も存在する。この私は字が汚い！というコンプレックス、そのことがもたらす影響はこんな展開も生んでいる。

ご本人不在の連絡帳という仕組み

そもそも連絡帳というシステム自体はどうなのだろうか？ご本人が知らないところで、施設と家族がやり取りをしている要素がないとは言えないのである。では、ご本人に伝わるような努力はどのくらいしたのだろうか？「合理的配慮」、「意思決定支援」という言葉が「障害者の権利に関する条約」と共に話題になる昨今、連絡帳という仕組み自体が、ご本人を中心にした支援への弊害にはなっていないだろうか？

もしかすると連絡帳という仕組みが機能しない方がいいのかもしれない。実際、スイスの同じような障害者施設に職場研修に行かれた方のお話を複数聴くことがあるが、どなたが行かれた施設（皆さんいかれた施設は違います）も「連絡帳」という仕組みはなく、伝達事項はあくまでご本人に伝えるそうである。その理由としては内容は家族ではなく、あくまでご本人に属する事案であるから！ときいている。

知的障害を持つ人たちが集まってできたピープルファーストという活動がある。そこでは当事者自身が自らの権利を擁護するセルフアドボカシーを大切にした活動をしている。始まりは 1960 年代のスウェーデンまでさかのぼる。日本でも 1990 年代以降活発になったといわれている。なかでもピープルファーストの活動が支援者の役割を述べているものがある。(1998 年 4 月全日本手をつなぐ育成会から出された本人活動とその支援のあり方についての提言)

本人活動はセルフアドボカシーであり、

支援者については
「本人によって選ばれる」
「役割は本人によって決められる」
「決定権をもたない」

としている。(参考資料：「9　ピープルファースト：知的障害者の自立生活への道」和泉とみ代　よくわかる障害者福祉　ミネルヴァ書房　第 5 版　2013　より)

つまり、支援者がどうかかわるかは本人が決めるのである。(誰を支援者にするかもですけれども。これはまた別の機会に。)

これは昨今の対人支援のモデルの発展ともリンクしている。そこでは本人が望む、

本人が安定して過ごせる状態を目標に支援をすることに重きを置いている。社会構成主義、ナラティブ（その方が歩んでこられた物語）という視点が重視され、ソーシャルワークでは、ジェネラリスト・アプローチとしても整理されている。

施設では正しい事業所での過ごし方を時には表だって、そして同時に暗にも求めている側面が存在する。福祉的就労の現場では、現在中心にしている仕事の存在、提供しているサービスの内容が決まっているというなかで、ある程度あるべき姿を求めてしまう力動もあるだろう。これは制度のデザイン自体が持つ要素でもある。そのなかで、ご本人の意向をできる限り優先する、そのためのアレンジと、全体とのバランスをとること等が私たち職員には求められている。それは「集団処遇」という現実を踏まえた上での判断が求められ、非常に難しい判断が必要になることもある。そこでもできるだけ、よい時間を重ねるために本人を中心にしたご家族、事業所、連携諸機関との日々のコミュニケーションに力を注ぎ続けている毎日である。

（写真：橋本総子）

BACK ISSUES

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 4 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法
(11) マトリックス
―その暴力や逸脱は偶然ではない―

中村正

１．マトリックスへの関心

加害者臨床で対話をしているとその暴力や逸脱行動は偶然ではないと思えるような人生の経路がみえる。みえない道が轍のように作用し、その出来事を導く様子が浮かび上がる。出来事に至るその都度の、選択肢の問題、問題解決の仕方、出来事への意味づけや解釈の仕方、支援への拒否の態度、心身の健康状態、その時の人間関係、生活費や仕事の具合等があり、そしてそれらが絡まり合う。もちろんそこには分岐点もあり、そうではない選択をできなかったその人のパーソナリティ上の課題もみえてくる。

一般に、その逸脱行動の直接の原因ではなく背景となる事柄を環境的要因もしくは非犯罪的ニーズ non-criminogenic needs として把握する。刑事事件でいえば一般情状としてくくられることに近い。たとえば、自尊心の低下、心身の不健康さ、失業等の就労実態、被虐やいじめられ体験、家族の不幸等である。これらの解決をはかるために逸脱行動を選択する過程がある。その人の思考の仕方や認識の特性があり、それを「心と行動の習慣」として加害者臨床の対象にする。彼/彼女のもつ物事の認識の仕方や枠、問題解決の選択肢、感情の把握と処理の仕方等から構成されるトータルな「心的複合体 psy-complex」を把握し、働きかける対象にするようにしている。その人たちの生きる生活世界ともいえるだろう。もちろんそれは個人のパーソナリティシステムとしての複合体だけではなく、社会的に構成された複合体という面もある。『社会学辞典』（1998年、オックスフォード大学出版会）によれば、心的複合体とは、「心理学、精神医学、精神分析、精神療法、精神科看護、精神保健福祉ソーシャルワーク等のサイキ psycheを扱う一連の専門家群のこと。ミシェル・フーコーやジャック・ドンズロ、ロバート・カステルらの唱えたフランスのポスト構造主義に由来する概念である。家族生活、セ

立命館大学
Ritsumeikan University

クシャリティ、マインド、合理性を調整、規制する社会−心的な専門家の役割を分析するものである。」と定義される。人間科学の専門家によって構築されていく心的複合体は、個人に視点を定めた心理的現実を作り、そこに向けた臨床実践を根拠づける。悩み方や問題の発現の仕方が個人の問題としてその社会に相応しく編み上げられていき、心理化された社会的現実として作り出されていく過程を把握する言葉である。頭にpsyがつく言葉群から説明される事項で何かがかたちづくられていく。心的現実を中軸にして苦悩や問題が語られていく座標軸を成している。これはマトリックスmatrixとして作用している。マトリックスは「母」を意味するラテン語から派生した言葉で、「母体」「基盤」「基質」「そこから何かを生み出す背景」を意味する。

加害者臨床で出会う人たちは、その暴力や逸脱は偶然ではないように思える現実を生きてきた。環境的要因や非犯罪的ニーズをとおしてマトリックスとして作用している様相が浮かび上がる。暴力と逸脱を招き寄せているともいえる。非犯罪的ニーズに駆動され、そのように行動し、思考する心と行動の習慣ができあがっているともいえる。そのためにも彼らのマトリックスを俯瞰してみる必要がある。対人援助にとってはその人が周囲に組織しているエコロジカルなものに注目することが大切だと思うからである。

２．手袋と多重人格−作り上げる名付け

科学研究者、イアン・ハッキングも同じことを指摘している。ハッキングの『偶然を飼いならす-統計学と第二次科学革命』（石原秀樹他訳、木鐸社、1999年）は統計学的思考と社会とのかかわりを描いている。「印刷された数字の氾濫」を通して、次々と多くの「新しいカテゴリー」が作られたという。自殺、非行・犯罪、同性愛、多重人格、子ども虐待、アルコール依存・薬物依存等の社会的逸脱や社会病理現象であることが多い。「問題」の概念の変遷である。それに即して社会の制度や政策、そして臨床実践が構成されていく。それらが総合されて「人々の新しいカテゴリー」を作り出す。名前をつけることによってそれにあてはまる人々が存在し始める。しかもこのカテゴリーは単なる事後的な報告に終わらず、人々のあるべき方向性を作り出してさえいるという。こうして「人々を作り上げる」という現象が統計学をとおして実践されていることになる。統計学のカテゴリーは、もはや社会や自然のカテゴリーを写す鏡ではなく、逆にそのカテゴリー自身を通して社会や自然を編成していくように機能する。

名付けと実在と作り上げの相互関連の例として、馬、植物、手袋、多重人格という四つのカテゴリーを取り上げている（「人々を作り上げる」（イアン・ハッキング著/隠岐さや香訳、『現代思想』、2000年1月号）。

ハッキングによれば、馬や植物はわれわれの精神に従ってそうなったのではない。明確な実在があり、名付けという認識と実在は並行している。しかし手袋と多重人格はそうではない。両者は近似的な位置にある。人々は自発的にそのカテゴリーにはまり込むようになる。「馬の集団が共有する唯一のものは、

我々がそれらを『馬』と呼んでいるという事実だけだと主張するのは馬鹿げているだろう。・・どうして馬や植物が我々の精神に従うであろうか。手袋はこれらとまた別である。というのも手袋は我々が創っているからだ。私は思考と手袋のどちらが先に生じるかは知らないが、両者は共に手と手を携え生じてきたのだ。手袋がいう概念が手袋に非常にぴったりと合うこと、それは全然驚くべき事ではない。我々は手袋をそうなるように作ったのである。多重人格は馬よりも手袋の例に似ている。カテゴリーと人々は手に手を携えつつ共に登場してくるのである。人格というものpersonhoodにとっての可能性の空間を変容してしまうのだ」。

統計学の力は、二つのベクトルで作用する。ひとつは上からの、すなわち実在を作り出す専門家共同体によるラベリングのベクトルである。何人かの人々はこの実在を自分のものとしてしまう。ふたつはそうしてラベルを貼られた個人の自立的な振る舞いのベクトルである。それは下から、すべての専門家が直面しなければならない新たな実在をつくりだす、という。統計学がエビデンスを提出して、カテゴリーをつくり、ふたつのベクトルが作用して「人々を作り上げる」ことにより、そこには「人格性 personhood」にとっての可能性の空間が誕生する。そうあるべき、そのように振る舞いことを誘発する、作り上げていく可能性の空間とそこでの諸要素の組み合わせを「マトリックス」(ハッキング、前掲書)と呼ぶ。あるマトリックスのもとでのみ、ある観念とカテゴリーが可能になり、人々は自発的にそのカテゴリーにはまり込み、そのカテゴリーを生きる。この他にも手袋と多重人格によく似た作用をするカテゴリーはたくさんある。不登校、ひきこもり、発達障害、子ども虐待、DV、ストーキング等も同じように、現代の作り上げの効果である。これらはすべて現代日本社会で対人援助の課題とされ、解決すべき喫緊の課題とされている。

社会学は「応用医学」として機能してきたと指摘したのはM・フーコーである。なかでも各都市の報告書による社会問題解決のための統計的実践こそが社会学の直接の前身であるという指摘がされている(『身体と文化-身体社会学試論』ブライアン・ターナー、文化書房博文社、1999年)。これに着想を得て、私も「社会臨床」という言い方をしている。何かを社会問題や社会病理として定義し、専門家や実務家が政策・制度と連携し、時には批判し、逆に提言し、効果についてエビデンスを提出する等の総体の活動が共軛関係としてある。心理検査・心理調査も同じような共軛関係をともない、人間科学がある独特な社会構成体をつくる役割を発揮している。心理臨床や福祉資源が経済的な利益とともに独自な社会的統合の援助システムをつくる。その中軸に社会病理や社会問題の定義がすわる。これを心的複合体からさらに広げた「心-社会複合体 psy-socio-complex」という。加害者臨床もまたそのなかに措定されていく。この複合体の基盤がマトリックスである。

ポイントはこうだ。作り上げられたものであるならば、作りかえるための努力ができるはずだし、そのためのカテゴリーの再編成に

向かうべきである。マトリックスを洗い出す作業はこうしてみると面白い。

３．問題を招き寄せること

加害者臨床の対象である暴力、逸脱、行動化はその人にとって偶然ではない。彼ら/彼女らの生き方がそれらを呼び寄せている様相を考えてみる。心の病についての木村敏さんがこんな言い方をしている。

「メランコリー親和型の人物が鬱病にかかって罪責体験をいだいた場合、罪責体験は鬱病から派生した単なる症状ではなく、負い目や借りが『済んでいない』という意味での罪責の主題のほうが、それ自身を展開するための舞台として、鬱病という病的な事態を手に入れるのである。」、「罪責体験を表現するのに日本人は『済まない』という・・何かある事項が完了しない、過去が未完了のまま残っているという意味である。・・鬱病の患者が苦しむ罪は宗教的な意味での罪ではなく『負い目』とか『借り』という世俗的な意味での『罪責』である。・・メランコリーが罪のテーマをつくり出すのではなく、むしろ『罪のテーマ』がメランコリーを手に入れる。」という。その症状を生み出している事態の背後にある文化と精神のあり様が重要なのだと木村さんは語る。病を招き寄せるテーマそれ自体がまずある。ここでいうマトリックスに近い（木村敏『心の病理を考える』岩波新書、1994年）

他にも類似の発想が語られている。「深い侵襲を受けた患者を前にすると、最初にひとが受ける印象は、なんの埋め合わせもない、総体的な、ずっしりした欠陥、という感じである。（・・しかし）機能上のこの空虚は、同時に、原始的反応の渦巻きで満たされている・・。・・病は単なる意識の喪失ではなく、ある機能が眠ったことでもなく、ある能力がぼんやりしたことでもない。・・病は消失もするが、強調もするのだ。一方でものを廃絶させるとしても、他方ではものを高揚させもするのだ。病の本質とは、ただそれが掘ってこしらえる空虚な穴にあるだけではなく、その穴を埋めにやってくる代替活動のポジティブな充実のなかにも存在するのである。」（ミシェル・フーコー『精神疾患と心理学』みすず書房、1970年）という指摘である。

心の病、逸脱行動、問題や苦悩、依存対象等はそうした代替活動であり、その人にとってのテーマとなっている。それが一見するとポジティブな相（高揚感等）をもあわせもつという。

ハッキング、木村敏さん、フーコー、これらの考え方を重ねていくと、とくに逸脱、問題、暴力等への介入のもつ重層性がみてとれる。この考え方を踏まえて、次に、対人暴力論で最近指摘されているコントロール行動について具体的な会話エピソードをもとにさらに検討しておきたい。

４．愛情とコントロールのあいだ–その携帯メールはマイクロ・コントロール

木曜の三限目、筆者が担当する学部の授業「社会病理学」の講義のあとで女子学生が教卓に近寄ってきた。彼氏とのつきあい方のことで相談したいという。彼は同じ学部の別の

専攻に所属していて、受講している科目が休講になったのでこれから会いたいという携帯メールが授業の直前の昼過ぎに届いた。彼女が受講するこの授業は午後1時からはじまる。悩んだという。せっかくの機会でもあるし、彼のこころが離れていくかも知れないので会うべきか。でも彼女は受講したい。幸か不幸か DV について、親密な関係性における暴力という観点から話をした次の回だったので思い悩んだという。類似した問題として恋人同士の暴力(デート・バイオレンス)の話もしていたからだ。講義では、殴る、蹴るという身体への暴力だけではなく、何かを強いる行動や心理的な追い詰め等の広い行為を「コントロール行動・強いる行動 coercive control」として捉えるべきだという話をしたばかりだったので、彼女の悩みを深めたようだ。しかしそれは新しい気づきでもあったのだから相談に来ることができたのではないかと励ました。

もちろん彼に他意はなく、純粋に会いたいという思いだったのだろう。だから「授業が終わったらいいよ」と返事をするだけで済んだのかもしれない。しかし、彼女に授業があることは親しくつきあっているのならわかっているだろう。にもかかわらずそうしたメールをだすことはコントロールや強いる行動という面があると説明した。この点では、彼女だけが悩むという点に親密な関係性における暴力の厄介さが潜んでいる。つまり、お互いにそうしたメールをだすことが常であるならば別だが、聞けば彼女からは決してそうしたことはしないという。身体への暴力ではないが、彼女の自由を悩ませている。しかももっぱら彼女が悩むのだ。これが関係の非対称性である。愛情にコントロールされている。愛情という名を冠した束縛からはじまる DV 問題を理解するカギがここにある。

まとめると、メールは他者の行動を悩ませる(コントロールする)ことになる役割を果たしている。それが愛情という名のもとに、彼女が悩むことへの配慮もなく、一方的にやってくる。彼氏の行動はこうした意味で相手を尊敬していない。少なくとも配慮していないといえる。問題はこのことに彼が無自覚なことだ。暴力男と呼ぶ程のことでもないかもしれないけどすでにブラック彼氏であり、将来はモラハラ夫になるおそれがある。

さてそのような微細な(マイクロな)コントロールや強いる行動が家族同士だとどうなるか。もっと自然になされていくのだろう。もちろん家族関係は互いの意のままにならないことも含んで成り立つ相互扶助があり、信頼関係を前提にしてやりくりをして生きている。相互に束縛しあうことも多いし、不自由もある。コントロールや何かを強いる行動と紙一重であるが、信頼関係を基礎にしているのでそれは暴力として観念されるわけではない。

5. 傷ついた男性性の意識-「稼ぎが少ない」と言われたように聞こえる-

また別の例。筆者が取り組む DV・虐待の加害者との脱暴力面談やグループワークで話された。38 才の会社勤めの二児の父親の暴力。ある日の夕ご飯の食卓での出来事だった。妻

がため息交じりに「今月苦しいのよね」と話しかけたという。夫は突然怒りだし、妻を平手うちしたらしい。その男性はグループワークで反省していたが、その時の妻の発言は、「あんたの稼ぎが少ない。」と聞こえたという。彼は常日頃から収入が減っていることを気にしていた。ちょうどリーマンショック後で残業が少なくなり、帰宅時間が早まり、夫婦の向かいあう時間があったことも不幸だった。

本来は、その月のやりくりをどうしようとか、妻もアルバイトにいけないのか、貯金を少しばかりくいつぶそう等として会話を続ければいいことだ。ましてや妻が夫を非難しているわけでもない。しかし彼にはそう聞こえる耳しかなかった。認知の仕方が固まっていた。妻からすれば暴力を振るわれる理由がわからない。出来事の解釈や意味づけの、つまり認知のずれがある。

彼の暴力は日常的に保持している意識と行動を基盤にしている。暴力のきっかけは相手側の何らかの会話、言葉、態度であるが、それは彼の頭のなかにあるイメージや文脈、つまり意味づけであり、被害者には分けがわからない。彼のいき場のない怒り、恨み、嫉み、鬱憤、甘え、依存が一気にその関係性のなかで行動となっている。物事や言葉の認識の仕方、感情表現方法が独自にある。何かのきっかけで、彼の思う問題の解決行動として暴力が選択されている。親密な相手だからいいだろうと思っている。

こうしてみるとその暴力は決して偶然ではない。きっかけは遍在しており、暴力以外に解決行動がなく、選択肢は貧しい。暴力をささえる認知の仕方や意味の解釈が瞬時に動員され、家族だから犯罪にならないという甘えや依存の意識に支えられている過程がよみとれる。暴力がそこに潜在している日常生活を生きている。こうして出来事は、暴力性をもつ人の日常生活の構造を可視化させる。

この男性のマトリックスは、傷ついた男性性 wounded masculinity とそれを肥大化させている思考の悪循環と特徴づけることができる。建設的な問題解決を妨げている。弱くなることを受け止めきれない。その思考が現実を歪めてつくりあげていく。

６．お前のためにといってしつけること–ルールの混乱

虐待と DV は親密な関係性や家族の関係をとおして重なりあう。ある地方裁判所の刑事法廷の例。継父が二人の中学生の息子への虐待を繰り返し、傷害罪で起訴された事件。妻への DV もあった。妻にも息子を罵り、叱りつけるように強要していたという。とはいえ裁判は家族に宿る暴力を虐待や DV の罪として裁かない。焦点となった事件だけを扱うので、社会学的–心理学的な暴力という面は考慮されるだけである。現在、子どもたちは児童養護施設で暮らし、母は生活を立て直す努力をしている。50 歳のその継父は少年院に入っていた経験がある。彼は躾だと言い張り、動機において虐待を認めていない。いきすぎた行為としての暴力は事実として認めたが、いうことをきかない子どもを矯正するために必要な暴力であったと一貫して主張していた。要するに子どもが悪いと言い張っていた。こ

れが他罰性である。

この家では、その父特有の「ルール」が定められていた。たとえば門限は午後５時（中学生に！)、うそをつかない等。母や前夫の躾がきちんとしていなかったので、成績も悪いし、あいさつもできず、よくうそをつき、日常の生活の基本ができていなかったからだという。門限までにきちんとかえってくるかどうかベランダから双眼鏡で見ていたこともある。そのために定めた「我が家のルール（実態はマイルール)」だという。

確かに「うそをつかない」というのは大切なことだ。しかし、成長の過程でまったくうそをつかずに生きていくということを約束させられるのは無理だ。「うそをつかない」というルールはすぐに破られるし、殴られるのがこわくて「うそをついていないというううそ」をつきとおすはめになる。こうしたルールの設定は恣意的なので、どちらにしても「虐待する理由をつくっているルール」のように機能する。ルールが守れなかったら「長時間立たせる」という罰もあったそうだ。耐えられるものではない。その罰も守れなかったら、また虐待が待っている。すべては「矯正」のためにということだ。

この場合のルール観は歪んでいる。ルールを破ったときのルールとして暴力を用いることが正当化されているからだ。これはルールとして機能しない。親父のルールでしかない。暴君として君臨できるだけだ。罰としてふとんたたきで殴ったという。そのふとんたたきが激しい暴力で折れたという。折れた箇所をつなぐため細い鉄の棒で補強し、それでまた殴った。その結果、大きな傷を負わせ、傷害罪で起訴された。争点となっていたのは虐待だ。これは躾だったという虐待する親の勝手な言明と行動が浮かび上がっていた。

しかし傍聴していた筆者は歯がゆかった。「これはいきすぎた躾ではなく、虐待である。」との専門家証言を引き出した検察官だが、弁護士も勝てる法技術しか用いない。継父の弁護人も伝統的な情状刑事弁護に終始していたからだ。「彼の不幸な履歴と躾のためにという親心を勘案すれば相当程度の情状酌量の余地がある」という主張だ。虐待する親への行動改善命令制度、その指導体制、方法論、援助技術が不十分なので、司法も伝統的な枠を超えることができないということだ。彼は地裁では懲役三年となった。

７．現実感の喪失と虚構の世界

また別の父親。その父には二人の子どもがいる。ゼロ歳の男の子を誤って自宅の床に落としてしまい、脳にダメージを与えた傷害の罪で起訴された。結果は傷害罪で懲役一年、執行猶予四年。児童相談所はその間に家族再統合をめざしたカウンセリングを受ける計画をたてた。もちろん妻との関係も修復をしていく必要もある。30歳をこえた父は最初のカウンセリングから何かしら「陰り」があった。目を合わすことなく前後の事情を聞いただけで一回目の対話をおえた。執行猶予は四年間なので長い。裁判の詳細を聞いてもうまく話ができずにいた。妻も同罪とされたらしく裁判にかけられ執行猶予となった。妻は「主犯」ではないが親子ははなされたままである。こ

の時間を利用して、まだ赤ちゃんでもある長男との関係づくりのため施設に通うこととなった。

事件となった事故のようでもあるが、カウンセリングは裁判所や警察ではないので、いろいろ自由に語って欲しいと思っていた。こうした事案の場合、通例は児童相談所への怒りや批判がでてくる。これは事故であり決して事件ではないと言い張る。警察の取り調べの不満もあるはずだ。しかし経過を語る彼の様子はあまりにも他人事のようであった。感情の抑揚がなく、精気がない。着ているものもモノクロ。同じように彼が語るこれまでの人生のエピソードには色がない。感情がみえてこない。その事件があったから落ち込んでいるのでなく、いつものようである。そのように生きてきたようだ。

察するところ、彼は相当に孤独であるらしい。しかし例外があった。ネットゲームである。その様子を語る時には目が合う。多少は精気があるようにみえる。こちらが知らないことなので教えてあげるという態度にみえ、力が入るようだ。そのゲームは冒険ものの闘いの物語であるらしく、そこで怪物を倒すために購入する武器に課金をされ、その物語を首尾良く運ぶには月に二万や三万は要るという。小遣いの範囲をこえているがついつい使ってしまい、妻と口論になるらしい。そのキャラクターを演じて、ゲームのなかで登場する他者たちとチャットする時が楽しく、自分をだせているという。多いときでは同時に十数人がチャットするという。そこにいる自分がもっとも自分らしいと思うと語る。妻と暮らし、子どもをあやし、仕事をしているときではなく、ネットゲームのなかに自分をつくっている。実家なので親とも一緒だけど、最も話をする相手はこのチャット仲間らしい。彼と同じようにしている人たちが相当な数に上るのだろう。

面談ではこれまでの生活を振り返った。現実の人間関係での傷つきや恐れがあるという。一回目と二回目の対話の際、大きなマスクをしていた。痩身で小顔な彼の顔のほとんどをそのマスクで覆っていることになり、表情が見えない。しかし三回目からそのマスクはなくなり、きょろきょろしているがアイコンタクトもできてきた。

彼にとってこのカウンセリングの対話はネットゲームでのキャラクターの発話と同じような機能を果たしているらしい。半現実だという。しかし、ネットの２次元でもなく、生の生活の３次元でもない。その間のようだという。いま話題になっている2.5次元である。３次元の私と面談室の現実に登場している彼はチャットで登場するキャラクターに近い。私との利害関係はなく、生活の背景も知らず、「いま・ここ」での接点をもつだけなので虚構空間のようでもあるらしい。呼び水に誘われるように自分がひきだされ、心地よい飛びだしやすい場だという。いままでの彼の人間関係にはなかったようだ。周囲を気にして生きている世界とネットゲームの世界に二分割され、裂けた世界にいるので、そのあいだの汽水領域のようにカウンセリングの場が作用している。

彼はその孤独や寂弱を飼い慣らす苦心をして生きてきた。現実の世界で彼は周囲の動きと人間関係に流されているようだ。もちろん抵抗はせず、翻弄されているのでもなく、その流れにのっているという感じだ。満員電車では揺れに身を任せるしかない。抵抗して踏ん張ると押し返される。そんな感じだと思った。これを「漂流」という。たとえば10歳年下の女性に迫られたつきあい、その彼女とのできちゃった結婚、やや無計画な二人目の妊娠・出産、重なる転職と失業、事件か事故かも争われた裁判、息子の施設入所と家族の別離等の家族の困難がこの三年程続く。その転職は正社員であることに自信がなかったからだという。責任がかかる仕事はしたくないらしい。正社員だとアルバイトやパートの人に指示をしなければならないので荷が重い。こうした経過を聞けば聞くほど、主体的ではない。陰りのなかに生きているようだ。

地に足ついていない生活は赤ちゃんを床におとした以前から続いているようだ。他者をケアすることへの無頓着、他者への気遣いの弱さ、近くに子どもがいるのに気づかない、ぞんざいな扱い等が生起する。リアルな世界で子育てしている父の姿ではない。彼は常に虚構のような世界で赤ちゃんを育てていたようだ。

８．心と行動の習慣をみること

本稿でも何度か紹介してきたカナダの心理学者のドナルド・ダットンは、「エコロジカル・ネスト ecological nest」という。暴力と虐待を振るう者の心と行動の習慣を把握するためのモデルであり、生態学的な巣のようにして暴力を肯定する日常生活とパーソナリティがあるという。暴力を振るう人はそれを肯定し、必要だと思い込み、正当化する理由をたくさんもって生きている。暴力や虐待を含んだ生態学的環境を作っているという。それをまとめて虐待的パーソナリティと把握した。

このアプローチでは、その人のもつ問題解決のレパートリーや選択の仕方に偏りがあり、健康的ではない手段として暴力と虐待や問題行動を選択していると考える。どうすればその問題を克服するように生きていけるのか。長く育んできた習慣的な行動は変えにくい。心の習慣となっているからだ。心の習慣とは、問題解決の志向性、快楽の感じ方、対人関係の取り方、認識や解釈の仕方、意味付けの体系、対人関係の取り方（アタッチメント）のことである。全体として彼の生きる日常環境を構成している。

この「臨床社会学の方法」の連載で取り上げた暗黙理論、ガスライティング、日常生活、日常行動理論、エスノメソドロジー等の多くの言葉はマトリックス理解に関わる言葉である。加害者臨床論は逸脱行動や触法行動をした人たちの行動を支えているこのマトリックスを探り、その再構成に伴走する。手がかりは加害・逸脱行動のナラティブである。その一部がここで紹介してきた面談である。それ自体が矛盾し、整合なく、加害者にとって都合のよいものである。しかし加害者の理解や更生への手がかりはそこにしかない。

こうした加害・逸脱行動のナラティブは、そこにおける沈黙や外部（語られていないこと）

も含め、その説明行動をとおして、①正当化・中和化（都合のよい意味づけ）、②犯罪・逸脱への意識（犯意・犯情の認識や準備の具合）、③関係性への責任転嫁（他罰的な思考や行動化したことの事情）、④逸脱的な生活の選択過程の表明、⑤欲望の構造の可視化等の総体からなる「更生・離脱のための資源」と位置づけられる。自然な振る舞い、やり方や関係の持ち方、コミュニケーションのかたちにそのマトリックスがみえてくる。

そして、加害のナラティブをとおして彼らのマトリックスに内在する暴力、虐待や逸脱行動を招き寄せた自らのテーマに向き合い、解決の仕方を再構成する必要がある。問題解決の方法の刷新しておかないと、偽問題解決となるだけだ。その一環である謝罪の方法も同じ。さらに反省もそうだ。問題解決の仕方が問題だったのだから、同じようにしていては解決と謝罪も以前のようになるだけだろう。だから脱暴力や謝罪・反省をひとりではしない方がいい。このマトリックスが再組成されないかぎり、謝罪も反省すべきではない。そうしないと謝罪は威圧的となる。謝罪を受け入れない相手が悪いと責めることになる。

あるDV加害とされる男性との会話からこんなことがみえた。その方はカウンセリングに通うことで解決の方向に自らがあると考え、妻に会って欲しいという思いが強くなってきた。こんなに自分は変わりつつあると思っているのだが、「解決の仕方を自分で決めないで欲しい。」と被害者である妻は考えるのでそのことに配慮してはどうかと薦めた。焦りは禁物であくまでも相互作用なのだと説明した。そのためにも、たとえば、その人を想定して届かない手紙を書くことや私を被害者として対話のロールプレイをすることを提案している。狙いは、反省するための心や態度を耕すことである。保持しているマトリックスを自覚し、理解し、それを自ら再組成する、そうした「自己の書き換え」が対話をとおして展開される。

９．マトリックスを再構成すること−批判的に実在をつくりあげる実践へ

もちろん、その名付けはカウンセリングルームやグループワークの場に止めておいてはいけない。加害のナラティブとの対話をとおして脱暴力へと協働していくこと、そのための社会臨床として、男性性と暴力、暴力を容認する文化と社会（つまり暴力を呼び寄せ、高揚する穴埋めになっている点）にメスをいれることというテーマがある。それは社会がもつ暴力のマトリックスを成している。暴力、逸脱、苦悩、問題は社会的に作り上げられている。だから社会病理や社会問題と表現される。決して個人のパーソナリティや個人の病理にだけ還元できない。その社会的なマトリックスを書き直していきたいと思う。

なかむら　ただし
（社会病理学/臨床社会学/社会臨床論）

2015 年 11 月 25 日受理

哀悼日記「そのときまで」

指定居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ
ケアマネジャー　木村　晃子

日記や手紙の類は、小説などの読み物より興味深いところがある。それは、日記や手紙は極めて個人的な領域だということと、それらを覗き見した瞬間に、時空を超えて、その個人的な領域に立ち入れることができるからだと思う。一方、個人的な領域でありながら、個人の置かれた環境を垣間見ることができる。それは、一つの歴史を知ることにもなるだろう。

この 10 月に、11 年にも渡る療養生活を終え、７６歳の父は天国へ旅立った。５０歳の頃に、癌を発病。余命 3 か月の宣告を受けた。そこから四半世紀以上も与えられた命があった。当時、20 歳だった私が今は４６歳。父がいなくなってから、父の日記や父宛に届いていた古い手紙を通して、私の知らない父に出会った。あの時にはわからなかった父の想いが、今なら少しわかるような気がする。「置き土産」というものだろうか。父亡きあとに目にした、病床日記を振り返りながら、私の心に生じるあれこれを「哀悼日記」として記録しておきたい。今、声にして伝わらないことが、いつの日か、私の子どもたちに何かを残すことができるのではないかと考えながら・・・。

時空を超えて伝わる『そのときまで』

『そのときまで』　病床日記

いかならむ心さき行く夜長かな

癌ときき心静まる霜夜かな

寒月にいたしと一度言いてゐる

生徒来て黙したり虎落笛

支へられ力たしかな冬がこひ

大根を洗う手もとを見つめけり

平成元年 10 月。５０歳だった父は、秋から続く治りの悪い咳を懸念して、係りつけ医から、地域の総合病院へと診察を変えた。その場で即入院。自宅にいた母に、病院から電話が鳴った。医師に呼ばれ、父の病室へ行く前に、母は病状説明を聞くことになった。「余命 3 か月です。咽頭がんです。すぐに治療を開始する必要がありますが、ここではできません。札幌の北大病院へ紹介します。」

母は、どのような気持ちでこの説明を聞いたのだろうか。札幌勤務をしていた私の職場に母から電話がかかってきて、先の内容を電話口で聞かされた。その後、直近の休日に実家に帰ったが、既に父には病名も予後も知らされていた。

癌の告知が当たり前の時代ではなかったと記憶する。けれども、自分のことについては、正しく真相を知っておきたい、というのは常日頃からの父の生きる姿勢だった。当然、母は父にそのことを知らせたのだと思う。

父や母がどのような不安を持っていたのか、その時、私は想像することすらなかった。

紹介先の大学病院は、生憎の満床で入院受け入れができない状況だったため、協力病院への入院が決まり、そこから放射線療法に通うとになった。諸々の父のスケジュールの調整があり、放射線治療の開始は、診断を受けた翌月 11 月からに決まった。

寡黙な父。痛みも口にすることはなかった。今、振り返ると、父の沈黙が、私たち家族の不安を大きく減らしていたのだと感じる。

放射線治療を開始する前に、甥の結婚式に参加するために、病院から外泊許可をもらい、結婚式に参加した。ふるまわれたホテルの料理の数々が、当時、喉の痛みに食が進まなかった父にとっては、久しぶりの味わいになったようで喜んでいた。その後は、病巣の痛みと、放射線治療でダメージを受けた皮膚の痛み（放射線の照射によって、皮膚がやけど状に荒れてしまっていた。）と闘っていた。

父の病床日記からは、これからの自分の余命について、冷静に立ち向かう様子が感じられる。いつでも、何事にも動じない落ち着きを持っていた父を思い出す。その父の立ち居振る舞いがあったからこそ、家族は不安もなく過ごせていたのだろう。

この日記の中の、「虎落笛（もがりぶえ）」は、病巣の痛みを表しているように思うが、我慢強さと、生徒の前に凛としている教員としての父の姿が浮かぶ。私の中では、父親像はほとんどなく、いつも映るのは教師の顔をした父だった。

親としての動じなさが子に与える影響は大きい。もし、あの時、父が不安の只中にいることを目の当たりにしたら、私には何ができたのだろう。きっと、何もできずにいたと思う。２７年も経ってから、父の想いに触れた時、今なら親としての立ち居振る舞いを受け継ぐことができると思う。時空を超えてもらった置き土産は「動じなさ」だ。

病院へ妻子が守る霜の道
待つ宵や千々の思ひももとのまま
ふとさめし眼につれなくも冬の月
病めばベッドにすわる夜寒かな

兄姉叔父叔母もゐる寒雀

肩や背に娘の手ある雪見かな
見舞花の色香も優し冬至かな

教え子の雪踏み分けて来たりけり

兄姉も願かけてみる煤払い
鶴渡る重ねて千羽ここにあり
折鶴にかけし心か明の空

病室に千羽鶴あり雪明かり

寛容な父のもとへは、いつも多くの人の心があった。木枯らしの吹く時期に入院した父の病床からの景色はすぐに銀色へと変わり、厳しい闘病生活と重なる景色の移り変わりだったと思う。大きな通りからひとつ中道に入ると、見舞中に降り積もった雪の小道は、先行く誰かが踏み固めた足跡に沿って歩を進めるしかない。病院を背に歩く私たちの後姿を案じてくれていたのもまた、父だった。その眼差しには気がつかなかったけれど。

千羽の鶴は、宝くじのはずれで折られたものだった。病気に当たりませんように・・・という意が込められていると教わった。父は、夏に冬に、毎度１００枚の宝くじを買っていた。小さな当たりも、そしてはずれの中にも楽しみが宿っていたのだろうと思う。

←父が、勤めていた学校の国語科での旅行記。平成２年には、特別寄稿として、病床日記が収められている。

冬籠るひと時なれど我家かな
遠くから雪はねたるかブルの音
友の母願かけ黙す除夜の鐘

この余命何にかかげむ初御空

時来れば我を導く初日あり

ひとすじの光求めて明けの春

松の内元気出せよと生徒言ふ
七草や秤の計をただ見つめ
ぼつぼつと姉の文あり蕗の薹
退院す福寿草吹く我家かな
見舞来し兄病みてあり暮れの春
灌仏会月に一度の観察日

風光る学校にありときを待つ

放射線治療の途中の年末年始。外泊許可を得て、自宅に戻ってきた父。皮膚のやけどの状態が痛々しかった。人に触られるのも辛かったのだろう。軟膏を塗布したガーゼの交換を、毎朝自分で行っていた姿が今でも鮮明に浮かぶ。父の為に、願かけをしてくれていた教え子のお母さんの話がとても印象に残っていた。

庭に福寿草が顔を出すのは、雪解けのころ。早くて 4 月。はっきりとは記憶していないが、父が治療を終え退院したのは、2 月か 3 月だった。福寿草の芽吹きに自分の再生を願っていたのかと思う。

既に、余命 3 か月は過ぎていた。父の忍耐の治療が、私たち家族から「余命 3 か月」という説明の記憶はなくなっていた。

５０歳で、癌の告知を受け、余命 3 か月と宣告された父のその後。まもなくパーキンソン病の診断もつき、５０代は、仕事をしながら療養を続けた。放射線治療の後遺症で嗄声に悩み、早期退職も考えていたようだが、母の叱咤激励によって、６０歳の定年まで仕事を全うすることができた。

定年を迎えた６０歳からの父は、入退院を繰り返す自宅での闘病生活を 5 年ほど送り、その後は自宅生活が困難になり、６５歳で長期療養のできる病院への入院となった。そこからの１１年の療養生活。声を発することもできなくなり、使用していた文字盤での会話もなくなり、結局、沈黙の療養生活だった。その傍らで、母が一人おしゃべり上手になっていった。返答のない声掛けはどのようなものなのだろう。仕事と子育てに追われていた私には、母の気持ちを推し測る余裕もないまま一年一年が過ぎていった。

おめでとう
愛しき夫（つま）の　よろこびと
深き歩みの　素晴らしきかな
木漏れ日に　窓辺のカフェ
香わしく
ほのかにゆれて　想いはめぐる
花園は　海辺の丘に咲きみだれ
白いスーツの　そっと手をひく

母がどのような想いで父のもとに通っていたのかはわからない。ふと出てきたメモ書きには、母の字で記された詩がいくつかあった。これは、平成 20 年の 9 月、父の誕生日の近い日に書かれたものだった。誕生日を祝っている様子。病床で迎える誕生日を祝っている中で、最後の二行は何を表しているのだろうと、母に尋ねた。花園は、道東にある網走原生花園。父と母が、結婚前に初めてデートをした場所だと言う。白いスーツを着ていたのは母。初デートの様子をこんなにも覚えているものだろうか、と感心した。なんだかんだと、仲睦まじい夫婦だったのだろう。（父と母のドタバタ夫婦は、当マガジン 7 号で取り上げている。）

母が病床に足を運んだ 11 年という歳月は、他の誰にも代わることのできない「夫婦」の時間だったことと思う。

極めて私的な事柄ではあるけれど、読んでくださる人に何を届けることができるのだろうか。内容はともかくとして、「伝える」ということが、声を通さなくてもできるということが伝わったら幸いだ。後になってわかること。時間が人の理解を深めてくれることもある。上手くはないけれど、書くことが好きな私に、書いたものを通して教えてくれた父と母。言葉は残る。時空を超えて伝えるために、言葉を残していきたいと思った。

今にして思えば、あの時の余命宣告から 27 年。長年の私の原家族の物語の傾向が大きく書き換えられたような気がする。にぎやかな父と母の夫婦の時間が、最後の 11 年で静かな夫婦の時間へと変化した。父も母も変わった。その変化の時間こそ、今は私にとっては、

ちょっと誇りだ。この両親のもとに育って良かった。これが、私のオルタナティブストーリーというものだ。

平成２７年１０月１０日午後２時３０分　父、天国へ。いつか会える、そのときまで・・・

街場の就活論 vol.23

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

日本式就職活動の行方

就職活動の選考開始時期が 6 月からになったというニュースが関係者の間で話題になっている。選考をするということは、合否が決まるということ。つまり6月1日から内定が出始めるという意味だ。今年は8月からだったので、2か月前倒しになる。

でもその前はずいぶんと長く 4 月からだった。

8 月に後ろ倒された経緯には、大学側の要望も大きかった。3 年生の秋から就職活動が始まることで、学生が不在がちになり授業が回らないというのである（広報活動は選考開始の半年前くらいから解禁される）。しかし実際に 8 月にしてみると、「かえって学生の拘束期間が長引いた」のだという。

その大きな要因は、就職協定と呼ばれるこのルールは経団連に加盟する企業の努力義務に過ぎない、という点だ。大学生の間で人気企業と呼ばれるような知名度の高い大企業は軒並み加入しているが、一方で外資系企業や日本の大多数を占める中小企業は非加盟だ。つまり、それらの企業はいつ採用活動を始めようが、他人にとやかく言われることではない。楽天の三木谷社長がつくった新・経団連も就職協定には与していない。

結果的に、これまで通り秋から採用活動をする企業と、努力義務を順守した企業とに分かれ「かえって学生の拘束期間が長引いた」というのだ。

また、早めに採用活動を展開し、内定を出した企業側にも困ったことが起きた。8 月に内定辞退者が続出したのだ。多くの大学生は、早めに内定をもらっても、本命企業の選考は 8 月から。とりあえずもらった内定はキープして、本命に通ったら断ろうと考えた。多くの大学の就職課も「とりあえず行きますと言っておきなさい」と指導をした。その結果、私の知る範囲でも、200 名の採用内定者のうち、80 名に辞退された会社があった。

この流れの中で出てきた流行語が「おわハラ（終われ終われハラスメント）」。「就職活動をやめてうちに入社を決めてくれるのなら、内定を出すけどどうする？」と大学生に迫る行為のことだ。このような経緯を経て、「来年は 6 月からに」というのが経団連の新・就職協定となったのだが、一方で外資系企業や非加盟企業の多くは今年と何ら変えるつもりはなく、この新協定もいつまでどうなるやら、というのが大半の見方だ。

それにしても、この議論にはいつも当事者である

大学生の姿が見えない。大学生は、決まったことに振り回される一方だ。主体性が問われる就職活動の枠組みがこれほど受け身なのは、どうしたことだろう。就職活動の時期を調整すれば大学生はもっと大学で学ぶはずだと思っている大学にも違和感があるし、大学生は雇用してもらうんだからこちらの決めるルールに従うだろうと思っている企業にも違和感がある。

仮に、就職活動の面接日と、どうしても受講したい授業が重なったとする。そのときに、大学生が企業の人事担当者に授業が理由で面接に行けない事実と、その授業がいかに自分に有益かを説明すれば、企業は面接日の再設定を普通厭わない。それどころか、評価につながるのではないかと思う。要するに、合理的な理由があれば積極的に受けたくない講義のオンパレードだと学生は考えているのではないだろうか？

一方で企業側も、公平性を盾にした効率主義にいつかどこかでメスを入れないと、制度疲労が明らかな新卒一括採用の枠組みをいつまで維持するつもりなのだろうか。この厳しいグローバル競争社内の中で、国内大学生に向けた制度設計に構っていられないというのが本音ではないだろうか？

就職活動は年次を問わずオープンに、多様的に展開するのが一番だろう。そうすることで、大学生は働くことの本質に向き合う機会が増えるだろうし、また、大学での学びを問い直す人も増えるだろう。さらに、これまで大学生には見てももらえなかったような企業にも目が届くんじゃないかと思う。

もちろん移行期には様々な要改善課題が浮上するに違いない。大学生に不利益を与えているとみなされることもあるだろう。しかし、雇用形態や働き方が大きく変化する現代において、国内大学生の採用入口だけが“まったく影響を受けない”というのは、明らかに違和感がある。もはや壁は崩れかけている。ぼくとしては、より良い形で、いちはやく壁が崩れることを望む。

文／だん・あそぶ

「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

カウンセリングのお作法　第五回

ＣＯＮ(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

カウンセリングを効果的にすすめるための土台作り

さらに、大学で私の講義を受けている学生さんをカウンセリングすることはしていません。客観的な立場で成績評価を出す立場にありつつ継続して支援することはできないため、学内の学生相談室を利用するように伝え、教員であることと、カウンセリングの仕事との区別をしています。

このように、カウンセリングをすすめるために欠かせないのが、スタート時点の基盤整備です。カウンセリングというと、どうしても相談内容そのものに関心が向き、どんなことをして、解決に至るのかに焦点が当てられがちで、土台作りの重要性はあまり伝えられていないように感じます。

そこで今回は、ＣＯＮで行われている、家族カウンセリングの土台作りや進め方等、具体的な話をします。

友だちにカウンセリングはできない

「ねぇねぇ、おいしいものをごちそうするから、カウンセリングしてよ」

友だちから頼まれると、その内容がどのぐらい深刻なのかをそれとなくと確認します。そして、多くの場合は、せっかくのお話ですがと、お断りをします。

もちろん、かなり困っていて支援が必要だと考えられる場合は、専門相談機関を紹介します。

この対応を、固苦しい態度だと感じられるかもしれませんが、友だちや親戚は、日常生活ですでに関係が成り立っているので、カウンセリングはお引き受けできないのです。それは、冷静な判断をしながら、話を聴き続けることができないためです。

クライエントのイメージをカウンセラーの枠組みと一致させる

実際、本格的にカウンセリングがはじまるときには、最初に契約をします。契約というと大げさに聞こえるかもしれませんが、確認作業です。あとからそんなつもりじゃなかった、ということにならないように、クライエントさんが思い描いているイメージとカウンセラーが考えているカウンセリングの枠組みに、ズレが生じないように、微調整をします。

受付

まず、ご相談内容をうかがって、カウンセリングが適しているかどうか、お引き受けできるかを明確にします。受理面接＝インテイクと呼ばれ、困っている状況をおききします。

カウンセラーは友だちや親戚を

カウンセリングしません

ＣＯＮ子さんは、ＣＯＮ子さんのお友だちを、カウンセリングすることはできないのですね。

はてな子さん　カウンセリング初学者

ＣＯＮ子さん
心理カウンセラー

そうなんです、友だちや親戚は、日常生活ですでに関係が成り立っていて、冷静な判断をしながら、話を聴き続けることができないためです。もしも困った状態にあるときは、専門機関を紹介します

インテイク　受理面接

受け付けるかどうか、引き受けられるかどうかを確かめる

受けつけできない例は、法に触れる問題行動により警察が関係している場合や、相談機関が専門としていない症状、たとえば、アルコール使用障害の相談です。

また、申し込みのとき、病院等で心理治療のために投薬中の場合は、担当の医師から診療情報を提供してもらい、カウンセリングが適しているかどうかの医師の判断を確認したあと、カウセリングをします。カウンセリングと並行して投薬治療を続ける場合は、担当医師と、カウンセラーが連携をしながら、チームで問題解決にあたります。

その後、クライエントさんの状況変化にともなって、神経科や心療内科の医療機関への受診や他分野の専門家を紹介する場合もあります。このように適切な機関を紹介することをリファーといいます。

相談窓口はひとつに

困った状況になると、回復の可能性があるならなんでも取り入れたいと考えることがあります。ですが、ここは要注意。他機関でカウンセリングを継続して受けている場合は、重複してカウンセリングを利用するのではなく、相談先を一つにすることをお願いします。

在籍している学校でスクールカウンセリングを受けているのと同時に、もう一方で、家族カウンセリングを希望するような場合は、絞る必要性を理解していただきます。

その理由は次のようなことです。

何カ所かで相談をすると、めざす方向は同じでもその機関によって支援方法は微妙に異なります。さまざまな考え方に触れると、ご本人やご家族が混乱します。それらを避けるために窓口は必ず一つにします。

支援が必要な状態にあるご家族にとって、適切な相談機関たどり着くまでに、労力を使うことがあるかもしれません、在籍している学校や、通院中の医療機関の担当者から紹介をしてもらうのがスムーズだと考えます。

初回の予約、場所、時間、費用

相談内容が確認できれば、初回カウンセリングの予約に話が移ります。

面接はすべて予約制です。担当者は毎回同じで、途中で交代することはありません。

急きょカウンセリングをするということはありません。また、電話でちょっとだけお話したい、たずねたいことがあるというようなことも原則はできないので、約束した日時に直接お会いして、そのときにじっくりとお話をうかがいます。

カウンセリング予約申し込み

電　話
・簡単にご相談内容をきかせていただきます

説　明
・カウンセリングの進め方について説明をします

予約日時
・空き時間をお伝えします
・ご都合の良い日時をお選びください

面接当日
・カウンセリング予約日時にお越しください

初回面接
・約90分ゆったりとお話をうかがいます
・今後どのようにしていくのかについて話し合います

次回の予約
・1～2週間に1回のペースでお越しください　安定後は月に1回など、間隔をあけてお越しいただきます

カウンセリングスタート

場所・時間・費用・家族カウンセリングは誰が参加する？

面接のスペース

カウンセリングを行う場所は、来所していただき面接室で行います。他のクライエントさんと顔を合わせないように、また、外からの音が聞こえないように、集中できるスペースでお話を聴きます。カフェのようなオープンな場所でおこなわず、プライバシーを守れる環境でうかがいます。そうすることがクライエントさんの安心につながると考えているからです。

時間と費用

一回の面接時間についてです。

家族、カップルカウンセリングは九十分。

個人カウンセリングは六十分です。

様々な事情があって、遅刻して来られた場合は、残念ながら、予定の終了時刻までしか時間を確保できないことを了承してもらいます。

費用は一回一万五千円です。

家族カウンセリングは母親一人で来られても、ご家族四人で来られても同じ料金です。

前日までに連絡があれば、キャンセル料はいただきませんので、都合が悪くなった時点で早めに連絡をいただけるようにお願いしています。

いろいろとルールがあって、負担をかけることがあるかもしれませんが、事前確認をさせていただきます。

誰が来所するのか

不登校状態で家族カウンセリングを希望されているとき、子どもは嫌がって行かないかもしれないので最初は親だけでも良いですか？と尋ねられることがあります。その場合は、まず親御さんだけで来所してもらい、様子をうかがいます。無理にひっぱって連れて来ていただく必要はなく、二回目以降の来所はどうするかをご家族と話し合いながら決めていきます。

学校によっては、カウンセリングに通うとその日数分を配慮してくださる場合もあるので、ご家族にとってどのようなすすめ方が最適であるかを判断します。

訪問面接のオプション

状況によっては、訪問カウンセリングをします。その場合は、必ずご本人の了解を得てから家庭訪問します。決して急に、家に押し掛けることは、ありません。お互いに十分に準備をして納得していただいてから、お目にかかります。

ここに示した土台作りの内容は、一挙にご家族に示すのではなく、タイミングをみて、少しずつ伝えていきます。調整をしながら、より効果的支援をすすめます。

面接についてよくある質問

Q　本人がカウンセリングに行きそうにないのですが、最初は親だけでも良いですか？

A　はい。ご両親あるいはお母様だけが来所されてもかまいません。子どもさんが相談に初回から来られると良いスタートが切れますが、まず、お越しいただける方から様子をうかがい、カウンセリングをすすめます。

Q　子どもが学校を欠席しているので、相談に行きたいのですが、私の育て方を指摘されるのではないかと内心気になって、決心がつきません。

A　カウンセリングに行こうと思っても、敷居が高いと感じるかもしれませんね。面接では、育て方を追及したり、親の態度を責めたりするようなことはありません。今後どのようにしていけば解決につながるのかについて、じっくり考えていきます。

映画の中の子どもたち

第22回 エール！

ーマンネリが感動を呼ぶー

川﨑　二三彦

ストック・シチューション

本作､何か深く考えさせられるとか、新しい発見があったというようなことはなかったけれど、「ああ、映画館に足を運んで良かったな」と素直に思えた映画だった。ただし、どこが良かったのか、なぜそれが良かったのかを書き付けようとした途端、それがほとんど無意味なことだと気づき、書くことが何もない。何しろストーリーは単純明快で、感動したといっても、見終わってみれば結末はほぼ予測できるものでしかなく、それ以上何かを付け加える必要がないのである。

＊

そうして考えていて､ふと思い出し、書棚から引っ張り出した本がある。井上ひさしと平田オリザが対談した「話し言葉の日本語」（小学館）だ。読んだのは､もう十数年前のことだけれど、記憶を辿って改めてページをめくり、井上ひさしが語っていた次の一節を探し出した。

「外国には『ドラマドクター』という人がいます。その戯曲のどこが悪いかを指摘する人です。彼らがよく使うボキャブラリーのひとつに『ストック・シチューション』という言葉があります。日本語に訳すと、『お決まりの状況』。人類にはいままで何千年もかかってためてきた、おもしろい人間関

係や出来事がある。これがストック・シチューションです。たとえば、『三角関係』とか『偶然と誤解』とかいったものがそうです。野望に燃える若者が出世の階段をかけのぼるというのもそうです」

井上ファンである私は、彼こそ、こんな、いわばマンネリの極致のようなストーリーと決別し、奇想天外な発想の小説や戯曲をたくさん書いた、また書こうとした作家だろうと考えていたのだけれど、実は違う。対談の続きを見てみよう。

「このようなパターン化された人間関係や出来事を、文学や演劇が引き継いで再創造していきたいというのが、僕の基本的な姿勢です」

なんだ、マンネリを否定するのでなく、それを前提にして作品を生み出していたのかと驚いていたら、それは何も井上ひさしに限られたことではないという。

「チェーホフの『三人姉妹』は愛の三角関係ですし､シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は偶然と誤解でできている（笑）」

成功の秘訣

この部分を再読して、ようやく分かった。本作のパンフレットには、「耳の聴こえない家族の中、唯一聴こえる少女には歌の才能があった」「少女の夢と家族への愛を乗せた歌声が起こした、最高の奇跡とは？」などといった惹句が踊っていて、「簡単には起こりそうもない物語なんですよ」とささやいているけれど、実はこれ、何千年も前からある「お決まり」の映画だったのである。

ただし、そんな映画に人が感動するには、条件がある。今回は井上ひさしに度々お世話になるのだけれど、先の対談で、彼が戯曲を書く前につくるたくさんのノートのことを尋ねられ、こんなことを言う。

「この紙に書かれたものは、あくまでも、ただのストーリーですから、これを立体に組み上げるプロット作業が必要になります」

加えて、こんな発言もある。

「戯曲を書こうと思ったときに、(中略）テーマや思想や構想を最初にもって書き出すと、必ずと言っていいほど、失敗します。いや、これは、ほんとうです」

普通のコメディ

「よくできたシナリオ、俳優達の熱演に支えられながら、ラルティゴ監督は見事に私たちを楽しませ、さらには感動さえ与えてくれる」

フランスの映画雑誌「ポジティフ」は、本作品をこのように評したらしいが、今まで述べてきた井上ひさしの蘊蓄に耳を傾けるならば、この評はなるほどうなずける。

MovieWalker などで事前に情報を得たとき、もしかするとお涙ちょうだい式の安っぽい映画かも知れないと、実は最初敬遠していたのだけれど、それが裏切られ、「ああ、見て良かったな」と思った理由は、ストーリーの見事さなどではなく、シーンの一コマ一コマが立体的で楽しく作られていること、そして何より、人類が「いままで何千年もかかってためてきた、おもしろい人間関係や出来事」が繰り返されることで、安心していられた、つまりは、自然と湧き上がる期待感をそのまま満足させ、見たかったとおりに展開する映画だったからにほかなるまい。

この映画、キーワードはあくまでも

「聴覚障害」だ。ところが、不思議なことに、この手の映画で常に生じる「障害問題」だとか「障害者」を考えさせられ状態がなく、いとも簡単にそこから自由にしてくれる。いわば、普通のコメディに過ぎないのである。好感が持てるのは、恐らくこの点にあるのだと思う。

とりわけ、父の役どころがツボにはまっていて可笑しい。

「私が当選したら、あなた達のような障害者を全力で支援します」

などとおべんちゃらを言う村長に、「クソ野郎」と（手話で）毒吐き、周囲の反対を押し切って自ら立候補するなんて痛快だし、娘が歌の才能を見いだされ、家を離れてパリの音楽学校に行くという話が持ち上がると、急なことに母が狼狽し、「家族の手伝いは？」などとやり合う中で、迷う娘に父が答える。

「おまえなしでも平気さ」

考えてみれば、どの家族だって、多かれ少なかれ変化には痛みが伴うものだ。この家族では、唯一耳の聴こえる娘が、外部とのコミュニケーションを一手に引き受けていたのだから、確かに不便をかこつのはやむを得ない。けれど

「だからといってそれが何だ」

「どこの家でもあることだろ」

こんな雰囲気が、いいのである。

＊ 2014/フランス
＊鑑賞データ　2015/11/03 京都シネマ
＊公式 HP http://air-cinema.net/
＊ Twitter への投稿　http://coco.to/movie/39336

＊題名を　click すると本文へジャンプします。

へこれまでの連載〉
第 1 回 プレシャス
第 2 回 クロッシング
第 3 回 冬の小鳥
第 4 回 その街のこども
第 5 回 八日目の蝉
第 6 回 いのちの子ども
第 7 回 ラビット・ホール
第 8 回 サラの鍵
第 9 回 少年と自転車
第 10 回 オレンジと太陽
第 11 回 孤独なツバメたち
第 12 回 明日の空の向こうに
第 13 回 旅立ちの島唄
第 14 回 くちづけ
第 15 回 もうひとりの息子
第 16 回 メイジーの瞳
第 17 回 ファイ
第 18 回 思い出のマーニー
第 19 回 ショートターム
第 20 回 真夜中のゆりかご
第 21 回 きみはいい子

コミュニティと集団精神療法
（　3　）
― Rovinj でのスモール・グループ ―

藤 信子

８月の終わりから９月の初めにかけて、第１９回国際集団精神療法精神過程学会（IAGPP）に参加するためクロアチアのRovinj(ロヴィーニ)に行った。海に突き出た小さな半島が旧市街であり、その真ん中に高い鐘楼のある聖エウフェミア教会があるが、この教会が丘の上に建っているため、街の上に教会がひときわそびえたっている。プレコングレスが終了した午後、この旧市街と聖エウフェミア教会に出かけた。教会へ上る狭い坂道はツルツルになった石畳で、その坂道の両側にところどころテーブルを出して食事やお酒を楽しんでいる人たちがいた。その狭い坂道を登りきった丘の上の教会の庭から、夕方であるにもかかわらず、真昼のように輝く海と島の眺めが見下ろせるのだった。

２日間のプレコングレスは「ソーシャル・アンコンシャス」のワークショップに出た。昨年のリスボンの Group Analysis in Europa(GAS)のメディアン・グループでいっしょだったスウェーデンとイタリアの女性と一緒だったので、懐かしくほっとした。グループの中では慣れるまで聞き取ることに苦労したけれど、日本から一緒に行った友人二人も同じグループだったので休み時間に補いあいながら参加した。

3 日目から 4 日間のコングレス中に、毎日 90 分の継続するグループがある。これはサイコドラマ(PD)、グループ･アナリシス(GA)、グループダイナミックス（GD）などのオリエンテーションと、グループサイズのスモール・グループかメディアン・グループ等が明記されたものに、コングレスのサイトで申し込むようになっていた。一応コングレスの公用語は英語だけれど、グループによっては、英語以外にスペイン語、イタリア語、クロアチア語なども併用することが書かれている。このグループを申し込む時に、3 年前のカルタヘナ（コロンビア）での IAGPP の時のスモール・グループや昨年のリスボンでのメディアン・グループの体験がとてもよかったと感じていたので、自分の英語力を顧みず、GA オリエンテーションのスモール・グループに申し込んでいた。一日目の基調講演の後、グループの場所に行くと私たちのグループの場所は、部屋というには仕切られ方が不十分な一角だったので、ちょっと驚いた。コンダクターと、メンバーは A、B、C、D、E、F と G＝私で英語が母語であるメンバーは一人もいなくて、皆女性というグループ構成だった。ちなみに、B,C はヨーロッパの同国人、E,F はアジアの同国人である。始まって間もなく一人のメンバーが私に日本のグループとヨーロッパのグループとの違いはあるかと聞いてきたので、欧米のグループを体験した人から、日本のグループは始まった時の沈黙が長いと聞いていると答えた。帰ってきてトレーニング・グループの文献を読んでいたら、同じような質問をみつけた（Horwitz　2014)。グループが始まった時の沈黙に対して、よそから来た脅威的なメンバーに対して出される質問の一つのパタンのようである。確かにヨーロッパの人にとって、遠い日本から来ているけれど、どんなことをしているのかという興味と、話が通じるのだろうかという不安を持つことは、珍しいことではないだろう。そう考える一方、グループの始まりの沈黙に対して、コンダクターへの不満から、自らが質問を始めるということになったのだとも解釈できるということである。このセッションは、日本の引きこもりとイタリアのマンマバンビーノは同じようなものかとか、難民、ボスニアの戦争の話などがでた。

2 日目は E.F 二人が欠席、6 名のグループとなった。A が D の論文を読んだことを話す、戦争の結果、名前等を書き替えさせられた、という話。名前やアイデンティティを変えさせられるということに私は少しショックを受けていた。日本はホモジェニアスかと聞かれ、そうではないという話をする。現在の日本の問題は、日本の軍隊は防衛のためだけど、それを変えようとする政治家がいると言うと、名前を変えさせられた D は、とても穏やかな印象の人だけれど、「守るだけの軍隊なんて信じられない」と驚く。私の気持ちとしては、中立国はいくつもあって、それなりに国民皆

兵のスイスとか、いくつかの形態があると思ったけれど、20 年前に戦争が終わった国から見るとそうなのか、とそれ以上言わなかった。

3 日目にBがコンダクターはもっと強いリーダーシップを発揮するべきだと言い出し、C も沈黙が多く時間がもったいないと言う。コンダクターのスタイルはそれぞれだし、A と私は沈黙は嫌いではないと言った。私が沈黙しがちで何を考えているのかというCの問いに、私は戦争の加害者であることを忘れたいと思っている日本人について連想していると答えた。何故戦争のことを忘れてはいけないと思うの？と A に聞かれ、私は、当たり前だと思っていた事を改めて聞かれ戸惑い、グループの終わりまで考えることにした。コンダクターに対する攻撃がさらにこのカンファレンスの企画も及び、グループプロセスへの不安が高まった。B、C は明日はもう来ない、と言い出して、このセッションが終わった時にはヘトヘトという感じだった。

4 日目に来ないと言っていた C が来て、A と私が、3 人になるかと思っていたと C に言うと、嫌になったら途中で帰るからと言って席に着く。私はコンダクターへの不満は、この部屋の壁が十分でないため、不安になったからではないかと感じたことを話した。何故戦争が怖いとか、忘れてはいけないと戦争の話をするのかは、日本はこの 70 年戦争したことがない、ヨーロッパに来るといろんな戦争の話が出るので、怖くなったのだと思う。昨日の夕方は疲れきっていたということを言うと、C もそうだった、けれどとても良い本を見つけて読んだと言う話をする。私が疲れきっていたということにCが同じ感じをもっていたと感じられたことが、一つの展開のきっかけになったと、今プロセスを振り返って思う。C にとってあまり話さず、話すと暗いことを言う東洋人に、不安をかき立てられていた時に同じ感じだったということでCは私が理解できると感じたのだろう。昨日の怒りや不安が治まり、皆で外国に行った時に、いろいろなシステムの違いに困惑する話になり終了した。

国や地域が違うところで感じ方、考えが違うのは当たり前とはいえ、同じような職業や関心領域に従事していても、育ち暮らすコミュニティという背景の違いを感じることができたグループだった。そして私は戦争についてかなり観念的な捉え方をしているようだと、このグループは教えてくれた。ただそれが悪い事かどうかは難しい問題だと思う。

文献

Horwitz, L. (2014) Listening with The Fourth Ear, Unconscious Dynamics in Analytic Group Psychotherapy. Karnac

蟷螂の斧

第二部

トークライヴ2001

第六回

団　士郎

仕事場D･A･N／立命館大学大学院

今回は前の連載のつづきです。「続・家族理解入門　2」を期待しておられた方、ごめんなさい。大方まとめた原稿があるのですが、フィニッシュの気分になれない。そして新たな根本的なコンセプトを思いついたりしたので、いったん置くことに。

そして何より、前のこの形式が書きたくなったので、今回はこちらです。こういう自在性も対人援助学マガジン連載の魅力です。もっとも、書き手の身勝手が過ぎるという弱点もあるかもしれません。ご容赦を。

2001年8月（14年前）

08/01　空調工事屋が二度目の来訪。すぐ分からないなどと言う。そして、よく調べて試行錯誤してみたら修理できたという。なぜ専門家がこういう仕事しかしないのか･･･と思う。

「月刊仕事場D･A･N通信」(トークライヴ会場配布)の日誌を校正。K崎くんの本、4冊目の表紙デザインのゲラが届く。現職公務員で単著が4冊出てるんだから凄いことだ。

●忘れている人も多いかも知れないが、14 年前、PCはあったし、HPやブログも存在したが、ツイッターは多分存在しなかった。(調べてみたら、2006年7月スタート)だが私は、この時点で恐ろしく面倒な紙版のツイッターをやっていた。毎月それを印刷して配布していた。もう今となってはそんな手間はとてもとても。年賀状でさえストップしてしまった。

今や全国を、私以上に細かく走り回っている川崎二三彦君は、この時、まだ京都府宇治児童相談所の職員だった。それでいて明石書店から4冊目の本が出ていたのだ。

08/03　一日仕事場にいていい日はゆったりする。ポータブルDVDの修理が出来上がったと連絡があったので寺町の電気店に取りにゆき、**「火垂るの墓」、「グッドバイガール」、「理由なき反抗」**と、意味不明なラインナップのDVD三本を購入。マンションの天井やりなおし工事も終了。クーラーも治ったし、機嫌よく金剛出版の原稿の校正作業をする。紀伊國屋書店出版部の原稿の件、一応白紙に戻すこと、担当Mさんとのメールで了承。「発達」原稿のあれこれも校正段階に。

●当時、京都・寺町四条は家電街として誰もに認知されていた。とりあえずあそこに行って、複数店を見て･･･そう思って出かけていた。今、見る影もない。撤退した店、大型店は京都駅前にと様変わりしてしまった。私の頭の中からだけ消えない幻の家電街。

出版を打診されて、今まであちこちに書いていた原稿に、書き加えを入れた「私の見た心理臨床業界周辺の事情」(そういうタイトルではないが、そう言うつもりのもの)の本。出版社営業サイドから、読者ターゲットが見えない、書店のどこに並ぶ本なのか曖昧というような理由で駄目になったと、編集者から連絡あり。向こうから声をかけてきておいて・・・とも思ったが、まぁそんなこともあるのはここに限らないので撤収。

08/04　教員のための家族理解ws最終回。いいグループになって最終コーナーを迎えている。Sさん提出の事例、まったく家族の体をなさないまま、非常事態につっこんでいる。子供は大変である。

この事例検討の H 樫君の進め方が、なかなか面白かった。時間経過をファクターに入れて、2時間かけてやったもの。

●学校関係者が直面することになる問題に、深く家族が関わっているのに議論の余地はなかった。しかしあの頃もまだ、学校としては家庭に入り込むことは出来ないという言い方のままだった。

しかし昨今、SSWが登場して、その人達がどれほど機能できるかどうかの検証はぬるいまま、突然の手のひら返しで学校も家族のことを言い始めている。家庭訪問の手間も省いてしまったところが少なくない今になってである。

現場の必然に合わせて、自らが機能を拡充、変化させていかなければ、流行モノ、廃りモノを次々に予算の名で押しつけられて、消費するだけの学校にしかならないのに。そして、自分たちの実力はドンドン劣化していくのだが・・・。

私は家族療法の訓練を継続する中で、教員に家族のことをもっと理解して、扱えるようになって貰う必要を痛感していた。そこでKISWECで教員対象の家族理解WSを集中開催し始めていた。

参加してくれた人たちには成果も大きかったと思うが、継続的に参加者が溢れることにはならず、数年で不開催になった。何故そんなことが分からないのだ！と憤慨気分の頃もあったが、今では、世の中とはそう言うものだから、出来ることからするしかない。時期が来れば解ることもあるよと思っている。つまり老化である。

08/05　日曜日だが、Sさんの面接日が取れなかったので朝やることに。KISWECへH樫、S掛、C葉、Y本の4人がギャラリー。昼食歓談後、仕事場 D·A·N に。夜、自宅に届いた「人間関係論」のレポート899通(1000 人を超える受講登録で、最終レポートの提出がこれだけだ)の採点を夜中に始める。面白いものが減ってきている気もするが、それでも読もうという気はする。

08/06　移動途上にレポートを読み続ける日々が始まった。20日までに成績を欲しいとか言っている。次年度の授業は600人以下の清心館でおこなえるようコントロールすべきであると書いた答案あり。

08/07　昼前に仕事場 D·A·N に。今朝も4時頃まで採点をしていた。読んでも読んでもいっぱいある。仕事場 D·A·N 通信八月号を完成させて折って切る。夕方からKISWEC今年度訓練受講生達との会食に、仏光寺柳馬場のレストランESSENへ。

●文学部「人間関係論」のレポートが送られてくると、長い読み歩き生活が始まる。ありきたりな記述も多いが時々、はっとするような文章や状況記述と出会う。するとそれが、「漫画・木陰の物語」のインスピレーションになる。そのまま描くことはないが、記憶の中の何かが引き出されるきっかけになる。

08/08　Y市教員の夏期wsで勤労者福祉センターに。昨夜までH田さんから連絡がなく、やきもきしたが32人の受講である。M園小学校の教員は基本的に全員参加。月例開催の家族勉強会とドッキングしている。

午前中は父親を思い出して語るエクササイズ。午後は「決定」をキーワードの家族面接と事例検討。三つ目の事例検討は、時間の関係で中途半端になってしまった。やめる決断もあったとは思うのだが。

琵琶湖花火大会の混雑を避けたくて、急いで帰宅。自宅ベランダから目前の花火を見上げるのは

いつまでだろう。その内また、山側の本宅(本宮)で花火を見る日がくるだろう。

キネ旬広告で8月10日「初恋のきた道」DVD発売を知る。待望の・・・である。

この時点ではまだ、暫定別宅生活を夫婦と娘でしていた。本宅には両親と私の次男(孫)が暮らしていた。もう二人とも亡くなったが、この時点ではまだ両親が存命だったのだ。今では次男も二人の子の父親になっている。十四年も経つと、何もかもが変わってしまうのだなぁ。果たして自分自身の成長変化はいかがなものだろう。

08/09　時間を見つけてはこつこつとレポートの採点をしている。面白いものがときどきあるが、つまらないものや舐めているものも多い。自分の学生時代をふりかえれば、もっともなのだが。巨大教室(1000名収容)の変更がムードをかえてしまったことを感じている学生が多いのに改めて驚く。

夏の旅、イスタンブール旅行の払込みをしてHISに電話をいれると、トルコ航空(直航便)で席が確保できたとのこと。何かと都合のいい段取りである。

夕刻、園部駅に向かう。瑞穂町職員向けの講演で、出迎えが園部駅まで。JRの走ってないところは私には不便なところ。講演の出来は、笑いの少ないものとなったため、受け手の感触は不明。住民課長は嵯峨野高校でも聞いているので、あの時との違いに驚いたかも。

帰路の車中、**N・サイモン著「第二章」**読了。面白く読んだが、第一巻の方が良かった。

イスタンブールに格別な思いがあるわけではない。巡り合わせ、偶然である。そしてそれが必然になる気がすることもしばしばある。遭遇とはそういうものだろうし、私達はまだ見ぬ何かは知らない。そして知らないものを欲望することは出来ない。

08/10　**「DVD・初恋のきた道」**購入。そのうちゆっくり見よう。

午後は家裁の調停三回目。申立人が来ないという展開。相手方の母親にも来てもらったが、見事に話し合いにならない。同じ日本語世界の人とも思えない。代名詞ばかりの、独り言老人。イライラする。娘も来ていたが、彼女の立場のなさにも同情してしまう。もっと普通の親や祖父母が欲しかったろう。

仕事場D・A・N通信　第５号

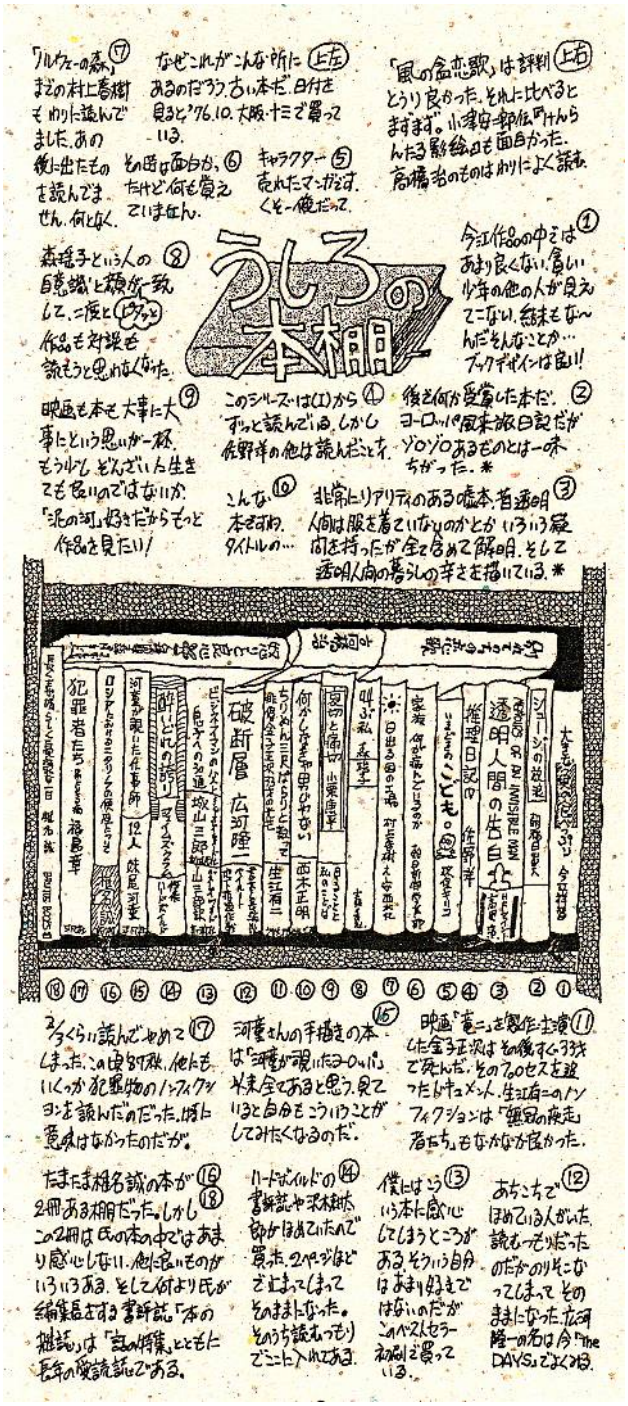
トーク2001の5回目が終了。いつものように50人ほどの出席は有り難いこと。しかし、話の出来は今ひとつではないかという反省しきり。というのも、今回第二部に用意していた話にゆかりのある人が突然出席してきたのである。驚いてしまって、やや混乱。終了後、K崎、K嶋と三人でお茶を。

帰宅途上にレンタルビデオ。**「処刑人」**変な映画。**「ダーク・エンジェル第二巻・ハンナ」**ちょっと、面白くなってきた。でも、やっぱり続き物のシリーズの匂い。採点は半分済んだような気配である。思っていたより快調なペースで進んでいる。

トークライヴに50人もの有料入場者があったこ

とは、今振り返ると不思議な気さえする。私に勢いがあったのか、時代がそんなだったのか。この時の全記録が音は良くないが存在する。いつか聞き直してみたいと思って、ある時8ミリビデオテープをDVDにダビングして貰った。

以下は配布していた仕事場DAN通信の中の記事。手間のかかることを楽しんでいた時代だ。



08/11　朝寝の土曜日。四六時中採点の日々である。今日読んだ中に、今回の一番のレポートがあった。長崎の大雨土砂崩れで、生き埋めになって妻子を亡くした人が、社会人入学で受講しているそうだ。これだけ人数がいると、そういう人が含まれていることがあるのだとあらためて思う。仕事場に出てきて、メール返信。HISにパスポートのコピー、K出版のI井さんにFAX。

実家の母から心細そうな電話。近隣の住人の妻が妄想気味のことを言ってクレームにやって来る。「自分の悪口をFAXであちこちに言っているだろう」と何度も繰り返しているらしい。夫に連絡して、しかるべき対応をしてもらった方が良いとアドヴァイスしたが、父と相談して様子を見ることにしたらしい。

妻が熱っぽいので夕飯は済ませてきてと言う。そこで仕事場に泊まり込むことにした。「発達」の校正をして、夕食に出る。安くなった吉野屋で特盛り、けんちん汁、漬け物で八〇〇円。食後、青山でアメリカン・コーヒー五五〇円。仕事場に戻るつもりで歩いていると、「ジュラシックパーク3」オールナイトの看板が目にはいる。次回は午前一時三〇分から。まだ一時間ほどあるが、観ることにする。そこで初めてマンガ喫茶に。新規オープン半額とかで一時間一九〇円である。気になっていた**コミックス「陰陽師」**を読む。**映画「ジュラシックパーク3」**は例の調子で、変わりばえしない。鳥かごのイメージはなかなか目には面白かった。なんだかいろいろ刺激的な土曜日である。

木陰の物語「過去・現在」のネタ元がここにあった。そうか、あの話に触れたのは 800 枚以上のレポートの中だったのか。すっかり忘れてしまっていた。あの作品は今では宝だから、読む作業は発掘だったことになる。

地域社会にはいろんな人がいるが、みんながつつがなくやっていればいるほど、ちょっとした差異が、不安や恐怖になる。

仕事場に泊まることは、以前より今の方が多くなった。しかし、こんなにイベントのように夜中にうろつくことはない。元気だったのだなぁと思うが、自宅以外に、京都市内に仕事場を設置したのは、家賃負担を越えて得策だった。

最近、そろそろ大学の定年退職も視野に入れて、仕事場D・A・Nの撤収も考え始めている。そして、この期に及んで、ずっと自宅がベースになる事への心配が頭をもたげている。

08/12　半日かかって仕事場の掃除。なかなか片付かない。わかっているのに、なぜこんなになってしまうのか。日曜夜、K一1を見ながら飽きていることに気付く。BS放送のイチロー特集。わくわくする。シアトルのアメリカ人のイチロー談義が面白い。これって小泉人気と同じメカニズムだけど。

身勝手な話だが、やがてイチローにも飽和してしまった。説教臭く感じ始めたので、情報に触れる機会が減った。振り返ってみると、サッカーの中田ヒデに注目し、香川に移り、MLBのダルビッシュに目を奪われ、ヤンキースのマー君に心惹かれ、今は錦織圭って、ただのスポーツミーハーだな。

08/13　月曜日、昨日手をつけた片付けがまだ納まらない。それよりショックなことは、「カイよりはじめよ」の言葉を、まったく勘違いして覚えていたこと。それを文章に書いてしまったことだ。しょうがないか。

「木陰の物語」を紀伊国屋書店から本にできないかどうか、打診のスクラップを送る。一度失敗しているMさんが今度は頑張ってくれるかな？それだけで一日すんでしまう。

夕刻K崎くん、遅れてH谷さん来訪。LAMASAで食事しながら話す。H谷さんの園部での生活は愚痴ばかり。大変だなと思う。今、組織の団塊世代は本当に行き詰まり、閉塞であるようだ。

夜中、ビデオ**「ぼくたちのアナ・バナナ」**エドワード・ノートンを観る。そこそこ面白かった。

この時点ではまだ、「木陰の物語」が出版物になる計画は成立していない。結果的にホンブロックから、「家族の練習問題」1−6 巻として現在に至ることになる。でもまだ、そんな未来があることを誰も知らない。未来はいつもそうである。

08/14　小泉首相は昨日靖国参拝に。そういうアイデアがあったのか。レポートの採点が大詰にきている。今日の一通、「虐待の世代間連鎖のようなことを言い過ぎると、片親や家族的マイナス原因を興信所が調べたような風潮が、またぶり返すのではないのかという懸念がある」このセンスにはっとする。

08/15　嫌な事件が起きている。連れ子再婚夫婦の小学生の子どもを、虐待死させてしまっている。施設にも入っていた子だ。一時帰省の間のこと。死体遺棄までしている。全く嫌になる。人間に期待を繋ぐのが虚しい気にさせられるような出来事だ。

この二日間の記述は、何かを考える上での「ありたい姿」と「ある姿」の扱いについて、考えさせられる。慣用句に登場する、親が変わってしまったというのは本当なのか。子どもが昔とは違うというのは本当なのか。生物がそんなに短期に、決定的変化を遂げたりするものなのか？変わりやすいのは人ではなく、状況の方だろう。

08/16　朝の相談室は受け付けのAさんがアメリカの妹宅訪問でお休み。面接予約も入れてなかったのでソファーで居眠り。

午後は家裁のやっかいな一件。時間がかかって、2時から始まったものが、終了は5時45分。気むずかしい虐待親父に、ここというところで、リアリズムを突き付けて話す。すると、私は理解してくれてる人だといいだす。28条の調査については、一緒に居てくれるのかと聞いたりする。人は自分の都合のよいようにではあっても、理解されたいものなのだ。この時間になると空調は切れてしまって暑くて仕方ない。なんという役所だ。

終了後、久しぶりに本宮へ。母が、「もうこの家はあんたも必要ないやろ」等という。何を云われても、笑っている私である。7シネマに出かけて**「RED SHADOW　赤影」**を観る。心底つまらない。映像的面白さだけの映画。忍者映画の面白さを作り出せていない。

これを読むまで、母がこんなことを言ったことを

覚えていなかった。この経過には、いったん同居しておきながら、大津市内のマンションに別居していった私達への不満や批判がある。当初の話し合いでは、親父よりも物わかりの良いことを言っていた母だが、腹の中では無念だったのだろう。しかしこの後、父が亡くなり、一人暮らしになった母の所に戻って再同居するようになって、想いの変化もあっただろうと思う。人は単純じゃないし、その時だけではない。

人はどの時点かに時間を止めて、それに自分の人生を代表させてしまう事がある。事実に目を向ければ、けれど生きている・・・だし、その後にも様々なことが起きるのが必然だ。生き物は自分の知らないある日の死に向かって、それでも日々を過ごすものだ。解釈と説明で人生を操作しようとしすぎる人の落とし穴を見る気がする。それもこれも、今も、私の人生である。

08/17　昼前に仕事場にきた。人間関係論のレポートの採点が完了。よく読んだものだと思うが、残り僅かになると、もうあと少しか・・・と残念に思ったりする心情がおかしい。25日のイスタンブール行きまでに仕上げておきたいことを書き出して片づける。

立命レポートの成績記入と発送、季刊「発達」の原稿、「児童心理」のイラストと原稿、晩年学フォーラム通信のマンガと文章、できれば「木陰の物語」9月分、とこんなところなのだがサテサテ。夕刻、N本さんが面談に来る。

今も忙しいような気がするが、当時の多忙さに比べると、年齢相応の抑制もきいてきている気がする。それに、この当時頑張っておいたことの成果が今に結びついている感じはあちこちにある。やはり出来るときには、やっておくのが一番なのだろう。

更に説教臭いことを加えるなら、今だけをしのぐような仕事は抑えて、未来の種蒔きに鳴ってくれそうなことを、忙しくてもしておくことだ。

08/19　月例ミーティングの日。F川、C葉、M、N本、小Z、H田の六人が来談。

月に一度、日曜日の午後から有志が集まって業界内外、周辺諸々の雑談会を仕事場DANで開催していた。食べ物持ち寄りの、日がな一日の歓談会だった。

仕事場を京都市内の便利なところに設けた目的の一つがこれだったので、長いこと月例会で開催していた。参加が 10 人近くと多いときも、3, 4 人の時もあったが楽しかった。毎日出勤する職場がなくなったので、新たな同僚づくりを志していたのかな。

08/20　一日かけて木陰の物語・金剛出版用バージョン第一話「故郷」の絵の部分を完成。BGMは朗読・**永井荷風著「墨東奇譚」**。

夜、遊が泊まりに来ている。「団遊通信」のおかげで、やっていることがよく見えている。大和証券に務めている次男いどむの事が気がかりだ。こと葉は明日、台風の中を彼氏の車で東京から戻って来るという。

この頃はまだ、自分の中に親の気分が強かったのだなぁ。上二人は成人して、それぞれ仕事をしていたのにである。今だって、子どもは子どもだが、それぞれに対して安心感は絶大だ。有り難く育ってくれた。

08/21　台風である。琵琶湖からマンションにふく風は驚くほど。朝、大津市の保護司会・K川さんから講演依頼あるも、火曜日で女子大の授業日ゆえ断る。O市自治労の保育部会の研修会、助言者依頼ある。日程は都合つかなくないが、講演料定価を伝えて返事待ち。網野町から講演依頼。夜間であるが、日程が比較的自由で相談の余地あり。規定の謝金を用意しているので引き受けることになりそう。

50 歳でフリーになってから、お金のことをきちんと請求して、扱えるようにと努力してきた。公務員だったから一番弱い面だからだ。そして様々な状況の中、自分の定価を確保して時間が経った。

昨今、あまり拘らずに、行けるところには行って

あげようと思った途端、講師謝金が 15 年前に戻ってしまったところがある。人にものを頼むのに、謝礼のことを口にしない世話人はずるい人か弱い人だ。自分に都合のいい熱心さばかり強調するのは怪しい。

08/22　近畿はまるまる暴風圏にはいって雨風。そして関東に抜けていった。仕事場で一日作業。児童心理校了、発送。「発達」FAX送信。締め切り分は一応片付く。やっと本物の空調屋が来てくれたようで、クーラーの水漏れ工事、三度目の正直期待。
08/23　昨日から読んでいる、「蜷川幸雄伝」が面白い。朝は相談室。先日会った人が偽名で来ていたらしいことが判明。本名で改めて別の日に予約が入っている。しかも、前回来たときのことを受け付けに伝えている。よくわからない人だ。
　MさんのN市勉強会、９月も中止。１２月からというが、その日程でトラブル。上手くいくところは自然にそうなるし、駄目なところはどうあがいても裏目にでる。そういうものなのだろう。

　他人任せで気楽に、何もかもが上手くいっていたわけではない。むしろ、順調なもの以外は皆、壁や落とし穴に出会っていたと考えてもらった方が、事実に近い。
　それでもへこたれないのは、上手くいったその一つが元気をくれていたからだ。やりたくもないことが上手く行っても、フィードバックは少ない。そして上手く行かなかったら、本当に滅入る。
　だから結果が出た時の気分は、上手くいったかいかないかで決まっていたのではなく、やりたいことだったかどうかで決まっていたのだ。
　やりたくもないことを、仕事だからと我慢して、あげくにダウンしている人は考え直した方がいいよ。

＊＊＊＊

　そして翌日からイスタンブールに出かけた。その旅の記録は以前に掲載したことがある。

学校臨床の新展開

― ㉒此処じゃない何処かへⅡ ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

何しに来るんだろうか。学校へ。

教員「おい、いまごろ何しに来たんだ。」
生徒「・・・(無視)」
教員「そんなに勉強するのが嫌だったら、学校来なかったらいいじゃないか。」
生徒「うっさい、ハゲ。」
教員「何しに来たの。」
生徒「きもいんじゃ。」
教員「帰りなさい。」
生徒「しばくぞ。」

昼前にやってくる中学生。ふらっとやってきて教室で友人の顔を見て、連れ立って校外へ出ていく。こんな光景をいろんな学校で何回ともなく目にしました。

彼らは既存の学校システムの中では排除される者たちです。集団で勉強をする場には、それにあったふさわしい姿勢、態度が求められますが、彼らはそもそものところからなっていないと排除されるのです。心ある多くの教員は彼らの背景を一定理解し共感的にかかわろうとしますが、それを上回る勢いで彼らから反抗や挑発があるため、なかなかコミュニケーションが成立しませ

ん。彼らは、行く場を失い、街のほっとステーションなるコンビニの前に集まりますが、お菓子の袋を散らかしたり、タバコを吸ったりということになり、ほどなくコンビニから学校へ通報され、教員が大挙して押し寄せ、また「早く家に帰りなさい」「迷惑をかけるな」と追い払われます。そして、なかなか親が帰って来ない家などに集まったりします。

彼らのなかには、生活困窮家庭やひとり親家庭、保護者の疾病、被虐待児童、発達特性のある児童、外国籍など生活面で何らかの支援が必要な家庭の子どもたちが少なくありません。しかし、冒頭のようなやりとりが多いため学校教育のなかでは排除されがちです。また、たとえ、教室に入って授業に向かおうとしても、彼らの多くは、もはや授業内容についていけず、学習に対するモチベーションが低下しているだけではなく、劣等感や自己否定が支配しています。学校では、あの手、この手で彼らに学習習慣の定着をはかろうと、教員ＯＢ・ＯＧや地域の有志の方々の力を得て、放課後の補習などに彼らを誘いますが、中学生ともなると、なかなかまじめに頑張ることに抵抗も出てきます。そんなとき、できるだけ小学校低学年のうちに、何らかの適切な支援につなげることができていればと思うことが少なくありません。そして、学ぶ喜びについても、できるだけ小学校のうちから感じてほしいなと思うのです。そのためには安心できる大人が傍らにいる必要があります。

家でも学校でもない学童保育という場

2015 年の春から、児童福祉法の改正を受け、いわゆる学童保育がこれまでの低学年に加え高学年までも対象とするようになりました。地域によっては、この改正により高学年のニーズが顕在化し、利用児童数が激増しているところもあります。そういったところでは、これまでと同じ施設のなかで、子どもの人数だけが増加するという状況のなか、すし詰め状況の施設もあります。新システムへの移行期でさまざまな課題に直面する学童保育ですが、家庭でも学校でもないもうひとつの「場」として、子どもたちにとってはかけがえのない生活空間、成長の場、出会いの場、学びの場となっています。しかし、学童保育は放課後からせいぜい 18 時 30 分ころまでの支援です。就労している親が 18 時や 18 時 30 に家庭に帰っている状況というのはフルタイム就労では考えにくいのではないでしょうか。このような場合、子どもたちは親が帰ってくるまでひとりで、あるいはきょうだいで待つか、それとも塾や習い事へでかけるということになります。経済的に厳しい家庭では塾や習い事に通わすことは難しいですので、子どもたちだけで保護者の帰りを待つということも少なくありません。さみしい思いを抱くという心理的な面だけではなく、食事や学習といった生活や学習習慣の問題も出てきますし、朝が起きられない、不登校にもつながってきます。

夕方から保護者の帰宅までを支援する児童福祉サービスとして「ファミリーサポートセンター（地域子ども子育て支援）事業」や「子育て短期支援事業（ショートステイ、トワイライトステイ）」があります。しかし、これらの認知や活用には大きな地域差があるのが現状です。

地域で子どもたちを育む

糸賀イズム福祉先進県といえる滋賀県では、昨年末から社会福祉協議会や社会福祉施設、民間ＮＰＯ、大学生が協力し、「子ども食堂」や子どものための「フリースペース」を運営しています。子どもの利用を促すのは、各相談窓口だけではなくスクールソーシャルワーカーが大きな役割を担っています。とくに画期的なことは地域によっては高齢者施設を活用して「子ども食堂」や子どものための「フリースペース」を運用されているということです。特別養護老人ホームではデイサービス事業を行っている事業所も多くそのスペースを夜間子どもたちのために活用されているのです。色紙などレクリエーションのためのグッズもたくさんあるし、食事もできるし、お風呂だって入れる。確かにこれはすごい！

家か学校かではなく家でも学校でも塾でもなく、「評価」を抜きに存在をあるがままに受け入れてくれるもうひとつの場所ができること、「評価」を抜きに関わってくれるおばあちゃんや、おじさんやお姉さんがいることは子どもたちにとって明日への力となるのです。

Ⅳ. キャリア再考への序章

学びの森の住人たち（18）

－学校でもない学習塾でもない、〈学びの森〉という世界が投げかけるもの－

アウラ学びの森　北村真也

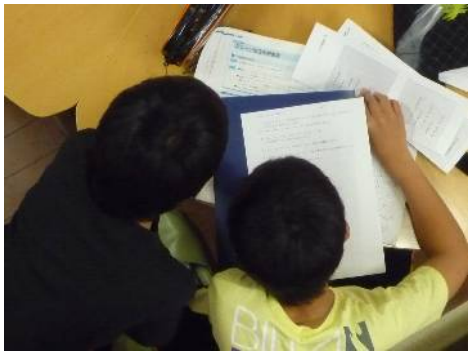
この原稿の各章を貫いている一つの大きな文脈は、不登校という現象には、現代社会が抱えるさまざまな課題が表現されているのではないかという社会臨床学的な視点です。だから私は、不登校の子どもたちが変容を遂げ、やがてそのキャリアを形成していこうとするエピソードやインタビューを丁寧に拾い上げながら、それを通して彼らが育った家族や学校、そして社会そのものを見つめてきたのです。そういう意味では、不登校というのは社会を見つめる有効な窓のようなものだったのかもしれません。

学校という社会に適応しなかった彼らは、やがてさまざまな形で追い詰められていきます。それは、昼夜逆転やひきこもりといった生活面で、発熱や頭痛、あるいは腹痛といった身体面で、さらには対人不安、強迫症状、情緒不安定といった心理、精神面で、その他、発達面やパーソナリティに還元される問題など、それらは実に様々な形で表現されていきます。

私たちは、そんな彼らのコトバによらない表現から、その奥に横たわる文脈を読み解き、それをコトバによる文脈へと置き換えていく作業に関わっていったのかもしれません。そして、そこで語られるのが、個人の物語です。孤独なリストカッターとして登場したアッコ。得体のしれない不安と対峙してきたサトル。会話のない両親のもとに育ちコミュニケーションに対して大きなコンプレックスを抱かずにはいられなかったヒロシ。お腹が痛くて、いつまでも教室に入れず 2 つも高校を辞めることになっていったユキエ。そしてみんなが顔見知りという田舎の小さな社会で育ちながら、メイクをしないと外に出られなくなってしまったカオリ。そこには、彼らの切実で状況と、それらを乗り越えていこうとする物語がありました。そして彼らは、自分たちの物語を描きながら、今まで分断され、見失っていた自分自身を取り戻し始めたのです。

そんな彼らも、やがてアウラの森を巣立っていきます。高校や大学へと進学し、そこで多くのことを吸収し、それぞれのキャリアを形成していきます。ここでは、そん

な不登校を経験した彼らのキャリア形成の過程から見えてくるものを拾い出し、あらためてキャリア形成そのものを見つめ直してみたいと思います。



1. 不登校への俯瞰的視座

不登校支援の最大の難しさは、その多様性にあるように思います。支援の現場におられる方であれば誰しもが実感されているように、その状況は一人一人大きく違うのです。本来、不登校という社会現象を大きく俯瞰的に捉えると、それは家族や地域を含め多様化する子どもたちの生活世界と、近代システムとして機能する学校というリジッドで単層的なフレームとの乖離として生じている現象として捉えられるように思います。言い換えればそれは、すでにポストモダンな社会へと移行してしまった私たちの生活世界を未だ近代的なシステムとして機能する学校が十分に受け止められなくなってきた証でもあると考えられるのです。

近代システムは、どこかに理想的な正解モデルを前提としています。雑多な状況をこの正解モデルのもとに序列化させて評価を与え、いかに効率よく正解へと導いていけるかに価値をおいてきたのです。そして、そのシステムは常にモノローグ型。つまりシステムそのものは変化しないわけです。システムが更新されると、混乱が生じると考えられているのです。ラウンドテーブルの学校関係の参加者がよく口にしてきたことは、「学校では、システムそのものの是非を問えない」ということでした。「学ぶってどういうこと？」、「学校の意味って何？」、「生きる力って、私たちにあるの？」これらの問いが学校内で話し合われることは、まずないそうです。それは、禁じられた問いなのかもしれません。

それに対して、ポストモダンなシステムは、多様性を前提としています。次々と変化する状況をまず引き受けているのです。だから、システムそのものがダイアローグ型であり、どんどん自己更新をすることで、この多様性を吸収しようとするダイナミズムを持っています。つまり先の学校の例でいえば、具体的な問題を巡っても、それが「学校って何？」という大きな問いにいつでも戻されるような議論が交わされるシステムなのです。ここでは、絶えずその意味が問われていくことになります。

ある意味、現代社会の持つ多様性がプリントされた不登校の子どもたちが、モノローグな学校というシステムのもとで不適応を起こすことは、決して考えにくいことではありません。いわば当然の結末かもしれません。それは、異質なもの同士の葛藤というカタチで表現された状況であり、どちらか片方にその問題性が集約されるもので

はないはずです。でも現実は、子どもたちがその問題を引き受けるのです。

不登校の子どもたちはたいてい、何らかの具体的な名前を持った問題を抱えています。アッコは〈リストカット〉、サトルは〈対人不安〉、そして〈ひきこもり〉、ヒロシは〈コミュニケーション・コンプレックス〉、ユキエは〈過敏性腸症候群〉、そしてカオリは〈醜形不安〉に苦しんでいたのです。そして具体的な名前は、彼らにその問題のイメージを提供するのです。これはラベリングと言われています。しかし彼らの多くは、それがどうしてなのかわかっていませんでした。ただ不安なのであり、ただ苦しいのであり、ただお腹が痛くなるのです。そして、わからないからこそ余計に自分自身を責めたり、卑下したりしながら、次第に自信を喪失していくのです。一旦、自己肯定感がなくなってしまうと、社会に対する信頼感も失われていきます。彼らにとって、社会はいつも恐ろしいものに思えてしまうのです。社会に対する不安が彼らに襲い掛かり、ますます自分の殻に閉じこもるようになるのです。そこにはどうしようない状況へと突き進んでいくような悪循環のループがあるわけです。

不登校に対する俯瞰的視座は、私たちにある矛盾を突き付けます。本来、現代社会の多様性が子どもたちに表現され、その多様性ゆえにモノローグで単層的な学校というシステムの中で不適応を起こしたのであれば、その課題は、学校というシステムを介して社会に再帰するべきなのではないだろうか？　つまり、学校や社会そのものが、不登校の子どもたちから何を学びとれるのかが、問われているように思えてならないのです。不登校という現象を前に、問題の子どもたちをどれだけ多く見つけだし、彼らに何らかの施しを与えるのではなく、そこから見えてくる課題を、より大きな社会へと再帰させる仕組みをどう考えるのかということの方が、より重要なことのように思えてならないのです。

『幼稚園の現場から』

23・大量に焼き芋を焼く！

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

●焼き芋焼いて20年

幼稚園はもちろん、保育園でも子どもが何かしらの経験を通して心身を発達させていくことが、園で営まれている活動の目的であり、園そのものの存在意義でもありましょう。

何を身につけるかはその園の教育方針により違いますが、とくに小学校以降の系統的学習につながるような活動において、外してはならないのが「内発的動機付け」といわれる「子ども自身の自発性」を引き出しながら活動を進めることではないでしょうか。

そのためのエッセンスとして「楽しい！」という感情や「興味・好奇心」というキーワードは欠かせません。

①たのしい！
②やりたい！
③まんぞく！
→次へつながる意欲が沸く

という流れを作り出せれば、教師の意図する「発達のねらい」を子ども自身がどんどん獲得していってくれます。伝達されて覚えていく〈静の知識〉より、実体験を伴う〈動の知識〉が幼児期には適しています。なので教師たちはいつも「子どもたちをどう楽しませようか…」と腐心していますが…これがとても重要な仕事なのです。

さて、焼き芋の話に移りましょう
僕は童謡の「たきび」の歌を聞くと（歌詞には焼き芋なんて出てこないんですが）あの煙の下には、ホクホクした焼き芋が隠れている！とつい連想してしまいます。

『たき火』
かきねのかきねのまがりかど
たきびだたきびだおちばたき
あたろうかあたろうよ
きたかぜぴいぷうふいている

僕が少年時代に、父が枯れ草を燃やすときには、決まって芋を放り込んで焼いてくれた経験があるからでしょうね。昭和30年代の田舎ではそんな情景が普通にあったのですが、ずいぶん前から野焼きが制限され、都市部はもちろん、地方の市町でも個人的に焼き芋を焼くこともかなわなくなってきました。

「子どもたちにも焼き芋の情景を味合わせてやりたい！」園長のノスタルジックな動機が発端であることは否めませんが、かれこれ20年以上、幼稚園で焼き芋を焼いてきました。

少量でしたら電子レンジやオーブンでも「焼き芋」モードでおいしく焼けるし、バーベキューの時に焼くこともできるでしょう。同じようなものでも、焼き芋を〈動の知識〉とするためには何が何でも焼かなくてはなりません。

秋に芋掘りに出かける幼稚園・保育園・施設は多いと思いますが、いも煮や蒸かし芋で味わっている園も多いと思います。この方法だとほとんど失敗はありません。

野焼きの焼き芋は、時間通りに焼けなかったり、焦げてしまったりと失敗の不安がつきまといます。それでも焼き芋を子どもたちに食べさせたい！と、僕と同じように思われる方は今回紹介する方法を試してみてください、きっとうまくいくと思います。

「自分たちが掘ってきたお芋が焼くだけでこんなにおいしくなるんだ！」という、じつに楽しく、美味しく、満足できる（お腹も？）活動ができることでしょう！

▶やきいもだあー！

●情報交換がヒントに

この方法は、東京八王子にある高尾幼稚園の園長先生に十数年前に教えてもらい、それ以来安定して焼き芋を焼き上げることができるようになりました。

それまでは、落ち葉やもみ殻、薪を使っていろいろ試行錯誤をしてきましたが、場所も取るし煙いし、時間までに焼きあがらず、お腹をすかせた子どもたちをずいぶん待たせてしまったこともあります。

幼稚園の活動は、それぞれの園で独自のレシピ（活動計画）を持っていますが、同じような活動をどうやればうまくいくか、具体的な情報交換がそれぞれの園の活動を充実させます。この方法を教えて下さった先生への感謝の気持ちを込めてこれを読んで下さっている皆さんにも詳しくお伝えします。

さほど広くない ●園庭で焼くことを考慮

畑や広い空き地で焼くなら、火の用心や煙のことをそれほど気にせず焼けるのですが、幼稚園で行う場合は園庭のまん中あたりになるのではないかと思います。園庭が広くない場合は、火の大きさや灰の処理も考慮しなければなりません。それも**木炭を使って焼く**ことで解決です。

200本を一気に焼くとなるとそれなりの道具が必要ですが、実施される園の規模に合わせてアレンジしてくださいね。

童謡「たき火」のイメージはこの際置いておき、火は見えないけど遠赤外線で焼くことで、さほど広くない園庭でもおいしい焼き芋が焼けます。

●道具

ドラム缶の釜

お知り合いの工務店や溶接をやっているところで、ドラム缶を縦に真っ二つに切ってもらい、「釜」を入手します。両側に溶接で取っ手を付けてもらうと便利です。１釜でマックス200個焼けます。大量でなければ市販のバーベキューコンロを使用しても良いでしょう、芋を平面に並べられる数×２段程度までは焼けます。

▶写真の釜は10年以上使用して錆びていますが問題なく使えます。金具を溶接して取っ手を付けてあります。サイドに空気穴が開けてあります。

その他道具一覧（焼き場）

ブロック	ドラム缶の釜を安定させるために両側を挟みます （１釜に２個）
木炭	ホームセンターなどで購入します。 １釜で芋200個焼く場合12kg使用 芋100個で９kg見当
薪	材木の端材など木炭に火をつけるためのもの、（１釜に端材袋１袋程度） 煙を最小にしたければ着火剤でも可 その場合木炭の量を増やす
火バサミ	バーベキュー用の長めのもの
ブロアー	炭に風を送るときに便利 ウチワでも可だが熱に注意
綿軍手	古いもの、芋をつかむときは二重にして使う、合成繊維製は溶けるので不可
スコップ	燃えている炭を入れ替えるためのもの
バーナー	着火用、ライターでも可
消火バケツ	水を入れておき、使った火バサミを入れる
竹串	焼き芋の焼き上がりを確認する

▶１釜100個 × 2釜=200個焼く準備（木炭18kg）

▶充電式ブロアーと綿軍手

芋の準備

いも+アルミホイル	洗った芋をアルミホイルで隙間なく包んで準備。二重でも良い。
新聞紙	あつあつの焼き芋を入れて子どもが食べるための袋をつくる
ゴミ袋	焼き上がった焼き芋からアルミホイルを剥いて捨てる。

▶前日に自分たちで洗った芋にしっかりアルミホイルを巻いて持ってきました。

▶新聞紙を使って紙コップの要領で芋を入れる袋を事前に準備します

●事前準備

①子どもたちが芋掘りで掘ってきた芋から適度な大きさのものを選別し、必要な個数の２割増しで準備しておきます。（中が傷んでいたり、焼いたときに焦げたり、食べるときに落としたりした時の交換用）

②年中長クラスの子どもたちが事前に芋を洗います。

③当日、芋を焼く前に、子どもたちがアルミホイルで芋を巻きます。隙間がないように二重ぐらいにします。隙間があるとそこから火が入って焦げてしまいます。
アルミの内側に濡れた新聞紙を挟み込む方法もありますが、新聞が焦げたときに取り除くのが大変だったので省いています。なんとなくふっくら仕上がる感じがしますが、好みでやっても良いと思います。

④クラスでは、お芋が焼けるとどう変わるのか、お家ではどうやって食べているかなど興味を沸かせる話が弾みます。

★お近くの消防署への届け出も忘れずに！

●タイムテーブル

火の管理は時間がポイントです。仕上がり時間から逆算して考えていくと良いでしょう。

9：00am　木材に点火→おき火づくり

9：30　火のピークが過ぎ、落ち着いてきたところで（火があるうちに）木炭を投入※目安は芋を入れる最低30分前ブロアーで送風し木炭の着火を促進

10：00～10：30頃　クラス毎に子どもたちが園庭に出てきて芋を投入します。

▶みて！しっかりアルミホイル巻いてきたよ！

①担任の誘導で「焼き芋グーチーパー」の手遊びなどをして気持ちを盛り上げる。
②火が見えないけど炭火の熱が出ていることや投入方法について説明する
③一人ずつ釜に近づいて芋を投入（大人の補助が必要）
④おいしく焼けますように！とお願いをして、あとは焼き芋が焼けるまでクラスに戻って、あるいは園庭で遊びながら待ちます。

▶うわあ！あつい！近づいてくると遠赤外線の熱に驚きます。

▶おいしくなりますように…

◆芋が多いと釜の中で重なりますが、下の芋から焼けていくのでそのままにして焼きます
◆炎はほとんど見えませんが、熱が出ていればOK
◆火が弱くなったらブロアーで火を活性化させます
◆芋の大きさ、太さにより焼き上がり時間は異なりますのでご注意を

10：50頃～

20分経った頃に一度全ての芋をチェックして焼けたものと再度焼くものとに分類。（二重にした軍手でギュッとにぎって柔らかければＯＫor竹串がスッと通ればＯＫ）
◆服装は灰をかぶっても良い綿の長袖、頭には手ぬぐい等がベスト
◆芋を出すときに火バサミ（トング）を使い、一旦バットや地面の上に転がし灰をふるい落としますます。手で直接いくと炭でやけどをする恐れがあるので注意！

11：10頃～

順次焼けていくので、芋のチェックを繰り返しながら、アルミを剥いて焼き芋を新聞紙に入れ、クラス分そろったところで順番に子どもたちが呼ばれて食べに来ます。この作業は熱いので大人がやります。子どもには無理です。

▶この活動にはお父さんお母さん方のお手伝い（事前に募集）が欠かせません。芋の焼きチェックから袋入れ、食べる補助まで一緒にやっていただきます。幼稚園だけでなく保育園でもお休みや時間休を取ってお手伝い下さるので本当に助かります。

12：00頃～

お昼にはその日予定した子どもが食べ終え、片付けに取りかかります。原町幼稚園と原町保育園では合わせて３日間かけて焼き芋を焼きます。

▶新聞袋にセットされた焼き芋

▶あちち

▶でっかいでしょ！

▶がぶっ！

▶これみてよ！うまいぜー！

直火をはじめて目にした子どももいますし、はじめて焼き芋を食べた子どももいます。芋が嫌いで家に持って帰った子どももいますし、焦げたところが嫌で食べるのに苦労した子もいれば、口の中を真っ黒にして皮ごとモシャモシャ食べている子もいます。

冒頭に「子どもが何かしらの経験を通して心身を発達させていくこと」が園の存在意義と書きましたが、焼き芋を焼いて食べることが、子どものどんな発達を促しているのかはっきりと実証することはできません。

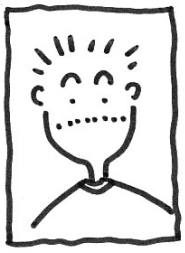
ただ子どもたちの心の中に物語を作ることができたと思います。

「火がついてさあ、ものすごく熱かったとこに芋を投げて待ってたら、焼き芋になったんだよ！…甘かった～！また食べたいなあ！」…大人の言葉でまとめるとこんなところでしょうか？楽しい物語を積み重ねて大きく育てていく。それも私たち保育者の大事な仕事ですが、焼き芋にかぶりつく嬉しい顔を見たら大変だけどまたやってあげたくなっちゃいますね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」マガジンラインナップ

第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号・楽しく運動能力アップ
第22号・〔休載〕



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

福祉系対人援助職養成の現場から㉓

西川 友理

A先生の魔法の言葉

「…A先生、Eチームの事、どう思います？」
「うーん、あそこねぇ…なんだかイマイチ乗り切れてないですね。」
「やっぱりそう思いますよねぇ…。」

お昼休みに、A先生と打ち合わせ。ここは、様々な福祉施設職員を対象とした研修会場の、講師控室。A先生と2人体制で、研修講師をさせていただいた時の事です。

講義については、午前中は私が担当、午後はA先生が担当となっていましたが、お互いに相手の講義の時のアシスタントをしていました。

研修内容は、参加者をいくつかのチームにわけ、チームごとに話し合いなどのワークを行うものでした。そのうちの1チーム、Eチームがどうも盛り上がっていない様子なのです。

「今から10分間、話合ってください」と言うと、各チームが時間いっぱいまで話し込む中、Eチームは数分程度それぞれが自分の意見を出しあって終了、あとは静かに黙って、皆が終わるのを待っています。トイレ休憩中も、お互い言葉を交わしません。さりげなく、しかしお互い細心の配慮をしつつ、苦労して目を合わさないようにして、気が経つのを待っているように見受けられました。

人間同士だから相性はあるでしょう。もちろん、特に仲良くする必要もありません。

他のグループと比較して、Eチームだけが特別に、年齢や性別に偏りがあったわけではないので、本当にたまたま、話すタイミングが合わず、気が合わなかっただけなのだろうなと思われます。

それにしても、ワークへの取り組みが不十分だと研修の学習効果も十分に得られません。それに2日連続で行うこの研修、翌日には大型のワークもある予定です。何とか今のうちに、グループメンバーのつながりを作ってもらわないと…。

焦った私は午前の授業中、場が盛り上がるようにとEチームにだけ声をかけたり、ワークの内容を少しアレンジしたりと、なんとか状況を好転させようとしていましたが、どうも効果は薄いようでした。

午後の授業の一つ目のワークで、A先生は行動に出ました。

皆がワークに取り組む中、A先生は、相変わらず盛り上がりに欠けるEチームに近づき、何か一言お話をされ、すっ、とその場を離れられました。

その直後、Eチームの雰囲気が格段に良くなりました。メンバーが主体的に動こうとしたり、皆で助け合う雰囲気があったり、表情が動いたりといった行動が見られ始めたのです。

「すごいなぁ、A先生！どんな魔法の言葉を言ったんだろう…？」私は驚きました。

その次のトイレ休憩の時、Eチームのメンバーの１人とお手洗いで会いました。

彼女は出会うなりペロッと舌を出して、

「A先生に心配されちゃいました。」と笑いました。

「A先生から、『Dチームは、傍から見てると、なんだかワークが盛り上がってなくて、私、心配してます。』って言われて。確かに私、ちょっと踏み出してなかったなって思って、思い切ってチームメンバーに働きかけてみたんです。そしたら、みんな反応してくれて、結構いい感じになって来たみたい。」

翌日のワークもEチームは大健闘。研修後、A先生に言いました。

「Eチームの変化、さすがだと思いました。A先生すごいですね！」

A先生は笑っておっしゃいました。

「いやぁ、もう、途方にくれちゃったから、素直に気持ちを伝えただけですよ。」

Bさんの授業態度

最近のBさんは、授業中、こっそりスマートフォンを出して、ゲームで遊んでいるのです。机の隙間からちらちらとスマートフォンの画面が垣間見えます。

ある日の授業後、Bさんを呼び止め、周囲に誰もいないことを確認してから、私は言いました。

「この授業、面白くないかな。Bさんがゲームしていたのが見えたから、授業がつまらないんだろうなぁと思ったよ。」

突然そんなことを言われたBさんは驚いている様子でした。

「あ…ごめんなさい。」

「うん、授業中、ゲームしているのを見ると、やっぱり辛いよ。授業を聞く気持

ちじゃないですよ、と言われているように感じるし。出来れば授業をもっとこうしてほしいという要望とかがあったら、教えてほしい。」
「いや、あの、先生。違うの。…ちょっと、あるゲームアプリにハマっちゃってて…ここんとこ止められなくて。」
「え？そうなの？」
「うん、ええと、だから、ごめんなさい！」
「なーんだ、そうだったの！」
次の授業から、Ｂさんは授業中きちんとスマートフォンを置いて、積極的に授業に参加するようになりました。

Ｃ君の進路相談

就職を決めたい、と言いながら、なかなか踏み出す一歩が見つからないＣ君。
「Ｃ君は、何がしたいの。何になりたいの。」
「わからないんです…。☆☆になりたいと思うけど、それを仕事に出来る自信がないし。だから〇〇の仕事をしようかなと思うけど、それは競争率が激しそうやし。だから△△でいいやと思うけど、別にそんな魅力を感じる分野でもないし。いっそ進学しようかなとも思うけど、そんなお金もないし…」
このフラフラとしたやり取りを何週間も続けているＣ君は、話すだけ話して、いつも最後に「あーわからん！」と進路支援の部屋から出ていきます。
長らく就職相談に来ているのに、どの会社の説明会にも、就職試験にも、いまだに応募をしていません。
ひと月ほど経った時、私はＣ君に思い切って言いました。
「何だかＣ君は、誰かに、『これこれこういうところで働きなさい』って言って欲しがっているように見える。」すると、Ｃ君は肩を落とし、困ったような笑顔になりました。
「…うん、そう。多分、そういうこと。」
その後、ゆっくり話をする中で、Ｃ君は言いました。
「今まで、誰かに言われた通りにやってきたら、それで大体うまくいっていた。高校も、大学も、俺の偏差値ならココ！って、学校に言われた所や、友達と同じような所を選んできただけやし…でも、就職って違うでしょう。本当に、自分で決めないといけないでしょう。これは難しいですわ。」
それを受けて私は言いました。
「…誰かに決めてもらったら、うまくいかなかった時にその人のせいにも出来るし、って感じ？」
「そう！！正解っ！！」
と笑いだしたＣ君…やがて笑い終わり、ぼそっと言いました。
「あー…責任とりたくないだけやねんなぁ、俺。自分で自分の人生の責任をとるのが怖い、みたいな？それではあかんってわかってるんですよねー…」
「ふぅん。…Ｃ君がやりたいこととか、したいこととかは、あるの？」
「やっぱり☆☆で働きたい。でも自信がない。そんな大それた仕事、自分に出来るかなぁ、と考えると…。」
☆☆は、Ｃ君が最初に言っていた志望分野でした。
私は少し考えた後に、ゆっくり言いま

した。
「…これは、本当に個人的な意見だけど。私はＣ君が、☆☆で働いたらいいだろうなぁと思うよ。今までＣ君から聞いた話を総合すると、その仕事に就いたら、Ｃ君も、Ｃ君の周りの人にも、いい影響を与えると思う。でもそれは、私の勝手な妄想みたいなもんやけど。」
Ｃ君が言いました。
「本当に？本当にそう思う？」
私が言いました。
「本当にそう思う。でもこれは、私の思いなだけで、決めるのは、Ｃ君やで。」
　Ｃ君はわかっている、とでも言いたげにうなずき、その日のうちに☆☆の分野のある会社の説明会にエントリーしました。
　そして就職試験。結果は、不合格でした。Ｃ君は、私のせいにしませんでした。
「次行こ、次。次はココ！」
　明るく言ったＣ君は、同じ分野の会社を数社受験し、最終的には、内定を勝ち取りました。

Ｄさんの思い

　Ｄさんは、友人たちから「ホトケのＤさん」と言われるほど、穏やかな学生です。私はＤさんと面談中に、
「…Ｄさんって何だか、穏やかで、心の根底がとても安定しているように見えるねぇ。」
と言いました。するとＤさんは、
「いえ、あの、そんな、ありがとうございます。」
と、謙遜したようにかぶりを振り、穏やかな笑顔を見せます。そういう態度がますますホトケなＤさん。私は、重ねて言いました。
「小さい頃から、愛されてきちんと育てられて、安定して生活してた…っていう感じがするなぁ。」
すると、Ｄさんは、えっ、というような顔をしました。
「確かに、小さい頃は幸せだったかもしれません。けど、物心ついた頃からは、結構うちの家、波乱万丈やったんですよ。」
　いつもと変わらない笑顔のＤさん。しかしその口調からは、
（すごく大変だったんだからね、私。そんなふうに、何にも考えず生きてきたんじゃないんだからね！）
とでもいうような、ほんの少しだけ、私に対する非難めいた思いが感じ取られました。私は慌てて言いました。
「ええっ、そうなんだ！…ああ…ええと…乗り越えた、という感じかなぁ…？」
「うん。そうですねぇ…乗り越えましたねぇ。生き抜いてきたというか。うん。乗り越えましたよ。」
噛みしめるように言う、Ｄさんです。
「そうか。ごめんなさい、勝手に想像して、解ったような言い方をして。」と謝ると、
「うん。いえ、穏やかって言われたのは、嬉しかったですし。…うん、色々あって、私、そういう風に言われるくらい、乗り越えて来たんだなぁ、って今、思いました。」

「素直な思い」の力

学生や受講生などに対して、変化を起こさせようとして、ああしよう、こうしようと様々に策を弄します。

授業はその最たるもので、学生が気付くきっかけを作ろうと、あれこれ手を尽くして授業構成をします。

しかし、どんなに構成された授業や、すばらしい面接テクニックよりも、「相手に対して、素直に感じた事を言う」方が、大きな力を持つような事が、とても多いと思います。

上記したA先生の行為は、まさにそれでした。素直な気持ちを言われたEチームのメンバーにとっては、客観的な視点で自らを振り返るきっかけになったのではないかと思います。

自らを客観的に見ることが出来て初めて、見えて来るものがあるようです。

そしてもう一つ、今この日本文化の中で生きていると、「相手に対して素直に感じたことを、穏やかに伝えあう機会」が少ない、と思います。素直な思いを誰かから表出されるような、あるいは自ら安心して表出出来る様な環境が少ない、とも言えるでしょう。そのためでしょうか、私が素直な思いを伝えると、相手は大体、一瞬、驚いたような顔になります。

例えばBさんは、私の発言に対して、大変驚いたようでした。たぶん、そういう声かけのされ方を、あまりされた事がないのだろうと思いました。

本当のところを言うと、Bさんがゲームをしているのを見た瞬間には、「あっ、授業をサボって遊んでいるな」と思いました。だけど、それはBさんの行動や思いを無視した、勝手な決め付けです。相手の行動や思いを決め付けず、事実として「私は嫌な気持ちになった」と言う気持ちだけを素直に伝えたほうが、効果的だろうなと思ったのです。

素直な気持ち＝安心しているよ、と言う自己開示

この連載の20回目にアサーションやIメッセージについて、またそれらを実施するにはムラ社会的なメンタリティを持つ多くの日本人にとっては、結構難しいことだという話を書きました。

あの時に書いたように、正直に言うと、相手に素直な気持ちを伝えること自体、私もいまだに少し緊張します。自分の気持ちの生々しい部分を、わざと相手にさらけ出すことになるからです。これはほんの少し無防備すぎるくらいの態度だとも言えるかもしれません。その分、素直な気持ちを伝えることはすなわち、「私はあなたとの関係に安心しているよ」ということを相手に伝えるメッセージになっているのだと思います。

そのメッセージは、「私は安心しているのだから、あなたも安心しなさいよ」という意味ではなく、「あなたがどう思っているかわからないけれど、少なくとも私はあなたとの関係に安心しているよ」という意味です。

それを受け止めた相手は、安心する義務はないけれど、安心してもいいのだ、とは思えるのではないかなと思います。

その結果、BさんやC君のように、人によっては安心して自分の素直な気持ちを語り始めるのです。感情的になるの

ではなく、冷静に、素直に、気持ちを語り合うと、問題が解決に近づいていきます。

とは言っても、相手に対する信頼さえあれば、いつでも、どんなときでも、素直な気持ちを言えばいいというものではありません。

素直な気持ちを言うためのお作法

例えば、最初のDさんの笑顔に嬉しくなった私は、感情のままに素直な思いを発し、Dさんに関して私のあずかり知らないところまで勝手に想像し、心のデリケートな部分まで触ってしまったのだと思います。

自分の気持ちを素直に伝える事は、自分自身を相手にさらけ出す事と同時に、相手の生々しい部分を刺激することになり得ます。経験上、相手にとっても、自分にとっても緊張が走る可能性が高いと感じます。いくら相手を信頼しているという気持ちからであっても、それを聞いた相手の内面がどう変化するかという事を思いはからず、ただただ素直な思いを口にすると「無神経」になりかねません。

また、素直な気持ちを伝えるという事は、相手に感情をぶつけるという意味でもありません。感情をぶつけるのは、ただのぶつける側のわがままです。

自分の素直な気持ちを手のひらに載せて、相手に差し出すように伝えることが大切だと思います。

そのためには、今この感情を相手に伝えていいかどうか、よく状況を考えて、注意深く差し出す必要があるように思います。

私は、Bさんの時も、Cさんの時も、よくよく考えて注意深く自分の気持ちを差し出しました。しかし、Dさんの時のように、明るい気分でいると、調子に乗ってしまう時があるようです。

「素直な気持ちを伝える」とは、ただ正直に思うままを言えば良いということではなく、大変色々なことを思いはかって、勇気を出して行う必要があるようです。

素直な気持ちを相手に伝えるには、相手に対する思いやりなどの社会性やお作法が必要なのかもしれません。

傷つけることもある
ということを受け入れる

ただ、どんなに相手を思いやって考えたコミュニケーションでも、相手を傷つけたり、自分が傷ついたりする事はあります。自分の素直な気持ちが思いがけず相手を傷つける時はあると思います。

人はそれぞれの感性が違うから、そのような事がおこるのは当たり前です。

わかりやすい所では、自分と相手の育ってきた環境や文化、世代の違いなどが大きく影響します。

極端な例ですが、ふくよかな女性を見て「体が大きいなぁ、しっかり太いねぇ。」などと言うことは、今の日本では失礼とされていますが、モーリタニアやタヒチなどでは最大級の褒め言葉です。太っている女性が美しいという文化が

あるからです。

高齢の女性が２０代の女性に「もったいないわ、早く結婚したほうがいいわよ」と言うのはたとえ相手を思いやった親切な気持ちであったとしても、今の時代、セクハラと言われる可能性があります。

そういった行き違いや、思い込みからお互い傷つくことはよくあります。

しかしそういった傷つきは、豊かなコミュニケーションの恵みにかかる「税金」のようなものだと私は思います。失敗や傷つきや苦みがあることで、よりコミュニケーションが豊かになると思うのです。豊かなコミュニケーションという富を得ようとすると、それに伴う痛みという税金も増えます。

税金を払いたくないから稼ぎたくない、というのは本末転倒です。その痛みの節税対策が「お互いへの思いやり」だと思うのですが、それにしたって税金はゼロにはならない、と割り切る必要があると思います。

適切でない形で素直な思いを伝えてしまい、相手を傷つけてしまったら、また素直な気持ちで、悪いことをしたと思っていることを伝えるといいと思います。それも不適切なら…そのやり取りそのものから、得るものは大きいと思います。

アドバイスとして表出する素直な思い

社会福祉士や保育士の相談援助に関する勉強では、「こうしたらいい」「こうする方がいい」「こうすべきだ」などとアドバイスをすることは注意深く行った方がいい、とされています。

本人の心や体、環境などにまだその準備が整っていないのに、アドバイスをしても相手の耳に入っていきません。また、たとえ準備が整っていたとしても、人から言われたことをするのと、自分で決めたことをするのとでは、物事に対する向き合い方が違います。それにもかかわらず、アドバイスをしたくなるならば、どうぞ細心の注意を払って行いなさい、と書かれているテキストが多いように見受けられます。

以前、知り合いの臨床心理士の方が、「相手の話を色々聞いて、とにかく聞いて、しっかり聞く。その上で、心に浮かび上がってきた『こうしたほうがいいと思うって言ってしまいたい』という気持ちを、我慢して我慢して、とうとう最後に、控えめに、そおっとＩメッセージで出した『私からのアドバイス』が、相手にものすごく響くなぁ、と感じるよ。」とおっしゃっていました。

アドバイスはＩメッセージではないけれど、このような時のアドバイスは、いわば自分の気持ちがこもった素直な気持ちが「アドバイス」というかたちで表出したものと言えます。

だから、それまで話をしてきた関係性が基盤となり、強く相手に響くのでしょう。

素直な思いを伝えあう人間関係の積み重ね

長らく、「自分がやっていることは、福祉的支援か、教育的支援か」という悩みがあったのですが、このところ、そういう言葉にとらわれること自体がおかしいのかもしれない、と思うようになってきました。

もちろん、福祉的支援と教育的支援では、お金の出所や社会的役割というものが明確に違うことは解っています。

しかしそれとはまた別に、福祉と教育は、どちらも根本的には「与える」ものではなく、「関係性の中で生成されていくもの」だという事を、言葉だけではなく、日々の仕事の中でひしひしと感じるようになって来たのです。

この文章の中で使っている「素直に気持ちを言う」という行為は、現在の日本において、特に大人になるにしたがって、あまり主流でないコミュニケーションになっていきます。相手のことを思いやりながら素直な気持ちを伝える事、ひいては「素直な気持ちを伝え合う」事は今やこの国の文化で生きる人々にとって、どちらかといえば難しい事です。その中で「素直な気持ちを伝える」という事の意味を理解しているからこそ、「戦略的な作戦として」行ってしまう時もあります。

しかし本来、素直な気持ちを伝え合う事は、人間関係を生成する上で、とても基本的なコミュニケーションであるはずです。

お互いの傷つきを恐れず、だけど相手と自分を思いやって、コミュニケーションをすること。

とても基本的ですが、この大切な「経験」の積み重ねの中で伝わっていくものの重みを感じるようになってきた、今日この頃です。

先人の知恵から
11

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

あっと言う間に１年が終わろうとしている。１年を短いと思うのは毎年だが、１年を長いと思っていた時期があったろうかと思い返してみた。

恐らく小学生だっただろうか、「早くお正月が来ないかな」と待ち焦がれていた時などは、時の流れを遅く感じたのを覚えているし、小学校の６年間は長かった記憶がある。

子育てをしている間も、小学校の６年間が一番長かったように思う。また、子どもが乳幼児の時も、手がかかっている間は、何となく１年が長い気がしたと思う。

何故だろうか？乳幼児を育てている間も日々忙しかったはずである。忙しさは関係ないのかもしれない。むしろ、「早く過ぎて欲しい」と思っているからこそ長く感じるということなのだろう。

今はきっと、もう少し時間が欲しいと思っているからこそ、早く過ぎて行ってしまうと感じているのかもしれない。少しスピードを緩めようと改めて思う。

さて今回は次の７つを挙げてみた。

- 得難(えがた)きは時、会い難きは友
- 枝を矯(た)めて花を散らす
- 画(え)に描いた餅
- 遠親(えんしん)は近隣に如(し)かず（明心宝鑑）
  遠水近火(えんすいきんか)を救(すく)わず（韓非子）
- 偃鼠(えんそ)河に飲むも満腹に過ぎず
- 縁の下の力持ち
- 縁は異なもの

＜得難きは時、会い難きは友＞

良い機会は中々捉えにくく、良い友には中々巡り会えないということ。

自分の思い通りのチャンスなど、中々出会えるものではないが、だからと言って諦める必要もない。いつかはその時が来ると信じて待つことも大切だろう。近頃の子ども達は、何かと言うと直ぐ諦めてしまう。世の動きが速い事もあって、待つことが苦手になっているように思う。きっといつか、最高のチャンスが訪れる。それなのに、人生そのものを諦めて自ら命を絶ってしまう事さえある。10 年やそこいらで、人生をすべて諦めてしまうのは余りにも早計だろう。

一攫千金と言う意味ではなく、人生にとっての最高のチャンスは、その人それぞれ何がそれに当たるか違うだろうが、きっと誰にでも訪れる物ではないかと思う。それをしっかりと掴む事が出来れば、人生が一段と面白くなるだろう。でも欲張って、もっと良い機会がある筈と次を待っていると永遠に来なかったりする。その選択は難しいかもしれないが、小さな運でも逃さないように掴んでいくことが大切ではないかと60 年余りを生きてきて思う。

そして、良い友にも中々出会えないのも真である。信用し、裏切られ、それを繰り返し、友達など要らないと思う。こうして一人で居ても、寂しくなって又友達を作ろうとする。時々見かけるのだが、友達選びで中々自分に合う子を見つけられない子がいる。勿論付き合ってみなければわからない話ではあるが、憧れから付き合って、結局意地悪をされ、ずたずたに傷ついているのに、まだ付き合おうとして居る子に出会う。憧れるのは分かるが、そういう人間が自分に合うかどうかはまた別の問題である。

一人で居る強さも必要だが、かと言って一生一人で生きていける程人は強くもない。傷ついて学び、強くなり、いつか本当に信じられる友達に出会えると信じながらその時を待つ、友達作りとはそんなものだと伝えるが、我々はそんなことを親や他の大人から学んだことなどない。本や実体験から学んできたのだと思う。子ども達にも、本や実体験から学んでほしいものだ。

＜枝を矯めて花を散らす＞

小さな欠点を直そうとして、かえって一番大事なものを駄目にしてしまう事の例え。枝ぶりを良くしようとして、花を駄目にしてしまう意から。

親は子どもの欠点ばかりを見て嘆いているように思う。「だらしがない」「片付けてくれない」「朝起きない」「勉強をしない」「準備が出来ない」など等、生きて行くと言う意味だけであれば、たいしたことではないのだが、日々の生活を預かる保護者としては、大事件の様である。

親が一般的に子どもを見過ぎているせいもあるのだろうが、小さいことに気付く。幼児や小学校 1 年生ならともかく、大きくなっても細かいことをあれこれ注意する。必要最低限の躾は大切だが、余り細かいことを言いすぎると、子どもが強迫的になったり、不安になったり、自信喪失して自己

評価を下げてしまったりする。一旦強迫的になるとか、不安が強い子になっているのを治すのはとてもエネルギーがいる。もっと伸び伸びと育てていれば、きっと大きな花を咲かせられたのにと思う青年にも度々会う。目が行き届くと言うのも中々罪な話である。かといって、放置して大変なことになってしまっても困る。何事も程々の所でやって貰えればと思う。

＜画に描いた餅＞

実際の役に立たない事の例え。計画などが実現する見込みが無い事の例え。画に描いた餅はどんなに美味しそうに描けていても、食べられない事から。「机上の空論」「畳の上の水練」も同義。

この諺を良く使ったり、思い出したりするのは、教育関係の計画や行政計画などを見た時である。誰かの公約だとか、何かの計画には、理想ばかりを並べ立て、何の実践的行動計画が伴わない物も多い。

例えばいじめ撲滅のキャンペーン一つをとっても、余り具体的ではない。いじめは悪い事だと言って見ても、どこまでが「からかい」で、どこからが「いじめ」かなど、子ども達には分かり辛いし、いじめた結果に対し、責任を取らせるにしても、その子の年齢に応じて、どのように取らせていくのかなども分からない。

国会で堂々と野次を飛ばしているし、からかいやいじめは大人の社会でもはびこっている中で、子どもにだけ禁止しても、悪い見本を散々見せているのだから、所詮上手く行くわけもない。

絵に描いた餅は食べられない。誰の空腹も満たすことはできない。そんな餅をいくつも描いて、
皆お腹いっぱいになっただろうと思っている人たちが余りにも多くて嘆かわしい。

世の中には、この手の問題が多すぎる。子どもの貧困にしろ、母子家庭の問題にしろ、教育にしろ、原発にしろ、もっと現実的で、実践的な行動計画をしっかり作って行かなければ、子ども達の未来は危うい。そんな風に思っているのは筆者だけだろうか？？

＜遠水近火を救わず・遠親は近隣に如かず＞

この二つの諺は元々一つの文章からの出典。
どんなに有用なものでも、遠くにあるものは急場の役には立たない事の例え。水はあっても遠くでは目の前の火を消すことはできないし、遠くに居る親戚より、近所に居る他人の方が、いざという時には頼りになると言う事。出典は韓非子及び明心宝鑑。

世の中には、色々なシステムが構築され、困った人たちの助けになっている。しかし、それが全国各地、津々浦々に作られているかと言うとそうでもない。ある地域には、色々な資源が揃っていても、他の地域に行くと何にもないと言うようなことは侭ある。

新しいものが次々作られていくような、

豊かな時代ではない。国が借金まみれの今の時代に、行政が、お金を出してあれこれ作ってくれると思う方が甘い。

これからは、創意工夫で頑張らなければならない時代である。近くにある使える資源をどう掘り起こし、どう活用して行くか。そうした知恵が我々支援者には必要である。お金も出来るだけかけずに上手くやるには、昔ながらの方法を活用することも考えねばならないだろう。例えば、町内会であるとか、長老の知恵であるとか、助け合いの精神であるとか。日本人が昔から持っているものの中にも、支援として使えるものがまだあるのではないか？今一度近くの資源を考えてみたいと思ってこの諺をあげた。

英語では・・・

Water afar off quenches not fire.（遠くの
水で火は消せぬ。）

＜偃鼠河に飲むも満腹に過ぎず＞

偃鼠はモグラの事。人はそれぞれの分に応じて満足すべきだと言うことの例え。身の程を知るが良いという事。モグラが大きな川でどれだけ水を飲んでも、腹いっぱい以上は飲めないという事から。出典ではこの前に「巣林一枝」（ミソサザイは深い林に巣を作るが、巣を作るのに使うのは枝一本だけである）がある。「巣林一枝」も同義語。出典は荘子。

「分相応」と言う言葉がある。カードローンに限らず、ローンをそう簡単に組めなかった時代に育った筆者としては、借金をすることに対して凄く抵抗感がある。だからカードは殆ど使わない。空港ラウンジを使う時や、アマゾンの１クリックを使う時くらいのものだ。現金主義で通してきた。そうすると、お金を貯めて、そのお金で買える物ということになり、分相応の者になってくる。

最近、色々なところで夫婦の問題に携わるが、いざ離婚となると、正の財産と負の財産の整理がある。「負の財産は有りますか？」、つまり｛借金はありますか？｝と聞いているのだが「ありません。」と言い切り、「車のローンとか家のローンとかありませんか？」と聞きなおして初めて、「ああ、車のローンはあります。」などと言ってくる場合がある。カード決済も同様なのだが、借金と思っていない。

そうなると、ちまちまとお金を貯めて買うわけではないので、結構高い買い物をすることになる。
家、服飾品、車、何もかもが、かなり高価なものになる。一回の支払いは払える範囲でなければ困るが、火の車になっている人もいて、挙句に自己破産することまである。以前にも書いたと思うが、国も借金の上に成り立っているところを見ると、「分相応」の国になっていないと言う事か。

大人が悪い見本を沢山見せていれば、子ども達の感覚も変わってくる。子ども達の物欲も激しいし、商戦に乗せられて、次々と新しいゲームを買っている保護者に出会う事も多い。毎日何時間も遊べれば、一つのカセットをすぐクリアーしてしまうだろう。こうした物については、満足という感

覚が薄いのかもしれない。

お腹いっぱい水を飲めば、それで良い。お腹いっぱい食べたらそれで良い。そうした、分相応に「満足すること」を国民全体で考え直さなければいけないのではと思うし、子育て支援の所でも伝えて行きたいと思う。

＜縁の下の力持ち＞

人目に付かないところで他人のために苦労したり、努力したりする事。又そういう人の例え。折角の力持ちも、縁の下にいたのでは認められない事から。京都のいろはがるたの一つでもある。

我々対人援助職があるべき姿がこれだろう。正面切って誰かを引っ張って行くのが支援ではない。「支えること」が第一である。誰に認められなくても良い。誰かを支えることで、その人が頑張れれば良いのである。その人がしっかり生きていければ良いのである。でも時々、「私が」と前に出て、上から目線で物を言い、支援とは程遠い対人援助を行っている人に出会う。悲しい事だ。子育てであれ、高齢者支援であれ、家族を支えること、他人を支えることは、正に縁の下で頑張る事ではないだろうか。表に出るのは、主人公である家族や子どもや高齢者である。その人が立てるように、杖になったり、動けるように車いすになったり、考えられるように問題を整理して分かりやすくしたり、何をするにも主体はご本人である。それを忘れないための諺として覚えておきたい。

＜縁は異なもの＞

男女の縁はどこでどう結ばれるかわからず、まことに不思議なものだと言う事。「縁は異なもの味なもの」ともいう。江戸のいろはがるたの一つ。「愛縁奇縁（あいえんきえん）」も同義。

夫婦、或いはパートナー関係を見ていると、この言葉を思い浮かべる。何処で男女が知り合っているか？学生時代の知り合い、お見合いパーティーや合コンは普通だし、元々グループで付き合っていたと言うのも良くある話。電車やバスの中で知り合ったり、道端でぶつかることもあるだろう。さだまさしの歌ではないが、雨宿りで出会う事もあるかもしれない。病院の看護師さんと患者さんの組み合わせ、職場結婚ももちろんある。ペットが取り持つ縁もあるし、スポーツやスポーツ観戦がきっかけになることもある。

特に今の時代はフェイスブックやツイッターで繋がったり、ラインで繋がったりして、その結果結婚して居たりする。

どんな出会いであれ、日本に限っても数千万人いる対象者の中でたった一人と組み合わさったわけである。それを考えると、本当に不思議な縁を感じる。くじみたいなものだから、当たりくじも外れくじもあるだろうが、縁を大事にするも台無しにするも、その二人次第。ずっと縁に恵まれず、死にたいと言っている女性にも出会った。そんな彼女に、「縁がある」と言う保障もで

きないが、「諦めるな」と言い続けている。今は 50 歳でも 60 歳でも或いは 80 歳でも、縁があるかもしれないのだから。

英語では・・・

Marriage is a lottery.（結婚はくじのようなもの）又は、Marriages are made in heaven.（縁結びは天国でなされる）

今回はここまで。

出典紹介

韓非子（？～前 233 年）

中国、戦国時代末期の思想家韓非（かんぴ）の尊称。

韓の公子（貴族の子）。荀子（じゅんし）に師事して

刑名学（けいめいがく）（法治主義）を学んだ。国の弱体化を憂い、国王をいさめたがいれられず、発奮して『韓非子』５５編を著して法による政治を論じた。のち、秦に使いした時、謀略にあい自殺した。

明心宝鑑（めいしんほうかん）

中国明代に編まれた儒学を中心とした箴言集（しんげんしゅう）。箴言とは戒めの言葉。孔子をはじめとする中国儒学の先人達の名言を集めたもの。1368年に出版された。

荘子（そうし）（生没年不詳）

中国、戦国時代の思想家。道家（どうか）思想の中心人物。名は周（しゅう）、字（あざな）は子休（しきゅう）。荘子は尊称で「そうじ」ともいう。儒教の思想に反対し、人為（じんい）を捨てて、無為自然（むいしぜん）に帰ることを説いた。老子と合わせて「老荘」という。著に『荘子（そうじ）』がある。

対人援助学マガジン第 23 号
生殖医療と家族援助

例えば、卵子提供による家族形成について⑧

～ドナー家族に起きること～

荒木晃子

危惧もろもろ

自民党の法務部会及び厚生労働部会の合同部会は、卵子提供など第三者が関わる生殖医療技術で生まれた児の親子関係について、「卵子提供や代理出産では産んだ女性を母親、精子提供では提供に同意した夫を父親と定める」とする民法の特例法案の、今国会への提出を目指すという（2015.8.5 毎日新聞夕刊）。しかしながら、このような内容の報道は、今回が初めてではない。同様の国会内の動きは過去にもあり、その際も今回と同様の報道があった。例えば、2003 年厚生労働省の部会がまとめた第三者の卵子・精子提供を認めるとした報告書は、結果として、生殖医療関連法案の法制化には至らず、途中でとん挫した経緯がある。また、今国会で現在も論議されている国家・国民の安全に関わる法案の審議の重要性を考えると、今回も成立の見通しは不透明といわざるを得ない。生殖医療に関する法整備については、以前から賛否両論の議論が続いており、医療現場の実際と法案の内容について十分な検証のないまま成立するのは望ましいとは言えない現状がある。反面、法案が成立することなく現状維持のままでは、今後も何ら法規制の無い状況下で、引き続き卵子提供や精子提供、さらには代理出産が、（これまでもそうだったように）医療機関の管理下のみで実施されることを意味する。仮に、法整備や社会保障の無い現状下で、無償ボランティアの卵子ドナーとその家族に対し何ら支援体制や専門家のサポートの無いまま、直接ドナーを医療機関に紹介する活動を継続するとなると、医療機関からの活動資金の援助や医療従事者の支援を受けるしか術はないだろう。

筆者は、卵子提供による不妊治療に反対する立場に位置しておらず、むしろ、不妊に悩むカップルの選択肢が拡大することに賛同する見解をもつ。しかし、第三者提供型生殖補助医療によって生まれる/生まれた児の幸福を保障できないこの社会に、制約や規制、且つ保障もない医療技術が先行する現状には、危惧を覚える者のひとりである。

前号にもあるように、現在実施されている第三者の提供卵子による生殖補助医療関連施設・団体では、ドナー夫婦関係の調整や、ドナーの子どもたちに“卵子提供で生まれた事実をどう伝えるか”等、ドナーとその家族への支援内容は含まれていなかった。では、実際に、ドナー家族へはどのような支援が必要なのであろうか。ドナーとその家族に必要な支援は、

「その家族に何が起きるか」を理解することから始めなければならない。ドナー条件を満たす、既に実子のいる 35 歳未満の健康な女性の多くが、生殖技術の詳細な情報を知るはずはないという前提で、自身の卵子を提供したいという思いをパートナーに相談する場面を想定した対話を、仮説として次章で提起してみよう。

ある（仮想）ドナー家族の物語

その家族は、夫婦（D 子＆D 夫）と二人の子ども（2歳と4歳）の4人家族。D 子は 32 歳、D 夫は35歳。共に正規雇用の仕事で日々忙しくも、子育てや家事を分担するなど互いの協力関係の中で、子ども達も健やかに成長していた。が、ある日突然、妻が「卵子が無いため子どもに恵まれないご夫婦のために、自分の卵子を提供したい」と夫に相談を持ちかける。これまでも、ことあるごとにふたりでよく話し合い、互いが納得するまで議論を重ね、ふたりの意見が一致するまで話し合ってきた。しかし、今回ばかりは、自然に妊娠し二人の子どもを無事出産した D 子にとって、不妊治療というまったく経験のない領域に自ら足を踏み入れることへの不安は大きく、また、自分がやろうとしていることへ、パートナーからどのような答えが返ってくるのか全く想像がつかない相談であることはわかっていた。最初は、自分の卵子を提供するのだから、自分の意思だけで決断しようとも考えたが、「卵子提供ドナーになるには、パートナーの同意は必須」という応募条件があるため、どうしても夫の同意を得なければならない。夫に内緒で事前にきいた説明で、思っていたほど簡単ではないこともわかってきた。これは、「卵子ドナーになりたい」と意を決して夫に告げた、ある夫婦を想定した対話である。

「卵子提供ドナーになりたい」

D 子：「先日テレビで会見をみて以来、ずっと悩んでいたんだけど、私、卵子を提供しようと思う。自分でも、ネットや新聞で調べてみたんだけれど、日本には今まで、生まれながらに卵子の無い女性がたくさんいて、彼女たちは結婚しても夫婦の子どもが産めなくて、苦しんできたらしい。なかには、（卵子が無いため）自分では子どもが産めないからと、恋愛も結婚も諦めた人生を送ってきた女性も多いと聞いた。私たちは結婚して自然に子どもを授かったから、“授かることができない人の気持ち”なんて、今まで考えてみたこともなかった。確かに、子どもの世話は大変だし、いつもかわいいばかりじゃないけれど、もし自分に子どもが産めなかったら、って思うと、同じ女性としてその辛さがわかるような気がするの。今では、この子たちに会えない、子どものいない人生なんて考えもつかないもの。ね、そう思わない？うちはもう二人（子どもが）いるので、これ以上（私の）卵子は必要ないわけだし。残った卵子を提供することで、子どもを産んで幸せになれるカップルがいるのなら、是非協力してあげたいと思うんだけれど、あなたはどう思う？」

D 夫：「なんだかよくわからないけど、君の卵子が誰かの役に立つのはいいことだね。で、その卵子の提供って、何するの？献血みたいなもの？」

D 子：「血液を提供するのとは、ちょっと違

う。献血は、看護師さんが腕から注射器で採血するでしょう。でも、卵子は子宮のそばにある卵巣という器官の中にあるから、採血ほど簡単じゃないみたい。不妊クリニックの専門医が（私の）卵巣に針を刺して卵子を取り出すんだって。入院の必要はないけれど、そのための事前準備に時間と手続きが必要らしい。不妊治療のクリニックで私の卵巣から取り出した卵子を、卵子の無い女性に提供する生殖医療技術という説明だった」

D 夫：「え！医療技術って、まさか、君がその治療をするってこと？もしかして、君はすでに説明をうけたわけ？」

D 子：「そう。どんなかな～と思って、先にドナー登録団体に電話で問い合わせたら、ざっと説明をしてくれた。そのあと、団体の HP 見たり、時間のあるときに自分で集めた情報とかで、何となくわかってきた。つまりね、私が不妊治療するわけじゃなくて、卵子を提供するだけってこと。不妊治療は、そもそも自然に子どもが授からないカップルのための医療技術。だから、生殖を補助するための医療＝生殖補助医療と呼ぶらしい。私は、卵子を提供するボランティアをしたいだけなの」

D 夫：「でも結局、君の身体から卵子を取り出す医療行為を、君が受けるってことだよね？」

D 子：「そうね。私がおもうに、骨髄バンクでいう骨髄ドナーのような役割なんじゃないかな。聞いたところによると、骨髄ドナーみたいに、入院したり絶対安静が必要なほどではないみたいだし」

D 夫:「健康で何も治療する必要のない君が、卵子を提供するために病院で医療行為をうけなきゃいけないなんて、僕はちょっと納得できない気がする。だって、薬をのんだり注射を打つだけでも、副作用や事故が発生することがある。いくら大丈夫だといっても、100％安全とは言えないはずだ。今のままでは、賛成できないな・・もっと詳しく説明を聞かなきゃ、何とも言えないよ」

D 子：「そう、そうよね。ごめんね、驚かせちゃって。今まで私が聞いた説明では、採卵（卵巣に針を刺し卵子を取り出す）までには、生殖医療機関に何度か通院し、いろんな検査や問診、そして、カウンセリングを受けなきゃいけない規定があって、卵子提供までには数か月間もしくはそれ以上かかるらしい。で、その間に、もし、私の気持ちが変わり、（卵子を）提供したくなくなったら、いつでも中止できるんだって。『いやならいつでもやめていい』というわけ。で、必要な手続きが終わり、それまでに私の気持ちが変わらなかったら、いよいよ採卵することになる。事前に出された排卵誘発剤やホルモン剤など服薬や注射の効果で、良質な卵子を（自然よりも）多く排卵させ、その卵子を医師が採卵する。その後、取り出した（私の）卵子を、レシピエント夫の精子と受精（体外受精）させ、その結果、作製した受精卵（胚）をレシピエント女性の子宮に移植するんだけど、（場合によっては）一定期間凍結するらしいとも聞いてるし、どっちなのかしら・・。採卵した後の卵子はともかく、受精卵になった時点で私に所有権はないはずよね。その受精卵は、レシピエントカップルの受精卵だもの。もちろん、作製した受精卵に何も問題がなければ、その受精卵はレシピエント妻の子宮に移植して妊娠を目指せる。そうなればう

れしいな！だけど、いくら健康な卵子でできた受精卵とはいえ、子宮に移植すれば妊娠できるとは限らない、って以前聞いたことがある。そう、こればかりはどうしようもないこと。でも、もし、(着床が）うまくいけば、医学的には、その受精卵で妊娠して生まれた子どもの『遺伝上の母はドナー』、つまり私ということになる。ここが一番気になるところだったので、念のため確認したんだけれど、イマイチはっきりしないよね・・これまで卵子提供や代理出産で生まれた子どもの親子関係をあらそった過去の判例では、「分娩者を母とする」という判決が出ていて、最近では、『産んだ女性を母』とする法改定も進んでいるらしい。いくら、私の卵子から受精卵ができたのだとしても、実際に、その子を妊娠し出産するのはレシピエント女性だし、その子を育てるのはレシピエントカップルなんだから、当然、その子の両親はレシピエント夫婦だと思うんだけど。ね、そうは思わない？」

夫：「・・・なんか、ややっこしくて、よくわからない。君のいうことをわかってあげたいんだけど、僕たちは不妊治療の経験もないし、ましてや僕は男性だから、排卵とか受精、着床や妊娠のことを知ろうとしたこともないし、その必要もなかったから、どう理解したらいいのかわからない。確かに、君の気持はよくわかる。卵子が無くて子どもを産めない女性とそのパートナーのために役に立ちたい、という気持ちは理解できる。もっと内容を理解できれば、僕も同じ気持ちになれるかもしれない。でも、そのために君が負うことになる負担があまりにも大きい気がする。どこも悪くないのに卵巣に針を刺すとか、排卵誘発剤を服用したり注射を打つとか、反対にどこか悪くならないかと心配だ。もし、君に何かあれば、どう対処すればいいの？誰が責任を取ってくれるんだろう。君の提供卵子で治療が成功し、無事子どもが産まれた後に親子関係を法廷で争うなんて、そんなことになったらどうするの？ドナーになることに最初から反対するつもりはないけれど、いろんな問題が発生する可能性があるのなら、いいことの説明ばかりではなく、ドナーになることへの身体へのリスクや、子どもが生まれた後の親子関係などに問題が生じないか、事前にもっとしっかり確認したほうがいいと思うよ」

妻：「たしかに・・。そういえば、レシピエントが産んだ子どもは、私たちの子どもと血縁関係があることになるわけよね。父親違いの『きょうだい』ということになるのかな。過去の判例で親子関係が争点になったとは説明があったけれど、子ども同士の関係までは私も思いつかなかったし、説明にもなかった。そういえば、採卵までに受けるカウンセリングにも、一度はあなたの同席が必要だとも言ってたっけ」

D夫：「え！僕もカウンセリングをうけなきゃいけないの？どうして？」

D子：「うん、団体の規定では、ドナー夫婦も生殖医療施設に出向きカップルカウンセリングを受けることと、夫の個人カウンセリングも必要と説明があった。それも再確認が必要ね」

D夫：「そうみたいだね」

＜次号に続く＞

日本のジェノグラム

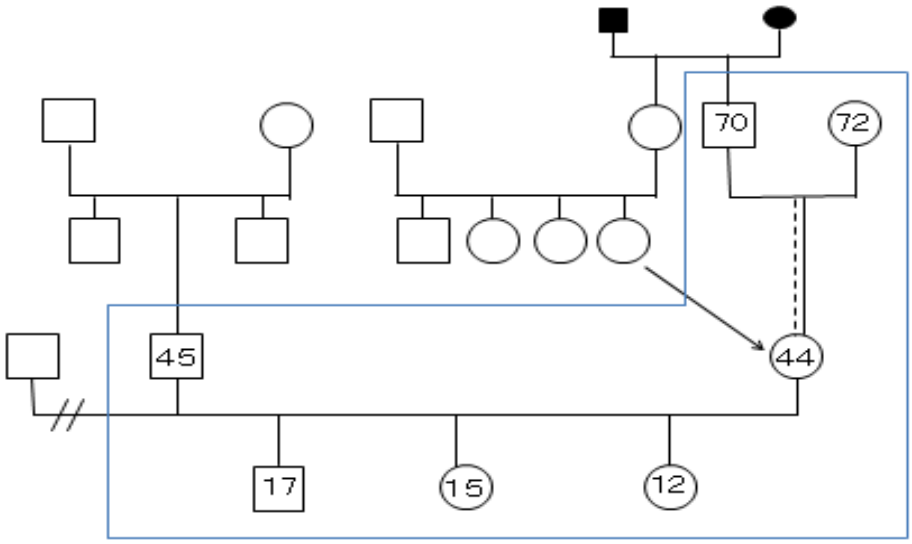
早樫　一男

10

ある家族の場合

家族は祖父母、両親、長男・長女・次女の７人家族。祖父母は「父方か母方か？」を確認したところ、「婿養子です」という答えが返ってきました。

ジェノグラムを作成すると次のようなになりました。読者のみなさんは、どのようなことが思い浮かびますか？



母親の語り

『私は３歳の頃に、私の母の弟夫婦（おじさん）の家に養子になりました。おじさん夫婦には子どもがなかったのが理由です。母方実家の跡取りとして迎え入れられたのでした。実の両親が暮らす地域の隣町におじ宅はあったので、両家の交流は頻繁にありました。大きくなるにつれ、何かあれば、３歳上の姉を頼りました』

【ミニコメント】

幼い頃、親戚の家に養子に出されるというケースがあります。この母親から見れば、「実の親だけれどおじさん・おばさん」と「おじさん・おばさんだけれど養親」という事態が生じることになります。また、「実のきょうだいであるけれどいとこ」という関係も生まれます。

このような場合、家族や親戚間の関係に関して複雑な心境となっても不思議ではありません。

実際に『養父母にはずいぶん気を遣いました』というのが母親の語りです。

母親の語り　その2

『最初の結婚はお見合いでした。２２歳の時です。婿養子に来てくれるというのが前提でしたので、養父母の薦める相手と結婚しました。

夫はとても大人しい人でした。しかし、お酒が入ると人が変わったようになりました。

私は夫と養父母との間でずいぶん気を遣い、一時期、不眠になりました。結局、養父母が言うまま、離婚することになったのです』

『その後、再婚することになりました。やはり、見合い結婚でした。離婚歴や婿養子に入るということも承知で結婚してくれた現在の夫にはとても感謝しています。長男は養父母に大変可愛がられました。例えば、小学校高学年までは、養父母の部屋で寝ていました。長女は夫がとても可愛がりました。そのような中で生まれた次女が唯一心の支えになっています』

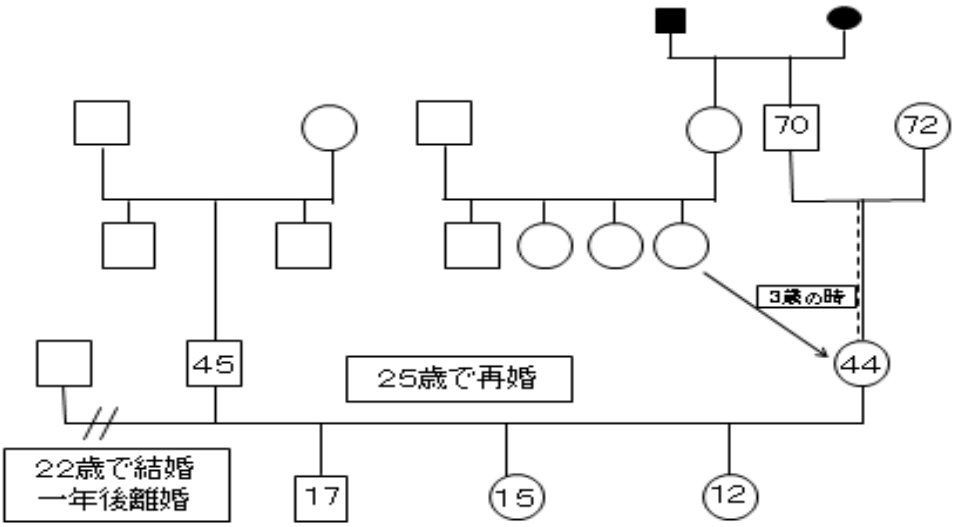
【ミニコメント】

家族の歴史を辿ることによって、母親の理解が深まりました。家族に対してでさえ、人一倍気遣いをする中で、これまで過ごしてきたようです。これまでの苦労をねぎらう言葉に続いて話されたのが、次のような内容でした。

母親の語り　その3

『次女は私の実の姉と重なるのか、いろいろなことを安心して話せるのです…。長男は養父母にとられた感じ、長女は夫にとられた思いがありました。い

つの頃からか、次女のみが私の支えになったのです。成長していく次女の姿を見ていて、うれしい反面、私の手元から離れていくかもしれないと思ったら不安でした。正直なところ、学校に行って、私の知らない世界を作っていくよりも、行かなくてもいいから、手元にいてくれる方がという気持ちが強いです…』



母親の語り　その4

母『これまで、いろいろな面で気遣いをしてきたので、私にとっては
次女だけが支えだったのです…。でも、次女は、結局、私と同じように、家族に気を使っていたのかもしれませんね。負担だったかもしれませんね』

【ミニコラム】

母親は思い出しながら、これまでの生活を語りました。その際に、役に立ったのが、母親の目の前で作成したジェノグラムです。

もちろん、ジェノグラムがなくても、母親の語りは展開したかもしれません。しかし、少なくとも、母親の語りを触発したのはジェノグラムでした。ジェノグラム上の人物を指さしながら、家族や親子関係についての話題が展開したのですから…。

改めて：家を継ぐことについて…

ところで、この家族の場合、母親は家を継ぐ役割を期待された子どもであり、配偶者選択にまで影響を与えていました。

家を継ぐ（具体的には土地や建物を始めとした財産の相続、さらにはお墓の守りなど）ために養子や養女を迎えるという家族に出会うことがあります。

そこには、家族のドラマが生まれるわけですから、家族の歴史とそれに伴う感情を丁寧に確認することによって、家族の理解が深まっていくことになります。

そのプロセスにジェノグラムが寄与することが多いのではと感じています。

（つづく）

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第22話

水野　スウ

人間かまくら

2015年5月から審議されていた安全保障関連法案が、9月19日未明に国会で可決されました。その日、私はけんぽうのおはなし出前で宝塚に行っていて、朝一番に出前先の若いお母さんからそのことを聴きました。

その2日前は、参議院平和安全法制特別委員会で法案が強行採決される場面を、宿泊先ホテルの深夜のテレビで見ていました。

あの瞬間いったい何がおこったのか、まったくわけわからず。後に明らかになったこと。いったん不信任案を出された鴻池委員長が部屋にもどって席につき、民主党の福山議員が委員長席に近づいたとたん、同じ室内にいた、委員会の委員ではない（!）自民・公明の議員たちが、一斉に委員長席に走り、その勢いで福山さんはふっとばされ、彼らはあっという間に「人間かまくら」をつくってそこに委員長を囲い込み、マイクもない中で、次々に法案を読み上げては可決していくという、何とまあ、むちゃくちゃな事態があの場で起きていたのでした。

新しいpeople

これに限らず、数さえあればなんだってできる、の前例を、安倍政権は矢継ぎ早に積み上げていっています。このやり方、決して民主主義じゃありません。主権者の私たち一人ひとりが本気で民主主義してないと、「民主主義」って簡単にこわされてしまうものなんだ、ということを安倍さんはなんとわかりやすく私たちに知らしめてくれていることだろう。

それでも、というべきか、だから、というべきか、これまで空気みたいに実感しにくかった「みんしゅしゅぎ」や「りっけんしゅぎ」が、にわかに身近なものとなり、「しゅけんざいみん」の民、って、ほかならぬ、わたし／あなたのことだったん

だね！と気づいた「新しいひと」たちが、この夏から秋にかけて、日本全国に数えきれないほど誕生しました。

SEALDsに代表される、若い人たちの蒔いた種は、ティーンズ、ママたち、ミドルズ、オールズ、と自らを呼ぶ人たちの勇気につながり、国会前や路上で、自分の意見を表明するようになった憲法学者やさまざまな分野の研究者や大学の先生たちもあらわれ、そういった行動のすべてが、やがて、どこどこの所属と一つの呼び名でくくることのできない、全国各地の個々人一人ひとりの勇気にもつながっていきました。そんな人たちが、法案成立後の今ももちろん、まだまだ生まれているのを感じます。

それは、突然変異なんかじゃない。3.11後の、政治への大きな不信。原発再稼働反対のデモ。原発震災でないがしろにされたままの、被災した人たちが幸せに生きる権利をとりもどすためのたたかい。沖縄の人たちの民意と人権をふみにじる辺野古基地建設への、反対の意思表示、オール沖縄で勝ち取った、翁長県知事の誕生、などなど。

おかしいことに対しておかしい、と声をあげること、自分の意見を路上でスピーチすること。そういった多くの人たちの、目にみえる実際の行動が、戦後初めてといっていいくらいの、民主主義の芽が育つ土壌を、この数年間ずっと耕し続けてくれていたのです。

それはまさしく、人々のちから。そもそも、デモクラシーって、デモス（民衆）とクラトス（権力）、文字通り、people's power、なのでした。

その言葉を、今年は幾度となく思い起こしていました。戦後70年経ったこの夏。そのバトンが力強く引き継がれていっていることを、目のあたりにするたびに。

そのもとをさらにたどれば、68年前に新しい憲法ができて、この国の私たちは、戦争のない「平和のうちに生存する権利」や、世界と国民にむけて約束した戦争放棄の9条や、「すべて国民は、個人として尊重され」、しあわせを求めて自分らしく生きる権利の13条を持っている、と知った人々が、このユニークな憲法を、それゆえかえてしまおうとする勢力に抗い続けた、そのおかげなのだとも思います。

peaceのpiece

わたしたちが自由にもの言う権利も、基本的人権も、憲法に書いてあるからって、「わたし」が何もしないでいていいわけじゃない。権力に憲法を守らせるためには、一般peopleのわたしたちが、日々、不断の努力の「12条する」ことが欠かせない。

その意味でも、「13条のうた」のCDブックをつくった2年前、憲法をもう一度読み直して、そうか、そうだったかと、12条の存在にあらためて気づけたことは、私にとってとても大きなことでした。

出前けんぽうかふぇの先々でも、かならずこの話をしています。なるほど！　12条にはそういう意味があったのか、と新鮮にうけとめてくれる方が、どの出前先にもかならずいます。意外や、若い弁護士さんや新聞記者さんからも、そう言われましたから。

個々のする12条は、おそらくささやかなものでしょう。でもどんなに小さくたって、それはたしかなpeaceのpiece、平和のひとかけらであることには違いない。

“I am a piece of peace.”“We all are the pieces of peace.”という自覚が、ごく当たり前の暮らしの一部に、どうかなっていきますように。その願いをこめて私はいつも語っています。

出前けんぽうかふぇ

前号に少し予告編をかいた憲法の本、娘との協

働作業でつくった「わたしとあなたの・けんぽうBOOK」は、安保国会真っ最中の8月末にできあがりました。なんとしても法案可決前に出したいと思っていたので、いわば〆切寸前の完成です。この秋は、その本をかかえて、あちこちの出前けんぽうかふぇに出かけています。

法案は通ってしまったけど、だからこそ今、憲法を知りたい、学びたい、知らなきゃ。そういった熱い想いが、大波小波となって私のもとに届くからです。

多くの学者さんが安保法制は憲法違反だと言ってるけど、そもそも憲法って何なのか、法律とどう違うのか、そのあたりがわからないと、どこがどう違反なのかさっぱりわからない。とはいえ、今さらもうそんなこと訊くに訊けなくて、よけいに頭ん中モヤモヤ、胸のうちザワザワが倍増してる。

そんな気持ちでいる、特に若いママたちの場に、憲法きほんのきを手渡しで配達する感じで出前に行くのです。いったんその基本がわかると、今の政権が、憲法に照らしてどれほどおかしなことしているかも見えてきて、みなさん、少しはすっきりするみたいです。

大文字ではじまるConstitution

私の届けるけんぽうかふぇ、たとえばこんな感じです。

憲法はなんのためにあるのか、といえばーー。

我れこそが法なり、と自分で好き勝手な法律をつくり、国を動かし、力で民を支配していた王様がいたとします。民衆がその王を倒して新しい国を設立=constituteする時には、国の構造=constitution（かたち、しくみ）を説明するあらたな文書が必要となります。それが、大文字のCではじまるConstitution、日本語で、憲法。つまり、この文書の書き手は、以前の王ではなくて、人々。その憲法によってしばられるのは、権力の側にいる人たち。そういう憲法にのっとって国を運営していくことが、すなわち立憲主義。

または、こんな説明も。

憲法とは、「政府がやるべきこととやってはいけないことを、わたしたちが決めた、国のおおもとのきまり」（「絵本・戦争のつくりかた」より）であり、「人々の自由や権利の実現のために、国家権力を拘束する法」（三省堂の「新六法全書」の水島朝穂さんの解説より）であって、これを守るべき人は、私のような一般peopleは持っていない権力を持ち、国家を運営していく仕事を国民から託された、総理大臣や国会議員や裁判官や公務員、といった人たち（この中には天皇も含まれる）、と定められているということ。

英語のConstitutionには、設立、とか、構造、といったもともとの意味が含まれているのでわかりやすいけど、日本語の「憲法」の二文字には、どちらも昔々に中国から入ってきた刑法を想像する「憲」と「法」の固いイメージがあるため、もう漢字を見ただけで、なんとなく私たちが縛られているような印象を持っちゃうのも、うなづける。

そのせいでしょうか、この憲法を守らなきゃいけないのは誰？とお尋ねすると、私たち国民の側、と思いこんでいる人が今も少なくありません。ここんとこの出発点が違ったら、憲法違反しているのが誰なのかもやっぱりわからなくなりますよね。

三角の仕組み

国家権力を一カ所に集中させないため、その力を分散する仕組みが、三権分立の三角形。立法と司法と行政。それを実際におこなうのはどこ？

私たちが選挙で代表を選んだ国会議員からなる国会が立法の場、法律をつくるところ。ただし、憲法は法律の上に位置していて、国会でつくられる法律は、憲法を越えることはできません。憲法に違反する法律は、その効力を持たない、と憲法

に定められています。

行政をおこなうところが、内閣。司法をおこなうところが、裁判所。権力は憲法を守る義務を負い、国民は法律に従う義務があります。

では、この三角形の中で一番えらいのは、どこでしょう？

この問いに、つい先日の出前先では、「内閣」という声が返ってきました。う〜ん、さもありなん。安倍さんのしていることを見る限り、まるでそうとしか思えないものね。

国会にはかることなく、内閣だけで、国の大事なことを次々きめていっちゃう安倍政権。集団的自衛権行使容認も、武器輸出禁止三原則をとりはらって、防衛装備移転三原則にかえたことも、安保法制も、国会に諮らず「閣議決定」で出してきたのですから、そう思っちゃっても不思議じゃない。ましてや、安保法制は国会に出された後も、主権者である国民に対して少しもていねいな説明はされませんでしたし、っていうか、いまだされていませんし。

このことだけでも、「国会は、国権の最高機関であり、国の唯一の立法機関である」と憲法に定められたことを、安倍さんがいかに軽んじてるか、っていう何よりの証拠です。

その上、いつでもどこでも自衛隊が米軍とともに共同行動ができるようにする、つまりは自衛隊が軍隊になる、という法律の安保法制を無理やり通したのですから、どこから見ても、これまでずっと専守防衛を掲げてきた9条に、ばっちり違反しています。憲法を守らなきゃいけない総理大臣が率先して、主権者である国民の、大きな反対の声を無視して、憲法違反の法律をつくっているのです。

って、このあたりのことが整理されると、安倍さんがいかに、憲法も立憲主義も主権在民もないがしろにした政治を行っているか、だいたいわかっていただけるみたいです。

13条こそが核心

私の出前けんぽうかふぇで、決してはずすことのできないところ。それが「国民は、すべて個人として尊重される」という文言ではじまる憲法13条です。

それぞれに違う個性をもった一人一人が、大切にされる、その人らしく生き、しあわせを追い求める権利がある、と個人の尊厳をうたうこの13条こそが、日本国憲法の核心です、と今は確信をもって語っています。そう言えるようになるまでには、何年間かの前段階がありました。

7年前、母娘でつくった冊子「ほめ言葉のシャワー」のコラムに、「あなたの存在は、ほかの誰ともとりかえることができません」と書いたのは娘でした。6年前、その言葉がそのまま、憲法13条の理念と見事に重なっている、と発見したのも娘でした。

それについては、このマガジン連載の中で何度も書いてきたけれど、けんぽうかふぇで13条のことを語れば語るほど、その時の娘の発見がいかに重要な意味をもっていたか、いっそう深く実感するようになりました。

戦前の日本で権力があのように暴走して、とてつもない犠牲を多くの国民に強いたこと。あの当時、大切なのは一人ひとりのいのちじゃなくて、神とされた天皇であり、国家であり、公（おおやけ）でした。個人に人権というものがある、なんて意識、持ってはならない時代。それはもちろん、権力にとってつごうのよいこと、命令一つで国民を従わせることができましたから。

そういう時代があったからこそ、戦後生まれの憲法では、同志社大学の総長さんがこの春の卒業式祝辞でのべられたスピーチの言葉をお借りするなら、「国や社会でもっとも尊重すべきものは、一人ひとりの個人であり、国や社会は、何にも

勝って、個人の自由な考え方や生き方を大切に扱い、尊重しなければならないという原則」にのっとり、それまでの「天皇中心主義の国や社会のありかたを180度転換させて、すべて国民は個人として尊重される、という憲法13条を、憲法の根幹を示すものとして規定した」のです。

憲法って、私の味方

それにしても、まだまだ今ほどは憲法論議が盛んでなかった6年前に、娘がよくぞ13条の真価に気づけたものだ、と今更ながら思います。

「ほめ言葉のシャワーから平和へ」という題で親子で話してほしい、と頼まれた時、話のテーマが平和、というなら、そのヒントがもしかすると憲法の中にあるかもしれない。娘がそう思ったこと自体、この国が他国に対して、少なくとも60数年間、主体的には一度も戦争をしてこなかった、そういう時代のこの国に彼女が生まれ育ったことと、おそらく無関係ではないでしょう。

ともあれ、自分の話のヒントを見つけたくて憲法をはじめのページからめくっていった娘は、「すべて国民は、個人として尊重される」と書かれた13条を読んだ瞬間、「あ、憲法って、権力の味方じゃなくて、私の味方なんだ！」と感じたのだそうです。その直感がどこからきたのか、私にとってずっと謎だったけれど、つい最近になって、その謎が解けはじめています。

時代の空気

当時の娘は、どこかに勤めるとかバイトするとかは一切せずに、手作業で本をつくることだけを、はたしてそれを仕事と呼べるかどうかもわからないまま数年間、一人で細々と続けていました。

そんな細々暮らしの中でともすれば、ああ、自分なんて何一つ社会の役にたっていないなあ、国内総生産のGDPをあげるのにも全く貢献していない、なんて情けない存在なんだろ、と、企業勤めしている同級生たちと自分をくらべて、うしろめたく感じるような時期が長く続いていたそうです。

娘のこういった感じ方は、頭のつくりの丸い私とまるで違う、きまじめで四角い頭の彼女ならではの感覚でもあったろうし、それにくわえて、当時の社会の気分というものからも、多分に影響を受けていたのだろうと思います。

あのころ、世間って一体どんな感じだったっけね、と最近、親子で語りあっていた時、次々に思い浮かぶ、当時の空気をあらわす言葉がいくつもありました。

時は、小泉政権から安倍政権にまたがる時代。

新自由主義とか成果主義とか、勝ち組／負け組、負け犬、自己責任、といった言葉を、流行り言葉のようにしょっちゅう耳にしました。小泉政権で労働者派遣法の規制がゆるめられ改悪され、非正規で働く人たちが大量にふえていったころです（派遣法は安倍政権でさらに改悪されて、非正規で働く人の多くが、いつまでたっても正社員になれない仕組みができあがってしまいました）。

あの当時よく言われたこと。正社員になれないのは、お前がちゃんと努力しなかったせいだ。それは自業自得で、自己責任だ。そんな非難めいた言葉がたびたび聞かれました。

結果や数字を出さないものに価値はない、といった、目にみえるdo的な価値観だけであたかもその人のすべてが計られるような風潮。一方、その人が「存在する」、そこにいてくれる、という意味でのbe的な価値観は、無視されるか、軽んじられて当たり前、という社会の空気、時代の気分が蔓延していました（その空気は今もこの社会を覆っているように思います。）

13条の意味

そういうものに、多くの若い人たちが呑み込まれていったように、娘もまた、そんな時代の気分を反映していたところが少なからずあったこと、やがて薄うす、彼女自身が気づきはじめた。ちょうどそんなこころ具合でいた彼女が、6年前のあの時、憲法13条に出逢ったのです。

そうだったのか！　憲法って、私の味方だったんだ！　どんな人も、無条件で、個人として尊重される、憲法にそうはっきりと書いてある。ということは、私は私を大切、と思っていいし、自分らしく生きたいと願っていいし、しあわせを追い求めて生きていっていい、ということじゃないのかな。それは同時に、あなたやあの人、あの子、といった、ほかの人たちの大切さもないがしろにしないってこと。その大切さは行ったり来たり、ってことなんだ。

なぜこんなことを憲法にわざわざ書き込んだんだろ。それは、個人を尊重する、とか、どの人にもおかしてならない人権というものがある、といった考えが戦前の憲法にはなくて、結局はそのことが権力の暴走をとめられないことにつながっていった。自分も他者も、大切にしあい、認めあうこと、それなしに、平和って成り立たないものなんだーー娘は、13条をそんなふうに自分に引きつけて感じとったのでした。

そもそも憲法が、とりわけ13条が、何のためにあるのだったか、それを今一度、考えてみると。

一人ひとりの基本的人権がきちんと守られるように、個人の自由や権利が奪われることのないように、権力を拘束するためにこそ、それはあるのです。戦前はあまりにも、一人ひとりのいのちや自由や人権が粗末にされ、奪われていた。その深い反省から、個人の尊厳という、これまでの憲法にはなかった価値観を、新憲法に書き込んだのです。

だとするなら、一人一人が、自分をかけがえのない大切な存在と思い、しあわせになろうと願って生きることは、同時に、権力に好き勝手なことをそうやすやすとはさせないぞ、という、権力の横暴に対して抗う力になる、そういうことでもあるはずです。

逆に、自分なんて何の価値もない存在だ、と多くの人が自己否定してしまう社会は、国家に国民をわざわざコントロールしやすくすること、権力にとってつごうのいいことです。ごく一部の人だけがいい思いをし、富む者と貧しい者との格差がより深刻にひろがる社会構造は、そのためにこそ、周到に、意図的に、何年もかけてつくりだされているのではないのか、と思うほどに。

すばらしい国？

娘の直感による、13条の発見由来を探りたくて、親子で何度か対話するうち、はからずもこんな地点にたどり着きました。これって私にとっては大きな意味のある、コペルニクス的発見です。

そんな目で今、この国を眺めた時、一人ひとりの自己肯定感や自尊感情の低い傾向がいまだずっと続く中で、それと裏腹に、日本ってすばらしい国だ！とか、日本人ってすご〜い！的なテレビ番組のやたら多いことが、とても気にかかります。

自分に自信が持てなくたっていいんだよ、そのかわり、このすばらしい国に誇りを持てばいいじゃないか、国のために、国民や国土を守るために、がんばったり尽くしたり。そうやって国の役にたつ国民になりさえすれば、その誇りも共有できるんだしね、といった誘導が、メディアを通じて知らず知らず、人々の心に深くはいりこんでいってるような気がしてなりません。自衛隊への勧誘はそれがもっともあからさまなかたちになって出ているからわかりやすいけど、テレビ番組はもっと巧妙につくられていますから。

その意味で、「ほめ言葉のシャワーから平和へ」というテーマには、6年前に私が思っていた以上

に深いものがあったことを、今、強く実感します。

「紅茶の時間」で私が常日ごろ心がけている、相手のいいところを言葉にして相手に伝える、という何げない行為も、「あなた」の存在はほかの誰ともとりかえがきかないんだよ、と言い続けることも、「あなた」の大切な人権を権力から守るための、おおげさにいえば、ささやかな防波堤みたいなものかもしれないのです。一人ひとりの大切さが尊重されない社会の中では、いっそう簡単に、権力の暴走を許してしまえること、これまでの歴史がはっきり教えてくれているのだから、なおさら、その防波堤が今の時代には必要なのだと思います。

ママたちとのけんぽうかふぇ

つい先ごろ、金沢の若いママたちが小さなけんぽうかふぇをひらいてくれました。今回のマガジンに書いたような、憲法きほんのきをまず伝えてから、13条と12条はコインの裏表のようなもので、自分の自由を守り、しあわせになるために生きる13条の実現のためには、一人ひとりが自分の12条をするってことがかかせないよね、といった話をしました。

おはなし会の最後にいつもする「単語な感想」は、今日ここにきて、お土産に持ち帰りたい言葉、つまりこれだけは忘れないぞ、と思う単語を、折り紙に書いてもらって発表する、というシェアリングのワークです。何人かの人から、13条や12条のこと、今日はじめて知った、と聴くと、よかった、語りにきた甲斐があるよって、思えます。

みなさんの単語な感想の中から、いくつかおすそわけを。

・自分の自由を守る。守りたいから不断の努力をする。
・自分も、peaceのひとかけらになる。
・大切さが行ったり来たり、というのが心に響いた。
・小学校の時の先生がいっていた「不断の努力」っていう校訓が、これだったんだ、8歳の時に聴いて覚えていたこの言葉、それが今日はじめてつながった！
・13条と12条を持ってかえって、近所の子どもたちに、言われてうれしい言葉を、ほめ言葉のシャワーを、いっぱいかけてあげよう。（これは、子どもたちのために駄菓子屋さんをオープンしたおばちゃんの言葉）
・積極的平和主義の英訳にでてくる「proactive」という言葉は、戦略用語で「先制攻撃」って意味だったんだ。（安倍さんのいう積極的平和主義と、積極的平和という言葉の生みの親の、ガルトゥングさんの意味するところとは違う、と説明したことから）
・草案の98条と99条、今どのようで、今後どのように、なのかをもっと調べよう。（来夏の参院選のあと、安倍さんが出そうとしている自民党改憲草案の中の、新設「緊急事態条項」のこと）

おしまいに、この会を企画してくれたママがこう語りました。

「安保法制に対して、名前も顔もだして行動する、そのことへの恐怖がはじめはものすごーくあったけれど、ある時を境に、それが不思議なくらい、消えていった。だって私には、憲法があるじゃない！って思えてから、その怖れがすーっとなくなっていったんです」

このママにそう思わせてくれる憲法がこれからも私たちを守ってくれる憲法であるために、これを変な方向に変えさせちゃいけない！といっそう思えた、この日のけんぽうかふぇでした。

娘の「12条宣言」

安保法制が参院を通過する直前、娘ははじめて、東京の路上でスピーチしました。それを今号マガ

ジンのとくべつ付録で、ここに載せます。彼女が記録としてつづったブログから、スピーチを含む以下全文を。

わたしの12条宣言

今日の未明、ついに安保法案が参議院本会議で可決されました。

でもね、たくさんの人が「終わりじゃない。ここからはじまり」って言っているし、（そこがこれまでとは違う空気な気がする！）私も、ここからが本番、って思ってます。

国民に誠実でない方法で憲法違反の法案を成立させる政治家のこと、やっぱり私は信頼できないな。

そしてそのような政治家が、法案を誠実に運用するとも思えないな。

だから、「あぁ、もうだめだ」って目をつむってしまったら、それこそ相手の思うつぼなんです。

のど元過ぎれば熱さ忘れる方式で忘れちゃうことも、相手が望んでいることだよね。

憲法とこの国に住む人がないがしろにされたこの理不尽さを、私はしっかりと感じて記憶したいし、一人でも多くのひとに感じて、記憶してほしい。そして、次の選挙につなげたい。

憲法の中身を知ると、今起こっていることがどんなにへんてこりんか、理不尽か、よくよくわかります。

そのことを知ってほしくて母とつくった『わたしとあなたの・けんぽうBOOK』だけど、私、この前人生で初めて街角でスピーチしたんです。

この本をつくろうと思ったきもちについて、こんなふうに。

私がこの本の中で特に伝えたかったことは二つあります。

一つ目は憲法を守る義務があるのは国民ではなくて、総理大臣や国会議員や公務員や天皇陛下、といった私たち国民にはない権力をもつ人たちだということ。

彼らに一定の権力が与えられているのは、あくまでも国民が生活する場としての国を運営するためです。

だけど、権力というのは時として国民の望まない方向へと暴走していってしまいがちだということは、数々の歴史が証明しています。

たとえどんな横暴な人間が政権をとったとしても、

国民の自由と権利が守られるために、ないがしろにされないために、権力をしばるための機能として、憲法が存在しているのです。

そのことを前提にして考えると、9割の憲法学者や、かつて内閣の憲法解釈を担ってきた元内閣法制局長や、法の番人と呼ばれる最高裁の元長官が違憲だといい、国民の8割が説明不足と感じ、6割が今国会での成立に反対だという安保法案が、このまま通ってしまうことを、私はおかしいと思います。

たとえ、もしもあなたが安倍総理を支持していて、

安保法案の中身に賛成だとしても、やっぱりこんなやり方はおかしいよって声をあげる必要があると思います。

なぜって、一度こんなルール違反にOKを出してしまえば、この先あなたが支持しない人が総理になって憲法違反をしたとしても、文句が言えなくなってしまうからです。

この状況にあって、なおも立ち止まってくれない安倍内閣に、私たちは堂々と「おかしい！」と声をあげる権利がある、ということを、憲法は教えてくれています。

私はさっき、本の中で伝えたかったことは2つだと言いました。

もう一つは、この「おかしいと思うことに声をあげる」というのが、私たちの権利であると同時に、責任でもある、ということです。

憲法が命じる矢印の向きは、ほとんどが権力をもつ側にむけられていますが、12条は、私たち国民にむけて書かれた条文です。

第12条
この憲法が国民に保障する自由及び権利は、
国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。

「不断の努力」というのは、絶え間のない努力、という意味です。
憲法が私たちに自由や権利を与えてくれているからといって、それにあぐらをかいて私たちが何もしなくていい、なんてことはありません。
政治家は変なことはしないだろう、という根拠のない信頼感に頼っていたらだめだよ、今の自由や権利をこれから先も持ち続けていくためには、私たちが絶え間のない努力をしなくちゃいけないと、憲法は言っているのです。

そのことを、本の中では「12条する」と表現しました。
だから、権力をもつ側が、おかしなことをしようとしたときに、おかしい、って声をあげることは、立派な「12条する」なんです。

私は初め、スピーチしてって言われた時、とてもじゃないけど自分に出来る気がしませんでした。
今だって、怖いし緊張しています。
だけど、私の友達には、憲法を守る義務があるのは総理大臣や国会議員だということを知らない子もいます。
政府がルール違反をしようとしているときに、
そのルール違反はおかしい、と政府に伝える責任が私たちにあるということを知らない子もいます。
そういう人、他にもたくさんいると思うんです。
だから、そのことを知ってしまった者の責任として、そのことを知らない人へ伝える責任があると思ったから、今私はここでスピーチをしています。
それが私の「12条する」ということなんです。

今この話を聞いてくださっている方の中に、
もしもたった一人でも、安保法案に賛成でも、反対でも、よくわからなくても、自分の「12条する」はなんだろう？とふと考える方がいてくれるとしたら、私はとても嬉しく思います。

参議院での採決の過程によって、はからずも、
あの日スピーチで言ったこと、けんぽうBOOKに書いたこと、それがそのまま証明されました。

私たちが「ちょっと待って、一旦止まって」と言っても、権力はその声を聞かず、ふりきってしまうことがあるんだね。
選挙で選んだら、あとはもう政治家に任せておいて大丈夫ってことじゃなくて、正当な手続きで選んだ人であったとしても、ルール違反をすることがあるんだね。

憲法がなんのためにあるのか、そしてなぜ憲法に12条の「不断の努力」があるのか、そのことがよ〜くわかりました。
だけど、このままだと、その憲法が機能不全になってしまいます。

ここから先、問われていくのは、主権者である私自身。次の参院選まで、このきもちを忘れないで持ち続けて選挙で示すこと。
忘れっぽい私が、忘れないでいるために。いろんな考えの人がいる中で、おもいを選挙に反映させるために。私は何をしていこう。

それに、デモに行くまでではないんだけど、な

んかモヤモヤするって人ともつながりたいし、話したいな。
　政治には無関心なんだよね、って人とも、つながる方法がないかなって考えたいな。
　けんぽうBOOKは、そんな人にこそ読んでもらいたくてつくりました。それを、どうやって手渡していくことができるかな。

　たとえすぐに答えが出なくても、私は考え続けることをやめないでいようと思う。
　違和感もモヤモヤもまだ言葉にできないきもちも全部大切にしながら、進んでいこうと思う。
　私が無関心であることが、権力をもつ側にとってはどうやら都合がいいらしいので、だから私はこれからも、おかしいことはおかしいって言おうっと。
　そう決めた私の心は、自分でも意外なほど晴れ渡っているよ。

　これが、わたしの、12条宣言。

mai works

2015.11.18

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になればと思います。大切な人の死が、縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。また、悲しみを乗り越えない生き方であればと思います。

二　七　日

1. 本眼力にあいぬれば

浄土真宗のお葬式では、「本願力にあひぬれば、むなしくすぐる人ぞなき」という和讃が読誦されます。葬儀の終盤になってきた頃に、この和讃があげられるのです。

私は長い間、疑問に思っていました。「本願力にあひぬれば」というのは、阿弥陀様の力に出会ったならということでしょう。阿弥陀様の力に出会って、有意義な明日を迎えると言われてもなぁ、と思っていました。

私は、かつて火葬場の建物の前で、老人と若い娘が抱き合って泣いているのを見ました。老人にとっては、息子を亡くし、娘にとっては父親を亡くしたのでした。二人とも悲しみのあまり、立っていられないように泣いていました。彼らにとっては、本当に大地が崩れるような感じだったと思います。大切な方を亡くしたとき、何物もすべて崩れるように感じるのでしょう。

大切な人を亡くした人々に、明日から有意義な日々ですよ、と言ったところで実感できるだろうかと思っていました。

2. 導師として

あるお葬式に遇って、私の考えは変わりました。それ以来、葬儀屋さんには、必ず棺掛けを用意してもらいます。それは独特の編み方をした紐の付いた錦織の布です。この布でお棺を被うのです。私には譲れないところです。かつて、葬儀屋さんから抗議をうけました。「そんなものを掛けると、お棺の彫刻が見えなくなってしまう。」お棺の彫刻は不要なものです。その葬儀屋さんは最近、彫刻入りのお棺を勧めなくなったと思ったら、「上・中・下」の棺掛けを作って、どれがいいかと尋ねるそうです。

葬儀屋さんは棺掛けと称していますが、本来は七條袈裟なのです。浄土真宗が使う七條袈裟は大きな、立派な錦織の袈裟です。それでお棺を被うように掛けるのです。同じように七條袈裟をつけた導師が、仏様の最も近い所に座ります。

浄土真宗のお葬式では、亡くなられた方が本当の導師なのです。即得成仏を説きますから、亡くなられた方はすぐに仏様になられるのです。仏となって、お葬式の導師を勤められるというのです。私は葬儀司会者に「導師の入場です」と紹介されて登場するのでが、実は導師ではないのです。私は導師代理なのです。

お葬式での私の声は大きいと言われます。私は精一杯の声を出すことにしています。それは、私が仏様の代理を勤めさせていただくのですから、力一杯の声を出すことにしています。

3. 娘の死

お葬式は、いつも突然です。枕経の依頼の電話をもらって、明け方の頃に車を走らせました。当時は、カーナビのない時代でしたので、電話で教わった住所のあたりに到着しました。夜明け前に家中の電灯が灯っているお宅の前に立ちました。

父親が、私に葬儀の依頼をするのは自分の葬儀の時だと思っていたとおっしゃいました。まさか娘の葬儀を頼むとは思わなかったと涙ながらに話されました。通夜と葬儀は、

多くの会葬者でした。そのお嬢さんは、会社で明るく笑いをとる人気者だったそうです。

少し話がそれますが、このご両親には、いわゆる家族葬という選択肢はなかったようです。お嬢さんの生き方を思ってのお葬式だったとおもいます。子供のお葬式では、ひっそりとしたお葬式を選択されることも少なくないようです。誰にも顔を会わせたくないのだし、誰とも会話をすることもできません。子供のお葬式で、親の心は強靭ではありません。子供を亡くした親の心は、ティッシュの折り紙のようなものです。なんとか形を保っていても、ちょっとしたことで、グシャリとつぶれてしまいます。

話を戻しましょう。私はこのお嬢さんの病名をご両親から聞いたのですが、初めて聞く病名ですぐに忘れてしまいました。ただ、眼球の奥にある視神経にできる癌のような病気だと思いました。

治療が進む中で、医者は両眼の摘出を提案されたそうです。ご両親は、悩みました。いくら治療だからと言っても、すぐに「はい、目を取ってください」といえるわけがないとおっしゃっていました。治療は、娘さんの「お母ちゃん、目を取ってもええか？」の言葉で決まりました。

ご両親は娘があんなに頑張っているのだから、自分たちも頑張ろう、娘の前では泣くまいと、決めて病室に通われたそうです。ある日、病室で父親はこらえきれずに涙を流していたそうです。無言で涙が流れていたそうです。その姿に、娘さんが「お父ちゃん！泣いとったら、アカン。泣いとらんで、しっかり仕事行きや。頑張って、お母ちゃんをラクにしたってや。お父ちゃん、働け！」と言われたそうです。

両目を摘出した娘さんに、お父さんの涙は見えていたのです。人間は目で見えるものだけが真実ではありません。心で見る真実もあります。

そして、娘さんは亡くなっていきました。ご両親は、頑張ってがんばって、娘のお葬式だけは出しました。しかし、お葬式の後は、何の気力も失せてしまいました。父親は自営業です。このまま仕事をたたんでしまいたいと思ったそうです。

「あの娘には、何もかも見えてたんや、と思います。こないにガタガタになってしもた私らの姿も」

「あの『お父ちゃん、はたらけー』の言葉が私らを立ち上がらせてくれたのです」と。

お父さんは、今も年をとったと言いながら、頑張って働いています。

4. 仏の説法

先にも申しましたが、浄土真宗では、亡くなられた方がすぐに仏と成って、説法をされるのです。だから、お葬式では近親者が最前列に座るのです。そして、七日参りでも法事でも最前列に座るのです。仏様の説法を、一番近い所で聞かせてもらうのです。

身近な人の死は、とてつもなく大きな出来事です。それは人の生死を語る機会なのです。この真理に出会う機会こそがお葬式なのです。この機会に出会うことが、「本願力にあひぬれば」と言うことです。

一方、先に往かれた方は、遺してきた人にしっかり生きて欲しいと願って説法をされるのでしょう。自分が生きられなかった明日をしっかり生きて欲しいと。その思いを受け止めるところに、死の向こう側とこちら側がつながるのだと思います。生死を超越したつながりを知った生き方は、決して虚しいものではないのです。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（１９）

中村周平

2012 年 3 月某日、初めて訪れた同志社大学新町キャンパスの食堂で私は落ち着かない時間を過ごしていました。食堂に置かれた時計と家から印刷してきたものを交互に見返しながら…数時間後に控えた、ある面談が気になって仕方ありませんでした。

弁護士の方を通じて紹介していただいた方は、同志社大学政策学部で教員をされている川井圭司先生でした。ご専門はスポーツ法学、中でも労働法を中心に研究されています。また、同志社大学体育会ラグビー部のＯＢでもあり、大学のプロフィールによれば「学生時代はラグビーに明け暮れ、勉強面ではかなりの落ちこぼれであったが、その後、指導教授の薦めでスポーツ法学と出会い、その必要性を認識するとともに研究の楽しみを見出す。」(同志社大学政策学部ホームページより)とあります。大学教育という場で「文武両道」を実現された方でした。

面識といえば、以前弁護士の方に誘っていただいて参加したシンポジウムでご挨拶をさせていただいたほど。スポーツ法学会での発表の際は、大学業務のため欠席されており、面と向かってお話をさせていただくのは初めてのことでした。

メールで数回のやり取りをさせていただき、お忙しい中、面談の時間を確保していただきました。日程が決まってから面談の日までには三週間ほどあったのですが、緊張と不安が日を追うにつれて高まっていきました。「先生の教え子でもなければ同志社大学の学生でのない自分が、論文指導をお願いする…それって物凄く身勝手なお願いでは」。これが頭に浮かんでからは、食事量も日に日に少なく…。「そういえば、ラグビーやってた頃もメンタルほんまに弱かったなぁ。試合前になるとゲップが止まらず、何度もえずいていたような…」と、自分の精神面での弱さをあらためて痛感しました。

そして、あれよ、あれよという間に、面談当日を迎えました。川井先生の研究室がある新町キャンパスは自宅からバス一本で行ける距離だったのですが、極度の緊張と絶対に遅れられないという不安から、2 時間近く早めに到着してしまいました。川井先生の研究室の場所を確認した後は、新町キャンパスに学生食堂があることがわかり、そこで面談までの時間を過ごすことにしました。その日までに食事量が極限まで減っていたこともあり、話の最中に血糖値が下がってしまうことは避けなければと、おそらくカレーか何か…カロリーの高そうなものを頼んだと思います。味はおそらく美味しかった(いや、美味しかったに違いない)と思うのですが、初めて訪れる大学のカレーを評価できるほど心に余裕はありませんで

した。食べ終わってからは、面談で自分が話したいことの整理の時間となりました。事故の詳細、その後のラグビー部や学校との関係の変化、3 年にわたる調停、立命館での学び、知識不足のまま発信していくことの危うさ。限られた時間の中で、自分が一番伝えたいことを順番に整理していきました。

お昼過ぎ・・・とうとう約束の時間が来てしまいました。研究室がある建物は南北に伸びる縦長の造りで、川井先生の部屋は入口から一番遠い箇所に位置していました。距離にして３０メートルほどの廊下、ただその日は実際の距離以上に長く感じました。部屋の前に着いて軽く深呼吸した後、ノックをしました。

川井先生は現役のラガーマンを彷彿とさせる本当にがっしりとした方でした。部屋にお邪魔させていただき、簡単な自己紹介をさせていただいた後、本題に入っていきました。ラグビーを始めたきっかけや中高時代のチームとの思い出、事故の経緯、その後の学校側との関係性(時間の経過の中で感じた温度差や芽生えだした不信感)、調停でのやり取り、修士論文作成によって気付くことができた過去の自分、スポーツ法学会での発表…。ラグビーやチームに対する想い、そして自分自身に足りないことを包み隠さず川井先生にお伝えしました。また、こちらが一方的に話すのではなく、川井先生が適時質問をしてくださったことで、より自分の想いを深めてお話しすることが出来ました。初対面とは思えないほど、こちらの想いや考えを汲み取りながら話を進めてくださる、非常に優しい先生というのがこの時感じた印象でした(それは今も変わっていません)。

想いを伝えることに集中して時間を意識しないで話してしまったため、どれくらいの時間が経過したのか自分ではわかりませんでしたが、こちらの想いを一通り聞いていただいた後、川井先生から思いもよらないお返事がありました。それは、「一度、学部生のゼミに来てみないか」という提案でした。断られることを覚悟していた私にとっては、全く想像していなかったことでしたが、是非とも参加させていただきたい旨を伝えました。新年度 4 月から学部生ゼミが始まるので、３，４回生のゼミにゲストスピーカーとして招いていただき、それから都合のつく日程で参加させていただけることが決まりました。

帰りのバスは、数週間の緊張状態から解放されたこともあり放心状態でした。ただ、こちらのお願いを真摯に受け止めてくださった川井先生の人柄に感銘を受けていました。「なんかスゴく温かい先生やったなぁ…」。バスの窓から卒業式帰りの親子づれを何組も見かけました。気付けば季節は新年度の春を迎えようとしていました。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第17回

龍三と七人の子分たち

1．　ラーメンをもらった！

１ヶ月ほど前、仕事でご一緒のある女の先生から彼女の故郷のラーメンをいただいた。３人前のやつを二箱である。とても嬉しく、感謝したのだが、さて、どうしよう？？？

今のマンションに移ってから、３年半が過ぎようとしているが、キッチンを使ったのは一度だけ。２年ほど前に母が遊びに来て、手料理を作ってくれた時だけだ。その時も大変だった。俺の部屋には炊飯器がない、電子レンジがない、フライパンもない、急須もない、あるのは電気ポットと、前にこの部屋に住んでいた人が残していった小さな鍋だけなのである。仕方がないから、近所のスーパーで、ご飯を買い、誰が使っていたのかわからない、その小さな鍋で、母がちょっとしたものをつくってくれた。

俺は大学で教えているので、テキストを採用すると時々出版社からお礼に食べ物が送られてくる。毎年うどんを送ってくれる出版社があるのだが、毎年他の先生にあげている。お茶をくれる出版社もあるが、これも他の先生にあげている。俺は絶対に自分では料理はしない、お茶もたてないと決めている。

もともと俺は器用に頭を切り替えられない性格である。学生の頃は想像を絶するほど部屋を汚くしていた。あの頃の俺の心はまさに嵐だったので、俺の部屋は俺の心のメタファーだった。20 代の後半の頃、少しましになって、男も料理ぐらいはできなくてはと思って、毎日料理をしていたが、そのおかげでキッチンが汚くなって、出るときには敷金を返してもらえるどころか 10 万円くらい余計にとら

れた。今だったら考えられない話だが、あの頃は住居者の方に修復義務があったのだ。しかも、自炊していた頃は、栄養が偏るので、無残なくらいに太ってもいた。

そのあと、３０を過ぎてからは仕事が忙しくなり、無理に料理する必要もないのだから、特別な時以外は料理はしないと割り切った。しかし、今回のラーメンはどうしても食べたかった。せっかくいただいたのに他の人にあげるなんて、失礼だ。また地方のラーメンはそれぞれ味わいがあるので、どういう味がするのかも知りたかった。

誰かのところに持って行って食べよう！まず、日頃お世話になっている、男の先生に頼んでみた。彼は俺と違って生活能力がある。安くしてうまいものをつくるのは得意だ。すると彼の方はあまり気が進まないようだった。「カニとかよっぽどつくるのが大変なものなら、話は別だけど、ラーメンなんて、自分でつくりゃいいじゃないですか」と言われてしまった。「でも、普段火を使っていないと、火を使うのも怖いんだよね。火が出たらと思っちゃうから」と俺。「でも、國友さんのところって、電気コンロでしょ？　余計に心配ないじゃないですか？」

確かに彼の言う通りだ。ラーメンも作ろうとしない俺の方が悪い。そう思って、自分でつくるしかないかと観念していたとき、行きつけのレストランの女性にそのことをふと話したら、「それだったら私が作ってあげるわよ」と引き受けてくれた。

彼女は前に、京都風の雑煮も特別に作ってくれたことがあった。彼女のレストランは小さな、家庭的なレストランなので、そういう脱線も許されるのだ。そういうわけで、近々、彼女のところでラーメンをつくってもらって、食べる予定である。

思えば、彼女のレストランに通い始めて、もう３年が過ぎている。彼女のところに最初に行った時のことはもう覚えてもいない。学会で知り合った先生が、
この女性の義弟にあたる。それで「行ってあげてください」とチラシを渡されて、それからだ。ところが行ってみると、彼女は、俺の行きつけの近所のカフェの人とも知り合いであることがわかり、対人援助学会のメンバーの人や映画祭のメンバーの人、大学の非常勤講師仲間だった人とも親しいことがわかっていった。「京都は狭いのよ。だからすぐに知り合いになるのよね」と彼女。

そんなわけで、俺はすっかり彼女の店の常連で、本当に美味しい料理を毎週ごちそうになっている。自然食系の家庭料理である。

２．そうじしなくては！

俺は部屋のそうじもほとんどしない。洗濯は毎日しているが、アイロンかけはしない。そういえば、アイロンはもっているけど一回も使ったことはない。この頃はノーアイロンのワイシャツがでているので、ハンガーにかけておけば、それほど問題はない。

１週間に１回、マッサージの人に部屋まで来てもらって、体のメインテナンスをやってもらっているのだが、彼は綺麗好きで、こっちが頼まなくても、さっさっと部屋のそうじをしてくれる。ちなみに今俺のところにある掃除機は彼のお古なのである。

「國友さん、もうおっさんなんだから、掃除機くらいはかけないと寿命が縮みますよ」

と彼からは言われる。彼は普段が綺麗に生活しているからなのだろうが、敏感である。彼は、俺の部屋にくると必ず、最初に窓をあけて、空気を入れ替える。俺は窓を開けることすら面倒臭くて、そうそうしょっちゅうはあけていないのだ。

彼は、去年までは、もっとたくさん部屋の掃除をしてくれていた。しかし、この頃、彼の仕事が忙しくなってきたので、そうそう彼に甘えるわけにもいかない。自分でするしかないのだが、なかなか進まない。俺の部屋がゴミっぽくなるのは、仕事柄紙が多いからだ。昔の答案とかを溜め込んでいて、どこから捨てていいのかわからなくなってしまっている。この頃は個人情報にうるさい時代なので、名前などが入っている書類は捨てるのに苦労する。自分宛にきた郵便でも、露骨に捨てるのはまずいかと思って、なかなか捨てられないため、部屋が紙だらけになっていくのである。「そこまで考えなくても、そのまま捨てても誰も見ないんだから」という人も多いのだが、強迫的な性格の俺にはそれができないのだ。とりあえず、シュレッダーを買った。小さなシュレッダーなのでテストの答案まで処理するのは無理だが、自分に来た郵便くらいは、これで処理できるだろう。

ちなみに俺のマンションは、掃除会社が毎日ゴミをとりにくるので、ゴミの分別はしなくていいことになっている。しかし、それでも俺は心配になる。俺はやはり強迫症だ。普通のところだったら、燃えないもの・燃えるものと分別して、決まった日に捨てるのに、何もかも一緒に捨てるということに罪悪感を抱いて、それができないのだ。せめて、カンとペットボトルだけは、一般ゴミとはわけておこうと分別して捨てる。しかし、ペットボトルはラベルなどをすべてはいで捨てなければ気が済まない。他の人たちはそこまでしていない。そこまでしようとするから疲れるのだけど、俺はいったん決めたルールが破れないのだ。ルールを破ってしまうと絶望的なことが起きるという強迫観念にとらわれている。俺の生活にはルールがあり過ぎて、それが俺の行動を鈍らせている。独り身で自由のはずなのに、心は強迫症に縛られているので、自由を感じる間がないのである。

一週間に一度、マッサージの彼がきてくれるのは、俺にとっては心のやすらぎの時間だ。彼と俺は、一緒に飯や風呂、海水浴やスポッチャも行った仲だから気心が知れている。体をマッサージしてもらいながら、心もほぐれていく。彼は元々俺の通っているスポーツクラブで働いていた人で、８年くらい前から知っている。親密になってからはもう４年近くになろうとしている。もはや、家族のようなものだ。

３．愚痴を聞いてくれる友人

俺は強迫症で心配性だ。当然、誰かに愚痴をこぼしたくなる。グチグチ言うだけで、俺の心は少しマシになるのだが、愚痴を聞かされる周りの人は、当然のことながら、面倒臭がる。しかし、一人だけ、嫌がりもせず、愚痴を毎日聞いてくれる人がいる。６歳年下の男性だ。彼と知り合ったのは、14 年ほど前、俺が 37 歳の時のことだった。

なんども書いてきたとおり、俺はずっと若い頃から男の友達の一人もいなくて孤独だった。他の男子と同化できないことで不登校に

なり、学歴マイノリティになったことで、さらに友達はつくれなくなり、30 になって、カウンセラーにそのことを相談しても、解決策は見つからない。ある女性カウンセラーからは、「そんなみんな親友なんているのかしら？みな、その場その場でつきあっているんですよ」と言われた。

もう友達をつくることなんか諦めていた頃に、神様がくれた友達。それが彼だった。俺の唯一の LINE 友達でもある。彼と俺は、まさに赤い糸で結ばれた友達だった。彼は実家は関西だが、普段関西で暮らしているわけでもないのに、知り合った当初からメールのやりとりで、徐々に友情を育んでいった。俺は、それまで友達もいなかった身なので、友情に多くを期待することはしないでおこうと思っていた。心からの友達なんてそうそうできるものではないし、人は皆、やってきては去っていく。さよならだけが人生なのだ。

しかし、彼とはそうはならなかった。この 14 年間、お互いに風呂好きで、美味しいもの好きなので、大阪のスパワールドで落ち合って、たっぷり風呂のなかで話をし、一緒に食事をする。酒を飲んだりはしない。むしろ、しゃれたレストランと甘いデザートだ。彼は俺の愚痴をたっぷり聞いてくれる。他にも映画の話、コンピューターの話、仕事の話など、とりとめもなく楽しい会話が続く。女性の話になることはない。俺と彼はゲイ関係ではないが、これだけしょっちゅう風呂にいって、一緒にスゥイーツを食べて、しかも、酒や女の話なしとなったら、端から見たらゲイだろう。しかし、本当にゲイ関係ではないのである。

彼とつきあっていると、同性同士の友情結婚というのがあってもいいのかと思えてくる。この頃、男同士の結婚も認める国が増えてきて、日本も近いうちに認められるのではないかと思うのだが、別にセックスだけが結婚じゃない。むしろ、一旦結婚してしまうと性欲を感じなくなって、セックスレスになっていくカップルの方が多いとも言われる。中村うさぎのようにゲイの男と結婚している女性だっている。

彼と俺は、14 年も友情をつないできた。本当に赤い糸の関係だ。ゲイ関係ではなくても、生涯の伴侶とするにふさわしい相棒なのではないか。

４．俺は足長おじさん

俺の従妹はシングルマザーである。男の子が一人いる。まだ幼児だった頃は本当にかわいくて、彼と一緒に遊ぶと心が癒されていたものだ。息子ができたみたいで嬉しかった。しかし、その彼も、早くも小学校の高学年となって、だいぶ大人びてきたせいで、この頃は恥ずかしがって、あまり相手になってくれなくなった。

しかし、たまには親父の気分を味合おうと去年の夏の彼の誕生日にはゲームソフトをいくつか買ってあげた。しかし、今年の夏は残念ながら会う機会がないので、彼が欲しがっているゲームの機械を Amazon で注文して、彼宛に贈った。２万円くらいかかった。ちょっとした散財である。

でも、いいか。お父さんのいない子だし、たまには足長おじさんみたいな気分で、プレゼントを送るのも悪くない。父のない子と子のないおじさんとである。彼は俺のプレゼン

トに本当に喜んで、夢中でゲームばかりしていると電話で聞いた。あー、よかった。ゆくゆくは彼が京都に遊びにきてくれればいいけどなあと思っている。まだ小学生だから無理だろうけど、高校生くらいになれば可能かもしれない。夏休みに１週間くらいきてくれれば、京都案内もできるだろう。

実際に自分の子供をつくることは俺にはできない。俺は、少年時代に辛酸を舐めるような思いをしているので、自分の血を残したくない。あんな辛い思いをするのは俺一人で十分なのだ。

５．Facebook

先日、N 先生と打ち合わせのために温泉に行った時のことだ。ある若い男性が、立って俺の方を見ている。４年ほど前に専門学校で教えていた子だった。「あー、元気だった？」とまず男同士の固い握手。「だいぶ、ムキムキになってきただろう？　スポーツクラブで筋トレしているんだよ」と俺が自分の体を誇示すると、彼は俺の腹や胸や腕をさわりながら、「まだまだですよ（笑)」。彼はスポーツマンなので、なかなか手厳しい。「また今度、飯でも行こうよ」「ええ、ぜひ」「後で、Facebook にリクエスト送るから。先日、A さんから友達リクエストがきて、それがきっかけで、S くんには久々にあったんだ」と会話した。

その後、風呂から上がって早速リクエストを送るとすぐに承認が来た。「機会があれば、また一緒に風呂に行こうね」とメッセンジャーでやりとりした。

専門学校で教えていた頃は、つらいことも多かった。専門学校は大学と違って、学生の注文が多いので、クレームが来て凹むことも度々だった。その一方で、専門学校の子は卒業した後も、俺と交流しようとしてくれる。大学の教え子でも数人、Facebook で繋がっている子はいるが、専門学校の方がはるかに割合が高いのである。

これだけ何人もいると、時々、遊んでもらうことがある。かつての教え子に遊んでもらう先生なんて、なんとなく情けない気もするが、しかし、若い頃友人のいなかった俺にはそれが楽しくてたまらないのだ。

６．しかし、女性恐怖は治らない

俺の生活は優しさに満ちている。独身生活になんの不自由もしていない。

繕い物があるときはクリーニング屋さんに頼めばやってくれる。留守中に荷物が届く場合は、近くのコンビニで受け取れる。コンビニには毎日なんども行っているので、すっかりお得意さんで、俺には笑顔で接してくれる。行きつけのレストランはたくさんあって、俺が、漬物嫌いで、スウィーツが好きだということは、もう周知のこととなった。

強迫症も耐えられないほどではない。人間は自分の生活と付き合うしかない。５０代にもなれば付き合い方もわかってくる。

少しずつ、自分の場はできてきたように思うのだが、女性と恋愛関係になることだけはできない。友人なら OK だが、深い付き合いはしたくない。俺のジェンダーの病は、本当に深刻なものだ。しかし、それもだいぶ割り切れるようになってきた。結婚しても、恋愛しても不幸な人は大勢いる。俺のように女性と付き合うことがなくても、他のやさしさに

包まれているやつのほうがはるかに自由で幸せだ。

俺は対人援助学会で、少年の頃に異性から凌辱されると、それが一生消えないトラウマになり得ること、そして、女の子が男に凌辱されるのは重大な問題としてケアして貰えるけれど、逆の場合は、軽いことのように片付けられてしまうのだということ、それを訴えたかった。

俺は、男性ジェンダーを女性に要求してこられることに激しい反発を感じる性格になってしまったため、もはや女性とは軽い関係しか結べなくなってしまったのだ。男性ジェンダーを求めずに男と付き合う女なんて、世の中に存在するのだろうか。フェミニストであっても、男に守ってもらいたい願望を持っている人のほうが多いのではないか。

俺は女性の前だと男になれない。自分のことを「俺」とは言えない。男っぽいことができない。男の子の前で男っぽいことをするのは平気になってきたが、女性だと様々なトラウマが一気に想起されて、それがブレーキになってしまう。

俺は女に男という目で見られるのが嫌なのだ。それは、俺が少年の頃に、男であるがゆえに様々なつらいことを強制され、さらに、その強制してきた相手が女性であるケースが多かったこと、そして、男が男のジェンダーを強制されて苦しんでいるのを、まだまだ気づかずに、女性のほうが一方的にジェンダーで苦しんでいると思い込んでいる人が多いことが原因である。

女性に凌辱されたトラウマを引きずっている男なんて、マイノリティなのだろう。毎年発表し続けたおかげで、対人援助学会で徐々に賛同してくれる人はでてきた。しかし、まだまだ分からない人の方が多い現実を目の当たりにすると、自分の孤独を思い知ることがたびたびである。

理解してもらえないままに、俺はもうすぐ５２歳。人生の秋になってしまった。女性から受けた凌辱をどう消化するのか。これは俺の人生の一生の宿題な
のだろう。1 日 1 日、自分の宿題と闘いながらも、楽しい感動を沢山積み重ねて、これからの人生を送ることができたらと思う。

６.『龍三と七人の子分たち』（北野武監督・2015）

今回のオススメ映画はこれである。何よりも藤竜也の主演というのが嬉しい。藤竜也は若い頃は見事なマッチョで、日本の役者のなかでも、その体躯のよさはナンバーワンだった。しかし、その彼も 74 歳となって、この映画でも少しだけ裸の場面があるのだが、さすがにもう昔ほどのムキムキではない。だんだんと枯れてきている。

俺も、５０代になって、少しずつ枯れていかなくてはならない。そんなことを考えさせてくれた。近藤正臣など、元マッチョのおじいちゃん俳優大挙出演の映画である。

マッチョの老後？？？？？（笑）。この年になって、マッチョだと痛々しいけど、それも男のこだわりで素敵だと俺は思っている。俺も、できる限りマッチョボディを保って、70 になっても、若い男の子と海水浴に行ける男でいたい、男でイタイ、男で痛い！

援助職のリカバリー

《16》

～「居場所」を体感し、自分の寂しさと向き合う～

袴田　洋子

私の誕生日は、7月です。なので、今年、48 歳になりました。信じられません。ちょっと、マズ過ぎる感じがします。文字でみると、48 歳とは、すごい大人で、大人どころか、人生折り返し地点も過ぎて、子どもがいるならば、ちゃんと親業をやっていて、子どもも高校生や大学生など、そこそこ、大きくなっていて、もうほんとに「ちゃんとした」大人な感じのする年齢だと思います。が、まったくそうなっていない自分です。で、このままでは、ヤバイ、と思うわけです。今更、親業はできないので、「もっと、人として○○でなければ」という追い込み自動思考が始まるのですが、そうすると、心身が疲弊していきます。そうして、やっと自分がどんなものに囚われているのか、気づいていきます。実は、その気づきをもとに、今年、2015 年は、人生がずいぶん大きく変わった、と感じる年になりました。

《地獄の院生生活はじまる》

穴のあいたバケツのような、大きな「承認欲求」を抱えて、独立ケアマネ事務所を閉じることもできずに、半ば、心折れた状態で、2013 年の春、私は、大学院に進学しました。大学院と言っても、研究のための院ではなく、現場実践者が、自分の実践力を高めるための専門職大学院です。所属したゼミも、「振り返り・内省」を大切にしている大変に優しい誠実な先生（お医者さんでもあります）で、「援助者としての成熟するための修行」のような学生生活が始まりました。

授業は、主に、木曜、金曜の夜、18 時 30 分から、文京の茗荷谷にあるキャンパスで、21 時 40 分まで、土曜は日中に授業があります。同期生は約 40 人。院生たちは、日本全国から集まっていて、私が通学していた頃は、ソーシャルワーク実践の現場にいる人たちが、より良い実践者になるためのソ

ーシャルワークコースと、施設経営者や管理者がより良い管理者になるためのマネジメントコースがありました（来年度から、これらのコースは統合されるそうです)。

《大金払ったから、やめられない！》

働きながら学ぶというのは、想像以上に大変でした。17 時 30 分に仕事を終えて、速攻で駅に向かい、電車に飛び乗り、講義に滑り込み、家に帰ってくるのは、23 時前。それから洗濯して、風呂に入り、あれこれしていると、寝るのは１時頃。６月を過ぎると、第一陣のレポート課題の提出が始まり、日々、レポートに追われる、というプレッシャーが追加されました。なぜ、こんなことを始めてしまったのかと、本当に後悔をしました。いっそのこと、辞めてしまおうかと何度も思いましたが、他の同期生の、「本当に辞めようかと思った。でも１年目、100 万もの金を払ったのでやめられない」という思いを聞いて、ああ、皆、同じなのだ、自分だけじゃなかった、とよくわからない勇気のもと、「続けよう！」と思うことができました。そうして、だんだんと、ぼろぼろな院生生活に慣れていき、同期生や先輩たちとたくさんの飲み会をしながら、これが、「居場所」というものなのかな、と考えるようになりました。

《「変人」が集まる専門職大学院》

大学院の一部の講師たちは、「こんな大変なことにチャレンジしてくるあなた方は、変人」と（笑いながら）言います。仕事をしながら、「自分の実践は、これでよかったのか、もっとどうすればよいのか」と内省・振り返りを求められ続ける場は、本当に修行です。そんな場に、決して安くはない授業料を払い、わざわざ来るのは、確かに「変人」かもしれません。が、それほどまでにして、「今、自分がやっている実践をもっと良いものにしたい。専門職としての成長を目指したい」という思いの人たちと出会える場は、そう多くはないかもしれません。特に、私は、大学教育は、看護学部というある意味、特殊な教育機関で学んだこともあり、「ゼミ」というものを経験したことがありませんでした。そうして、この「ゼミ」で、私は大きな影響を受けることになります。

ゼミの指導教官は、その年に初めて、その大学にやってきた鶴岡浩樹先生という人で、栃木で在宅医療をやっているお医者さんです。実は、社会福祉実践について学ぶ大学院に来たのだから、ソーシャルワークが専門領域の「福祉の指導教官のゼミ」を選ぼうかと悩みましたが、「尊厳死」の実現を目指すことをテーマにしたいと考えていた私は、地域で在宅医療の実践家である鶴岡先生のゼミを選びました。そして、鶴岡ゼミを選んだ初代ゼミ生は、40 代ー60 代、私を含めて全員女性、保険医協会に勤める社会福祉士、訪問看護師、老健の看護部長、グループホームのワーカーという面々。初回のゼミは、やや緊張気味に取り組みた

いテーマについて話しをし、その後は、それぞれの実践研究テーマを題材に、毎回、熱い議論が繰り広げられました。

《「居場所」があるということ》

ゼミは、各自、自分のテーマを題材に、指導教員やゼミ生と議論を行うのですが、「議論する場」というのが大前提ですから、かなりツッコミ合う場面もあります。言い過ぎると、本人に不快な思いをさせてしまうし、言わなさ過ぎると、実りある時間にならない可能性もあります。そして、テーマの内容そのものよりも、その「言い方」などに眉間にしわがよることもあります。コミュニケーションが上手くない、という自信がある私は、感情的に発言する場面が多々ありましたが、鶴岡先生やゼミ仲間は、そんな場面でも私を排除することなく、常に同期の仲間として受け入れてくれました。そんな体験を繰り返す中で、ダメな自分でも居ることを許してもらえる「居場所」という言葉の持つ感覚を体感していったように思います。それは、安心感や幸福感を得られたような感覚です。

《三大欲求：食欲、性欲、群れる！》

先日、大学院で個人スーパービジョンをお願いしている矢部正治先生から「哺乳類の三大欲求。食欲、性欲、群れる」という話しを聞きました。この、「群れる」という感覚は、おそらく「居場所」に繋がるのだろうと個人的には思っています。大学院に進学して、多くの「変人」の仲間と知り合い、「援助とは何だ？」「専門職とは何だ？」と自問自答しながら、実践を振り返る仲間がいる専門職大学院は、日々、クライアントの痛みに向き合い、消耗？するエネルギーを援助職が充填する「居場所」なのだと思います。しかしながら、援助職であっても、そうでなくても、「居場所」や「群れていたい」という意識できる人は、どのくらいいるのかと考えると、そう多くないのかもしれません。

そういうわけで、「居場所」を得られたと思い、ぼろぼろだけど幸せな院生生活を送っていたはずですが、当然、院生生活は、卒業と同時に終わりが来ます。「卒業」によって生じる「喪失」と、自身が取り組んだ看取りの実践研究によって生じた「喪失」とで、私は、想定外の「しくじり人生」を歩むことになります。

周旋家日記 16「キャリア形成について考える⑤ーワークショップの 3 つのかたちー」

乾明紀

１．工学的アプローチと羅生門アプローチ

前回のマガジンでは、学習者に「深い学習」を促すために、また教員をアクティブにするために「逆向き設計」（Wiggins & McTighe、1998）[1]が有効であることを述べた。逆向き設計とは、名前のとおり、まず教育プログラムのゴール（到達目標）を明確にし、そこから逆算してプログラム内容を考える方法である。

このような教育手法を実践するためには、感覚やセンスに頼るだけでなく、教育目標を分解したりプロセスを明確にしたりする工学的思考が重要となる。

授業の開発や運営は、工学的に進めるのか感覚やセンス（つまり即興性）を重視して進めるかでプロセスが大きく異なる。この点について、アトキン（Atkin,J.M.）は「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」[2]という視点で整理した。アトキンは、1974 年に文部省と経済協力開発機構（OECD）の教育研究革新センター（CERI）との共催による「カリキュラム開発に関する国際セミナー」において、カリキュラム・授業・評価にかかる典型的なモデルとして２つのアプローチを提案した（図１参照）[3]。

図１に示したように、工学的アプローチでは、ニーズアセスメントの後に、一般的目標の設定→特殊（具体的な）目標の設定→行動目標の設定→教材開発→教授・学習活動→行動目標に照らした評価の順に教育活動が進む。一方、羅生門的アプローチは、一般的目標の設定→創造的教授・学習活動→記述→一般目標に照らした評価の順に進む。

一般的手続き	
工学的アプローチ	**羅生門的アプローチ**
一般的目標（general objective） ↓ 特殊目標（specific objective） ↓ 行動的目標（behavioral objectives） ↓ 教材（teaching materials） ↓ 教授・学習過程（teaching-learning processes） ↓ 行動目標に照らした評価（evaluation based on behavioral objectives）	一般的目標（general objective） ↓ 創造的教授･学習活動（creative teaching-learning activities） ↓ 記述（description） ↓ 一般的目標に照らした判断評価（judgement against general objectives）

[1]Wiggins & McTighe（1998），西岡加名恵訳（2012）『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法 UNDERSTNDING by DESIGN』日本標準,

[2]羅生門的アプローチの名前の由来は、黒澤明が芥川龍之介の小説「藪の中」をモチーフに映画化した「羅生門」と重なることから命名された。

[3]田中耕治編（2005）『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房

評価と研究	
工学的アプローチ 目標に準拠した評価（goal-reference valuation） ↓ 一般的な評価枠組み（general schema） ↓ 心理測定的テスト（psychometric te-stes ↓ 標本抽出（sampling method）	**羅生門的アプローチ** 目標にとらわれない評価 ↓ さまざまな視点 ↓ 常識的記述（common sense description） ↓ 事例法（case method）
（目標、教材、教授・学習過程）	
工学的アプローチ ・目標：「行動的目標を」、「特殊的であれ」 ・教材：教材のプールからサンプルし、計画的に配置せよ。 ・教授学習過程：既定のコースをたどる（predecided） ・強調点：教材の精選、配列（design of teaching materia-ls）	羅生門的アプローチ ・目標：「非行動的目標を」、「一般的であれ」 ・教材：教授学習過程の中で教材の価値を発見せよ ・教授学習過程：即興を重視する（impromptu） 強調点：教員養成（teacher training, inservice training）

図１　工学的アプローチと羅生門的アプローチ

このように、工学的アプローチは、教材の事前準備が重視され、羅生門アプローチでは、創造的な授業（＝運営できる教員の養成）が重視される。

この２つのアプローチは決して対立するものではなく、必要に応じて使い分けることが重要なのであるが、教育実践者のおかれた立場などによりしばしば対立することがある。例えば、小野沢（2005）[4]は、工学的アプローチには次の 4 点の問題があると指摘する。①学習プロセスが定式化されることにより学習者の主体的、創造的追究活動の限界性、②教員の教授内容と子供の学習内容の間に生じる差異と成果の限界性、③学習の副次的効果の発生の抑制、④教員の視点・観点に限定される評価の限界性である。小野沢はこの 4 つに問題点を根拠に「総合の学習の時間」には、工学的アプローチではなく羅生門アプローチが相応しいと指摘する。

一方、佐藤（2007）[5]は、羅生門アプローチの有効性を認めながらも「教員の人格や教授・学習過程における即興性というものは、伝えることはできても、教えることはできない」ことから、大学の FD 活動を推進するためには「工学的アプローチ」が相応しいと指摘する。

このように２つのアプローチには一長一短がある。繰り返しになるが、必要に応じて使い分けることが重要なのである。

２．ワークショップの３類型

では、この２つのアプローチはどのよう

[4]小野沢美明子（2005）「総合的な学習の時間」の「工学的アプローチ」批判：「羅生門的アプローチ」を支える評価観転換の必要性,教育學雑誌（40), 33-47

[5] 佐藤浩章「工学的アプローチと羅生門的アプローチ」，ファカルティー・ディベロッパー日記,2007 年 04 月 18 日 http://blog.livedoor.jp/sandy_sandy/archives/51118372.html　2015 年 11 月 30 日閲覧

に使い分ければいいのであろうか。この点について、2015 年 10 月 30 日の対人援助学会で筆者が企画したワークショップにおける荒木寿友先生の「ワークショップの 3 類型」[6]は大いにヒントになったので紹介させていただく（今後、発表集も作成予定）。

ワークショップとは、講義などの一方的な知識伝達スタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり創り出したりする学びと創造のスタイル（中野,2001）[7]であるが、「総合の学習の時間」や一般的に言われている「アクティブラーニング型の授業」などで用いられる学習スタイルである。PBL（Project Based Learning）も広義のワークショップと捉えることもできるだろう。

さて、このワークショップについて荒木は、次の３つに類型化した。

①ワークショップ 1.0

到達目標が予め決定しており、その到達点に参加者が至るべく、ファシリテーターが具体的なワークショップスケジュールを準備できるもの。最初に何をやって、次に何をするか、構造化されているワークショップ。明示的なカリキュラム。伝えたいことと、結果として参加者が学ぶことの相違が比較的少ない。

②ワークショップ 2.0

一般的な目標は決まっているものの、結果として具体的に何が生じてくるかは予想出来にくく、参加者がその場で「答え」となるものを紡ぎ出していくワークショップ。全体的の流れは明示的であるが、結果として現れてくる成果はワークショップが始まった段階ではわからない。

③ワークショップ 3.0

参加者の興味や関心に応じて、その場で何をするか決定し（文脈に応じた目標設定）、比較的長時間かけて目標を図ろうとするもの。OST[8]の場合、問いの真正性（りあるさ）があり、当事者としての参加者が課題可決に向かう。ファシリテーター側の予想以外の学びが生じる場合が多い（隠れたカリキュラム）。参加者とファシリテーター双方に、即興性と創造性が重要視され、求められる。

このようにワークショップにおいても構造化された手法（ワークショップ 1.0）から参加者の主体性を頼りに実施する手法（ワークショップ 3.0）まで、目的に応じて開発されている。

学生にワークショップ型の授業を提供するためには、このような類型を参考に目的や目標に応じて配置する必要があるだろう。ワークショップ経験の乏しい学生や十分な知識・スキルのない学生がワークショップ 2.0 や 3.0 に参加しても教員が思うほどアクティブに思考したり活動したりしないケー

---

[6] 荒木寿友（2015）「形式で分けるワークショップの３類型さまざまな場でのワークショップを可能とするために」,対人援助学会第 7 回年次大会企画ワークショップ「『緩やかな所属による組織活動』における人材支援について」配布資料

[7] 中野民夫（2001）『ワークショップ―新しい学びと創造の場―』岩波書店

[8] 1985 年ハリソン・オーウェン（Harrison Owen）によって提唱された「自発的な自己選択」に委ねられたワークショップ手法。参加者自らが問題解決したいテーマを提案して仲間を募り、対話などを行いながら、プロジェクトを創出していく（参考：株式会社ヒューマンバリューHP http://www.humanvalue.co.jp/report/positiveapproach/03.html　2015 年 11 月 30 日閲覧）

スがある[9]。また、経験が豊富だったり創造性を発揮したいと思っていたりする学生に構造化されすぎたワークショップは退屈極まりないものになるだろう。

ワークショップを提供する際は、学生のレディネス（準備性）の把握は非常に重要となる（もちろん教員の授業準備や準備性、即興性も）。このことからも“ワークショップ＝アクティブラーニング”という認識は改めていく必要がある。

３．最後に

中等国語教育の実践・研究者として有名な大村はま[10]は、ワークショップの実施や運営、アクティブラーナーの養成にもヒントになる次のような指摘をしている。

「話し合いは『悪い癖』がついてしまいますと、まず直すことは不可能です。話し合いに対する興味を失い、その重要性を軽蔑するようになってしまいます。話し合いなんて時間つぶしでつまらない。みんな聞いてもきいても黙っていて、何も言わない人がいるとか、愉しく話せないとか、話し合っても、結局は、自分で考えたのと同じだ。話し合いがなくても、結局自分自分でやればいいんだ、とそういうふうになってしまいます。」（大村,2005）[11]

つまり、豊かな話し合いを可能とする『良い癖』が作られたり、その癖が発揮されたりする場を作らないと、非アクティブな価値観を生産してしまうのである[12]。学生をいきなりワークショップ 2.0 スタイルに放り込むのではなく、学生が 1.0 と 2.0 を選択できるようにするのが良いのではないだろうか。どの大学であれ学生のコミュニケーション能力は様々である。“アクティブラーニング＝ワークショップ 2.0 に放り込む”という認識を改め、学生のレディネスに応じたワークショップを選択できるように提供することが、学生をアクティブラーナーにするためには必要ではないだろうか。(つづく)

---

9 フリーライダーとなる学生の存在のほか、学生が何を学んでいるかわからないようなワークショップを開催すれば「這い回る経験主義」との批判を受けることになるだろう。

10鳴門教育大学附属図書館 HP 参照
http://www.naruto-u.ac.jp/library/shiryo/002001.html
2015 年 11 月 30 日閲覧

11 大村はま（2005）『教室に魅力を』国土社（新装版）

12 ここで紹介した大村はまの指摘とネガティブな価値観の学習の問題点については、中原淳が MANBA-LAB ブログで指摘している。
http://www.nakahara-lab.net/2013/06/post_2024.html
2015 年 11 月 30 日閲覧

トランスジェンダーをいきる（１５）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

私と三療とトランスジェンダー

１　はじめに

「三療」とは、あんまマッサージ指圧・鍼・灸の総称で、視覚に障碍のある私達の職業選択として、古い歴史を持っている。

高校卒業後、3 年の就業年限を経て、免許を取得し、将来、病院や治療院に勤務したり、自宅で治療院を開業したりして生計を立てていくというのが、視覚に障碍のある人の社会的ステータスとして自明化されている名残は、現在でも残っている。

私も例外なく、高校卒業後、三療の免許取得のために、盲学校の専攻科理療科に進学した。その勉学を進めていく中で、特に心身の性別の不一致によるさまざまな違和感と直面し、どのように対処したかについて記述する。

また、治療院で女性として働くということがどのような意味を持っていたか、そして現在、男性として就職し、在宅マッサージという私にとっては新しい仕事に着くことになったことで、私と三療とトランスジェンダーとが、対人援助の場面で、今後どのようなかかわりを持つのかについて記述する。

２　あんまマッサージ指圧・鍼・灸免許取得の勉学におけるさまざまな場面での性別違和感

①　基礎医学・臨床医学・東洋医学の学びにおける自己の身体の性別違和感からの逃走

専攻科理療科に進学して、基礎医学・臨床医学・東洋医学を学んでいく中で、「男女の性別の

差異」は付き物であった。基礎医学では、例えば解剖学や生理学のように、人間の体の骨格や筋肉の付き方・運動能力などの男女の差異を生態観察や模型によって触察することを通じて、自己の体内にある細い骨格を否定し、太い骨格を自己のものであるべきだというように、自己の身体を「間違った身体」として認識した。また、臨床医学では、統計的に男女によってかかりやすい疾患を逐次反転させ、自己の身体は男性にかかりやすい脳卒中や高血圧症などであって、女性にかかりやすい骨そしょう症や貧血などにはかからない、というように自己説得していた。

東洋医学では、総合的に患者を診るというスタンスが基本である。にも関わらず、男女の性別の差異は否めないということに、いやというほど気づかされた。

東洋医学の中でも特に注目したのが「陰陽論」である。「陰陽論」は、古代中国に起源を持つ自然哲学思想である。最初は、カオスのような宇宙万物であると考え、その混沌とした中から明るい光に満ちた陽気が上昇して天となり、重くにごった陰気が下降して地となった。この陰と陽の2つの気によって、宇宙万物のさまざまな事象を理解しようとしたのが陰陽説であった。

陰と陽は、もともと天候と関係する言葉で、陰は曇りや日陰・陽は日差しや日向をさしていたが、BC4世紀ごろ、すべての事物において、消極的なものを陰、積極的なものを陽とみなす「陰陽二元論」哲学原理に体系化された。そこでは、陰陽は、共に対立する性質を現しており、受動的な性質を陰（女・弱・静・地・月・冬・裏など)、能動的な性質を陽（男・強・動・天・日・夏・表など）に分類した（汪, 2011 pp50-51)。

このような東洋医学の哲学思想を受けて、自己の身体を、男のように陽の性質を持ち、女のような陰の性質は持たない、というように、陰陽論を自己の都合のよいように利用して、男女を二分させ、自己を男性の部類に帰属させていた。

このようにして、さまざまな医学の学びに置いて、随時自己の性別に違和感を覚えながらも、自己を男性の生き物として帰属させることによって、「性別違和感からの逃走」を図りながら勉学に励んでいた。

②マッサージ実技は、男女の体力の差異と体重差が表面化した「修羅場」

男女の体力の差異がもっとも表面化した場が、マッサージ実技であった。女性の身体であるということで、マッサージ実技では劣位の位置に立たされ、自己の身体がマッサージの術者（マッサージをする側)・非術者（マッサージを受ける側）の別を問わず拒絶していた。加えて当時は、同じクラスメートの女子に比して痩せ型で筋肉や筋力がなかったため、女子の中でも劣位の座は変化しなかった。そのことが、技術の向上を阻み、比較的技術の優れたクラスメートの中で、私の技術だけは「下手のピカ 1」という烙印を押されるくらい、他のクラスメートとの技術の差は歴然としていた。そのような状況の中で、もともと体を動かすことが好きだった私は、スポーツを通じて体力を身に付け、それに伴って技術も向上してきたものの、マッサージ実技への拒絶の仕方に変化はなかった。

③鍼実技の性質から、自己の男性性を見出し、「武器」として技術向上へ

マッサージ実技が修羅場であったのに対し、鍼灸の実技はオアシスの場、つまり、鍼灸の実技

は、男女の体力の差異がほとんど認められないという利点によって、逆にクラスの中でもトップの技術を維持していた。中でも、マッサージ施術では解消できない凝りや炎症性のある痛みへの鍼施術の即効性は、即効性＝男性性、すなわち、もんでさすって解消できなければ鍼を刺して解消する、炎症性の痛みには、下手に長くもむより鍼の弱刺激で短時間の施術、というように、鍼施術の性質の中に男性性を見出した。ここでは、マッサージ施術と鍼施術を対比させ、マッサージ施術の体表に当たる面積の広さや治療に要する時間の長さ、コミュニケーションツールへのアクセスのしやすさから、女性性と位置付け、逆に鍼施術はピンポイント性の刺激による絶大な治療効果、マッサージ施術に比して体表の当たる面積が狭く、コミュニケーションツールへのアクセスの希薄さという性質から、男性性と位置づけた。その上で、男性性の高い鍼の技術を武器として向上させることで、自己の身体への性別違和感に対処した。したがって、前述したように、マッサージの技術が鍼の技術に比して向上しなかったのは、マッサージの技術全体を女性性と位置付けたことで、その女性性を嫌悪、拒絶したからに他ならない。

3　マラソンとの出会い

このようにして、さまざまな授業の場面で、絶えず性別違和感を意識させられたのだが、専攻科理療科の2年生から、盲学校の近くの老人ホームに治療奉仕に行くことになった。それは、盲学校の臨床の授業で強制的に行かされるというのではなく、専攻か理療科の生徒たちを中心に理療科研究クラブを発足し、そのメンバーで月に1度の土曜日の午後に、老人ホームに出向いてマッサージ･鍼灸を行うというボランティア的要素と、この奉仕活動を通じて、社会勉強をしたり、マッサージや鍼灸の技術を向上させるという目的でで行われていたものであった。

ちょうどそのころ、ふとしたきっかけで、私はキリスト教の教会に行くことになった。私は中学生のころから、聖書の言葉を点字で読んでいたので、聖書の言葉を聞きに行くというよりはむしろ、どのような人たちが教会に集まっているのだろうかと思いながら、境界に1歩足を踏み入れた。すると、次のような聖句が、私の胸を打った。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ１１章２８節）

（私は「疲れている人」なのだろうか。もし、私が「疲れている」としたら、いったい何に「疲れている」のだろう。もしかすると私は、専攻科理療科のさまざまな授業における性別違和感に疲れているのだろうか。そうだとすれば、私はもはや、自分では気づかないくらいにその「疲れ」を自明のこととし、その「疲れ」にどっぷり浸かっているのではないか。）そんな疑問や葛藤が頭の中を駆け巡るようになった。そしてついに、「私は一体どんな「治療家」になりたいのか」という疑問に直面した。（私が「疲れている」とすれば、少なくとも疲れている状態で治療することなどできない。では、どうやってその「疲れ」を癒し、重荷を下ろすのか。）

そんなとき、一人の男性の英語教師が、マラソンをすることを勧めてくれた。体を動かすことが好きだった私は、放課後その先生に伴走してもらい、盲学校の運動場や、盲学校の周辺道路を

走るようになった。その先生と走っている間は、授業のことも、性別違和感に翻弄されていることも忘れ、ひたすら無心になれた。体は走っているので疲れているにも関わらず、精神的には「重荷を下ろした」という感覚に、私はひたすら酔いしれるようにして、ほとんど毎日、その先生と一緒に走り続けていた。

４　女性として「働く」ということ

盲学校の専攻科理療科卒業後、今度は別の盲学校で、理療科教員養成施設の受験のために、1年間学んだ。しかし、私は理療科教員の道は選ばず、就職してあちこちの治療院に、女性として勤めた。

私が勤めた治療院は、ほとんどが男性で、治療院に勤める女性は少ない。そんな中で私は、治療院で働く男たちを観察していて、次のようなことに気づかされた。

①「周辺化された男たち」の存在

心身に障碍がないこと、外見へのコンプレックスを感じていないこと、女性を性愛とする異性愛規範に則った性的嗜好を持っていること、その上で、所帯をもち、かつ、稼ぎ手になっていることなど、何らかの基準を共通に満たしていることを条件に、男社会が構成されているように思われている。しかし、現実の男たちは、これらの基準をすべて満たしているとは限らない。そこで、一般的とされている男社会の基準を満たしていないと思われている男たちを総称して、「周辺化された男たち」と意味づけた。その上で、どのようにして、男たちの中から、「周辺化された男たち」が存在しているのかについて記述する。

②二重の「周辺化」

これは、心身に障碍のある男同士のホモソーシャルな関係性において、最も重い障碍がある男たちが更に「周辺化された状態」をいう。したがって彼等は、一般的な男性社会から周辺化された上に、自分より軽度の障碍のある男たちからも周辺化されているという「二重に周辺化された状態」におかれている。逆の言い方をすれば、軽度の障碍のある男たちが、自分たちより重度の障碍のある男たちを周辺化することで、より一般の男社会のあり方に近づこうとする現象、つまり、他者を周辺化することで、自分の優位性を堅持したいという心性がそこにある。その代表例が「ジェンダー化された治療院システム」である。

③ジェンダー化された治療院システム

1）ジェンダー化された治療院システムの概要

一般的に、「男は女より体力があり、力も強いが、女は身体も小さいし、体力も力もない」という、男女の生物学的構造の相違を根拠としたジェンダー意識の下、治療院でもその意識を自明のこととしている。だから、強いマッサージを希望する場合は男・それほど強いマッサージを希望しない場合は女、というように、来院者が希望するマッサージの強度と術者の性別が記号化されて割り当てられることもしばしばである。このようなジェンダー意識は、治療院に従事している

術者だけではなく、事務の受付や個々の来院者も共通に内包している。もちろん、術者個人名で指名する来院者もいるが、例えば来院者で、初めから強いマッサージを希望する場合は男性・それほどの強いマッサージを希望しない場合は女性、というように、術者個人名で指名するのではなく、術者の性別で指名することも多い。

2）視覚障碍以外の障碍または病気を持つ鍼灸マッサージ師の男へのバッシング

しかし、このようなジェンダー意識に基づいた自明性は、しばしば裏切られることがある。すなわち、男であっても、視覚障碍以外の何らかの病気を有していることで、体力や力不足に悩む男たちがいるということである。

特に、視覚に障碍のある人たちが中心で経営している治療院は、交通機関の利便性を問わず、一般社会から周辺化されたコミュニティーとして認識されている。その中でも、視覚障碍のみを有する彼等と比較して、視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等が、体力や力不足による業績の低迷によって、視覚障碍のみを有する彼等からより周辺化された状態に置かれやすい。これは、視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱していること、つまり、そのような彼等とて、男の身体を有するゆえ、体力も力もあって当然、というジェンダー役割を果たしていないことを示している。そのような彼等へのバッシングは、視覚障碍のみを有する彼等だけに留まらず、来院者からの直接・間接的な方法で行われる。そこに、「男の癖に」というジェンダーバイアスが加わると、彼等の男性性が疑われるほどに貶められる結果にもなる。したがってこの局面では、彼等が視覚障碍以外の障碍や病気を有していることへの配慮はなされず､視覚障碍のみを有する彼等と同等の体力や力があるものとして扱われるのである。

また、視覚以外の障碍や病気を有する彼等へのジェンダーバイアスをかけた視覚障碍のみを有する彼等の心理状態として、視覚以外の障碍や病気を有していないことへの優位性を堅持しながら、かつ、一般の男社会に近づこうとする心性が見て取れる。すなわち、視覚以外の障碍や病気を有する彼等を周辺化しなければ、自己の優位性を保証することができない、あるいは彼等を周辺化することによって、より一般的な男社会に近づくという幻想を持っているといえるだろう。

3）周辺化した彼等を鼓舞する目的で利用された自己の女性の身体

更に、彼等へのバッシングはそれだけに留まらない。

治療院に勤めていた当時の私は、マラソンやその他のスポーツを熱心に行っていたため、学生時代とは異なり、体力も力もいわゆる「男並み」にあった。だから、自己の体よりはるかに大きな男の体も平気でマッサージしていた。しかし、このことは一見よさそうに思えて、実は私よりも体力や力の無い男たちを鼓舞するために、私が他の男たちから「女性の体を利用された」のである。

つまり、男の身体を持つ視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等が、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者というだけではなく、女性の身体を持つ私の、これまたジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を引き合いにして、更に彼等を鼓舞しようとする意図が見て取れる。そこには、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者である彼等を､「男の癖に」

というジェンダーバイアスによって、いったん男性性を疑わせるようなバッシングをしておきながら、女性の身体を持つ私が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を示していることをうまく利用して、彼等を鼓舞しようとする意図が伝わってくる。

要するにここでは、視覚障碍のみを有する彼等によって、視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等を周辺化した上で、その周辺化した彼等を鼓舞する目的で、「私」が利用されたのである。もっと言うなら、周辺化した彼等を鼓舞するための材料として、女性の身体を持つ自己のジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績ではなく、「女性の身体」が、周辺化した彼等を鼓舞するための材料として利用されたのである。

5　終わりに　―　今、男性として再就職

今年、私は勇気を出してハローワークに行った。最初は、鍼灸マッサージではなく、他の職種を探していたのだが、担当者から、「整形を成り立たせるという目的で、3療の資格を生かしたら」というアドバイスで、私は男性として再び鍼灸マッサージの職種を見直し、再就職した。

現在は、在宅マッサージといって、何らかの病気や歩行困難などで、自宅でマッサージを希望する人たちの家に出向いてマッサージを行うという、私にとっては新しい仕事に着いている。今のところ、まだ始めたばかりであるが、治療院で勤めていたときのように、男女の性別を意識することなく、また、動き回るのが大好きな私にとっては、要約「適職」といえる職にありついたのではないだろうかと考えている。

まだ始めたばかりではあるが、私が気づかされているのが、「私がマッサージをしたから患者さんに喜ばれる」のではなく、個々の患者さんの中に、もともと「喜ぶ力」が存在していた、ということである。言い換えれば、私が表立って誰かを「助けた」のではなく、私の行為によって、知らず知らずの内に「助かった」と言って「喜ぶ力」が、個々の患者さんに存在していた、ということである。今後、私がマッサージを仕事としていく中で、わざわざ「対人援助」なんていわなくても、個々の患者さんの「喜ぶ力」を自然に引き出すことができればよいと考えているのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（１５）

岡崎　正明

（広島市）

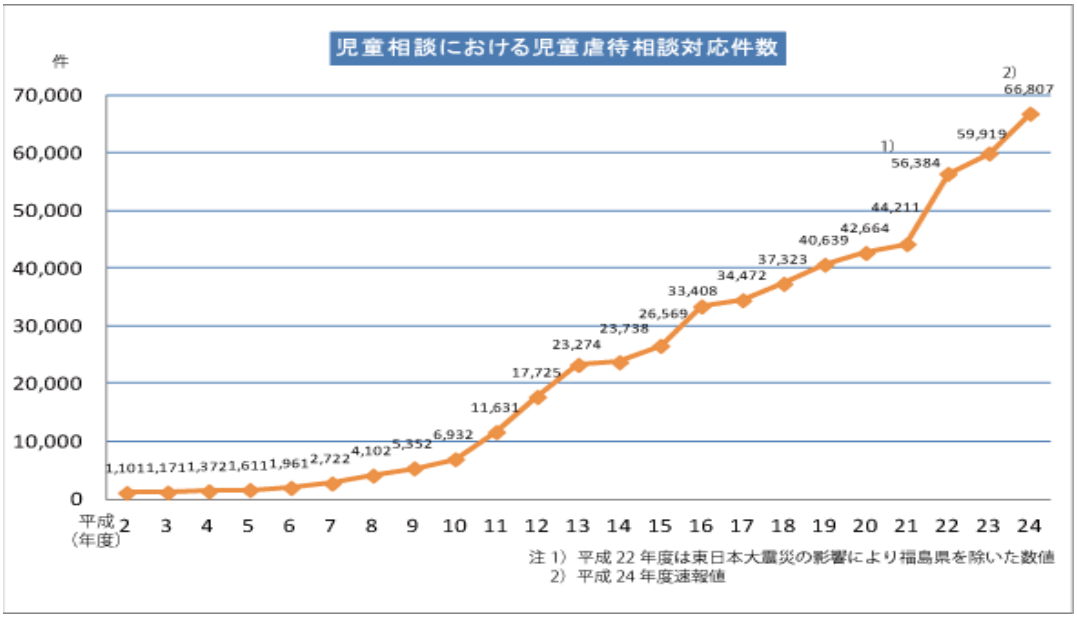
あえていわせて。「そろそろ虐待通報キャンペーン変えません？」

一時期ほどではないかもしれないが、「児童虐待」はいまだに最近の世相を表すワードとして使い古されていない。「育児放棄で餓死」などというセンセーショナルな記事がネットやテレビを駆け巡り、事件が新鮮さを失いかけた頃に「３ヵ月の赤ん坊に暴行」などという新たなニュースが飛び交う。どうもそんな印象だ。

「児童虐待相談の対応件数が過去最高を更新」

毎年のようにそんなことがいわれ、もはや驚くこともなくなった。

下記の厚労省の統計（オレンジリボン運動公式サイトより抜粋。以降のグラフもすべて同様）が示すように、この数字は２０年以上右肩上がりの状況だ（ちなみに平成２５年度は速報値７３７６５件で、やはり過去最高）。



こんな数字を見せられると、事情を知らない一般の人は暗い気持ちになるだろう。
「最近の親はどうなってんだ…」
「共働きが増えて余裕がないんじゃ？」
世間にはいろんな声がある。議論はやったらいいが「１つの事象の原因が１つ」だなんて、昔から世の中はそんなに単純ではない。

ただ注意しないといけないのが、これはあくまで“相談”の件数だということ。引っかけ問題のようで申し訳ないが、この数字が即児童虐待の件数を意味しないのだ。
近年児童虐待への社会的関心が高まったことにより、「ひょっとして…」「あの声って…」といった第３者や関係機関からの通報・相談が急激に増加した。それがこのグラフなのだ。

あくまで「相談」だから当然中には誤報もある。また、過去にも潜在的に虐待はあったが、それが近年の通報増で顕在化したに過ぎないという見方もある。
そんなわけでじつは専門家の中でも「いま児童虐待は増えているのか」というのは、意見が分かれるところらしい。「増えている」という人もいるが、それを裏付けるような信頼度の高い調査は無く、中には過去に比べて家庭内の暴力は減っているという学者もいる。

「それにしたって２０数年で５０倍以上相談が増えてるんだから、やっぱり虐待そのものが増えてるんじゃないの？」
そう思う人がいてもおかしくない。実際、核家族化や近所づきあいの減少など、家族や地域の養育力が昔と比べて弱くなっているという話はよく聞くし、ストレス社会とか、うつ病の増加とか、現代人に心のゆとりが無くなっている情報も頻繁に耳にするこの頃だ。児童虐待が増えていると言われても、なんだか納得してしまう。
私自身、児童相談所で勤務していた頃、虐待が増えているような実感を持ったのも事実だ。まあ毎日のようにそのような話に触れるわけだから、そんな感覚になるのも当然かもしれないが。

ただあえて冷静にいわせてもらえば、相談件数右肩上がりの現状は「児童虐待」という言葉の概念が変化し、過去と比べてその認定範囲（いうなればストライクゾーン）が広くなったことも大いに関係しているように思う。
昔からあった「オヤジのゲンコツ」や「厳しい躾」。
そういった現象が、今は「児童虐待」という定義で語られるようになった。つまりは虐待のストライクゾーンが広がった、ということだ。別に良い悪いじゃなく。
こういう変化というのはなにも児童虐待に限った事ではなく、「セクハラ」「発達障害」など、いろんなものに見られる。これは「昔は無かったものが、最近突然増え始めました」というよりも、「昔からそういう現象はあったけど、最近名前がつきました（もしくは名前を付ける範囲が広がりました）」という代物なのだ。

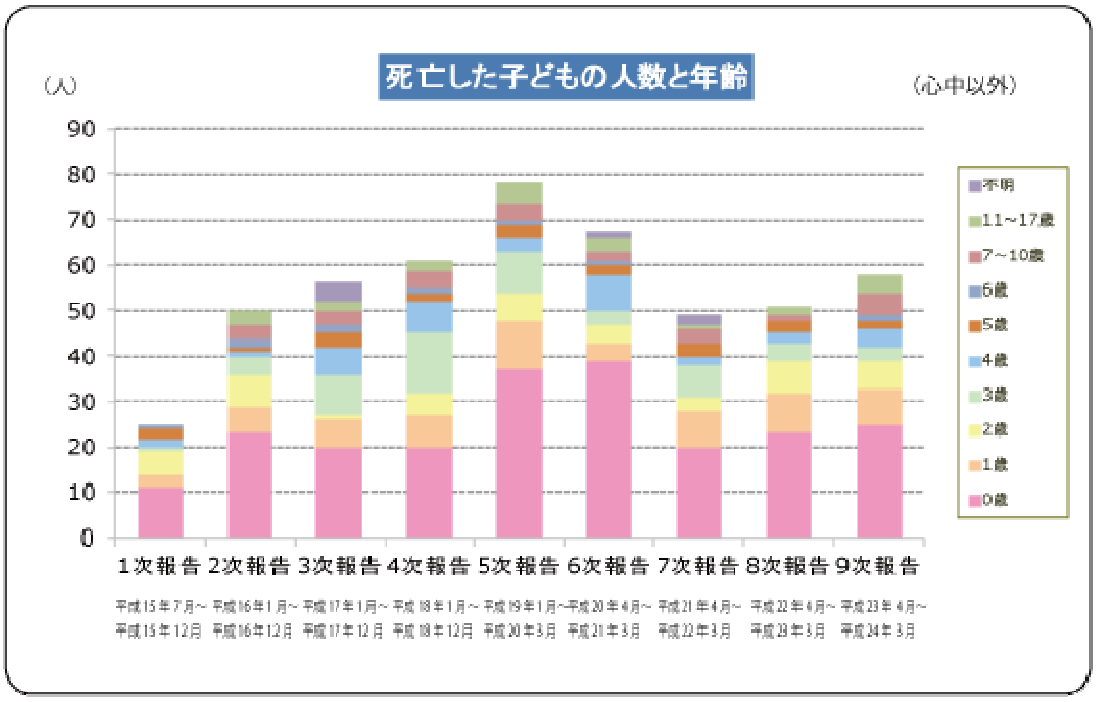
虐待自体が増えているのか、そうでもないのか。その議論はとりあえず横に置くとして、少なくともこれまで国やマスコミが進めてきた「虐待が心配されたら通報・相談を！」という広報活動（虐待通報キャンペーン）が、狙い通りの成果を出している

ことは間違いない。プライバシーの問題や守秘義務から通報を躊躇してしまうという、当初懸念されていた問題に対して、このキャンペーンは見事に効果を発揮したといえよう。

それなのにいまだにショッキングな児童虐待のニュースが減らないのはなぜだろうか。「近隣も気づかなかった」「相談の増加で児相職員が疲弊している」。そんな報道も耳にする。

この現状に、これからの虐待防止対策はどうあるべきなのか。虐待通報キャンペーンがまだまだ足りないのか。それとも他にとるべき方策があるのか。

私見を述べる前にもうひとつグラフを。児童虐待の死亡事例の統計である。途中から「年」でとっていたものが、「年度」に変わっており単純に比較できないが、こちらはほぼ横ばい。年間およそ５０～７０人の子どもが、虐待の結果命を落としているという報告になっている（ちなみに１番多い５次報告の７８人は H19 年 1 月～20 年 3 月までの 1 年 3 ヶ月間の数字）。



この数が多いか少ないかは分からないし、例えこれが「1」であっても「よかった」と納得できるものではない。限りなくゼロであってほしいと思うのは、誰もがそうだろう。

だがこれが今の日本の現実だと冷静に理解した上で、最初の右肩上がりの相談件数のグラフと比較し、私が個人的に考え至ったのは次の２点である。

- 少なくとも児童虐待が近年になって急に重度化（エスカレート）している状況とは思われない。
- 児童虐待相談の促進に一定の効果を発揮してきた「虐待通報キャンペーン」が、死亡事例の減少にはあまり効果を発揮していないと思われる。

あながち的外れな考察とは思わないが、いかがだろうか。
もしこの考えが間違っていないとすれば、マスコミがショッキングな内容の死亡事件報道に引っ張られ、「最近の親はどうなってんの？」「世も末だ…」みたいな風潮を広めて、「こんな悲しい事件をなくすため『もしや』と思ったら通報を！」とのキャンペーンばかりを推し進めることは、あまり事態の打開に役立たないか、少なくとも効果が薄いと言えるのではないだろうか。

誤解のないようにしたいが、私は「虐待通報キャンペーン」がもう必要ないとか、やっても意味がないとか、そんなことが言いたいのではけして無い。キャンペーンのおかげで社会的な関心は高まり、児童虐待は国民的な課題だという共通認識ができた。第１段階はクリアしたのだ。
問題は場面が次の段階に入っているようなのに、いまだに当初の手法一辺倒でやろうとしている（少なくともそう見える）、今の状況である。

「児童虐待防止推進月間」というのがある。厚労省が毎年標語を募集し、最優秀作品は国で作成する啓発ポスターに使われるのだが、過去の最優秀作品を見ても、その姿勢は如実に表れている。

平成２２年度　　見すごすな　幼い子どもの　SOS
平成２３年度　　守るのは　気づいたあなたの　その勇気
平成２４年度　　気づくのは　あなたと地域の　心の目
平成２５年度　　さしのべた　その手がこどもの　命綱
平成２６年度　　ためらわず　知らせてつなぐ　命の輪

ずっとこんな感じである。
お気づきだろうか。これらの標語はすべて第３者（一般の人）向けメッセージになっている。けして子育ての当事者（母親、父親、保護者など）には向けられていない。

はたしてこれでいいのだろうか。統計によれば、虐待の加害者になってしまうのは１位が母親で２位が父親である。子どもに接する時間の多い者ほど、加害者になってしまう確率が上がるのは至極当然のことだ。そして子育てをする大人であれば、誰もが対応で困ったり、叱り方で悩んだりしたことがあるはず。怒りにまかせて手を挙げてしまい、後悔するが、また同じことをしてしまう…。そんな経験がある方は、珍しくないだろう。そういう意味で私もふくめ、子どもに関わるすべての大人は、加害の立場に立つかもしれない“虐待予備軍”といえる。

どうしてこの予備軍向けのメッセージがないのか。子育てに悩んでいる親が今のポスターを見てどう思うだろう。社会が支援してくれると感じるだろうか。
躾か虐待かの自己診断で揺れている親が見て、「ちょっと相談してみようかな」「そんなに自分を責めなくていいのかな」と思える。たまにはそんなポスターがあってもいいんじゃないかと思うのは、私だけだろうか。

これまでのキャンペーンは「早期発見・早期通報」を目指すあまり、市民の疑う眼ばかりを育てる傾向がなかったろうか。もちろん小さなサインに気付き、心配な様子があれば迷わず通報する意識は大切だ。しかしそれだけでは監視社会の雰囲気にもつながりかねない。相手の立場に立った想像力や、寛容さを育てる努力も忘れてはならない。実際海外のこうした広報活動では、親の立場に立って相談を促したり、支援があることを知らせるものも多いのだ。

最近ニュースで話題になった高齢者施設での職員による入所者への虐待。
加害職員の行為は問答無用であるが、彼らだけを悪者にしても問題は解決しない。介護職の低賃金と高い離職率、利益優先の介護ビジネスのあり方、慢性的な施設不足。背景には様々な課題が絡み合う、構造的な問題があると、多くのニュース番組がいっていた。

児童虐待の問題もまったく同じ。残虐な行為をした親だけを責めれば済む話ではない。早期発見に力を入れ、虐待の認定を厳しくし、加害者の量刑を増やして、心配な子どもはドンドン施設に入れたら解決！…なわけがないのだ。
核家族化、子どもの貧困、女性の働きやすい環境整備、マタハラ、待機児童や保育士離職の問題。様々な問題が複雑に相互作用して、今のこの状況を作り出している。

当然その対応策も、様々で重層的でなければいけないはずだが、残念ながらこの国の子ども関係予算は、諸外国と比べて多いようには聞かれない。
今こそ本気で手当てしていくべきときではないだろうか。保育園の増設や保育士など子どもに関わる仕事の地位改善、子育て家庭への経済的支援など、今議論になっている課題はもちろん、予防・啓発の視点でもより自由な発想で新しい試みを考えたい。
小中高からの子育て教育やアンガーマネジメント。ペアレントトレーニングの普及。メールやＳＮＳなど、多様な形態をもった相談支援体制の充実。重篤なケースに至るのを防ぐため、赤ちゃんポストの全国的な設置も検討すべきかもしれない。児童養護施設や被虐待児への息の長い支援や治療援助なども、再生産の悲劇を生まないための予防となろう。

こうして考えてみると当然かもしれないが、児童虐待防止対策は少子化対策でもある。一部の特別な人のためのものでは決してないのだ。

最後に。
絵本作家・五味太郎著の『だれでも知っているあの有名なももたろう』。有名な童話を作者独特の視点でパロディにした秀作だ。その中にこんなくだりがある。

「それはともかく、その有名なももたろう、
おじいさんおばあさんにとてもたいせつにかわいがられて、
すくすく大きくなったということは有名です。
みんな知っています。」

「でもじつは、ももたろうがすくすく育つのを

お手伝いした人は、ほかにもたくさんいました。
近くのおねえさんやお医者さん、先生やおまわりさん、
お店のおばさんや工事のおじさん、それに子どもたち、などなど
ほんとうにたくさんいました。
あまり有名ではありませんが、ほんとうです。
おじいさんおばあさんだけでは、そうすくすく育つものでは
ありません。」

初めて読んだ時、思わず声に出して同意したのを覚えている。

時代とともに、早いこと「子育て」という言葉の概念も変化して、こんな風にストライクゾーンが広がっていけばいいなあと思う、今日この頃である。

発達相談①

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その⑫

大谷　多加志

はじめに

前号、K式についての連載をはじめて休みました。前置きとして、まずそのことを書いておこうと思います。

理由は至って単純です。書こうと思ったのですが、書けませんでした。時間的な問題もあったのですが、もっと根本的な理由として、書くことが何も浮かんできませんでした。ネタ切れかな？と思いました。

一方で、4 月から大学院に入り、アカデミックなスタイルでＫ式について何かをまとめるという機会は増えていました。アカデミックなスタイルで論文を書くときと、普段の仕事の中で感じていることをマガジンに書くときとでは、自分の中で思考回路が違う気がします。前回はどうもその辺りがうまく調整できず、詰まってしまったように思っています。その切り替えができるようになったのかどうか。ともかく今回は書きたいテーマが比較的早く決まりました。テーマは「発達相談」です。

このテーマが浮かんだ理由も明確で、ここ数ヵ月、「発達相談」をテーマとした研修会の仕事が続いたからです。ひとことに「発達相談」と言っても、その内容は多様です。ここでは主として「発達検査を用いた発達相談」を扱おうと思います。

検査を用いた発達相談における微妙な違和感

ここ数ヵ月、講習会などの機会を通して、発達検査を用いた発達相談に携わる方の検査への希望や期待、質問を数多く耳にしてきました。その中で、検査への期待と実際との“齟齬”を感じていることがあります。齟齬は言い過ぎで、ズレとか違和感、と言う方が適当なのかもしれません。そのように考えるようになった経緯は色々あるのですがここでは省略します。今回は「発達促進」「支援」の 2 つをキーワードにして考えたことを述べてみようと思います。

①発達促進

発達検査では検査全体への子どもの反応から子どもの発達状態を総合的に見立てていきます。しかし、「できなかった（不通過だった）項目」にはどうしても目が向きます。講習会では「なぜできなかったのか」「どのようにしたらできるようになるのか」という質問を、よく耳にします。発達がゆっくりな子どもに対して、それを促進する関わりや経験を提供することは、基本的に肯定的に捉えられますし、発達支援の 1 つの目標と言えると思います。

しかし、この側面だけにとらわれると、

奇妙なことが生じます。例えば支援の結果、ある課題が達成できるようになった場合、その次はどうするのか？ということです。

また、新たに別の側面の成長を促すのでしょうか？それとも今育ってきたところをもっと伸ばすことを目指すのでしょうか？では、そこも達成できたら？

「発達促進」を目標にすると、どこがゴールなのか、わからなくなります。可能なところまでとにかく発達促進した方がよい、という考えもあるのかもしれません。しかし、それは「なるべく周りに追いつく」という発想につながるものでもあります。保護者の方が「他の子に追いつく」ことを考えている場合、多くの支援者は「まだ障害を受け入れることができていない」と否定的に捉えるでしょう。このことを合わせると、時に保護者は「子どもに対して発達促進的に関わりながらも、周囲に追いつくという発想を持つことはなく、わが子なりの成長を喜び、子どもを心から褒めることができる人」であることを求められているように感じることがあります。

人から聞いて、とても印象に残っている話があります。

運動面の発達に遅れがある乳幼児期の子どもに対する訓練法として「ボイタ法」という手法があります。体幹の、コアな筋肉に外から適切な刺激を与え成長を促す方法です。このボイタ法によって、自力での歩行が可能になった子どもたちも多くいます。発達促進という点で見ればとても有効な手法と言えるでしょう。

私が聞いたのは、このボイタ法を受けた子どもについてのお話です。その子どもにもボイタ法は非常に効果があり、自力では四つ這いもできなかった状態から、歩行が可能なまでになりました。しかし、その後問題が生じました。非常に多動になったのです。自分の身の危険についても認識が薄いため転倒や転落の恐れがあったり、周囲にまだ立つことができない赤ちゃんがいてもお構いなしに走り回るため、この子にも周りの子どもにも危険なことが続き、周囲の大人は制止せざるを得ませんでした。まだまだ動きたく、なぜ止められたかもわからないという状況の中、制止されてはパニックになるという悪循環に陥りました。

断っておきますがその方が語ったのは、動けるようになって却って厄介になったとか、それならば動けない方がよかった、というような話ではありません。子どもは動けるようになると興味のあるものにどんどん近づき触れるようになります。しかし、動けない時には興味のあるものの方に必死で顔を向け、ただ見るしかありません。この時に「触れたい」「近づきたい」と思うことが、結果的に移動する力を育てるのでしょう。この子どもにはもっと「見る」時間があってもよかったのではないかというのが、この子どもの支援者の後悔です。十分に見る経験をしないまま、移動の力が先に身についてしまった結果として、「多動」と言われるような状態を呈したのではないかと考えていたのです。つまり、この時本当に必要な支援というのは、能力を先取りすることではなく「今の発達状態に見合った経験を十分に積むこと」であったと言えるのではないでしょうか。この話は「発達促進」について、「力はないよりもある方がいい」と安易に考えることへの警告を含んで

います。

②支援について

発達検査を実施した後、発達検査の結果や検査中の子どもの様子、保護者や関係者からの聴取した内容などを総合的に評価して、相談の主訴に対する助言を行うことになります。その中には、今後の具体的な支援方法も含まれます。

支援には、子ども自身が育つことを支えるボトムアップの支援と、周りが子どもに合わせる（環境調整）トップダウンの支援があります。この両方が大切であると言われていますが、ケースによって配分は異なってきます。例えば、現在の状態が本人や周囲の人を傷つける可能性があるような緊急性が高い状態への対応については、ボトムアップでじっくり成長を待つのではなく、まずは環境調整を行い、物理的にも心理的にもお互い安心できる環境を作ることを優先します。また、一般的な傾向として、対象者が年少であるほどボトムアップを目指す割合が増え、年齢が上がるほど環境調整が重視される傾向があると思います(図 1)。

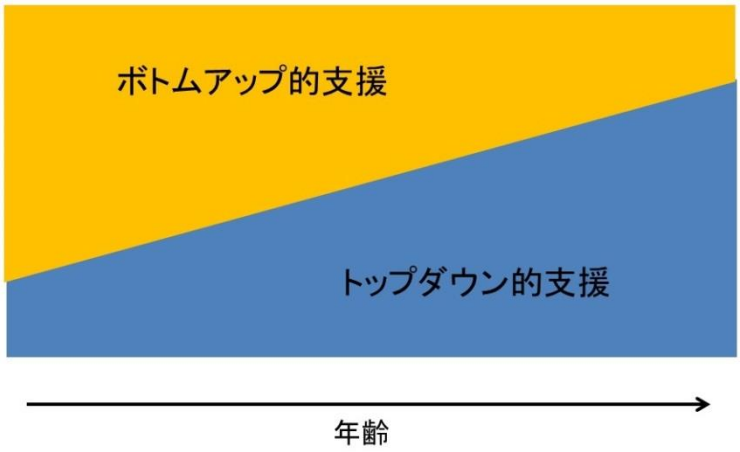


図 1. 対象者の年齢と目指す支援の方向性の関連

ただ、対象者の年齢の要因を除いた場合、どちらかというとボトムアップ的支援が優先される、または好まれる傾向があるのではないかと思っています。

環境調整を行う際に、つきもののやりとりがあります。環境調整には程度の差はあれど「周囲が子どもに合わせる」という部分があります。もちろん、環境調整が他の子どもや大人にもよい影響を及ぼすこともあり、対象児だけのために環境調整が行われるわけではありません。ここで取り上げるのは、例えば「本人のペースに合わせる」「本人のキャパに合わせる」など、どちらかというと個別的な対応についてです。これらの対応は「特別扱いはしません」の一言で、あっさり否定されていた時代もあります。このような見方はなくなったにしても、この種の対応には「適切な程度」が見

えにくいところがあります。「わがままではないか」「甘やかしていることにはならないか」「周りの教師や保護者からどう見えるか…」と言った迷いが生じてくることもあります。

例えば、書字障害を持つ子どもに代替手段として PC を用いるなどの支援方法が以前から知られていますが、導入されている例は今のところ決して多くはありません。他にも多動、衝動性が高い子どもに対して、自分の席で適切な感覚刺激を得られるよう配慮することで（例えば凸凹のついたゴムボールを握ったり、歯固めのような噛み応えのあるものを噛むなど）、体や気持ちを落ちつけられる場合があります。しかし、このような配慮も導入された例は少ないようです。

これらの手法を導入することへの抵抗を生んでいるのは、それぞれの現場の価値観や慣例、職場中での力関係など、色々なことが絡まっています。解き解すのは簡単ではないとは思います。ただ、このような価値観は、発達相談員の中にもあるはずです。何となく「ボトムアップ的支援」が好まれる背景の中に、「トップダウン的支援」の一部に対する支援者側の抵抗感が含まれてはいないだろうか？というのが、支援内容への志向や偏りに関連して気になっているところです。

バックナンバー

第 10 号　発達検査でわかること
第 11 号　通過・不通過
第 12 号　解釈・見立て・所見
第 13 号　検査手続き
第 14 号　導入
第 15 号　発達検査でわかること②
第 16 号　発達検査のもつイメージ
第 17 号　発達心理学用語講座（K 式編）
第 18 号　発達心理学用語講座(K 式編②)
第 19 号　行動の発達的意味と機能
第 20 号　K 式をめぐる私ごと
第 21 号　改訂に向けて

10 代の母という生き方 ⑬

大川 聡子

★はじめに

2013 年の日本の若年母親の出生数は，12,964 人（人口動態統計）であり，全出生数に占める出産割合は 1.26%と少数です。10 代での妊娠・出産はその後の生活に大きな「社会的リスク（経済的な不安定，配偶関係の不安定，家族との疎遠，母親としての未熟性を指している）」を抱えていく可能性が高い（定月，2009）とされています。

こうした状況にある若年母親の特徴を明らかにするために，筆者が若年母親に実態調査を行なった結果(詳細はマガジン 14～20 号に掲載),他者に母親として認められることの 困難さについて多くの意見が述べられました。その理由として，年上の母親達との関係づくりが困難なこと，周囲から児童虐待のリスク要因としてとらえられていることが挙げられています（大川，2010）。 Marshall ら（1992）は，社会的ネットワークからのソーシャルサポートがあることが，親の効力感を高めることを明らかにしています。このことから，住民が若年母親に対する理解を深める地域づくりが，若年母親への育児支援において重要であると考えました。

海外に目を向けると，アメリカでは妊娠後期から産後 6 か月間，ボランティアが若年母親の家庭に継続訪問を実施し，訪問を受けた母親は子どもに対する理解が深まり，母子相互作用が円滑に行われていることが報告されています（Barnet et al., 2002)。イギリスでは，10 代母親自身がボランティアとして地域活動に参加している事例もみられます。ボランティア参加に関しては，時間の制約や人種差別，地域に対する外部からの差別など様々な困難があるようですが，こうした地域に根差した実践が，10 代母親の社会的包摂のための個人的，社会的，政治的な障壁をなくす可能性を生み出している（Greene，2007）と意味づけられています。

このように，海外では若年母親にボランティアが関わることのメリットや，様々な困難の中で若年母親が地域活動を行う効果についても検討されています。 筆者が 2004 年からフィールドワークを行っている若年母親のサポートグループ「Z」には，地域の更生保護女性会メンバーが保育ボランティアとして参加されていました。そこでは，ボランティアをす る側－される側，という関係だけでなく，母親として同じ土俵の上に立ち，共に学びあう，ボトムアップ的な関わりがグループの中で自然に行われていました。今号および次号では，こうした場に参加するボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにし，若年母親を支える地域づくりについて考察します。

★ 研究目的

本研究では，若年母親サポートグループ「Z」に保育ボランティアとして参加している更生保護女性会メンバーへのインタビューから，住民ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにします。その内容を基に，若年母親を支える地域づくりについて考察します。

★研究方法

１．グループ「Z」の概要

グループ「Z」は若年出産した母親を対象に「子育てに関する知識や技術の取得，母性を形成すること」を目的に，保健師が主体となり 200X 年に発足しました。毎月１回２時間程度，X 市保健センターで開催されています。2008 年度の参加人数は ５～14 組でした。「Z」のスタッフは，保健師，保育士，助産師，栄養士，ボランティアなどです。ボランティア，保健師，保育士は主に育児を担当し，助産師，栄養士，保健師はプログラムを担当します。毎月のプログラムはメンバーによって決められ，運動会，クリスマス会等季節の催しを重視し，内容は多岐にわたっています。終了後にはスタッフ間でミーティングを行い，情報共有しています。

２．グループ「Z」におけるボランティアの関わり

グループ「Z」は，子どもの保育を地域住民ボランティア団体である更生保護女性会に依頼していました。更生保護女性会は，地域社会の犯罪・非行未然防止のための啓発活動を行うとともに，青少年の健全な育成を助け，犯罪をした人や非行の少年の改善更生に協力することを目的とするボランティア団体です。更生保護女性会は地域に根付いており，若年母親と生活圏域を同じにすることから接点も多いです。母親とボランティアは，調理実習開始時に子どもを預かる時と，終了後母親に子どもを受け渡す時に関わりを持っています。ボランティアは，グループ「Z」開始当初から 2009 年３月まで毎月 ３～５名が参加

し，子どもの保育を担当していました。

３．データ収集方法

2008 年１月に半構造的質問紙を用いてグループインタビューを行いました。対象者の選定は，当月ボランティアに参加していた３名に依頼し，了解の得られた３名全員を対象者と しました。インタビュー時間は約 60 分でした。インタビューの内容は，対象者の年齢，子育て経験の有無，育児支援の経験（年数・内容），グループ 「Z」のボランティアを始めた経緯，関わり始めた時期，グループ「Z」参加当初の母親・子どもの印象，最近の母親・子どもの印象，グループ「Z」の子ども達に関わる上で気をつけていること，10 代で出産した母親に対して必要な支援等です。グループインタビュー時は，すべての項目に対し全員が十分発言できるよう配慮しました。

４．分析方法

分析方法は，質的記述的研究としました。録音した内容を基に逐語録を作成し，逐語録の内容をインタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し，コード化しました。分類したものを徐々に抽象度を上げながら，カテゴリー別に類型化しました。本研究の質的データの内容とカテゴリーの整合性については，第３者である社会学，心理学，看護学分野の研究者から評価を受け，修正を行いました。

５．倫理的配慮

倫理的配慮として，研究への参加は自由意思に基づくものであり，参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明しました。面接の内容は，調査協力者の許可が得られた場合に録音し，個人名や地域が特定できないよう配慮しました。面接調査の実施時間，実施場所については，対象者の住居近隣とし，生活への支障がないよう配慮しました。本調査は，大阪府立大学看護学部研究倫理委員会において承認を得ました。

★結果

インタビュー対象者の年齢は 50 代，60 代，70 代 それぞれ１名ずつでした。対象者は全員出産経験があり，子どもの数は２～４人，第１子出産年齢は 26～27 歳でした。グループ「Z」での保育ボランティア経験年数は３～４年間であり，他の５名のメンバーと交代で毎月参加されていました。「Z」以外での育児支援の経験がある人も２名いました。インタビューデータを基に，大カテゴリーとして１．グループ参加当初の若年母親に対する認識，２．関わりが深まってからの若年母親に対する認識，３．若年母親に関わることの難しさ，４．居心地のいい場づくりのための支援，５．関係を構築する，の５項目が抽出されました。分析した結果をカテゴリー別に記します。以下， 大カテゴリーは数字表記，カテゴリ

ーを【　】，サブカテゴリーを《　》，コードを〈　〉で表します。

１．グループ参加当初の若年母親に対する認識

（１）　《関わるきっかけ》

①　〈若年母親の保育ボランティアは更生保護の務め〉

グループを主宰しているＸ市保健センター保健師は，当初保育ボランティアを民生委員に依頼しました。民生委員と更生保護女性会を兼ねているメンバーが，市からの依頼について更生保護女性会の理事に相談したところ，理事であるＦさんは民生委員としてでなく，更生保護女性会の行事として位置付けるべきであると考え，ボランティアを受けることをメンバーと相談して決定したと語っていました。

最初はね，（市から）民生（委員）のほうにお話がおりてきたんですよ。ＤさんとＥさんとかが「Ｚがあるんだけど」って（理事の）Ｆさんにお話ししたら，更女（更生保護女性会）で，ひとつの行事に取り入れてしたいから言うので。みんなで決めて参加させていただいたんです。（Ｃさん）

（２）　《関わり始めの若年母親の印象》

①　〈イメージ通りの若年母親〉

インタビュー対象者の中で，「Ｚ」に最初に関わったＣさんは，若年母親がグループ開始時に音楽をかけて踊りだしたり，保健師がグループ開始の声をかけても参加するそぶりを見せないといった振る舞いを見て「やっぱり」若い母親はこんな感じなのかと思い，唖然としたと語っていました。

カセットをバーッとかけて音楽鳴らして，パーッと踊ったりね。「始めますよ」言うても何かちょっと…。「ああ，やっぱり１０代のお母さんってこんな感じなんかな」と思って，ちょっと最初は唖然としましたけど。（Ｃさん）

②　〈他の母親グループとの雰囲気の違い〉

ボランティアは，他の母親サークルでも支援を行なった経験があり，グループ「Ｚ」は他のサークルの母親と雰囲気が違うと感じていました。

（他の母親サークルに）来てるお母さんと，ちょっと違いますね。（他のサークルは）年代上やから。雰囲気がっていうのか，何かな。（Ｃさん）

やっぱり外見とか，そういうの。（Ａさん）

おとなしめ？（Ｂさん）

向こう（のサークル）はね。（Ｃさん）

２．関わりが深まってからの若年母親に対する認識

（１）　《関わりが深まってからの若年母親の印象》

①　〈メンバーが変わり落ち着いた〉

参加当初はメンバーの振る舞いに唖然としていたボランティアも，最近は落ち着いた感じの母親が多くなったと語っています。子どもの就園や本人の希望によりグループを辞めるなどして年々メンバーは入れ替わるため，開始当初と現在のメンバーの印象は異なると全員が語っていました。

この頃，みんな落ち着いたお母さんが多いからね。全然，もう最初とは（違う）。（Ｃさん）

②　〈母親の行動に慣れさせられた〉

Ｂさんは，「Ｚ」に参加するメンバーの顔ぶれが変わっただけでなく，何回か若年母親と接した上で，自身の彼女たちに対する認識が変化しているととらえていました。Ｂさんは，自身のこうした変化を「慣れさせられた」と表現していました。

もう（母親たちに）慣れさせられたというか。こちらのほうがね。だんだん慣れたというか。向こう（母親たち）がちょっとおとなしなったというか。そこは定かじゃないですけどね。（Ｂさん）

（２）　《若年母親流の育児を認める》

①　〈若くても母親として行動している〉

ボランティアは，他のサークルとの雰囲気の違いは感じつつも，それは年齢が若いからであり，母親としての振る舞いや育児は一生懸命にやっているだろうと感じていました。

（グループ「Ｚ」は）年がそんだけ若いいうだけで，ちゃんとお母さんはしてはるん違うかなと思いますけどもね。（Ａさん）

あの子らはあの子らなりに，一生懸命（子どもを）みてるんやろなと思いますね。（Ｂさん）

②　〈子どもの行動を母親に転嫁しない〉

Ｃさんは，子ども達が多少乱暴に振る舞うことについても，年齢相応の行動であり母親が何歳であろうと関係ないととらえていました。

友達にポーンと積み木投げたりすんのは，どこの子もするでしょ？遊んでる間にね。どこの子でも小ちゃい時は，そんなんは結構ケンカみたいな感じですんのは何回か見ましたけど。それは誰でも，（親が）10 代ではなくてもすることやからね。（Ｃさん）

③　〈自己流の育児を受け入れる〉

ボランティアは，若年母親に対して世代の違いを感じており，季節に合わない服装をしている時は，助言したくなることもあると言います。しかし，それも 10 代である若者の特性であり，子どもを産んで親になっても，若いうちは自分の思うようにしたいのだろうと考え，若者らしい服装を受け入れようとしていました。

（冬場に）背中見えてる子もおるしな。しゃあないわ思って。若いうちに何でもしたいんやから，子どもはもう別やねんやろな思うわ。自分のおしゃれになったら。（略）だから，今は何も言うたって。自己流で行きはるやろな思うわ。（Ｂさん）

④　〈“子ども”なのに子育てをしているのは偉い〉

インタビューの中でボランティアは，若年母親を「子どもみたい」と述べる場面もありました。ボランティアは，若年母親達の努力は評価していますが，まだ「子ども」であるととらえています。そうした認識のもと，「子ども」なのに「母親」としてちゃんとやっていることが「偉い」というように，若年母親の育児を寛容的に受け止め，受け入れようとしている様子が見られました。

（母親の）年齢考えたらね，偉いわと思う。（Ｃさん）
そう。やっぱり，みんな遊びたい。（Ａさん）
まだ，ご自分が子どもみたいな感じですもんね。（Ｂさん）

次号へ続く

引用文献

Barnet,B., et,al.：(2002) The Effect of Volunteer Home Visitation for Adolescent Mothers on Parenting and Mental Health Outcomes, A Randomized Trial, Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine, pp1216-1222.

Granovetter, S.,(1973)：The Strength of weak ties, American Journal of sociology, 1973 (78),pp1360-1380（＝野沢慎司，2006，リーディングスネットワーク論，家族・コミュニティ・社会関係資本，第 4 章，大岡栄美訳，弱い紐帯の強さ，pp123-158）

Greene,S.,(2007)：Including Young Mothers: Community-based Participation and the continuum of active citizenship, Community Development Journal,42 (2),pp167-180.

Marshall,T.H.,BottomoreT.,(1992)：Citizenship and social classes,1992（=岩崎信彦，中村健吾訳，シティズンシップと社会的階級，法律文化社，1993）

大川聡子（2010）：10 代の母親が社会化する過程において，顕在化する支援ニーズ，立命館産業社会論集， 46（2），pp67-88.

定月みゆき（2009）：若年妊娠・出産・育児への対応，母子保健情報，pp53-58.

電脳援助 Ver.13

浅田英輔

User Interface

ユーザーインターフェイスという言葉を耳にしたことがあるだろうか。

・User ユーザー　＝　使う人
・Interface インターフェイス　　＝　最初に面するところ

　略してUIと書かれることも多い。 いろいろな仕組み、システム、機能、それらにアクセスする部分がUIだ。

　例えば水道の蛇口。昔からの十字の蛇口があるだろう。水道の機能は「水が出る」こと。これをどう出すかがUIの役目といえる。最近新しく付けられるものはレバー式だったり、公共の場では自動で水が出たり止まったりするものがある。これもUIの1つといえる。

　十字であっても回せば水が出るという機能では同じものである。ただ何度も回さなければならないものとレバーをちょいとあげるだけで水が出るというものはUIの違いからくるといえる。混合栓は程よい温度の水が使えるという画期的なUIだといえる。

　（写真の蛇口がほしい方は、アマゾンで売ってます。こちら）

　UIの違いは、機能自体に関係ない。「冷たかろうがなんだろうが、水が出ればよい」というならば、すべて十字蛇口でよいのだ。私の家の台所の蛇口は、レバー式で、シャワー切り替えができて、ヘッドが外れて伸びるタイプのものだ。シンク全体を洗うことができる素晴らしい蛇口である。「水が出る」のが機能。どんな形でも水が出る。井戸でもいい。インターフェイスを

進化させたものが蛇口であり、レバー式であり、混合栓であり、シャワーといえる。水がでるのは同じでも、出すまでの過程がそれぞれ違う。井戸は労働の大変さも、水からお湯にすることの過程も、「水は地下から汲むもの」といった知識も与えてくれるが、非常に手間がかかる。レバー式混合栓は、水がどこから来るのか、どうやってお湯になるのか、仕組みは全く見えない。これがUIの違いといえるだろう。

テレビの操作方法も時代を経て変わってきた。今の時代にテレビを見る人が、画面のそばにいってチャンネルを変えるということは少ないだろう。「チャンネルをガチャガチャ変える」という表現は、本当にガチャガチャ音がするものだった、ということを今の若い人（ついにこういうことを言う年齢か）にはわからないだろう。どんなスイッチだろうが、テレビはつく。でもいちいち席を立つのは面倒だし、いろいろな機能が手元で操作できたほうが便利だ。UIの進化がいまのリモコンになっているといえる。ただし、テレビのリモコンの操作方法がわからないというのも、UIの問題といえる。「簡潔さ」と「多機能」は大抵の場合、相反するものなのだ。

特に、テレビや車などは、詳しい人もそうでない人も、万人に受け入れられるUIが求められる。作っている人は非常に苦労しているだろうと思う。

前に書いた、スマホのことも同様だ。スマホじゃないとできないこともほとんどないし、「パソコンのほうが多機能だ」「ガラケーのほうが電話は便利」「なきゃなくてもいい」というのはどれもごもっともである。機能の問題ではないのだ。大きな違いはUIなのだ。「できるできない」ではなく、手間をかけずにできるかどうかなのである。LINEを使い慣れてくると、Eメールのかったるさが気になることだろう。もちろん、丁寧な仕事の要件などはメールのほうが適しているが、家族や友人とのちょっとしたやりとりをメールでやることのかったるさといったら！でも、LINEを使っていない人に「LINEって何ができるの？」と機能を聞かれたら、「メール・・みたいに・・やりとりできる」としか言えないだろう。実際、テキストを送って画像を送って、通話をしてと、機能は携帯電話メールと変わらない。一番大事なことは「手軽に」できることなのである。

メールにしてもLINEにしても、「この機能を使うにはどこを押せばいいのか」と悩むことはあるだろう。これもUIの問題である。もちろん、「すべての機能へのアクセスが、誰にでもわかりやすいもの」などは電脳界隈にはないといえる。

いつも不満に思うのだが、コピー機とカーナビのUIはなぜあんなにわかりにくいのだろう。「わかりにくい」も感覚によるものなので、私だけなのかもしれないが。

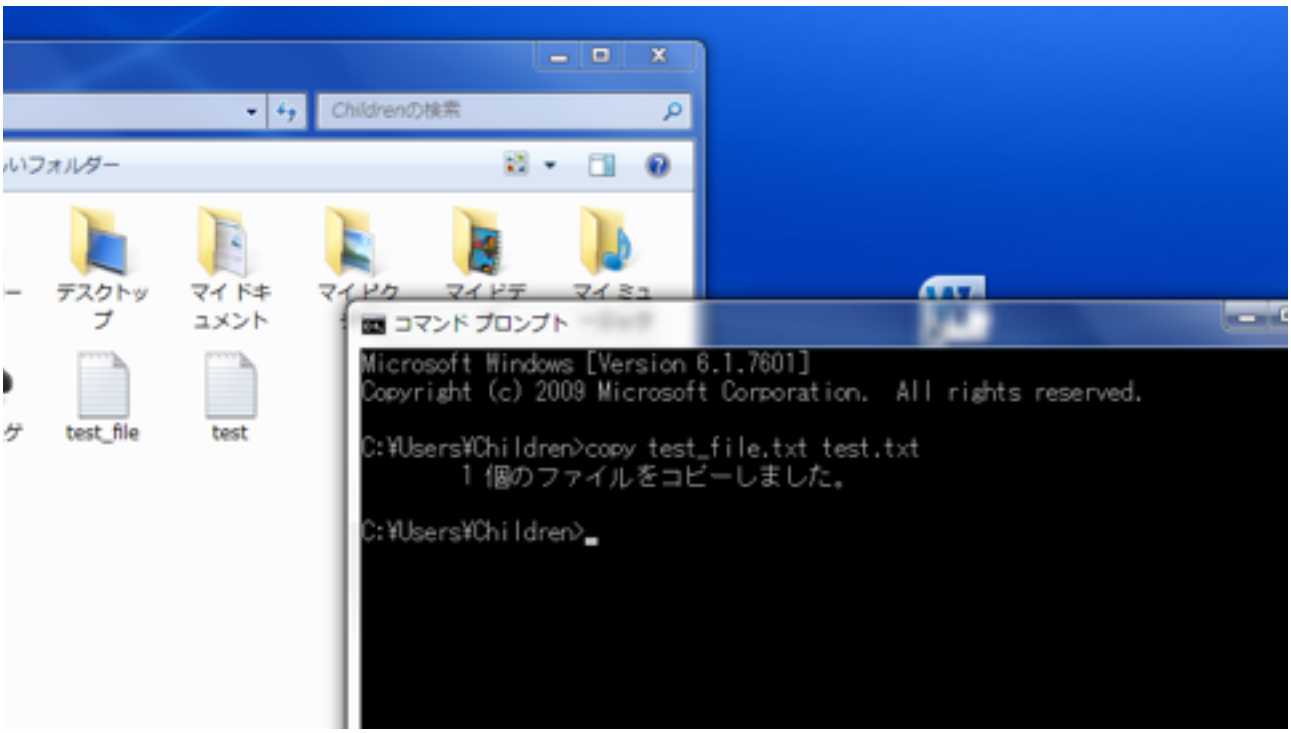
さて、生活のどこにでもUIの工夫はなされているが、この言葉がよく使われるのはパソコンに関連するものだ。パソコンの代表的なUIは、キーボードとマウスとディスプレイだ。どんな高機能のパソコンであっても、これらが使いにくいと使い物にならないのだ。普段仕事でパソコンを使っていて人マウスに無頓着な人は、是非買い換えてみてほしい。今は980円くらいでも使いやすいマウスが売られている。あとはマウスパッド。ずれにくくて適度な滑りがあるものにすると、操作の効率が格段に違うのだが、結構皆さん無頓着である。

使っているパソコンがデスクトップなら、キーボードも好みのものに変えてみるといい。スペースや予算的に可能であるならば、サブディスプレイも使うとなおよいだろう。ディスプレイが２枚になるとちょっとおおげさな印象になるのは否めないが、一度使うと手放せなくなること請け合いである。

これらの工夫は、パソコンの知識でもないし、パソコンの機能が上がるわけではない。UIの工夫をするだけだ。それでも仕事の効率は確実にあがる。

私の現在の職場ではノートパソコンだが、キーボードとマウスは自分のものを使い、余っていたディスプレイをつないでいる。とても快適である。

ここまではハードウェア的なUIについて書いてきたが、ソフトウェアとしてももちろんUIはある。代表的なものがWindowsなどのOSだ。Windows以前は、テキストコマンドというものでパソコンを操作していた。現在もプログラム一覧の中に「コマンドプロンプト」というものがあるが、これがそれである。



※黒いところがコマンドプロンプト。見えにくいが、左側のウインドウの[text_file]というファイルをコピーするのには、[copy test_file.txt test.txt]と手で打ち込まなければならない。

Windowsの何がすごいかというと、見てわかるUIにしたことがすごいのである。マウスを使ってカーソルを動かして、クリックすると目的の動作ができるという、今は当たり前のことが画期的であった。これはテキストベースのUIと区別してGraphical UserInterface、GUIと呼ばれる。OSは進歩を続けているが、おそらく「機能をよく知らない人でも目的のことができるにはどうしたらいいか」といった考えもベースにあると思われる。「スタートボタン→全てのプログラム→MicrosoftOffice→Word」とクリックしていくよりも、デスクトップにあるWordのショートカットをダブルクリックするほうがわかりやすいのだ。ただ、だからといってデスクトップに全てのアイコンを置いたら今度は見つけにくくなる。人によって違う「よく使う機能」を使いやすい場所に置き、そうでもないものはアクセスしにくい場所に置いておくといった加減が必要でもある。

ボタンひとつでもUIの違いはある。Wordを起動するボタンとして、使い慣れている人であれば右のボタンでよいが、そもそもパソコンに慣れていない人であれば左のボタンのほうがわかりやすいかもしれない。情報が多ければいいというものではなく、ユーザーにとって必要な情報がみえている必要があるのだ。

良いUIとは使う人が見てどうすればいいかすぐにわかるものであったり、使う人が悩まずに済むものであったり、その機能を使うための手間が少なくて済むものと言える。

よいUIは仕事効率をあげる。「AをしてからBをして、それをもとにCを作ってDにする」という手順を、「Aをすると自動的にDができあがる」にしたらいいのだ。「腰を上げてこたつから出て、テレビの近くまで行ってチャンネルを変え、また戻って座布団を整えて座る」よりは、「テーブルの上のリモコンをぴっと押して変える」ほうがいいに決まっているのだ。仕事が効率的にこなせる人は、どこかしら自動化していたり、考えなくてもできるようにしていると思われる。よくある批判には「過程が大事だ」というものがある。それは確かにあるだろう。コマンドプロンプトのほうが「今自分がなんの操作をしているか」は理解できるし、水道の蛇口をひねるよりも井戸から汲み上げたほうが水の大切さがわかるはずである。

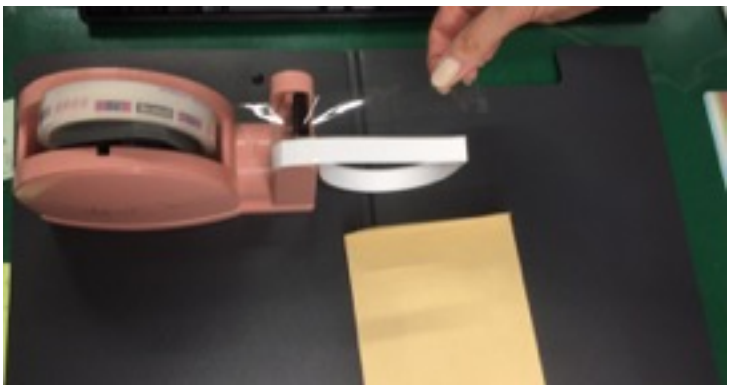
過程が大事なことはよくある。 例えば、ウェクスラー式知能検査の結果の算出は結構な手間がかかる。本をあちこちみて、計算して、記入してといったものだ。私が初めてWISC4の結果算出（解釈は含まない。数値を出すだけ）したときには、１時間くらいかかったと思う。これは慣れると速くなるが、慣れたとしても本をみなければできない。本を見ながら結果算出をしつつ、検査のどういうところからどの数値が計算され、その要素がどういうものから作られているのか理解することはとても大事なものだ。

ただ、それはずっとやるべきことだろうか。数字の成り立ちを理解したら、自動的に計算してもらったほうがよいのではないか。Excelで計算式を作ると、いくつかの数値を入れるだけ、５分もあれば結果算出ができてしまうのだ。たまにこれを「ズルしている」という人がいる。理解できない。ルーチンの作業を何度も繰り返すことが「仕事」だとでも思っているのだろうか。

パソコン仕事が多くてプログラムに長けた人は、「２回同じ作業があって、今後もその作業があることが予想されたら、自動化できないかどうか考える」そうだ。どうもこの世の中は、「やらなきゃいけないけど、形が整っていればどうでもいい仕事」が多すぎるような気がする。そんなのは自動化してしまえばいいのだ。それを延々と手作業していることを「仕事」というのは、ただの怠慢でしかない。

　さて、機械や仕組みの話をしてきたが、対人援助というものも、クライエントのUIを整えたり使い方マニュアルを一緒に考えたりするものといえるのではないだろうか。井戸から一生懸命汲み上げていたのを、「こっちに蛇口つけてみようか」とか「途中にボイラーつけるとあったかいかも」とか提案している気がする。その前に、「ここからこう通って水がでているんだねえ」と仕組みを一緒に理解していることもあるかもしれない。「水がでる仕組みなんかどうでもいい！」と言われることもあるかもしれない。「冷たい水でいいの？暖かいお湯がほしいようにもみえるんだけど」と提案するかもしれない。「水道の問題として話し合ってるけど、本当はガスの話がしたいのかな」となったりするかもしれない。十字蛇口とレバー蛇口を提示して、クライエントが「やっぱり十字がしっくりくる」というなら、「レバーのほうが便利なのに」と思いつつも「んじゃそれつけてみよう！」と乗ってみたりもする。そしてそのほうがうまくいったりもする。人間のUIこそ、手間が少なければOKというものではなかったりもするのだろう。少し余計に手間をかけたほうがうまくいくってことも普通に起きる。「めんどくさい人」というのは、その人の主要機能にアクセスするのに多少手順が多く必要な人のことなのだろう。単純な人というのは、ラクラクホンのように「ここを押せばこうなる」というのがわかる人なのだろう。
　対人援助の仕事も、クライエントの機能のことばかりに目がいっているとうまくいかないのだろうと思う。

　今の職場で画期的な発明をした！



　これは「簡単に封筒に貼るためのセロテープの長さが測れる装置」である。もう少しUIの改善を検討

する余地はあるが、思いつきで作ったわりには「封筒の封をする仕事」の効率はアップした。

邪魔なときはくいっと上げるとOKなのである。我ながらいい出来であった。

UIの工夫とはこんなことでもよいのだ。使いたい機能にどう簡単にアクセスするか。クライエントが持っている機能に援助職が、クライエント自身が、どうアクセスするのがよいのか。アクセスしたあとにどっちを向けば、次の行動につながりやすいのか。キーボードを使うのか。マウスを使うのか。タッチパネルだとどうなのか。視線はどう動くだろうか。ミスを減らすにはどうしたらいいのか。間違えて入力してしまったときはどういう処理をすればいいのか。最終的にどういう形ができあがればいいのか。

いろいろ混ざっているが、そういうことを考えていくと、よりよい仕事、よりよい面接につながるように思える。

「効率」を強調しているが、「短い時間で多くをこなす」ことが必ずしも効率がよいとは限らないこともある。目指すのは目の前の成果だけではない。この課題を楽しむためにはどういう見た目がよいのか。繰り返しやってもらうにはどういう刺激があればいいのか。ステップアップしたら次に用意する課題はなにがいいのか

こういう視線で、自分のやっていることを見直していきたいなあと自戒します。

Let's ユーザーインターフェイス！

講演会＆ライブな日々⑤

シンガーソングカウンセラー

ふるかわひであき

この春にユング心理学のシンクロニシティ（共時性）をテーマに講演をした。

シンクロニシティというのは、誰かの事をぼんやり考えていたらその人から連絡が来たとか、なんとなく胸騒ぎがしていたら、身内に何か不幸なことが起こっていたとか、道に迷っていたら今までずっと自分が行きたかったところにたどりついたとか、自分にとってとても意味のある偶然のことである。

シンクロニシティは「数字」「物品」「予兆」など細かく１７種類に分けられている。（興味のある人は独学してください。ユング心理学関連の本には必ず書かれています）

心理学会での発表ではないので、どなた様にも分かりやすく話さなければならない。

シンクロニシティという目に見えない力を説明するのは難しい。

何かの宗教や流行のスピリチュアルと誤解されるかもしれない。

そんな不安を持ちながら告知すると、たくさんの方に来てもらえた。

講演会が終わると、参加されたみなさんからたくさんの感想を頂いた。

今まで多くの講演会をしてきたが、こんなにたくさんの感想をもらったのは初めてだった。

聴衆が聞き入ってくれた確かな手ごたえと、話した後の満足感の両方揃う幸せはめったにないが、今回はそれに恵まれた。

それで満足していればいいのだが、それをもっと深めたいという欲に駆られて続編をこの夏に企画した。

誰でも体験できるこの不思議なシンクロニシティという現象はなぜ起こるのかをテーマにした。

心理学や哲学、宗教だけでなく、科学的にシンクロニシティを説明できないだろうか・・・。

いろんな専門家から情報を集めた結果、「量子物理学」という学問にたどり着いた。

この「量子物理学」はアインシュタインや朝永振一郎など、ノーベル物理学賞に輝いた多くの科学者が取り組んでいる。

さっそく独学で学びだしたのだが、これがかなり難解で、何冊も専門書を読みあさり、わからないところは物理を専門にしている大学の先生のところまで行って学んだ。

その結果、シンクロニシティに迫る考察ができた。

ざっくり説明すると、この世の物質の全ては量子という最小単位で出来ており、この量子は波の性質と粒子の性質を併せ持ち、人間の意識と深くつながっているということだ。

これだけを文章にしてもなんのことやらさっぱりわからない。

だけど私は、学ぶうちにかなりのひらめきを得た。

あとはこれをみなさんにわかりやすく説明するだけだ。

しかし、これが大きな落とし穴になった。

量子物理学の話をするうちに、聴衆のみなさんの頭の上にクエッションマークが浮かんで行くのがよくわかった。

それでも私は冷や汗と脂汗をかきながら、パワーポイントを駆使し、こころの中で「なんでわからへんの〜！」と叫びながら必死で説明した。

講演が終わり、後日にまたたくさんの感想を頂いた。

その多くが「今回は難しくて意味がわかりませんでした」というものだった。最初の講演でやめておけば良かったという後悔にさいなまれたのだが、だけどやっぱりもっと深めたいという思いは消せなかっただろう。

もらった感想の中にすごく役に立ったという人が何人かおられた。

しかも私が話した以上に深いものを感じておられ、私もまたその感想から学べた。

講演会というものは、自分の考えや知識を他者に伝えるという行為だが、前回と今回の講演会では、話している自分が一番深く学んでいるように思った。

しかも、自分がより深く学ぶのは、耳に優しい感想ばかりに囲まれたときではなく、あまり歓迎したくない厳しい感想をもらったときだと思った。

耳に優しい感想をもらった後よりも、厳しい感想をもらった後の今のほうがはるかに次回の意欲がある。

今回の感想が厳しいものだったので、次回は人が集まらないかもしれない。

何かを人に伝えるという行いは、常に参加者がゼロになるかもしれないというリスクがある。

そのリスクを負いながら、今も次回の講演会の構想を楽しんでいる。

Journey to my PhD@York in イギリス Vol.8

浅野　貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

前号の執筆者短信で触れましたが、今年の夏に博士論文を提出し、その後のVivaと呼ばれる口頭試問にも無事合格しました。私の連載は今回が最後となるため、博士号（PhD）の取得というJourneyを終えての振り返りをして連載を終えたいと思います。

From goal to step

4年に渡って格闘してきた博士論文を提出した後に私の胸に去来したのは、それまで想像していたものとは違った思いでした。研究室を共にする博士課程の同僚が、ひとり、またひとりと博士論文を提出し、誇らしい表情で研究室を去って行くのを見送りながら、彼らの喜びはいかほどのものかと想像していたのですが、私が博士論文を提出した時に感じたのは、何とか予定の4年以内に提出することができほっとしたという思いでした。納得のいく論文を書けたことに対する大きな達成感はありましたが、うれしいという気持ちではありませんでした。これは、私の中でPhDに対する捉え方が変わったことが影響を与えているように思います。留学する前や1年目ぐらいまでは、PhDの取得が大きなゴールだったのですが、博士論文に取り組む中で、研究者として研究を続けていくことの厳しさを肌で感じ、これからの研究者としての長いキャリアの中での大きなステップというふうに捉え方が変化しました。アカデミックの世界は、いわゆる「Publish or Perish（発表せよ、さもなくば滅びよ）」という言葉が示す通り、分野を問わず、研究者は研究論文を出し続けることが必須です。PhDを取得することは、そうしたアカデミックの世界へのパスポートのようなものではないかと思います。この連載のタイトルになっているPhDの取得というJourneyが終わりを告げても、研究者としての新たなJourneyが始まります。その新たなJourneyに踏み出す上で、留学生活を通して得られた様々な経験は私に多くの学びを与えてくれました。

新たなJourneyに向けて

第2回の連載（※第14号）で述べましたが、留学という決断をする上で大きなきっかけとなったのは、留学する前に勤務していた京都国際社会福祉センターでの様々な経験でした。京都国際社会福祉センターでは、社会福祉士の養成教育だけでなく、ソーシャルワーカーを始めとした対人援助職の継続教育にも携わり、それらの機会を通して得られた「専門職としての学び（Professional Learning）」というテーマについて、日本とは異なる環境に身を置き、多様な視点から研究を深めたいという思いで、留学することを選びました。

留学経験を通して得られたことのひとつに、他の対人援助職と比較し、しばし「なんでも屋」（Jack of all trades）と評されるソーシャルワーカーに対する捉え方が大きく変わったことが挙げられます。アメリカ、そしてイギリスという異なる文脈からソーシャルワーク／ソーシャルワーカーを捉え直す機会を通して、ソーシャルワーク／ソーシャルワーカーの多様なあり方の可能性への気付きが得られました。博士論文では、日本のソーシャルワーカーへのインタヴュー、そして、彼らが関わる様々な学びの場の観察から得られた質的データを元に、資格取得後の専門職としての学びのあり方を考察しました。インタヴュー協力者は、社会福祉士（または精神保健福祉士）の国家資格を有し、社会福祉関連の現場で10年程度の実践経験のあるソーシャルワーカーですが、その多くが、自身をソーシャルワーカーと呼ぶことにためらいを持っており、それぞれの専門職としてのあり方（Professional ways of being）を抜きにしては、彼らの学びは理解することができないことが明らかとなりました。つまり、ソーシャルワーカーとしての彼らの学びは、彼ら自身の専門職としてのあり方と分ちがたく結びついていることが指摘できます。しかし、現在の社会福祉士養成教育、及び継続教育の枠組みの中では、関連知識・技術の習得が中心であり、専門職としての学びとソーシャルワーカーのあり方（Ways of being a social worker）を結びつけた理解、さらに、そうした理解に基づいた具体的な取組みが不足しているといえます。これから大学での福祉教育に従事する上で私が大切にしたいのは、様々な関連知識・技術の枠を理解した上で、その枠内だけでソーシャルワーク／ソーシャルワーカーを捉えることに留まらず、その枠自体を問い直すことで様々な可能性を模索し、自らの専門職としてのあり方を問い続けていくことのできる学びの場を、ソーシャルワーカーを目指す学生と共に創り上げることです。

さらに、社会福祉士養成教育と比較すると、実践及び研究が不足している現任のソーシャルワーカーの継続教育にも積極的に関わりたいと考えています。博士論文では、インタヴュー協力者が、研修に代表されるフォーマルな学びだけではなく、援助職同士の自主的な勉強会や集まり等のインフォーマルな学びの機会を通して様々な学びを得ており、専門職としての学びをフォーマルとインフォーマルな学びに分けて捉えるのではなく、多様な学びのあり方を尊重した上で、ホリスティックに捉える必要があることが明らかとなりました。様々な制約の中、フロントラインで日々試行錯誤を繰り返しながら支援に携わるソーシャルワーカー同士が、支え・支えられ、専門職としてお互いが成長し続けられる学びのあり方を共に模索していきたいと考えています。

おわりに

この連載は、マガジンの編集員の千葉さんより声を掛けて頂いたことがきっかけで始まりました。引き受ける前は、単発の原稿ではなく、連載する必要があるということで、正直なところ、博士論文の執筆で忙しい中、時間的にやりくりが出来るかどうか不安に感じて、お断りをしようかという考えが頭をもたげたのですが、せっかく頂いたチャンスですし、本当に忙しくて時間が取れない時は休載すればいいと思い直し、引き受けることにしました。計8回の連載の中で、ヨークでの留学生活を通して感じたことを思うままに書いてきましたが、このような形で文章としてまとめる機会がなければ、忙しい日常に紛れてしまい、改めて振り返って考えることもなかったと思います。私が書いたものが、読んで下さった方々の考えるきっかけになったとしたら幸いです。最後になりましたが、このような貴重な場を与えて頂きましたこと、心より感謝申し上げます。（了）

養育里親

～もうひとつの家族～

11

坂口　伊都

生活を共に送る

子どもが我が家で暮らすことを決めてくれ、一緒に生活を共に送るようになって約 3 か月が経ちました。毎日毎日、生活の中にこの子がいることが、不思議なような当たり前になりつつあるような感じがします。

生活が始まった頃は、いろいろな手続きをしなければならず、何が何やらわからないままバタバタと過ごしていました。この子にできるだけ負担がかからないように試行錯誤しながらのスタートでしたが、思っていた以上にこの子がいろいろな事柄にチャレンジをしてくれ、伸びしろの大きさを感じましたし、それは嬉しい発見でした。

中途養育では、親子が生活を共にしてから 3 か月は、子どもが緊張していていい子でいるので、やりやすい子と感じるが、この 3 か月が済むと子どもの試し行動等が出てきて大変になると聞きます。我が家は、ちょうどこの 3 か月にあたりますが、この期間でも感情が揺さぶられています。

以前に、夜になるとなかなかテンションが上がって寝つけないでいると書きましたが、それは生活が始まってからも続き、学校が始まると何とか寝かせなければと焦りだしました。相変わらず、背中をトントンすることは嫌がられます。この子は、寝る時間帯になると話をしたがるのですが、話をしていると永遠に眠らないのではないかという勢いなので、仕方なくできるだけ刺激を減らしていきます。電気を消して、隣で寝たふりをしていると、その内にこの子がスースーと寝だすので、この子に話しかけられ

ても、隣で寝たふりをすることになります。そんなことをしている自分を意地悪ばぁさんのようだと感じて、自分自身が嫌になります。この方法で本当にいいのかなぁと悩みました。

何故、この子はお風呂辺りから元気になっていくのだろう？あまりテンションを上げないように気をつけて入浴するようにしたり、電気を豆球にしたり、真っ暗にしたりとしてみましたが、どれもしっくりときません。この子は夜になると不安を感じているのか、児童養護施設とは違いがあるのだとしたら何だろうか考えました。そして、この子に話そうと決めました。

「あのな、夜はみんな寝るための準備をしているんだよ。遅くまで起きているのは、いいことではないの。ずっと起きていたければ起きていればいいけど、パパもママも兄ちゃんも姉ちゃんも夜は寝たいからあなたに付き合うことはできないからね。起きていたければ一人でそれをしないとならない。あなたが、寝ようとしてくれるなら一緒にいれるし、一緒に寝れるよ。パパもママも兄ちゃんも姉ちゃんもいなくならないからね。そばにいるからね。心配しなくても大丈夫だよ。」

そんな話をして、数日経ってからこの子が入浴後「さぁ、寝る準備でもしようかな」と言い出して、布団にもぐりはじめました。この子は、しっかり話を聞いていて、時間をかけてゆっくりと自分の中に落とし込んでいったのだと感心しました。今は、9時になったら寝る準備の時間という我が家ルールができました。休みの前の日は、寝る時間が遅くなってもいいというおまけつきですけど。生活をし始めてからしばらくは、寝かしつけることの位置づけが大きかったですが、気がつけば犬を抱えて寝ているという日も出てき始めるようになりました。

今回は、この試行錯誤の生活の中で感じたことや戸惑ったことを率直に書いていこうと思います。その中には、人として未熟な部分を晒す形になると思いますが、実際に養育里親を体験して気づいた部分なので、お許しください。最後までおつきあいいただければ幸いです。

中途養育

子どもを途中から養育するということは、当たり前ですが、出会う以前が全く見えません。それは、真っ黒な穴があいているかのようです。これは、養育里親だけでなく、ステップファミリーや児童虐待等で家庭分離しその後家庭に戻った家族も同様のことが言えると思います。この子のよくわからない時期がありながら、生活をしていく難しさです。

養育里親は、そこにプラスで関係の希薄さがあります。以前、子どもを生んだ時に逃れられない事をしてしまったと感じました。ここにいる赤ん坊を育て、親として責任を負って生きるのだと思ったら、何かとんでもない重責を背負ってしまったような気がしたものです。養育里親も、親としての責任を負うことには変わりありませんが、実子の逃れられなさとは逆に、この子を失わないようにしていかなければならないという危機感で気が引き締まります。里親不調に陥っていけば、一緒に生活していけなくなる可能性が高くなります。里親不調になりたいとは思いませんが、ならない保証もありません。生物学的にも戸籍にも拠り所がない儚くて危うい関係性なのです。仮に里親不調になり、この子がまた別の養育里親や児童養護施設に入所することになれば、この子がとても傷つく結果になります。自分はダメな子だと感じてしまうかも知れませんし、誰も信用できないと人間不信に陥ってしまう可能性もあります。子ども自身が傷つくのであれば、何のための養育里親なのだろうと思います。

養育里親は、子どもの小さい頃が見えない、

わからないという現実がいつも隣にあるので、親子になっていくのも実子とは違う道のりが要るのかもしれないと実感しているところです。いつか、この子のライフストーリーワークを一緒にできればと思っています。この子が育ってきた道筋を辿っていく同士になれるのであれば、知らないという現実にも意味があると思えてきます。

出産してからの子育ては、夜泣きに泣かされたりしながらも阿吽の呼吸や波長を親子で作りあげてきました。10 歳から始まる子育ては、10 歳の意思を持った子どもとそれを作り出す作業になります。赤ん坊は、自分の力だけでは生きていけない、生き抜くためには大人の力が必要となる時期ですから、大人が向ける波長に子どもが合わせていく率が多くなりますが、10 歳からだと、お互いに背負ってきた生活文化の違いを目の当たりにします。例えて言うのなら、結婚当初の生活に似ているのかもしれません。お互いに当たり前だと思って過ごしてきた何気ない事柄に違いを感じ戸惑います。この子も何かを感じているのでしょう。その中で、いろいろな反応を出し始めているのだと思います。

この子は、一緒に遊ぶことは上手にしますが、しんどさや寂しさ、怖さを訴えてくることはほとんどしません。例えば、咳をし始めているので額に手をあてようとすると、手を払って嫌がります。「咳をしているでしょ」と言えば、「していない」と言い張り、自分に注目されないように頑張ります。視線が合えば、視線をそらしたり、手で顔を覆って隠したりして見ないでというしぐさをします。

触られることを嫌がる理由がよくわかりません。触れること自体が嫌なのかといえば、自分から身体をくっつけてきたり、手を引っ張りにきたりし始めているので、そうではないようです。どちらかと言えば、他者が自分に向かって触りにくるのを嫌がっているようです。頭を撫でたり、背中をトントンされたりすることに心地よさを感じられていないように見えます。

また、これをしてねと声をかけると、「無理」「いや〜」「知らん」等が第一声で返ってきます。挑発的な返答なのですが、「こっちの靴を履いたらいいよ」と言うと、「無理」と言いながら履いていたりします。何故しているのにそんな返答なのだろうと思いながら、「そこは、無理じゃなくて、はーいって言えばいいんだよ」と肩を落としながら伝えています。

この前も、お風呂に一緒に入っていたので、「お風呂のふたをしめてね」と言うと、「もう疲れたし、無理〜」と返され、「しめてね」と言い直しの繰り返しになっていると、その会話を聞いていた中学 2 年生の娘が登場して、「わかった。お姉ちゃんがしめてあげるからね、はい」と言葉はやさしいのですが、明らかに怒りながらしていました。それを察知したこの子は、「あっ、あっ、しめるぅ」と慌てたのですが、もうふたをして出て行った後でした。後で娘の所に行くと、「言われたことはする、できれば言われる前にする。そうしないと、中学に行ってから苦労するよ」と言われていました。たかが、お風呂のふたです。実子たちも言われればしめますが、何も言われなければしめ忘れることが今でもあります。これまでは、ふたをしてと言えば、何の抵抗もなく通り過ぎるような事柄にひっかかり、忍耐強く対応しないとならないのだと知りました。予期せぬところで、手間暇がかかっています。

この子は、息子や娘が言うと「はーい」って返事をするのですが、私や夫が言うと「できない、しない」を示す言葉が出てきます。「どうして、娘の言うことは聞くのにママの言うことは聞かないんだろうねぇ」と愚痴をこぼすと、娘から「それはね、ママに甘えているんだよ」と言われました。夫は、遊び上手な人です。子どもを連れて釣りに行ったり、UFO キャッチャー

でお菓子を取ったり、身体を使って相手をしてくれます。そんなパパが大好きなのが、見ていてよくわかります。私は、明日の学校の支度、宿題の確認等で口やかましくなることが多く、そこで、挑発的な返答が何回も繰り返されていくと疲れてきます。この子にとって私は求められていない、嫌われていると思ってしまいそうになります。子どもの反応が挑発的であっても、大人を頼りにしたいと思う気持ちがない子なんていないと仕事柄わかっていますが、母として追い込まれる構図は、こういうことをいうのでしょう。

この子の過去にどのような事が起きてきたのかが少し見えてくると、やり方に工夫ができ、気持ちに余裕が生まれるのだと思います。この子を養育してきた施設職員とこの子について話ができたらなと感じる時があります。一般論ではなく、この子について話をしたいのだと思います。一緒に生活し始めたこの子のこの行動が、施設の中ではどうだったのかを聞かせてもらえれば、今のコミュニケーションのやり方がこのままでいいのか、変えた方がいいのかを考える手掛かりになります。また、その職員から見てどう映るのか教えてもらえると気持ちの面で楽になれると思うのです。自分が知りたいと思った時に聞くと、貴重な情報として入ってくるものです。実際に暮らしてみて、知りたいと感じた時に話ができるととても有難いのですが、現実はなかなか養育していた施設職員と話す機会がありません。

子どもにとって適切な環境下に置かれることの意味は大きいと感じているので、この子についていろいろと語りあいながらヒントを見つけていけると里親も助かりますし、子どもにも利益が起こります。里親制度は、子どものためにある制度ですから、この子を支えるために工夫をし、努力をしたらいいのです。

この子は、言われたことや経験したことをゆっくりと自分の中にかみ砕いて理解していく子なので、「はーい」と言える場面が増え、ちょっとした表情が柔らかくなっているように感じています。

波紋

養育里親としての生活がスタートし、子どもとの関係での苦労をするのだろうと予想していましたが、それ以外の事柄で悩み苦労しています。新しいことを始めると、それに伴って今までくすぶっていた問題が、表面に出てくるようです。親戚との関係や体調面など、自分や家族に関わる様々な部分まで影響が出ています。養育里親をスタートさせる前は、子どもとの関係で苦労していくのだろうと予想していましたが、そこよりも他の部分に対応や調整が必要になり、養育里親に直結しない部分の方がストレスを感じます。ここに労力を使うのではなく、子どものために労力を使いたいと感じますし、違う部分のストレスで、自分の気持ちが空回りして落ち込んでしまいます。

当初、心配していた高校 1 年の息子と中学 2 年の娘の揺れは、さほどありません。この子に対して自然に受け入れ、息子や娘自身のしたいことを遠慮せずにしています。この子も、この二人に対しては比較的素直に応じているので、困ることも少ないのでしょう。児童養護施設という場で育ち、子どもと大人に対する意識に違う感覚をこの子が持っているのかもしれません。

子どもたちの揺れを感じずに済んでいることは有難い限りです。

側面からのストレスがかかると、どこかにその歪が出てきます。私の場合は、夫にいろいろな怒りをぶつけていると思います。そのきっかけとなったのは、私がどうしても子どもより早く家を出ないと仕事に間に合わない曜日があり、娘は部活の朝練、息子は通学時間が早いので頼みの綱が夫になります。夫は、特別養護老人ホーム職員なので、できるだけ夜勤明けや早出にあたらないようにお願いしていたのですが、その曜日に夜勤明けが 4 週中 3 回あたっていました。何故、そのようなことが起こっているのかと尋ねたのですが、夫の方は聞いていないと言い出し、私はずっと言っていたのにと暗雲立ち込めました。私は、こんな大事なことを忘れるなんてありえないとショックを受け、しばらく夫に対して不信感を抱いていました。高齢者施設勤務ですから、思うようにローテーションが組めないこともわかります。対立するのではなく、この状況をどう調整していく方法があるか話しあいたかったのですが、そこまでに時間がかかりました。今思えば、夫の方も私と同じような状態だったのかもしれません。いつもの夫とは違う反応だったように思います。私と同じようにストレスにさらされていたのでしょう。人は、余裕がなくなると上手く回せなくなるものです。上手く回せないとネガティブになっていきやすくなります。側面からのストレスにさらされ続け、養育里親をすることは、そんなに責められなければならないのか、養育里親をするってそんなに悪いことをしているのかと感じましたし、何か間違ったことをしてしまったかのような錯覚にも陥りました。

何か新しい試みを開始すると、その周辺部分に波紋が起こり、子どもとの関係以外の部分での対応が必要になり、それに疲弊してしまうことが起こるのだと思います。助け合っている相手との関係もギクシャクしてくる怖さが隠れていると知りました。

最後に

今回は、養育里親として生活をし始めてからの戸惑いについて書いてきました。学校や友達について書こうかと思っていたのですが、この感覚を今書き留めることが大切なのだろうと感じたので変更しました。

生活していると、どんな状態であろうと日々を過ごしていかなければなりません。養育里親は、生活と仕事が混在しているようなところがあります。仕事と割り切れませんし、生活に徹することも難しく、この子の今の状態や特性を考えながら対応していく必要が出てきます。

例えば、学校でクッキングをしてきたとわかったので、「何を作ったの？」と尋ねると「知らん」と返ってきます。「知らんではわからないなぁ。じゃぁそれは、何色だったの？」「茶色」「そうか、味は甘かった？しょっぱかった？」「甘かった」「もしかして、ドーナツかな」「あっ、それそれ」となったことがあります。この会話を聞いていた娘が、「何でクッキングの内容を聞くだけなのにクイズ形式なの？」と不思議がっていました。確かに息子や娘に対して、ここまで丁寧に聞くことはできずに怒っていると思います。この子の会話の幅が広がるようにという思いがあるから、会話を延ばし、違う方向からの質問ができています。これは、仕事に対する意識に近いです。

そうかと思えば、疲れてソファーでうたた寝をする大人の姿を見せています。夫は、ビール好きなので晩酌をしている姿を見ながら、「父ちゃん、もっと飲んで酔っ払って」と言われています。養育里親は、不思議なものだと感じます。この割り切れなさが、生活にまつわる様々な歪

を浮き彫りにさせるのでしょう。

児童養護施設等の施設職員でも生活との葛藤があります。職員に家庭があり子どもを養育している場合、施設職員としても家庭でも必要とされる時間帯が同じになります。子どもが起床してから登校するまでの時間、下校してから就寝するまでの時間帯です。どちらも子育てをしているのですから、当然と言えば当然です。特に女性職員は、結婚が決まったので正職を辞めることになりましたという話をよく聞きます。子育てをしたことがない年代の人が、児童養護施設等の子どもの養育を担っていると言われますが、背景の諸事情が重なっています。

子どもを護り養育すること自体が、仕事と割り切れる性質のものではありません。そして子どもは、大人と比べて圧倒的に弱い立場になります。腕力も経済力も判断力も大人より劣ります。強者である大人が、本気で子どもを護ろうとしないと、子どもはどんどん傷を深めていくことになります。社会の大人が、圧倒的弱者である子どもを護ろうと行動しようとする人を応援することはできないでことなのでしょうか。そうではないと感じています。そのためには、社会的養護の場で暮らす子どもの背景と現実を知ってもらうことが大切なのだと思います。

新しい養育里親家庭としての生活を始めるのは、子どもも大人も余裕があるわけではありません。自分たちの生活リズムを整えていくことで必死です。何歳の子どもと暮らそうが、親としてはひよこからのスタートです。親になっていくのに近道はないのでしょう。子どもを産んだ時も親として未熟でした。そして、現在も養育里親としての未熟さを感じています。この先、どのような出来事が起き、慌てふためくのか、泣きたくなるのかわかりませんが、この子を護っていけるよう少しだけでも応援してもらえると嬉しいです。

周辺からの記憶9

～2012年度　岩手（遠野・大船渡）～

村本邦子（立命館大学）

2015年11月20･21日、今度は台北で英語版「未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト：団士郎 家族漫画展」を開催した。アジア災害後心理援助国際会議という催しで、漫画展の報告と福島の報告、ふたつの口頭発表も行った。

これまでやった漫画展のなかで、短期間のうちに一番たくさんの人が見てくれたのではないかと思う。インタビュー代わりのアンケートへの協力者も多かった。

京阪三条の「ココロかさねるプロジェクト」では、漫画の感想とともに「困難を乗り越えるコツ」について250人にインタビューをした。その結果を9月初めの仙台の質的心理学会、10月終わりの対人援助学会で、ポスター発表やワークショップの形で公開した。助成頂いたJR西日本に対する報告も兼ねているが、それにしても、このプロジェクト、想定をはるかに上回る面白い展開を見せてくれたものだ。本当はまだまだいろいろやれそうな気がするが、この半年、あまりに忙しくなりすぎたので、このあたりでちょっとブレーキをかけることにする。

震災プロジェクトも着実に5年目の実りを得ている。12月12日のシンポジウムには、現地の協力者をお招きして交流と知恵の交換をする。楽しみだ。

準備

現地の状況は厳しく、プロジェクトを共催で担ってくれる機関が見つからず、岩手の拠点を再検討する。立命館が協定を結んでいる大船渡市が候補地となるが、今回も共催してくれる機関が見つからず、広報の協力のみのお願いとなる。ハードもシフトも沿岸部はまだまだ大変な状況だ。

十年計画と伝えてあったため、遠野の方々に申し訳なく（それに遠野の魅力は筆舌に尽くしがたく）、今回は沿岸部で試行してみるが、合わせて遠野でも開催することができるということを伝えると、去年お世話になった遠野市子育て総合支援センターの主任、立花正行さんが中心になって、社会福祉法人遠野市保育協会と一緒に子育て支援セミナーを企画してくださった。

大船渡の方は、大学の復興支援室とも相談し、カメリアホールという市の施設を借りて、漫画展と各種プログラムを実施することにした。今年は単独開催でも、次から共催してくれる相手が見つかればいいがと願いながら。詳細まで詰められたのは結局十月も後半で、十分な広報期間もなく現地へ行くということになってしまった。不本意ではあるが、やむを得ない。

再び遠野へ

2012 年 10 月 31 日、院生と一緒に、1 日早く JAL で花巻空港へ飛ぶ。今回、遠野の企画を作ってくださった立花さんが空港まで迎えに来てくれて、道中、遠野の様子を聞かせてもらう。現在、遠野の仮設住宅には 35 世帯が残っており、7 世帯が子育て中。阪神淡路大震災の時の反省を活かし、住民同士が交流できるような設計にしたためか、トラブルは聞かないという。そう言えば、遠野にある仮設住宅「希望の郷」は、住民同士が交流しやすいように各部屋の玄関前に屋根付きのウッドデッキを設ける工夫が施されているということで、昨年、通りすがりに見たことを思い出す。

15 時、遠野市役所子育て総合支援センターへ立ち寄り、所長、課長、係長らにご挨拶をして、宿にチェックイン。昨年同様、遠野博物館前にある「あえりあ遠野」である。懐かしい。去年はちょうど文化の日で、遠野文化フォーラムをやっていた。少し早いが、宿の人に教えてもらって、近くの小さなお店に軽い夕飯に行く。

宿がやっている 18 時からの「昔話の夕べ」

に出たくて急いでいたのだが、ギリギリになって慌てていると、わずか 1 分の距離と言うのに、店長自ら自分の車で宿まで送ってくれた。その 1 分の間に、実に濃厚な体験を聴かせてもらうことになった。店長は釜石出身で、子どもの頃からの友達が流されてまだ「あがらない」、去年の暮れには市役所に勤めていた友達がくも膜下出血で亡くなったそうだ。「この歳になるまであんなに泣いたことはありませんでした」と言う。もしかすると、偶然できた小さな枠組みの中で外部の人間にだけ話せることだったのかもしれない。外からは見えなくても、こんな思いを胸に秘めた人々がどれほどたくさんいるのだろうかと思う。

「あえりあ遠野」では、毎夕 6 時から 30 分、「昔話の夕べ」という語り部によるお話会をやっている。3 階の「語り部ホール」には囲炉裏があって、昨年、漫画展にも来てくださった奥寺恭子さんがお話しされていた。お客さんも多く、声をかけなかったが、ひょんなことからある方のおばさんであることがわかったという人だ。「むが～し、あったずもな」と遠野物語を語り、「物語を語るときは、物語そのままを語ります。修飾を加えたり、意味づけをしたりはしません。物語の筋だけをそのまま語るようにします」と説明していた。遠野物語にはわかりやすいプロットがないのが特徴だ（ http://humanservices.jp/magazine/vol19/34.pdf)。今やそんな文化に少しずつ馴染みつつある。

遠野のフィールドワーク

11 月 1 日、朝から急に冷え込んで、霧がかかる。9 時半にピックアップしてもらい、セミナー会場となる白岩児童館訪問して、園長と打ち合わせ。「今日からストーブを炊いています」とのこと。遠野には小学校が 11 校あり、小学校の数だけ児童館・児童クラブがある。白岩児童館は小学校併設で、両開きの扉で遠野北小学校と繋がっている。全国でも珍しく、1 年生から 6 年生までを預かっており、16 時半までは誰でも利用できるので、生徒間に溝が出来にくいのだそうだ。最近の子どもの問題としては、虐待などより、転びそうになった時に手を着くという体のコーディネーションがなく、すぐ骨折する、子どもたちが疲れていて児童館に休みに来る、どこまでなら怪我をさせないかなど、けんかの加減がわからない･･･など、都会と同じ問題を抱えているようだ。他方、都会では少なくなった先生方の懐の深さを感じる。

院生は遠野が初めてだったこともあり、曲家、オシラ堂、カッパ渕を見て、美しく色づいた山上にある風力発電を見学する。土淵町の国有林内にあり、水芭蕉群生地入り口標識から 1 キロほどのところに、たくさんの風車が並んでいた。霧の合間に太陽が顔を出すと、うっすら虹の橋がかかる。

午後は、遠野市役所子育て総合支援センターにある福祉課で、家庭相談員さん、婦人相談員さんから遠野の現状をお聴きする。家族のトラブルは相談に上がってこず、性的虐待はずっとゼロ、遠方に助けを求めて送り返されたケースもあるなど、コミュニティが生きているだけに、問題が表面化しにくいことをあらためて感じた。

夜は、立花さんと遠野名物ジンギスカンを食べに行く。仕事への思いなど個人的なことも少し聞かせて頂き、立花さんがぐっと身近に感じられる。レストランでは、店の人もお客さんもほとんどが顔見知りのようで、暖かさと同時に難しさをもあらためて感じることになる。

遠野駅周辺もリニューアル工事も終わり、全国からやってくるボランティアの波も落ち着いて、遠野の人々の生活は少しずつ日常を取り戻しつつあるように見えた。

遠野から大船渡へ

11 月 2 日、9 時半にピックアップしてもらい、白岩児童館へ、10 時から 11 時半まで「子育て支援者応援セミナー」。学童保育の指導員、保育士、家庭相談員、保健師など 35 名ほどが集まってくれる。要望に合わせ、子どもの発達課題やレジリエンスについて簡単に話した後、ネットワークを兼ねた交流の場とした。

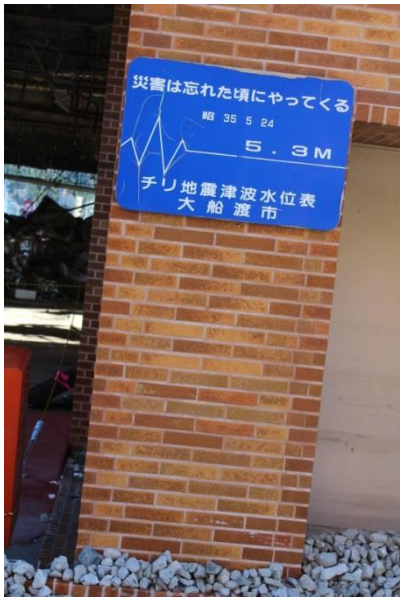
終了後、道の駅「風の丘」で遠野ラーメンを食べ、リンゴを買って立花さんと別れる。遠野駅で友人の笠井綾さんと合流。今回、大船渡のプログラムを一緒にやってくれることになっているアメリカのアートセラピストだ。研究科が提携している California Institute of Integral Studies（CIIS）との協働の一環でもある。笠井さんは、昨年も東北に来て、遠野のまごころネットでボランティアをしたが、今回、遠野のボランティアセンターに立ち寄ったところ、現在、瓦礫撤去ボランティアはほぼ終わり、生活困難に対する支援、以前から続けられている仮設での「お茶会」などを通してのコミュニティ作りなどに活動がシフトしていると聞いたそうだ。

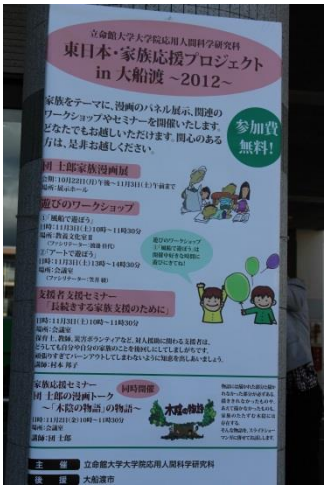
長いトンネルをいくつも越えると、まったく別世界が拡がっていた。大船渡は 1 メートル程も地盤沈下したとのこと、道路のかさ上げ工事中で、道路両脇に土嚢が並んでいたり、池のような水たまりがあちこちに残っていたりする。大船渡駅周辺は市街地だったそうだが、見渡す限りの空地になっていて、線路は途中で引きちぎられたように切れていた。大船渡の屋台村を見て、私たちの宿となる大船渡プラザホテルへ。ここも 4 階まで水が来たそうで、半分はまだ工事中。満潮なのかすぐ近くまで冠水している。

だんだんと日も暮れてきて、心細く物悲しい思いが胸に満ちてくるが、京都からやってきた仲間たちと合流して、少し賑やかになる。彼らは、気仙沼の市街地に打ち上げられた第十八共徳丸を見てきたらしい。それを残すか残さないかで遺族・被災者の間でも意見が分かれ、議論されているものだ（結局、残さないことが決まり、2013 年 10 月に解体作業が終了している）。

大船渡でのプログラム

11 月 3 日、朝早く目覚め、良いお天気で気持ちよいので、港周辺を散歩する。青く輝く海。大きな船や小さな船が並んでいて、一見、のどかで平和な光景だが、あちこちに津波の威力を感じさせる傷跡が残っている。歪んで折れた鉄のポール、上からはぎ取られたようなコンクリート。よく見ると、海には花束が浮かんでいる。持っていかれたままになった方々に手向けられているのだろうか。





会場は、JR 盛駅の隣にあるカメリアホールである。津波は盛駅まで来たそうだ。大船渡や気仙沼までは不通で、振替バスが出ていた。反対隣の三陸鉄道盛駅も不通となっているが、待合室がコミュニティスペースになっていて、小物やお弁当が置かれていた。カメリアホールの入口には、「暖かい御支援に感謝します！」「心をふるい立たせて頑張ろう！」と手書きで書かれた二枚の紙が貼られている。「そうか、彼らは心を奮い立たせて頑張っているんだ」とあらためて思う。1 年半。

午前、支援者支援セミナー。仮設住宅での支援をされている方々が参加してくれたが、自己紹介時、お一人が、すざましい被災時の体験とその後の経過について話してくれた。ただただ驚きながら聞かせて頂いたが、後で振り返ると、大船渡の支援者たちの状況を紹介してくださったような気がする。大船渡市は、仮設住宅の支援を大阪

に本社にある人材派遣会社に委託し、地元で求人をかけて、37 か所の仮設を対象に 100 名強の支援員を配置して、あらゆる支援をしてきたのだという。それまで支援の仕事をしてきた人々ではないので、なかなか難しい側面があったが、少しずつ信頼関係を築いてきた。「支援者たちも辛い状況なので、今日は立命館さんが来るということで、来てみた」とおっしゃっていた。立命館は大船渡と協定を結んでいることから、全体でひとつの組織として見られていることを実感した。一人一人は頻繁に来ることができなくても、組織から誰か彼かが入れ替り立ち代わりやってくれば、地元の人たちには、継続的な支援をしているという信頼につながることになる。

もうお一人は家が高台にあって被害はなかったとのことで、「被害比べ」も起こってしまうようだった。あちこちで起きている支援者たちの現状だろう。心を込めて支援しようとすればするほど圧倒される無力感についても語られた。

笠井綾さんに手伝ってもらって、最後の 20 分は体を動かすワークをすることに。まずは、①体のモニタリング（力を抜いて椅子に座っている感じ、足が床についている感じを感じながら、体の様子に気づいてみる）をしてシェアリング。次に、②一人ずつ「こんなふうにしたら体が気持ちいいな、こんなふうにしてみたいな」と思う動きをやってみて、皆でまねる（おなかを「の」の字でマッサージ、肩回し、腰回し、のびなど)。③動いた後は、体の変化を感じてみる。④名前と動き（名前を言いながら、体を動かす）⑤音と動き（音を出しながら、体を動かす)。空気が緩んで、皆の顔から笑顔がこぼれるようにして終えることができた。まだまだ大変な状況だ。長丁場の支援が必要だろう。

並行して渡邉佳代さんによる遊びワークショップ「ふうせんで遊ぼう」、午後には笠井綾さんが「アートで遊ぼう」をやった。私は「アートで遊ぼう」に参加したが、ミ

ニハープの音色でリラックスしながら、タッチドローイングという表現アーツの手法を使った版画のようなものである。数秒で描けてしまうので、1 時間もするとたくさんの絵ができる。これをペアになってシェアし、物語にした。私とペアになってくれた女の子は、「ハートの天使が降りてきて、ひまわりの芽が出て、新しいお友達と出会いました」というお話を作ってくれた。まるで自分が「新しいお友達」と言ってもらったような気がして、何だか嬉しくなった。そして、まるで子どものように、「また会えたらいいな～」と思った。

前日の「漫画トーク」は、参加者 1 名に記者 2 名、関係者 2 名だったそうで、全体的に小さなプロジェクトだったが、大船渡の方々と良い出会いができたように思う。

ついでながら、お昼食べるものを買おうと近くのスーパーに行く途中、イタリアンがあったので入ってみると、ここがとてもおいしくて、そのまま夜の食事の予約をして皆でディナーを楽しんだ。後でわかったことだが、ボランティアたちの口コミで評判になっているポルコ・ロッソという店だった。店長の山崎純さんは地元の方で、津波は店の前まできたが、幸い浸水は免れたそうだ。

陸前高田から花巻空港へ

今日も良いお天気である。朝 9 時半にチェックアウトし、マイクロバスで陸前高田を経由して花巻空港へ向かう。

瓦礫が片づけられ、瓦礫の山に草花が生えて、まるで大きな丘のようになっている。

5 階建てのマンションの 4 階までは窓が割れ筒抜けになっているが 5 階はそのまま残っているなど、そのまま津波の状況を物語る建造物が残っている。あちこちでボランティア団体と思われる人々が片付けや花を植えるボランティア活動をしていた。息長い活動を継続している人々の姿に、頭が下がると同時に、「私たちの市民社会もまんざら捨てたもんじゃないな」と心強く思った。

陸前高田を通ると、高田第一中学校仮設グラウンドに「陸前高田市産業まつり」の旗がひらめき、賑わっていた。震災後、2年ぶりの開催だということで、何だか人々の顔も心持ち輝いているように見えた。「まあ、元気だったのね！」と喜び合い、知り合いの安否情報を交換する会話も耳に入ってきた。被災後、避難してバラバラになってしまい、消息もわからなかったのだろう。

小さなブースでは、農産物や海鮮などの特産物や復興を象徴するようなグッズも売っていた。珍しい物としては、食べるほおづき。陸前高田で作っているという。甘酸っぱいフルーツのような感じだった。その他、「ぶどうサイダー」やりんご、「奇跡の一本松」の絵葉書など売っていた。復興への一歩を象徴する産業まつりだったと思うが、被災して出店できなかった方々もあったに違いない。

駐車場につながる地面は、地盤沈下のためところどころぬかるんでおり、靴底はドロドロになってしまった。

岩手の風景には、あちらにもこちらにも哀しみ、悼みと希望が散りばめられているように見えた。震災から1年半、影があって光があるという光景をそのままに胸に刻みたいと思った。来年も同じ場所でご縁ができることを願いながら。

つづく

病児保育奮闘記

（　8　）

子どもサポート H&K
大石　仁美

経営は大丈夫?!　ん～？

動き出してはや 13 年。われながらよくやってきたなあ～と思います。皆さん経営が成り立っているのが不思議らしく、起業したいと思って見学に来られる方は、まずそこが知りたい。赤字ですか？黒字ですか？と聞かれても基準がないので答えようがなく困ってしまいます。そもそも儲けるという発想がないのです。あればよし、なくてもよし。これでは人様にアドバイスなど出来るはずがありません。ゆとりがあるんでしょうと思われる方があるかもしれませんが、あると言えばある、ないと言えばない。あるがまま、為すがままです。

私は仕事は楽しいのが一番だと思っています。いやいやながら仕事をしても自分のためにならないし、ストレスがたまる一方でしょう。それよりも対相手の人に失礼というもの。おもしろくないならサッパリと辞めて、違う仕事を探したらいい。仕事は、「しんどいけど楽しい！」のがいちばんいいと思っています。

当然のことながら、仕事は稼ぐことだけが目的ではないはず。いまやりたいこと、やれることを精一杯やる。そこから新たな発見や、人とのつながり、喜びや感謝、希望や意欲が湧いてきて、充実感に満たされる。お金はあとからついてくるものだと思っています。これはいい恰好をして言っているわけではなく、実体験から本当にそう思っているのです。

今よりもっとお金を儲けるにはどうしたらいいかをいつも考えて生きている人たちがいますが、それも楽しい仕事なのでしょうが、価値観の違う世界に生きている人間にとっては、それを目的にすると、欲望がだんだん膨らんで、内部から自己破壊がおきるんじゃないかと思います。

まったく呑気で、お金には無頓着な私ですが、よく考えてみると、そういう計算をして、先を見透す俊敏さは持ち合わせていませんから、脳のそういうことを考える部分が欠損しているような気がします。ぼんやりしているのはＤＮＡの成せる業ですね。きっと。

新たな悩み　加齢には勝てない?!

さて、そんな私がこの 2〜3 年前から悩み始めたのが、可笑しいことにじつは経営のことなのです。

私もパートナーもこの 10 年余りで確実に年をとりました。長時間の子ども相手の仕事は、やはり疲れます。引き際をいつにするのか、体力の限界を見極めつつ、見通しを持っていないと、利用者に申し訳ない。選択肢はふたつ。閉鎖するか、誰かに引き継いでもらうかです。利用者からは「なんとか続けてほしい」という切実な声があるのは確かなので、出来れば誰かに引き継いでほしい。定年退職した暇なおばちゃんではなく、若者でやってみようという人はいないものだろうか。場所を提供するにしても若者はお金がないだろうから、それは話し合いで何とかしよう。でもどうやって人を探す？大学の学生課に相談する？保育協会に行く？新聞広告？ハローワーク？それとも心当たりの保育士さんに片っ端から聞いてみる？さてどうしたものか。いろいろ考えても良い策が思いつきません。考えあぐねて動けないのは、経営が安定していないせいなのです。はたして、若者が家庭を持って子育てをしていけるだけの収入が確保できるだろうか、これがかなり厳しい！まんまと載せて、潰してしまったなんてことにでもなったら、あと味が悪い。いやまてよ、若者は、発想が柔軟で、エネルギーもある。年寄が心配することではないかもしれない。任せてしまえばそれなりに上手くやっていくかも知れないではないか。そんな考えも頭をよぎりますが、踏ん切りがつかないまま時だけが無為に過ぎていきました。そんな時、息子が「母さんの跡を継いでもいいかなぁ」と言い出したのです。予想もしない申し出にびっくり。息子に跡を継がせるなんて思ってもみなかったのです。「ホンマにやる気?」「母さんさえよければ」「うーんムム・・」

思いもかけない展開になってきました。理由はあえて聞かないことにしました。いい年をした大人です。それなりに思うことがあったのでしょう。彼は数か月かけて勤務先の社長を説得し、半年後に退職して我施設の職員になりました。もちろん見習いです。その後試験を受けて保育士資格をとりましたが、自分の子育て以外に実体験がないのも心配で、保育所実習にも行ってもらいました。広い目で子どもを看てほしい。それと、ベテラン保育士さんから現場で学ぶことは多いはず。大勢の子ども達の中で、一人一人の子どもにどう接しているのか、集団の遊びを通して、子どもは生き生きとどんな表情で、なにをして、どう成長していっているのか、学んでほしいことはいっぱいあり、そしてなによりも同じ世界の人たちとつながって欲しいという親心です。しんどくても必ず未来の支えになるはず。その意味を息子は理解し、頑張って乗り越えてくれました。

新しい出発

息子が加わってから、私たちの仕事への取組み方も少しずつ変わってきました。もうすぐ傘寿を迎えるパートナーは、早朝の電話番と受け入れが主な仕事になり、午後からは好きな歌の出前ボランティアで施設訪問を楽しんでいます。本当に彼らしい第三の人生です。

私は食事づくりが主な仕事になり、あとは保育補助です。保育は息子が中心になってやってくれるので、身体の負担はかなり減りました。それに息子がこんなに子ども好きだったとは意外な発見でした。「お兄ちゃん先生」と呼んで子どもたちが慕うのです。これはやはり嬉しいことです。

これから私がやるべきことは、息子がこの仕事を続けていけるよう、環境を整え、道をひろげておくことでしょうか。これはあとを譲るものの責務だと思うのです。それでまずはアクセスしやすいホームページ作りを業者に依頼しました。必要な投資は惜しんではいけないと思うので、これは少しずつ功を奏しています。　次に機会があるごと

に研修の場に送り出すこと。せっかく根付いた根を太らせてやらないと申し訳ない。彼の人生をつぶしてはいけないと心から思うのです。人生の途中から全く違う職に転職した者への配慮はそれなりに必要だと思うので、これを親の過保護だとは思っていません。

ライバルにどう対抗する!?

いままでは他の施設は病後児施設でしたので病児を預かる我施設のライバルはいませんでした。ところが数年前から市の補助を受けている施設に病児を預かるところが出てきました。おもしろいことにどの施設も、開設の前に、我施設に見学にみえていて、こちらも好意的に対応しています。仲間が増えることが嬉しかったからです。安くて病児を預かってくれる施設を、多くの人が待ち望んでいるのですから。利用料が高くて、我施設が使えない人たちのことが気がかりでしたので、そうした施設の出現は大歓迎でした。

ところが、その中の一つの施設が強力なライバルとして、我施設を脅かし始めました。会員数が減ったわけではありませんが（むしろ会員は少しずつ増加傾向)、日常の利用者は 3 割近く減りました。なにしろ、料金が安く、病院併設なので安心なのでしょう。それに預かる子どもたちの数が多いのです。それでもキャンセル待ち。申し込んでも、なかなか順番が回ってこなくて、どうしょうもない時にうちを利用するというふうに、二股をかける利用の仕方が定着してきたのです。

もちろん、子どもサポートがお気に入りで、うちしか使われない会員さんもいらっしゃいます。古い会員さんは、子どもが馴染んでいて、「子どもサーポートに行きたい」と子どもが言ってくれるようです。ありがたいことです。でも 3 割減は経営上かなりの打撃です。

しかしよく考えてみると、会員数が減っていないということは、急なときのお迎えと、いつでも受け入れてくれるという安心は確保しておきたいということでしょう。うちとしては、会員が多くて日常の利用者が少ない方がじつは有難い。少ないスタッフで、一人の子どもにじっくり向き合え、会費はしっかり入ってくるということですから。これはむしろ**ラッキー**なことではないですか。
そう考えると、これはライバル関係ではなく、共存関係ということになります。相手が分かって、こちらの立ち位置もはっきりしてきました。

補助金を貰っての経営は？

さて、遊び心で、補助金を貰っているところの経営はいったいどうなっているのか好奇心もあり調べてみますと次のようでした。

最もてごわいライバルさんだと思っていた施設は、一日 10 人以上預かっているようなので、少なくても年間 2000 人以上看ていることになります。いつも予約でいっぱいで、キャンセル待ちが多いようなので、これより少ないことはあり得ません。仮に 2000 人とすると補助金は

基本額 240 万円＋2190 万円＝2430 万円となり
これに人数分の診察代が加わりますので、
さて、いくらになるのでしょうか？いずれにしろかなりの収入になるでしょう。

もし、子どもサポートＨ＆Ｋが補助金をもらったとしたら、（あり得ないことですが）次のようになります。

補助金を受けた方がずいぶん得な計算になります。一日の定員を 4 人にするだけで補助金 1400 万円が手に入りますから、これはもうダントツで補助金組が有利ですね。でも私たちとは理念が異なるので、お互いに違うやり方で、すみわけをするしかありません。こうして整理してみると目標金額も明確になりました。面白いものです。

最近うれしいことに、一度離れたお客さんがボチボチ帰って来始めました。やはり、急に仕事を休むことが出来ない職種の人にとっては、キャンセル待ちというのはつらいものがあります。精神的にイライラするのは当然です。それと病気の時ぐらい子どもをゆっくりさせてやりたいという親心です。泣き叫ぶ子どもたちが大勢いる中では、眠れないですね。

先日こんなことがありました。他府県に引っ越しされるという方がご夫婦で挨拶にお見えになり、引っ越し先には探したけれどこのような施設がなく、ここでお世話になったことがいまさらながらにありがたく、心置きなく働けましたことお礼申し上げますとおっしゃいました。なんとご丁寧な方でしょう。そんなにも喜んで頂いていたなんて涙が出るほど嬉しかったです。

私たちの施設は、ただの預かり場ではない。人と人が繋がっているということ。愛されているのですね。これがいちばんの強みですと胸を張ってこれからも仕事をしていきたい。

それから出来ればもう一人、息子と共同経営してくれる若者が参入してくれればこんな有難いことはありません。

今の経営方針を守りながら、今一つ、なにか光るものをプラスできれば未来は必ず拓けるという確信に似たものが私のなかに湧いてきています。

ラホヤ村通信

（６）

高垣愉佳

１．口説き文句あれこれ

歌を使って発音練習するクラスで、歌の歌詞に「あなたは私の輝ける太陽だ。」とか「あなたは私のあまーいはちみつだ。」とかいう日本語に訳すとどないしようもない歌詞がいっぱい出ていた。先生が「皆さんの国ではどう表現しますか？」と聞いて、皆口々に「はちみつ」「キャンディー」「角砂糖」とか言ってて、日本人だけが発言しなかった。先生がもう一人の日本人に「日本ではどう言うの？」と聞いたら、彼女は「日本人は言わない」と答えた。先生があの手この手で日本でどう表現するのかを聞き出そうとしたのだが、彼女は「日本人は言わない。」しか言わなかった。そうしたら、スペイン人が「日本人はロマンスに欠けてるのよ。」と言い出して、私は危うく無礼打ちにしてしまいそうになった(笑)。先生が「本当に日本ではそういうこと言わないの？ゆかにも聞いてみよう。」と話を振ってきたので、「本当に言いません。」と答えたら「じゃあ愛する者を呼ぶとき、例えば旦那とか子供とか、どう呼ぶの？」と聞いたので「名前で呼びます。日本でそういう言い方をしない理由は多分日本では甘いという表現はあまりいい意味ではなくて、悪い意味があるからだと思います。」と答えたところ、先生が「なるほど。わかった！これは文化の違いに起因するんだ。」と言って日本の文化について皆に説明しはじめた。

先生の説明は大きく間違ってはいなかったように思うのだけど、結論が面白かったので紹介します。「皆知ってるかどうかわからないけどね、日本ではほとんどの人が７０歳以上まで生きるんだよ。中には８０歳、９０歳まで生きる人もいるんだ。これは奇跡みたいだと思うだろう？多分ね、日本人が長生きする理由は食文化にあると思うんだよ。ゆかは日本では甘いという表現にいい意味は無いと言っただろ？多分日本人は健康的な食事を好むんだよ。だからきっと甘いという表現がいい意味を持たないんだと思う。アメリカ人は甘いものや油っこいもの何でもいいからたくさん食べるだろ？多分スペインもそうじゃないか？でも日本人は違うんだ。日本人は体にいいものを少しだけ食べるんだよ。皆、寿司は知ってるよね？寿司ってすごく体にいいよ。そして小さくて、ほんの少ししか入ってないだろう？めっちゃでっかい皿に山盛り盛られてる寿司って見たことないだろう？そう、きっとあれが日本の文化なんだよ。う～ん、そうだなぁ～、甘いが良くない意味だったら、じゃあ日本人はあなたは私の寿司ですって表現したらどうだろう？寿司は日本でもいい意味だろう？体にいいし、美味しい

し、悪い意味は無いだろう？寿司が嫌なら米でもいい。米も体にいい。あなたは私の米です。この表現ならいいだろう？」

確かに寿司も米も悪い意味は無いし、体にもいいだろう。確かにコメは主食で必要欠くべからざるものではあるけども、「あなたは私の米です。」とか言われてもなぁ・・・と苦笑した。確かに口説き文句としてものすごく新鮮ではあるけども。こんなところにも文化の違いが出て来るのかと興味深かった。

２．口癖(お気に入りの表現)

英語でも、皆それぞれ良く使う言い方の癖があるという事に気づいた。私の場合は「so」と「maybe」。日本語でも京都人の会話は「あんな」で始まって「多分な」で終わると言われているので、それが反映されているのかもしれない。「so」と言っている一瞬考える時間が出来るから便利でついつい言ってしまう。「so」は大抵の話に入れても意味が不自然にならないし、「えー」や「あー」よりも邪魔にならない。英語の会話の途中で「あー」と言われると、頭の中では「are」が出てきてけっこううっとうしかったりもする。

これは私の口癖で、口癖は本当に人それぞれだ。枕詞のように「recently（最近）」と言う人も居るし、何でも「also（～も）」と言う人も居る。ちなみに「recently」が口癖の人の日本語の口癖は「最近どうよ？」なので、英語でもそのまま見事に癖が反映されている。違う言語だけれど、同じ人間が喋っているのだから当たり前と言えば当たり前なのかもしれない。

スペイン語語圏から来た友人が良く使っていた口癖、「In my case,・・・・・・・・・（私の場合はね、・・・・・・・）」この喋り出しは何かを主張する時にとても使えるのではないかと思った。相手の意見も尊重しつつ、「私の場合は○○でした。」と意見を述べる事が出来る。聞いていて、嫌な感じがしないなぁ～と思った。過度の一般化を避けることが出来て、あくまで自分の経験に基づくとみたいな感じを出せるんじゃないかと思う。

逆にあまり頻繁に使わない方が良いのではないかと思った口癖は、「You mean・・・？（あなたが言ってるのはこういう意味？）」という表現。自分の聞き取りに不安を感じる時など、相手に内容確認をしたい時にはとても使える表現なのだけど、これを毎回繰り返し言われるとかなり嫌な感じを受ける。関西弁風に訳すと、「つまりあんたが言いたいのは～ってこと？」と繰り返し言われているような感覚だ。もちろん相手の言うことを正確にキャッチしようとしてる確認作業とも取れるのだが、あまりにも繰り返し言われると意図するしないに関わらず、「あんたの英語や言ってることよく分からないよ」というメッセージを送ることになってしまうように思う。

英語の口癖と言えば、アメリカの映画やアニメでよく耳にする「fucking（くそ！）」。実は西海岸、特にカリフォルニアではほとんど耳にしたことが無かった。珍しく「fucking」と言っている人が居るなぁと思っていると、大抵の人がニューヨークや東海岸から来た人だった。アメリカ人にこの件について聞いてみたところ、確かにニューヨークの人の口癖みたいなものかもしれ

ないと言っていた。

私のヨガの先生の口癖は「タラ～ン」だった。身体の構造や力のかけ方を説明した後、ポーズを取る際に必ず「タラーン」というのだ。難しいポーズをする際などに「タラーン」という音を聞くと力が抜けるので、一体何なんだろうか？やめてほしいなぁーとずっと思っていたのだけれど、その後レストランのウエイトレスさんが料理を出す際に「タラーン」と言って料理を出すという場面に遭遇した。聞くなら今だ！と思い、一緒にレストランに行っていたアメリカ人の友人に「あのタラーンというのはどういう意味？」と聞いてみた。アメリカ人の友人の説明によると、「タラーン」をよく使うのはマジシャンで、手のひらに黒い布を被せてそこから鳩を出したりする時に、「タラーン」と言いながら黒い布をはがすのだというような説明だった。つまり日本語風に言うと「ジャジャーン」に相当するのだなと思った。確かに、ヨガの先生が言っていた「タラーン」を「ジャジャーン」に変換してみると、状況としっくりきた。
口癖はなかなか奥が深い。

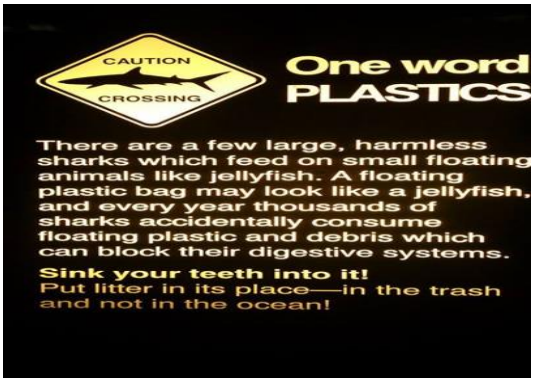
３．水族館あれこれ

サンディエゴには有名な水族館が２つある。一つは、シーワールド。ここはアメリカでも有名な大きな水族館で、サンディエゴの観光名所の一つとなっている。大きなシャチのショー（シャチの人権ならぬシャチ権を尊重する為に最近中止された）でも有名だ。ちなみに、このシャチはこれまでに指導員を三名くらい天国に送った事があるなかなか凶暴なシャチという事でも有名である。

もう一つの有名な水族館はとても小さな水族館で、バーチアクアリウムという。スクリップス海洋研究所付属の水族館で、展示の仕方が非常に面白い。

例えば、青白く光る物体のこの写真↑。まずこの水槽の前を通る。

次にまた青白く光る物体↑、この水槽の前を通る。

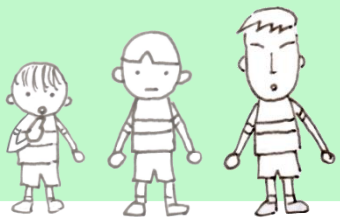


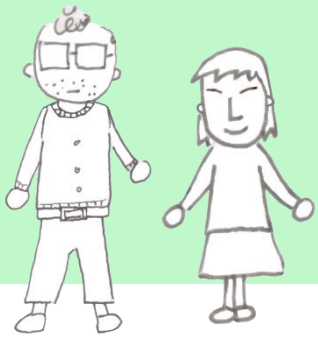
そして最後に、説明書きのボードの展示にたどり着く。初めの展示はナイロン袋、二つ目の展示はクラゲ、そして三つ目の説明はクラゲと間違えてサメがナイロン袋を飲み込んでたくさん死んでいますという現状を伝える説明書き。

当たりさわりの無いくらげとナイロン袋の展示例でお伝えしたが、その他にも国際問題に発展しているような問題に関しても臆することなくこのような形で展示されている。事実と事実を展示して、そこから問題意識や問いを投げかけてくる。ビーチの近くにある水族館なので、大人だけでなく子供達もたくさん遊びに来ている。小さいころから、遊びを通してこういうものに触れる事と触れない事の違いを想像せずにはいられなかった。

知的発達障害の家族の日々5

大谷　多加志





サッカー

ここ数ヵ月、６歳の息子の野球へのはまり具合が激しい。テレビでナイターを見ていたのが９月頃、10月にペナントレースが終わる頃にはタイガースの打順と先発ローテーションは把握済だった。野球が共通項になって仲良くなった友達もいるようで良いのですが、家でも隙があれば「野球しよう」とせがまれ、疲れ切って帰宅した日にはなかなか厳しいお誘いになっています。

そんな中、ふと思い出したのは、弟がサッカーをしていたこと。弟は中学校までは地域の学校の支援学級に通い、高校からは支援学校の高等部に通いました。その支援学校に、サッカー部があったのです。もともと、サッカーに関心があった風は全くありません。はっきりと経緯を聞いてはいないのですが、相性のよかった担任の先生がサッカー部の顧問だったので、それが一番の理由だったのではないかと思っています。

サッカー部に在籍している間、弟の体に起こった変化があります。お腹がへっこみました。脚は一回り太く、たくましくなりました。一度、何かの機会に学校で練習試合をしているところを見たことがあります。ボールが移動すると、敵味方とも選手の大半がいっせいにボールを追いかけます。結果、ボールに対する選手の密集度がすごく、ボールがどこにあるのか遠目からは全くわかりま

せんでした。得点が入った時も、結局最後に蹴ったのは誰なのやらでしたが、そんなことはお構いなしに盛り上がり、楽しそうな空気でいっぱいではありました。終始そんな展開で、20 分ハーフで前後半と試合をするので、運動としては 100m ダッシュをひたすら繰り返しているようなものだったのかもしれません。お腹がへっこんだことも、すごく納得がいきました。

そんなサッカーも卒業すると機会は一気に無くなりました。卒業当初は、OB で集まったり、仕事場と学校が近かったので仕事上がりで OB として顔を出し、一緒に練習をしたり、後輩にジュースをおごって先輩風を吹かしたりとそれなりには関わっていたようです。しかし、卒業から 2 年経つと現役の頃の後輩もいなくなり、徐々に足が遠のいていきました。同期の OB の集まりも、メンバーそれぞれの事情（新しい仲間や、転居、不調など）により数年で終わりを迎えました。

このこと自体は自然なことだったのだろうと思います。ただ、ふと振り返ってみると、あれほどサッカーをしていた時期でも、部活動以外の場で弟がサッ

カーに興味を示している様子を見たことは、なかった気がします。例えば、テレビでサッカーの試合を観ているとか、サッカーの練習を家でもしようとするとか、何か変化があってもよかった気がしますが、特に目立った変化はありませんでした。

そう思うと、サッカーは、人に支えられて楽しめていたものだったのでしょう。先生や友達、後輩がいることがまず第一で、活動の共通項としてサッカーがあったということなのだと思います。仕事が終わってから、電車を見に行く他には、これといって好きなものを見つけられなかった印象がある弟。お腹も、ポッコリと出てきていました。力と時間をいくらでも注げる「好き」が見つかっていたら、帰宅後や休日の過ごし方も、少し違ったのだろうか、と考えてしまいます。

団先生の「木陰の物語」に「好きになる力」というお話があります。周りからきっかけを与えられることはあるのでしょうが、最終的に無条件で「好き」と思うことは、自分の力でしかできません。障害をもつ成人期の人たちの「余暇」が話題になることも少なくありません。「好き」がどのように育まれてきたのか、結果として目に見えるのは大人になってからなのかもしれません。

対人支援点描（４）

「入院に頼らない精神医療③」

小林　茂（臨床心理士）

1. はじめに.

前回、浦河の実情を例にして、国の社会保証制度として住環境を整えることと生活保護費の不均衡について話題にした。

基本的人権と生活保障は、生活保護の家賃扶助となって保障されているといえば保障されているといえる。けれども、地域における実態は、地方の田舎だから家賃が都会よりも安いということはない。こうした実態を浦河の実情に見たのだが、今回は、その続きである。

現在、筆者は浦河べてるの家という社会福祉法人で包括型共同生活援助事業所べてる生活サポートセンターという部署の責任者をしている。思うところがあって、次年度の３月で退職することにした。理由については、積極的理由、消極的理由いろいろあって１年くらい悩んで総合的に決断を下した。この場は、その理由について披露する場ではないので仔細は取り上げることはない。普通以上の明るさの陰にそれ以上の暗闇があることもある、と言えば十分と思う。こうした話題は別として、障害福祉サービスにおいて居住系サービスに比べ日中活動系のサービスの方が人員配置基準やサービス費という報酬単価が高く設定されている問題は取り上げなければならない話題に思う。こうした問題に加え、法人運営の有り方が重なり自分の限界を感じたといってよい。

2. 居住系福祉サービスに対する行政への疑問

まず、浦河の事業所を具体例として挙げたい。

〇定員 30 名の就労継続支援Ｂ型事業所の場合、

就労継続支援Ｂ型サービス費＜Ⅰ（人員配置基準 7.5:1）＞519 単位となる。

これに、目標工賃達成加算、福祉専門職配置加算など各種の加算が上乗せされる。

対して、

〇定員 62 名の包括型共同生活援助事業所、棟数 8 か所を比べてみたい。その単価は以下のようになる。

包括型共同生活援助＜Ⅱ＞（人員配置基準 5:1）

区分 6	617 単位	区分 3	334 単位
区分 5	501 単位	区分 2	244 単位
区分 4	420 単位	区分 1 以下	212 単位

これに夜間支援体制加算などが上乗せされる。

精神障害者の障害支援区分とグループホームの入居者層について双方のイメージがつく方がいたら、その方は精神障害者の地域支援の現実をよく御存じの方ではないだろうかと思う。

上記の包括型共同生活援助の支援区分では、区分なしから区分 6 まで想定しているが、精神障害者の方で障害支援区分 4 以上の方の場合、多くは退院が難しい方とみなされる状態にある。障害支援区分 3 は地域ごと誤差があるかもしれないが、地域で暮らしていくことが認められるか否かの境目あたりにある。筆者が精神の障害で障害支援区分 6 の方には出会ったことがないが、精神の障害で寝たきりのレベルになるのだろうか。その場合、そもそもグループホームという選択はありえない。

浦河のグループホームの入居者の支援区分の中心はだいたい 3～4 の方が中心層となる。平均年齢は 55.5 歳ほどである。最近では、高齢化が進み、介護保険の対象となった方々を障害福祉の枠組みの中で支援している。

そこで、障害支援区分 4 がついたとしても、単価は 420 単位で就労継続支援 B 型の 519 単位と約 100 単位の差があるのである。同一人物が生活介護事業に登録したとしても、同様に単価の開きは大きい。偏見かもしれないが、就労系に比べ、居住支援系の加算は使えるものが少ない。

また、東京に近い I 市から居住地特例で浦河のグループホームの入居されている例があるのだが、グループホーム運営のための補助金、利用者の家賃の補助金などが設けられている。このように地方では夢のような独自の補助があるところもある。こうした独自の補助が見込めない現実がある。

最近は、このような単価の差に加え、消防法の改正によってスプリンクラー、自動火災報知器など消防設備の強化といった具合で、民間の事業所が持ち出しで負担する費用が増大している。

これでは、新しくグループホームの整備を始めようとする事業所がなくなってしまう。

採算性が悪いため管理者以外全員を最賃に近いパートで揃えるほかない実情である。

（結果として、筆者の勤め先では、事業収入の収益性が悪いため居住系の事業所の事業運営が後回しにされ、日中活動が対外的な宣伝効果も高いということで優遇される法人経営となっている。筆者は、こんな運営に嫌気をさしたこともある。全国各地でべてるの講演会が企画され、日中活動の職員が全国に随行し発題するが、観客は何を期待して観るのか観客側にも成熟が必要に思う。そうでなければ、ただ珍しいものを観に来るお客との違いは、どこにあるだろうか？）

まとめ.

入院に頼らないためには、それに代わる生活保障が必要となる。そもそも病棟自体が生活保障をする場ではないのだが、病棟が本来の目的である治療する環境としての病棟であるためにも、地域の居住系のサービスが必要なのである。（＊病棟の精神病院病棟転換型施設の問題は、今後、扱いたい。）

報酬単価の設定自体は、筆者の責任の負うところではないが、行政の方は、居住系サービスがただ食べて寝るだけの支援であると簡単に済むと思っているのだろうかと勘繰ってしまう。

しかし、障害を負った方が働くにせよ、人や社会との関係を再構築するにせよ、基本的な生活を保障することが出発点であると確信している。障害者を就労に結びつけたいという行政の方策が本当に実りのある成果を生み出すためにも、居住系のサービスの強化が必要となる。

リカバリーにも、建物の基礎部分となる生活保障に当たる部分が大事である。

生活保障という生活の営みの保証が、入院に頼らない精神医療の鍵であることを思う。

「あ！萌え」の構造：序論

（3）

応用人間科学研究科　齋藤清二

13.「萌え」とよく似ているが区別すべきものの候補（2）

前回、「萌え」と似ているが区別するべきものの候補の第一として、「性欲」を取り上げ、なぜそれを区別すべきか、ということについて論じた（…結論は歯切れが悪かったが…）。そして、第二の候補として「恋愛」を取り上げると予告した。え、そんなことちっとも覚えていないって？ いやそれならそれでいっこうに差し支えはないですよ…で、予告しておいて言うのもなんなのだが、「恋愛」と「萌え」が異なるものかどうかを論ずるのはかなり難しいと思っている。というか、ついさっき気づいたのだが、なんと私はこの連載の冒頭（斎藤，2016，対人援助マガジン，vol.21：181-193）で、すでに以下のように書いてしまっているのを発見した！（←他人事みたいに言うな）

もちろん、「魅惑される」という言葉で扱おうとする現象を外延設定（扱う範囲を決めること）しておくのは大切だが、けっこう難しい作業だ。ここで扱いたいものは、もちろん特定の対象に限定されるものではないので、かなり広範（欲張ればあらゆる対象）にあてはまるような外延を設定したい。

異性を対象とする場合の「恋愛」という現象は典型例として当然含まれるが、「一目惚れ」とか「憧れ」とか「胸キュン」などといった、もっとずっと広範な現象を含むものである…。(p182)

つまり、ここで私は、「恋愛」という現象は”典型例“として「萌え」の中に含まれるということを、すでに明言してしまっている。それにもかかわらず、恋愛を「『萌え』とは区別すべきもの」として論じようというのだから、これはどうみたって矛盾そのものではないか。この事実ひとつをとりあげてみても、この「あ！『萌え』の構造」なる連載が信用できないものであり、その著者が実にいいかげんな人間であるということは一目瞭然ではない！…ということでこれ以上論考を続けることは即刻止めるべきなのだろうか？

もちろん、そうではない（と居直ってみる）。実のところ、この一見区別できそうもないことをあえて区別してみようとすること、さらにはそのような作業をすることの意味を詳細に論じようとする試み自体が、この課題の複雑さと困難さだけではなく、この課題の大切さそのものを示しているのである。え、何を言っているのか分からないって、そう、そのくらい難しいことなのですよ、これは。そこで、本論に入る前に（…とまたまたもったいぶってみる）、まず、「萌え」と「恋愛」がいかに深く結びついているかについての例を示してみたいと思う。

みなさんは、モーツアルトの最後のオペラ作品である「魔笛」をご存じだろうか？ この作品は、1971 年にウィーンで初演された全二幕のジングシュピール（音楽の間を台詞でつなぐ形式のお伽噺風の歌劇）であり、200 年以上も全世界で上演され続けている人気オペラの一つである。

「魔笛」の物語の主人公は、タミーノという架空の国の王子である。彼は旅の途中で大蛇に襲われ、危いところを、夜の女王の三人の侍女によって救われる。三人の侍女から夜の女王の娘であるパミーナの美しい絵姿を見せられたタミーノは、一目でパミーナに激しい恋心を抱く。そこに夜の女王が登場し、娘のパミーナがザラストロという極悪人に誘拐されてしまったことを切々と歌い上げ、もしタミーノがザラストロを倒してパミーナを救い出すならば、パミーナは永遠にタミーノのものになると伝える。なお、この夜の女王のアリアの雰囲気を味わいたければ、著名なオペラ歌手による歌唱が YouTube などで簡単に聞ける。その中でも著者としては初音ミクによる以下の歌唱をお勧めしたい。（だまされたと思って聞いてみてほしい）
（https://www.youtube.com/watch?v=glYQ_xjlycI）。

話を戻すと、夜の女王のアリアに感動したタミーノは、パミーナを救い出す決心を固め、侍女から動物や人間の心を操ることのできる「魔笛」をもらい、パパゲーノという鳥刺しを従者と

してザラストロの神殿を目指すことになる。この物語はこの後実に複雑な展開を示すことになるのだが、ここではそれには触れない。

ここで重要なことは、タミーノは、夜の女王の娘パミーナに会うどころか、それまで一度も想像したことさえなかったのに、その絵姿を一目見ることによって、典型的な「恋愛」に陥ったということである。それでは「絵姿」とはなんだろうか？ もちろんこの時代には「写真」も「動画」も「DVD」も存在しないので、それに代わるものとして「肖像画」がはめ込まれたロケットやペンダントといったものが「絵姿」と呼ばれたものだったわけである。いくら精密に描かれていても、絵姿はあくまでも絵画であり、別の言葉で言えば「イラスト」であり「画像」であり「イメージ」である。そう、もう察しのよい読者はおわかりと思うが、要するに、タミーノは「二次元画像」に恋をしたわけである。この時タミーノの心というか全身というかにわき起こった感情体験は、まさしく典型的な「萌え」と区別できないだろう。

実はこの時代、このような現象（現代であれば“二次元萌え”）は珍しくなかったと思われる。もちろん小説や劇やオペラ作品の中で描かれている出来事が、その時代の多くの人が現実として体験することと一致していたという保証はない（往々にして、このような芸術作品のなかでは、現実そのものというより、現実のあり得べき姿＝理想像が描かれる）。しかし、それを差し引いても、一人の人間が一枚の「二次元画像」に身も心も奪われてしまうという出来事は、この時代の人々にとって“納得できる”ことであったことは間違いないだろう。実際のところ、オペラにしても物語にしても、このような「絵姿」に代表される二次元イメージに触れることをきっかけに、深い恋愛に陥り、その人間のその後の行動が全く変わってしまうというストーリーは非常にたくさんある。これはおそらく洋の東西を問わない。

男女の立場を逆にした物語の典型としては、ワーグナーの「さまよえるオランダ人」が有名だ。このオペラでは、ゼンタという若い清純な娘が、呪いをかけられたために幽霊船の船長として永遠に海を彷徨っているという伝説の主人公「さまよえるオランダ人」の絵姿（これはおそらく壁に掛けられたかなり大きな絵画と思われる）に魅せられてしまう（物語の詳細と結末はネタバレになるので省略）。

こういった“二次元萌え”の物語に加えて、“2.5次元萌え”とでもいうべき、現代の“フィギュア萌え”に匹敵する物語もある。最も有名なものは、ギリシア神話にみられる「ピグマリオンとガラテア」だろう。この物語の主人公のピグマリオンは、若くて情熱的でまじめな彫刻家なのだが、その極端すぎるまじめさゆえに、現実（三次元？）の女性を嫌悪している。しかし彼は自分の熱情に耐えきれず、ガラテアと名付けた彼の理想を具現した美しい女性の彫像を自ら作成し、それを愛するよ

うになる。この辺り、美しい物語ととるか、キモい話ととるか微妙なところではあるが、結局のところ、彼の情熱を理解し，評価した美と愛の女神アフロディテの計らいにより、ガラテアの彫像は生命を吹き込まれ、現実の女性となり、ピグマリオンとガラテアは結ばれてめでたしめでたしとなる。このピグマリオンの物語に象徴される「自分の理想とする異性を自らの手で創造する」というモチーフは、バーナード・ショウにより小説化され、有名なミュージカルとして舞台化された「マイ・フェア・レディ」の原作となった。

ここまでいくつかの物語の例を挙げてきたが、これらの物語に共通しているのは、絵姿という二次元画像や、彫刻などの2.5次元イメージとの接触が、強い恋愛感情を惹起し、主人公のひたむきな行動を誘発するということである。この引き金を引いている現象は「萌え」と表現しても決しておかしくない。二次元の萌えキャラに対して「オレの嫁～！」などと叫ぶ輩がいるのもその現れであろう。しかし、それが現実的な意味での恋愛に直結するか、ましてやそれが成就するかどうかについては単純には言えず、それらの物語は複雑な様相を呈していると言わざるを得ない。

タミーノは与えられた複数の試練に耐え抜き、最終的にパミーナと結ばれるが、成就されるのは精神的な、あるいは神聖な意味での結合であり、そこには肉体的な要素はあまり想定されていない。その代わりに「魔笛」においては、従者のパパゲーノがパパゲーナという伴侶を得て、こちらはたくさんの子供を授かるという形で、肉体的な部分を引き受けている。「さまよえるオランダ人」のゼンタは、オランダ人への愛のために、現実の婚約者であるエリックを失ってしまう。ここでは精神的な愛と身体的（世俗的）な愛との矛盾・葛藤が、最終的に悲劇へとつながるというストーリーになっているように見える。マイ・フェア・レディの主人公である独身主義者のヒギンズ教授は、無教養な花売り娘であったイライザを自分好みの淑女に仕立て上げることに成功するが、結果的に自律した主体性を獲得したイライザはヒギンズの元を去ってしまう。このように、「萌え」と「恋愛」は密接な関連をもっていることは間違いがないが、それは決して単純に同一のものと言えるわけではなく、「萌え」と「恋愛」の“関係”は複雑かつ多義的な様相を呈しているのである。

さて、色々ごちゃごちゃと述べてきたが、それでは結局のところ、「萌え」と「恋愛」は異なるものなのだろうか、それとも異なるものではないのだろうか？　これでは結論が出ないではないか。なんでこんなにごちゃごちゃと色々考えなければいけないのか？　たぶんその答えは「この問題を考えることが、萌えの本質は何かという問題に答える鍵になるかも知れない」ということなのである。もったいぶっていないで、次節へ進むことにしたい。

14.「カップ焼きそば現象」をめぐって

唐突であるが、「カップ焼きそば現象」という概念をご存じだろうか？ カップ焼きそば現象とは、漫画「みなみけ」（アニメでは「みなみけ おかえり」第１話）にて、主要な登場人物の一人である天才哲学少女の小学生、南千秋が提唱した概念である。この現象については、インターネット上でも多数言及され、その後色々な概念の変遷があるようなのだが、一応信頼できるオリジナルの定義を描写するとおおむね以下のようになる（らしい）

「焼きそばを食べたい時」と「カップ焼きそばを食べたい時」は違う。これらは既に別の食べものである。「カップ焼きそば」は「焼きそば」に近いものだが、焼きそばに勝ってもいないし負けてもいない。これを「カップ焼きそば現象」と呼ぶ。

そして、南千秋によれば、このような現象は“日常的にある”らしい。さらに原作のアニメ（http://gyao.yahoo.co.jp/player/00252/v10080/v0993400000000542672/）においては、「カップ焼きそば現象の具体例として、以下の３つが挙げられている。

１）「焼きそば」に対する「カップ焼きそば」
２）「くま」に対する 「ふじおか（くまのぬいぐるみ）」
３）「新茶」に対する「ハルカが入れたお茶（実は古いお茶）」

しかし、この三つの具体例の共通点は何かという問いに答えるのは難しい。多くの者にとっては意味がよく分からない。あるいは微妙に話がズレているように感じられる。したがって、その後のインターネット上の議論も焦点がぼけてしまい、現在では、カップ焼きそば現象は「似て非なるもの」あるいは「イラストなどにおいてもともと別のキャラクターが非常に似ている容姿で描かれている」ことなどを指すような意味で用いられていることが多いらしい（このへんの詳しい事情にはうといので筆者にはよく分からない）。

当然のことではあるが、読者は、この「カップ焼きそば現象」の話と、「萌え」と「恋愛」の話に、どういうつながりがあるのか疑問に思うだろう。そう、その「つながり」ということが重要なのである。筆者が「カップ焼きそば現象」にこだわるのは、決して「みなみ家の南千秋」に萌えているからというような理由からではないのだよ（げふん、げふん）。この天才少女が提示した洞察の中には「似ているけれども異なるもの」「異なっているけれども似ているもの同士のつながり」などのごちゃごちゃした「関係」を考えるための、重要な示唆を含んでいると思うからである。

話を「焼きそば」と「カップ焼きそば」に戻してみよう。「焼きそば」と「カップ焼きそば」はどちらも、基本的には何らかの実体を”描写”している”ことば”であると考えられる（ただし「言語」の機能のうちで”実体を描写している”という機能は実はごく一部に

過ぎないのだが、ここではこの問題は置いておく）。

私達はこれらの言葉が描写している具体的な実体を思い浮かべることができる。例えば「焼きそば」ということばからは、縁日の屋台の鉄板の上で良い匂いを漂わせながらジュージューと音を立てている「焼きそば」を思い浮かべる。「カップ焼きそば」からはプラスチックのカップに入って、熱湯を注ぐと三分で食べることのできる「UFO」あるいは「ペヤング」といったものを思い浮かべる。これらの「UFO」や「ペヤング」は、決して鉄板の上で焼かれてはいない。そういう意味では、これらは「焼きそば」ではない。それは「焼きそばと似たもの」として開発され、販売され、社会に定着したものとなっているかも知れないが、鉄板の上でジュージュー音を立てている「焼きそば」とは異なるものである。さらに南千秋がいみじくも言ったように、我々が（少なくとも若い世代の多くの者が）、「焼きそば」を食べたい時と、UFO を食べたい時は異なった時である。

よって、**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、“同じものであるとは言えない”**というのが一つの結論となる。

しかし、別の方面から考えてみよう。ここで注意しなければいけないのは、「焼きそば」も「カップ焼きそば」も「焼きそば」という同じ”ことば”を含んでいるということである。字義通りに解釈するならば、「カップ焼きそば」は「焼きそば」の一種であり、「焼きそば」の一特殊型であると考えるのが普通ではないだろうか。つまり「焼きそば」の中に「カップ焼きそば」や「ソース焼きそば」や「固い焼きそば」や「うちのお祖母ちゃんが作ってくれた焼きそば」などがあると考えるのである。これらの「多様な個別の焼きそば」が集合して「焼きそば」という“一般的なもの”を構成するわけである。もともと「カップ焼きそば」はおそらく「焼きそば」の代用品として考案されたものだと思われるので、製法や食べ方や味などは異なっていても、そもそもは焼きそばの一種（つまり「焼きそば」というカテゴリーに包摂される概念）であるという考え方は、あながちおかしいとは言えないだろう。このような関係は「ラーメン」と「カップラーメン」の関係にも当てはまり、決して珍しいものではない。そうすると「焼きそば」と「カップ焼きそば」が全く別のものであるということは簡単には言えないということになる。

しかしここで、「カップ焼きそば」という名称を純粋に個別名称である「UFO」などに変えてみるとどうだろう。「焼きそば」と「UFO」は同じものだと言えるだろうか？ 両方に「焼きそば」という言葉を含む「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係よりも、「焼きそば」と「UFO」の間は遠いように感じる。しかし先ほどまでの論理から言えば、それは「名称」にだまされているだけであって、UFO は「カップ焼きそばの一種」であり、それは同時に「焼きそば」の一種であると言えるので、やはり「カップ焼きそば」も「UFO」も「焼

きそば」に包摂されていると言うことができる。

そうすると、ここでの考察からは、**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は“異なるものである”とは言えない**、という結論が導き出される。

さて、そうなると、「焼きそば」と「カップ焼きそば」とは同じものなのか、違うものなのかという問いへの答えはどうなるのだろうか？ ここで「オレは同じだと思う」「いやオレは違うと思う」と言ったところで、それは自分の好き嫌いを言っているだけではないだろうか。丁寧な論理的考察の結果は、以下のように言わざるを得ないのではないだろうか。

「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、同じものではないが、異なるものでもない。

え！そんなのおかしいじゃないか！二つのものが同じであって同時に違うなんて、それじゃ論理矛盾じゃあないか。そもそも同じものは絶対に違うものではないというのは、論理学の常識でしょ！ …と読者は言うだろう。その通りである。記号論理学的にはあなたは正しい、異なるということは同じでないということであり、異なるということは同じでないということである。非A≠Aであるのは常識であるから、「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、異なるか同じかのどちらかであって、両方とも成り立つなんてありえない。

しかしそれはあくまでも「記号論理的に言えば」ということなのである。ここを私達は良く忘れてしまう。現実に私達が体験する現象世界のありようは必ずしも記号論理に従うわけではない。

それともう一つ言い訳をしておこう。私は、**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、同じものではないが、異なるものでもない**、とは言っているが、**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、同じであり，同時に異なる**、とは言っていない。

ここは微妙なようだが、賢明な読者諸君にはこの違いはすぐおわかりのこととおもう。おそらくこれは、私達全てが使わざるを得ない日本語という言語（日本語だけかどうかは要検討）の不完全さのせいなのだ。つまり、多くの場合、ある言語記述（命題）において全称言明（全ての○○は△△である）と特称言明（ある○○は△△である）は区別されていないということだ。特にこれは肯定文の場合に問題になる。

「焼きそば」と「カップ焼きそば」は同じである。という文章から、私達は以下の三つのうちのどれか一つの意味を読み取る。

１）「焼きそば」と「カップ焼きそば」は（常に）同じである。
２）「焼きそば」と「カップ焼きそば」は（多くの場合）同じである。
３）「焼きそば」と「カップ焼きそば」は（ある状況では）同じである（＝同じであることがある）。

どのような読み取り方をしているか

は、通常言語化されないままで、私達はこのような問題を議論することが多い。だから多くの場合議論は噛み合わない。ちなみに、記号論理を前提にするならば、１）は真か偽かどちらかであるが、現実には真であることはほとんどない。２）は調べてみなければ分からず、３）はほぼ常に正しい。

これも余談になるが、医師の国家試験はマルチプル・チョイス問題（MCT）という形式で全問が出題されるのだが、これは基本的には一つの命題について真か偽かを問う選択肢の組み合わせである。この問題を作成するときには、「○○は必ず△△である」という選択肢（例：肺炎は必ず呼吸困難を伴う）も「○○は△△であることがある」という選択肢（例：肺炎は呼吸困難を伴うことがある）も作ってはいけないということになっている。しかし「肺炎は呼吸困難を伴う」という文章にすると、これは厳密には正解とも不正解とも言えないということになってしまう。不詳私もこの形式の問題を作らされる立場にいたことがあるのだが、作問には非常に骨が折れる。頭の良い受験者は、出題の内容に答えるための知識のありなしにかかわらず、文章形式だけから正解かどうかを導き出してしまうからである。自慢ではないが、私が医師国家試験に合格できたのは、この原則を読み解くことを身につけていたからである。

話を戻すと、二つの概念の異同を論ずる時、肯定文形式による記述を行うと、ほとんどの場合、現実を説明できないか、議論が混乱することになる。そこで、現実に即した言明は、二重否定文にならざるをえないのである。つまり、「○○は△△でないとは言えない」といった文章である。この形式の言明は、多くの場合、現実におこっていることを説明でき、少なくとも“間違ってはいない”のである。一番典型的な例は、「あなたの病気は癌でないとは言えない」といった言説である。このような言説は実は意味のないことを言っているかもしれないが、ほとんどの場合“正しい”のである。もちろん、このへんのところは、筆者自身かなりいいかげんなことを書いているので、話半分にしか信用してはいけないのだが、真実でないとも言えないからまあ良いのだろう。

初頭の議論に戻ろう。「カップ焼きそば現象」という概念の提唱がなぜ重要であるかというと、上記のような「ごちゃごちゃしているが、現実に何かを論じようとする時に、分かっていないと必ず混乱してしまうこと」について、私達が考えてみるためのよい例題を提供してくれていると思うからである。実は「カップ焼きそば現象」の類題である、「くま」と「くまのぬいぐるみ」の問題とか、「新茶」と「新茶だと勘違いされた新茶でないお茶」の問題については、さらに詳細な考察が必要になるのであるが、いくらなんでも、もう読者も飽きてきたと思うので、それは次回に譲る。本節で述べたかったことを再度まとめるとこうなる。

カップ焼きそば現象とは、“A と B は、同じものではないが、異なるものでもない”というＡとＢの関係を表すような現象である。

ここで、A＝萌え、B=恋愛をこの図式に代入して言い換えると、「萌え」と「恋愛」の関係は、以下のようになる。

「萌え」と「恋愛」は同じものではないが、異なるものでもなく、それは「カップ焼きそば現象」の一種である。

「萌え」と「恋愛」をめぐる問題が「カップ焼きそば現象」の一種であるとすれば、「カップ焼きそば現象」にあてはまる特質は、この問題にそのまま当てはまるということになる（だろう）。次のステップは、この両者の「関係」はどうなっているのかということを、「カップ焼きそば現象」の他の類題とも比較しながら論じていくことになるだろう。

え、だから結局どうだって言いたいの？その疑問はごもっともです。長くなったのでこの続きはまた次回に…ちなみに今日のお昼は焼きそばです(「実話」）。

海の向こうにでて見れば

（３）持病を治療する

石田 佳子

前々回の自己紹介でもふれた通り、私にはＣ型肝炎の持病があり、この治療が手詰まりだったことは、早期退職と海外生活を後押しする要因の一つでした。しかし、この数年間でＣ型肝炎の治療法はパラダイムシフトしたと言われるほど画期的な進歩を遂げています。Ｃ型肝炎の患者は国内だけでも約 150 万人、全世界に約 1.7 億人いると推定される（注１）ため、今回はＣ型肝炎の新しい治療法、日本と海外の医療や保険制度の違い、持病の治療が海外移住の落とし穴になり得ることなどについて綴りたいと思います。

Ｃ型肝炎という医原性の、ありふれた病

Ｃ型肝炎は血液を介してウイルスに感染する肝臓の病です。そのウイルスが発見されなかった 1989 年以前には、集団予防接種での医療器具の使い回し、輸血、血液製剤、手術などによって感染することが多かったため、国内感染者は 40 代以上に多いと言われています。また、このウイルスに感染するとその約 70％が慢性肝炎になり、その後約 20 年を経て肝硬変に、その後約 10 年を経て肝臓癌に移行するため、そうなる前にウイルスを除去することが必要です。しかし、潜伏期には自覚症状がないので本人が気づかないことも多く、日本には毎年 3 万人以上いる肝臓癌で亡くなる人のうち約 80％がＣ型肝炎のウイルス保持者であると言われています。なお、Ｃ型肝炎はそこに含まれるウイルス量や遺伝子によって型別に分けられますが、本稿では日本人に最も多く筆者もそれに該当する１ｂ型に話をしぼることにします。（注２）

ところで、ちょうど一年程前、ＴＶでさかんに「Ｃ型肝炎の検査を受けよう！」というコマーシャルが流れていたのをご記憶でしょうか。厚生労働省が肝炎の啓発普及に力を注いでいることもあり、全国各地でＣ型肝炎の説明会も催されていました。2015 年 2 月下旬、私は地方自治体の主催する市民向け公開講座に参加して肝臓専門医の話を聴きました。これまではインターフェロン（以下、IFN）という注射薬を使った、副作用が酷くて効果の低い方法しかなかったＣ型肝炎の治療に、効果の高い飲み薬の新薬が出ているという話です。帰り際には色とりどりのパンフレットを沢山もらい、Ｃ型肝炎の治療に希望の持てる時代が訪れたことを実感しました。

繰り返しますが、Ｃ型肝炎はその多くが医原性の、ありふれた病です。そしてそのウイルスは、

「沈黙の臓器」と言われる肝臓に潜伏して細胞を壊し続け、徐々に加速度を増しながら癌へと導くため、国をあげて「早期発見・早期治療」を呼びかけても不思議はないのです。しかしながら、今改めて「なぜそのタイミングで、それほど熱心に宣伝する必要があったのか？」「その時にその薬で治療すると、どうなったのか？」を考えると、私は少なからぬ違和感と背筋が冷えるような怖さを感じるのです。

これまでのＣ型肝炎の治療法

子どもの頃に受けた手術でＣ型肝炎に感染したと思われる私の肝臓には、ちょうどその頃から黄信号が点滅していました。6 年前にペグ-インターフェロン（以下、Peg-IFN）を使った治療を受けましたが、副作用の酷さに耐え切れず中断しています。その治療は、著効率が約 50%で、それ以前の治療法（IFN による、著効率 10-20%代）よりは進歩していました。（著効率とは、治療を最後まで受けた人のうち成功した人の割合で、ウイルス量が減った割合ではありません。）

しかし、IFN や Peg-IFN を使った治療には、発熱、痛み、脱毛、うつ症状など人によって様々な副作用が伴うのです。私の場合は血小板が減ってしまい横になっていても目が回るという症状に悩まされました。その後、Peg-INF に抗ウイルス剤を組み合わせて行う新しい治療法が次々に開発され、著効率は 70～80%代まで上がりましたが、時間が経っても血小板の数値が戻らなかった私はそれらの治療法に挑戦する気にはなれず、治療を棚上げしたままマレーシアでの生活を始めました。そして、そろそろ肝硬変の心配をするべき時期に差し掛かった時期に、「IFN や Peg-IFN を使わず、飲み薬だけで済む、より効果の高い新薬が現れた」という情報を得たのです。

新薬にまつわる「大人の事情」

2015 年の初頭、期待を胸に帰国し、最寄りの病院の肝臓専門医に相談したところ、2 つの選択肢を示されました。一つは当時使える唯一の INF フリー経口薬だった、アメリカのブリストルマイヤーズ社が開発したダグラスビル/アスナプレビルという薬の組み合わせ（以下、D/A 剤）を使うことであり、もう一つは将来出てくるより著効率の高い薬（後述のハーボニー）を待つことです。その先生は 2 つの選択肢のメリットとデメリットを説明した上で、患者の私が良く考えて決めるようにと言ってくれましたが、あまり前者を評価していないようでした。

ところが、セカンドオピニオンを聞くために、別の（たぶんもっと高名な）肝臓専門医も尋ねたときに勧められたのは、D/A 錠でした。私の病歴などをガイドラインに照らし合わせるとこの治療になるとチャートを示しながら説明されました。D/A 錠は著効率(効く人の割合)が 84.7%と高いこと、認可されているのですぐに使い始められること、医療費助成の対象にもなっていることが良いところでした。また、D/A 錠を作った製薬会社は、有名女優を使ったＴＶコマーシャル、講演会でもらった美しいパンフレット、ネットで「肝炎」を検索すると必ず出て来る良くできた情報サイト（注３）などのスポンサーにもなっているのでした。

最終的には、最初の主治医の奨め通り、ハーボニーを待つことにしたのですが、あとでよく調べてみると、D/A 錠には問題があることがわかりました。ウイルスの遺伝子型によっては効かな

いという問題です。しかし、たとえ効かなくても服用したら多剤耐性変異ができて他の薬は効かなくなってしまうので、よく調べてから用いることが必要です。また、国内の臨床試験で 62%(255 例中 158 例)に副作用が認められたこと、そこに薬剤性の肝障害を起こした中止例が含まれること、その後 4 名の死亡者を出していることもわかりました。にもかかわらず、この薬の使用に積極的な（一部）医師もいるらしく、薬剤耐性や副作用のリスクを説明されず理解しないでこの治療を始めたという患者の声や、「耐性検査は必要ない」とか「この薬を使わないなら他へ行け」といった暴言を吐いた医師の存在が、ネット上にはあがりました。さらに驚いたことには、日本肝臓学会の出している「C型肝炎ガイドライン」が短い間に書き換えられて、D/A 剤の使用基準が緩められていたのです（注 4）。私はこれらの事実を知って、いったん治療を先送りする選択をしたことを改めて喜び、胸をなで下ろしました。

期待外れだったマレーシアの私立病院

話は前後しますが、マレーシアで治療を受けることも、選択肢の一つとして検討しました。私が受診したのは、クアラルンプール市内でも屈指の、ホテル並みの豪華な施設、最新の医療設備、日本語通訳などを備えた私立総合病院です。英国で教育を受けたという肝臓専門医が、たっぷり時間をかけて説明をしてくれました。

しかし、日本語通訳を介してさえ、（日本語で聞いても難解な）医学の専門用語や内容を理解して治療方法を選択するのは、簡単なことではありませんでした。また、詳しいデータを盛り込んだ英文紹介状を提出したにもかかわらず、全ての検査をやり直しさせられたり、それらの検査のための薬で強烈な副作用に見舞われたり、スタッフ間の連携が悪くてケアレスミスが頻発したりと、治療を開始する以前の段階ですでに疲れ果てるほどストレスを感じました。

そして何よりも、私が加入している海外旅行保険では持病の治療がカバーされないため、すべてを自費で支払わねばならず、検査代だけでも相当な額になりました。さらに、C型肝炎の新しい薬（ハーボニー）にはその薬代だけでも田舎に家を変えるくらいの費用がかかると言うのですから、日本以外でこの持病の治療を受けるのは、私には無理なことを悟りました。

一粒 8 万円の新薬

C型肝炎の新しい治療薬、ハーボニー配合錠（ハーボニー）がアメリカのギリアド・サイエンシズ社から発売され、2015 年の秋から日本でも使えるようになりました。この薬は、一日一回の服薬で済む上に、副作用が少なく、著効率が 100%に近いため、「奇跡の薬」と呼ばれています。

（「大人の事情」について前述しましたが、このハーボニーが承認されてしまうと D/A 錠は使われなくなってしまう恐れがあるため、その前により多くの D/A 錠を売っておきたかったのだろうというのが私の推測です。これは一患者にしか過ぎない素人の私見なので、間違っていたらぜひご指摘をいただきたいと思います。）

ただし、ハーボニーの問題はその価格で、一錠が約 8 万円（アメリカでは約 13 万 5 千円/錠）

の薬を一回/日、12 週間服用するため、薬代だけで約 672 万円（アメリカでは約 1,130 万円）かかります。

そもそも、なぜ処方薬がこれほど高値になるのでしょうか？堤未果の著書によると、アメリカでは政府が薬価交渉権を持たないため、薬の値段は製薬会社が言い値で決めることができます。また、大手製薬会社は研究開発費よりも遥かに多くの費用を“マーケティング・運用管理費”にかけており、その収益の多くが消費者獲得のための広報活動や、自社に利益をもたらす法律を作らせるための政治献金、ロビイング活動に注ぎ込まれているのです。（注５）

アメリカの医療と保険制度

アメリカでは、病気になったらどうするか（どの医療保険に加入しておくか）も「自己責任」で決め、賄わなければなりません。自己負担ゼロの公的医療保険（メディケイド）もありますが、貯金を使い果たして「貧困ライン以下」にならなければ加入できないため、基本的には民間の医療保険に加入します。多くの場合は雇用主が保険会社と契約する企業保険に入りますが、失業したり、病気になって働けなくなった途端に、高額な自己保険に加入するか無保険者となるかの選択を迫られます。そのため、家計の 35%にも上る医療費を払いながら適切な医療を受けられなかったり、医療費が払えなくて破産に追い込まれる中間層が少なくないというのです。（注６）

2010 年 3 月、オバマ大統領はこの状況を打開するため、「医療保険制度改革法（通称オバマケア）」によって全国民に医療保険への加入（無保険者には罰金）を義務づけました。しかし、民間保険会社への規制は行わなかったため、会社側は保険料の値上げ、保険適用範囲の限定、免責額（保険がおりる前に支払わなければならない自己負担金）の増額などで対抗し、加入者側の負担はオバマケアの導入前より増えたそうです。また、オバマ大統領は同時に「より多くの人が公的保険に入れるように」とメディケイド（低所得者のための医療保険）の枠を緩めましたが、その費用請求には煩雑な事務手続きが必要で、国からの治療費支払い率が民間保険の 6 割と低いことから、医師や病院が患者の受け入れを拒否するようになったそうです。

日本の国民皆保険制度のありがたさ

それとは対照的に、日本には憲法二五条の「生存権」に基づいて作られた、公的な健康保険があるため、年齢や病状や資産などに関わらず、皆が平等に医療を受けることができます。その上、高額療養費や医療費助成の制度まであるため、どんなに大病をしても限度額以上の医療費は支払わなくて済むのです。これは同じく「保険」と言っても、企業の扱う商品としての「保険」とは質の異なる、国民に対する「社会保障」です。

通常、海外で長期間暮らす場合は、住民票を抜くことになるので健康保険に加入できず、民間会社の海外旅行保険に加入することが多いのですが、海外旅行保険では持病（慢性疾患）と歯科の治療はカバーしないため、慢性疾患の治療費は 100%自費で支払わなくてはなりません。そのため、海外で持病の治療が必要になると、その治療費が生活を揺るがす落とし穴になり得ます。

つまり、会社などの庇護の下にいない日本人が、個人として海外で暮らすためには、その居住

国から永住権でも得ない限り、日本の社会保障（健康保険）という素晴らしいセイフティネットを捨てて自力で賄うリスクを引き受ける必要があるということです。

日本の医療サービスの素晴らしさ

また、海外と比べると、日本の医療サービスは素晴らしいと思います。私がそう思う理由は、施設の豪華さや設備の立派さなど目で見てわかり易いところにあるのではなく、情報の伝達が間違いなくスムーズに行われること、院内やトイレなどが清潔に保たれていること、医師や受付やコメディカルスタッフなどそこで働く人たちが有能で親切で温かいことなどにあります。

これらソフト面の充実は、お金さえ出せばどこの国でもすぐに実現できるというものではありません。日本人の優れた資質（きめ細やかさ、高い職業倫理観など）、地域とのつながり、病院の経営理念や地方自治体、国とのかかわり方など目に見えない多くのことに支えられて来たのだと思います。逆に言うと、日本にいる間は「できて当たり前」と軽視しがちだったこれらのことが、（マレーシアに限らず）海外では「なかなか達成できない難しい課題」なのを知って驚くことが少なくないのです。

私たち日本人は、素晴らしい宝物を持ちながら、その意味や価値についてはあまり深く考えず、無自覚で無防備になりがちかもしれません。しかしこれからは、自分たちの宝物をしっかりと自覚して、大切に守りながら次世代へと引き継いで行くことが、必要なのだろうと思います。

＜参考文献・参考資料＞

注１；　NIDI 国立感染症研究所のＨＰより
http://www.nih.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/322-hepatitis-c-intro.html

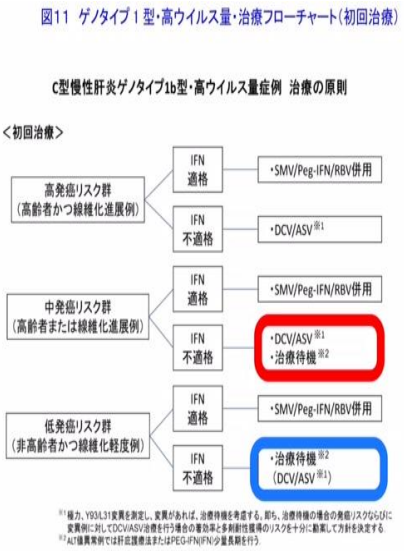
注２；国立研究開発法人 国立国際医療研究センター　「肝炎情報センター」のＨＰより
http://www.kanen.ncgm.go.jp/forpatient_hcv.html

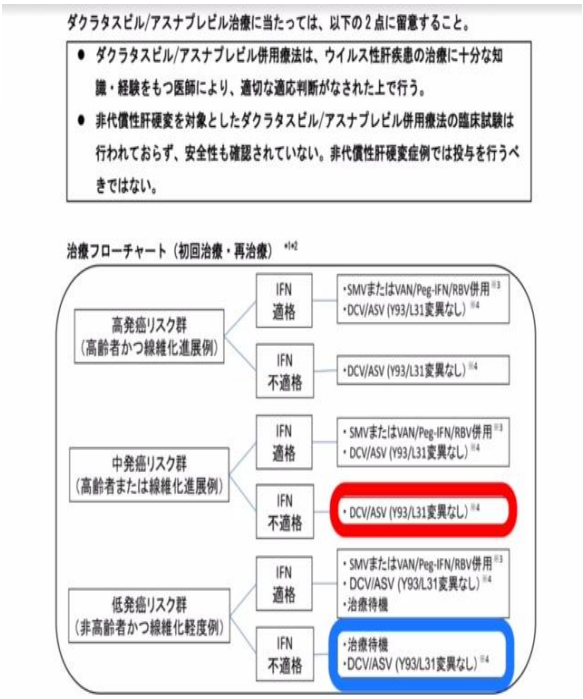
なお、Ｃ型肝炎には血中ウイルス量とウイルス中の遺伝子によって、1a/1b/2a/2b という型の違いがある。その中でも１ｂ型は、ウイルス量が多いためインターフェロンの効きが悪く、いわゆる「難治例」とされている。しかし、日本人感染者の約 70%を占め、筆者もこれに該当するため、本稿ではこの１ｂ型のみを取り上げて「C 型肝炎」としている。

注３；　ブリストルマイヤーズ社による、医師向けの肝炎の情報専門サイト「肝炎.jp」
http://www.kanen.jp/resource/1447944939000/kanen_open/index.html
ブリストルマイヤーズ社による、肝炎患者さんのための情報サイト「肝炎.com」
http://www.kanen-net.info/resource/1443060377000/kanennet/about/about.html

注４；日本肝臓学会の肝炎診療ガイドライン作成委員会編「Ｃ型肝炎治療ガイドライン」では、D/A 剤の治療は「十分な知識・経験をもつ医師により、適切な適応判断がなされたうえで行う」と明記している。また、これらのガイドラインでは、下記のように患者を発癌リスクの高い群、中程度の群、低い群に分けて、その治療法をチャート式に図示している。

2014 年 12 月版のチャート（下記、左側の図）と 2015 年 3 月版のチャート（下記、右側の図）を見比べると、「中発癌リスク群→インターフェロン不適格」（〇で囲んだ部分）については、2014 年 12 月版では「D/A 剤の治療または治療待機」の二択だったのが、2015 年 3 月版では「D/A 剤の治療」の一択になっている。また、「低発癌リスク群→インターフェロン不適格」（〇で囲んだ部分）については、2014 年 12 月版では「治療待機（D/A 剤の治療）」とカッコ付きだったのが、2015 年 3 月版では「治療待機または D/A 剤の治療」とカッコを外されて同等の選択肢に格上げされている。





2014 年 12 月版「Ｃ型肝炎治療ガイドライン」　　2015 年 3 月版「「Ｃ型肝炎治療ガイドライン」

注５；①堤未果『沈みゆく大国　アメリカ　＜逃げ切れ！日本の医療＞』集英社新書、2015 年
②堤未果『沈みゆく大国　アメリカ』集英社新書、2014 年

上記によると、（アメリカに限らず外資系の）大手製薬会社は、研究開発よりも営業やマーケティングに多くの費用を費やしている。（左側の図は②の 81 頁から引用した。）

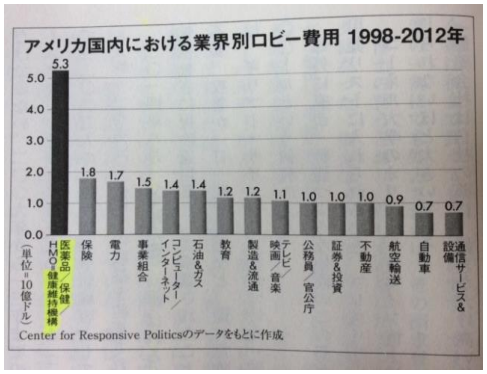
また、政治家に影響を与えるロビイング活動に、アメリカの医薬品/保健/健康維持機構は、他業界の 2.9～7.6 倍にも上る費用を注ぎ込んでいる。（右側の図は①の 159 頁から引用した。）

世界のトップ製薬企業の開発費 VS マーケティング費

（2013年、単位=10億ドル）

企業名	総所得	研究開発費	営業とマーケティング費	利益	利益率（%）
ジョンソン&ジョンソン（米）	71.3	8.2	17.5	13.8	19
ノバルティス（スイス）	58.8	9.9	14.6	9.2	16
ファイザー（米）	51.6	6.6	11.4	22	43
ロシェ（スイス）	50.3	9.3	9	12	24
サノフィ（仏）	44.4	6.3	9.1	8.5	11
メルク（米）	44	7.5	9.5	4.4	10
グラクソ・スミスクライン（英）	41.4	5.3	9.9	8.5	21
アストラゼネカ（英）	25.7	4.3	7.3	2.6	10
イーライリリー（米）	23.1	5.5	5.7	4.7	20
アッヴィ（米）	18.8	2.9	4.3	4.1	22

BBC, 'Pharmaceutical industry gets high on fat profits', 2014.11.6



注 6 ；堤未果『ルポ貧困大陸アメリカ II』岩波新書、2010 年

同書（113-114 頁）によると、オバマケア導入前のアメリカには 4,700 万人の無保険者がおり、その大半が公的保険の受給資格を満たさない（職を持ち、ある程度収入のある）中間層だった。また、2009 年に医療費が払えず破産を申請している国民は約 90 万人で、そのうち 75%が医療保険を持っているそうである。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

〜シーズン１「SM クラブの受付」〜

エピドード3：入り口

しすてむ❤きよたけ

Click して下さり、ありがとうございます。

初めて開いて下さった方。どうも、はじめまして。開いてビックリされた方もいるかもしれませんが…。

前回のエピソードでは、「みちのり」とし、「面接に至るまで」ついて綴っています。よかったら、そちらも…。

毎回読んでくださっている方。物好きですね。誤字脱字、起承転結ない綴りを読んでくださり、ありがとうございます。

今回のエピソードは、面接日のことを中心に綴ります。

ラインアップは、「1.　拠点から離れる」、「2.　心境が含まれた街」、「3.　まずは行ってみる！」、「4.　たどり着けない！」、「5.無知人の心境」、「6.　鞭あり面接」。〆は「7.決断のとき」でございます。

SM プレイ自体に興味ある方にとって本稿は、面白くないと思いますので、別のモノを読むか、お店へ行ってプレイをどうぞ！どの店に行ったらいいかわからない方は、ご連絡をいただけたらそれなりに考えます！

※これまでの登場人物「貴子」。この時期、「さん」付けで読んでいたので、当時の呼び方に戻します。

1.　拠点から離れる

駐車場があまりない街で、前日から駐車場を検索し、いくつか候補をあげておいた。遅刻をしないことは一般常識だが、僕は寄り道したくなったらついついしてしまう。しかし、今日は、貴子さんのメンツもある。ってことで、早目に出発をした。

この日は、体にシャツがじっとりと張り付くような蒸し暑さで、面接に行こうとする僕を引き止めているかのようだった。しかし、雨は降っておらず、天気が僕の背中を押しているかのようでもあった。

当時乗っていた、フロントフォークを長くした（前輪の位置が通常より前についている）ドラッグスター400cc のバイクに乗り、家を出た。

当時付き合っていた彼女も親も友人も、今から行く場所を知らなかった。特にいう必要もないとも思っていた。その反面、言わない方がいいとも思っていたからか、後ろ髪を引かれる思いだった。

思いの外、それは悪いものではなかった。夏のバイクの走行中にそっくりだった。湿って熱い風の中でも進めばわかる、爽快な風があるかのように。

2. 心境が含まれた街

街の駐車場に、予定よりもかなり早い時間に到着した。コンビニに寄っても持て余していた。それから、喫煙スペースに立ち寄り、3、4 本のタバコを吸うくらいの時間だった。颯爽と風を切って走っていたわりに「今なら帰れるかも？」そんな言葉もよぎったのだが、余裕もあった。

喫煙スペースには、一人でいる人が多いとか、携帯を触る人は誰とメールもしくは調べ物をしているのだろうとか、スーツ姿で電話をしている人やパソコンを開き座っている人が眼に入ると、仕事をしているのだろうかとか、いくつもの大きな袋を両手に持ち、スペース内をうろうろしている人の持ち物は全部拾い物だとか、自分の周りにいる人が眼に入るくらいに。

スペースの外側まで見ていた。カップルが手をつなぎ、仲良さげに歩く姿。あっちだこっちだとマップを見ながらうろつく観光客。そそくさと歩くスーツ姿の男たち。街中は、賑わいを見せていた。

どの光景も普段と変わらなかった。僕が、いつもと違うだけ。だから印象に残っていたのだろう。いつもなら、眼に入っていた彼らと同じように、何も気にせず過ごしているのだから。

今日の僕は、彼らとは何か違う感じがしていた。特別であるような感覚と、取り残されたような感覚。

しかし、そんな感覚どうでもいいやと思う節もあった。そもそも、周辺に居る人の心境を知る人なんて、いないし気にもしないのだから。僕がその時間にしていたメール相手も、これから入ろうとしている職場のことなんて知らない。人は全てを言わないものだ。僕も自分の周りにいる人の心境なんて知らなくていい。聞くなら、悟りでも開いたかのような風貌を装ってからしたら面白いだろうから、そうするつもりだが。（めんどくさいから、しないけど）

人はそれぞれ異なる心境をもって過ごしているのだから、そこは一致しているわけで、完全に彼らと違うわけでもない。みな、それぞれの思いを持ち、もしくは抱えたまま、街を歩いている（場合もある）。

それぞれ異なる歩みが集まる街中。それは当たり前のこと。そして、異なる歩を違和感なく過ごせることも、街の一つの顔なのだろう。

3. まずは行ってみる！

僕は「行こう！」と勢いがあった割に、急に尻窄みになっていた。僕が握りしめていたのは、貴子さんから教えてもらっていたイメージがつかない言葉、「変わった職場」だけだった。

何かを始めるとき、わからないから不安な気分になることだってある。そこから、新しいことに対し、挑戦や止めておくことだって、どちらを決めるかは自分次第だ。

そう思うと、やめておくことだってできたのになぜだか僕は、まずは行ってみよう、そこで頑張ってみようと思った。扉が開いたら僕は、進んでみる。あとは、流れに任せてそこでやってみるモノなのだろう（やったことで煙たがられる場合だってあるけど）。

余談

ちょっとだけ、巡り合わせの中で起きていることに触れてみます。

最近、何か始める際、「根拠」や「理由」を必要とされているような気がします。でも僕は、それより先に「やってみよう！」と思い進んでみます。僕にとっての「根拠」や「理由」は、「機会」そのものなのでしょう。

自分の経歴やできることを先に提示せず、相手とそれなりの巡り合わせで進んでいるのかもしれません。「機会」に乗るときは、僕の好奇心で選んでいることもあると思います。自分の能力に見合っているか見直さずに挑戦しているのかもしれません。

そうした、ある種の好奇心は、時として仇となることもあります。これまでの経験において、したことがなかった分野に入ると、これまでの状況や規範を知らずして進めてしまうのですから、崩すことや相手にお手間をとらせることだってあります。

しかし、自分で仇になっているかも！と思っていても、ここからバージョンアップがあるんじゃないか？と思うこともあります。一緒に考えてくれる人や別の楽しみを教えてくれる人がいることに気づくこともあります。そういう人たち助けられるから、「やってみよう」と思うのかもしれません。

勝手なことしすぎたかな…と思い反省することも多々有るのですが…。

いずれにせよ、どう転がっていくかなんてやってみないとわからない！でも、共になんとか始めてみよう！それ自体が、ドラマチックに展開していく。だから僕は、「機会」に乗っかってみること自体が、好きなのかもしれません。

僕が携わったSMクラブにも、乗っかってみて進み楽しむ人たちが居ました。なんせ、プロ童貞（素人童貞は、風俗で初体験をした人のことを言います）の僕がいきなり、SMクラブに入って、いつの間にか続けていたのですから。彼女たちの歩みなくして、僕はなかったと思います。

ま、僕のおかげやろ！馬鹿野郎！としゃしゃり出たくなることだってありましたけどね。でも、共に転がれて少しでもよかったと思う人（客も含めて）がいたなら、それで良かったと思っていたことに今更気づいたのでした。

ちょっとだけ触れると言いながら、長くなりました。

4. たどり着けない！

貴子さんから熟女だのマダムだのと紹介された雅さんから、「到着したら電話をくださいね」と言われていた。所定の場所を知らず、だいたいその辺りだろうと思う場所

から連絡をした。喫煙スペースが、まさにその辺りだった。

面接時間 10 分前。

「はい」、「あ、14 時から面接のお願いをしています、清武です。」「例の場所（ちゃんと場所の名前をおっしゃいました）ですか？」、「今、喫煙スペースなんですけど、そこはどう行ったらいいです…？」。

そんなこんなで、某ファーストフード店があるだの、某デパートがあるだの伝えてもらいながら、右だの左だのまっすぐだの。

「すんません。全然ないっす…」某店を背中側にして左手側に細い道だのお菓子屋さんだの教えてもらいながら…「いや、ないっす…。あのー僕、今某デパートの角で交差点です」、「行き過ぎてるわねー」ということで戻ることに。

「赤のＴシャツかしら？今見えたわよ」、「え？」会ったこともない上、僕は人混みの中、歩いていたのによく分かったな…と思った。

のちに僕も電話誘導しながら、迷っている客がどの人か見つけられるようになった。受付をこなし始めると屋外に出れば、目星をつけられるようになるものだった。

ようやく伝えられていた、全然難しい場所ではない、道に入った。扉を開け、体半分出し、前髪をポンパ風にあげている女性を見つけた。

雅さんに近づくまで、小走りで 15 秒くらい。かなり長く感じた。時間に遅れていないだろうか、この時間は仕事の邪魔になったのではないだろうか、とそわそわしていたのだろう。店まで、なかなかたどり着けなかったのも、僕がテンパっていたからだろう。

風俗業界、怖い男が出てくるんじゃないか、意外なことに店長は女性。これが、僕にどう映っていたかと言うと、もしかしたら…もしかしたら！これから怖い人が出てくるかもしれない。でも丁寧に案内してくれるから、そんなことあるわけがない！が…とはいえ、何をもって、そう認識したらいいのだろうか！？という心境だった。

僕がイメージする性風俗店店長と雅さんが発する「あ、いいわよ」とか「あ、そうなのね」と淡々として柔らかな口調よって、さらに僕を縮こまらせていたのだった。

5. 無知人の心境

扉の中に入った。内側にかけられている鈴のカランカランとなる音とともに扉が閉まった。

「…うわ。こわっ…僕どこに連れて行かれるのだろう…」とだけ思った。

薄暗く…人、ひとり分のスペース。そして、直ぐ、同じく狭い階段。しかも、急…階段の先は何か黒い布がかけられている…がそれ以外何も見えない。むしろ、それも少ししか見えない。

嘘だ！よく見えるものだってある！身体のラインが見事に映し出されるくらい、ぴ

っちりとした膝丈くらいのワンピース姿の雅さんだった。

フォルムがエロい！エロいけどシチュエーションが怖い！！エロくて怖い！シンプルにしてもややっこしい！！とか思いながら階段を上った。

ついて行くと次第に見える、次の扉。無店舗とわかっているけど、貴子さんも雅さんも店って言っている。扉の先で、何か行われているんじゃないかと疑い深くいた。

さらに、僕が何かされることはないよね？するとかもないよね？断るなら「ヤダ」しか出てこない僕だから逃げようがないかもしれないとまで思った。

でも…貴子が、「その日出勤だからお会いすると思います」って言ってたことだし…きっと、なんとかなる！！

思考の中に良き兆しが見えたころ、次の扉の中へ。また次のステージが出てきた。左側に黒のカーテン。右側もカーテン。右側は空いており、ソファーが置いてあった。

てっきりこっちに案内されるものだと思ったが、「靴を脱いで」と言われ、左側に案内された。そっちは何でしょうか！？淡々と仰っていますが、不安ですが何か！？と心の中で言っていた。

「靴は、どこにおきましょう？」、「そのまま置いてていいわよ」、「はい」。

面接に受かるかとかそんなことどうでもいい。「僕は今、どこに連れて行かれているのかだけでも教えてもらえたら、もう十分です」と思った、たった 30 秒くらいの出来事だった。

余談

「無知の歩み」とつけたよう、無知だから自分が知っている状況だけで想像を膨らませていたと思います。それが、ネガティヴに展開されていました。

でも、それだけではありませんでした。知らないことがよくないと思った体験ではなく、先に知っていることが全て良しかと問えば、そうだとも思わなかったという体験だったのです。

想像していくから、いろいろな創造もあります。芸術もそうかもしれないし、会話もそうかもしれない。なんなら人との関係だって、わからないから始まり、創造されていくような気がします。知らないということも大事なことなのかもしれません。知らずして出会うことから振り返ると、場所や人との出会いは、今ある状況の中で、創造されていくことがあるのでしょうか。あれこれイメージをもって、そうではないかもと気づき、進み始めた「受付」だったのですから。

これも、前述した余談と同じく SM クラブに居る人たちから気づいたことなので、おいおい。

6. 鞭あり面接

雅さんが、黒のカーテンを開けた。…うわ、女の人がいっぱい…。「お邪魔しまーす」。

雅さん以外に、4 人の女がいた。「こんにちはー」。「…」目線だけ向けられ、彼女たちは、そのまま戯れていた。

「どうぞ、狭いけどあそこの奥にでも座って」と雅さん。「あ、はい」。狭い部屋にもかかわらず、物が散らばりさらに狭くなった部屋の隅っこで、囲われたとしか言いようのないくらいの場所に、緊張しているくせにあぐらをかいて座ってしまっていた。

4 人のうち一人は、小さめの椅子に座り、足を組んで、頬杖ついてパソコンで何かをしていた。その他の人たちは、もう一つあ

るパソコンの周りにいて、ヤンキー座りや体操座り、正座をし、パソコンの前でなんだかんだお喋りをしていた。アニメか何かの話をしているようだったが、僕は興味がなかったからか知らない内容だったかで、何の話題で持ちきりだったのか入ってこなかった。

入って来たのは、僕の背後にぶら下がる鞭だった。あの時、こんなことを思っていた…「うわーー鞭だ！初めて見た…いろいろな色や形、長さがあるなー！あ？ここに居る人たちって…これを使うのか…使われているのか？…想像つかない…」

雅さんが、「お待たせ」と言って僕の左前に正座をして座った。僕も慌てて正座をした。

一般的なアルバイトの面接と同様、週に何回入れるか、何時くらいから来られるかなどを尋ねられた。週に 2、3 くらいであることを答え、月によっては、もっと入れる時もあるし、むしろ全く入られない週もあると加えた。

「ミカサさん、ちょっとお茶もらっていいかしら？」、「…あ、はい。どうぞ」。パソコンデスクの前に座っている女性は、どうやら「ミカサ」という名前らしい。

見た感じ 20 代。白っぽく、小さく花の絵柄が描いてあるワンピースを着ていた。どこかフェミニンな感じがし、柔らかい印象だが、ハスキーな声から、クールな印象も受ける。電話もあるし、あそこが受付のようだ。ということは…彼女は受付か…。

受付って男やと思ってたけど、女の人もいるんか！っていうか、男が出てこない…思っていた業界と違っていた。

「お茶どうぞ」。ミカサさんの烏龍茶 1.5 リットルのペットボトルから、『Hysteric Grammar』で黒のスカルが描いてあるマグカップに注がれたお茶を受け取った。頭上にぶら下がる鞭が気になり、お茶を飲んでいる場合でもなかった。こんな状況の中での面接が、初めてだったからだろう。

でも、話はいたってシンプルだった。受付の勤務は基本的に「通し」、「早番」、「遅番」の 3 形態。「通し」は、店が開く 12 時ー受付終了の 22 時（当時の時間）。12 時から予約が入っている場合は、その前に出勤。22 時から予約が入っている場合は、プレイが終わるまで。

「早番」と「遅番」の境目は、18 時。12 時から 18 時が「早番」、それ以降が「遅番」だ。

通しと遅番に入ると帰りの時間は、コースの時間によりけりということだ。給与は、時給 1000 円。それ以下もそれ以上もない。

余談

風俗店の HP に「受付時間 12 時ー22 時」と表記されているとします。この場合、22 時までにプレイを終了しないといけない！と思うかもしれません。多くのサービス店（飲食店をイメージすると分かりやすいかも？）の上記表記を見ると、店が閉まる時間が書かれているからかもしれません。

僕の知る限りの風俗店では、ラストの時間からスタート可能です。受付もキャストも、ラストにプレイが入ることを了解して各々の仕事に取り組んでいます。早く帰りたいと思っていても、場合によりますが、ラストであっても予約が入り、よかったなーと思うこともあります。

面接時、不規則になる大変さも想定しましたが、

実際には、その時間にできることを探すことができ（しない人もいると思いますが）、充実した深夜を過ごすことができます。

ここから能力と給与という観点から、店の紹介を。僕が働いていたところは、深夜手当てや残業手当などは一切ありません。どんだけできる仕事が増えたとしても、手当がつくことや昇級はありません。

でも、そんなわけでもありませんでした。僕は、ボスに無謀、かつ、何の意味があるのかわからない提案とお願いをし、ボスに同行させてもらい、すすきのに連れていってもらったことがありました（そのうち書きます）。

何の意味があるかわからないにもかかわらず、「いくらいるのか！？」と言われ、「自分が妥当だと思う金額をどうぞ！」ということで、交通費は出してくれることがありました。しかし、翌月手にした給与明細には、報酬として滞在していた時間給と何か上乗せの給与をいただいていたことを知りました。

実際、なんの手当てもなく、仕事も店自体と関係ない仕事もはいってくることや、ほぼ 24 時間体制になってしまうようなこともある職場ですし、体制が整っていないと言ってしまえばそうかもしれません。ですが、僕の体験からすると、そうだと言い切るには早い！そう思ったのでした。

もちろん、それぞれ組織や個人の理念によって、崩したくない何かがあると思います。それがあるから成り立つわけなので、大切なことだと思っています。僕が勤めていた店は、昔からの馴染みや恩を大事にする人たちがいたので、それらがあるから始まり、成り立っていました。

しかし、それだけで成り立っているわけではないということも知っておいたほうがいいとも思いました。親しみがあったり、平等に扱おうとしたりすることで、一人ひとりのよさが見えなくなってしまうこともありました。別の言い方をすれば、親しいしお世話になっている、もしくは、大変なときに頼った相手だからと言って、希望をなかなか言いにくい状況を、染まっていない僕は感じていました。

ボスも通常業務時間外に業務外のコトを頼みやすかったのかもしれません。それに対し、誰かだけに給与アップということをすると、贔屓しているようで気が引け、こそこそお金が動いていることもあったのかもしれません。

でも、受付はみな、良く動いている人にはプラスがあって良いと思っていました。

上記は、僕の体験後の振り返りで、ここからさらに考えたこともありました。平等にすることを中心に考えなければ、もしかすると結果として、受付だけでなく、キャストも働きやすい環境につながること、それは、客につながる何かなのではないかと。

僕が、ボスに提案をした経験では、理解を得ることはそう簡単ではなかったですが、かといって全く理解がないというわけではないということに気づけた始まりがあったので、他の人にもチャンスを！と思いました。そこで、他の受付にも、給与を出してもらうよう自ら言ってみるよう提案をするようになりました。その人たちには、好きでしていること、さらにスキルある分野がいくつかありました。そのうち書くと思います。

全て、うまくいったわけでもないですし、今の店の現状がどうなったのか細部までは知らないのですが、今でも彼らの、そして店のこれからを気にしてしまうような場所でした。

7. 決断の時

「ミカサさん、シフトいいかしら？」雅さんは、シフト表を手にしていた。「清武くん、いつから来れるかしら？」、「あーん？」。

返事をしようと思ったら、下の扉の鈴がカランコロンと鳴った。「あ、貴子ちゃんね」。1、2分後、「おー！久しぶり」、「あらーほんと久しぶりね、清武くん」。「おかえりなさーい」と他の人たち。彼女は、プレイから帰ってきたようだった。

しかし、あの時の僕は、彼女は海外旅行にでも行っていたのだと思っていた。大きな地味目のゴールド色スーツケースを持っていたからだった。だが、僕の後ろにもいくつものスーツケースが並べられていて、仕事カバンであると察し、「旅行帰り？」とは声にしなかった。

「ここでは、貴子だからねー」、「あ、うん。わかったー」名前を間違えないようにしようと思った。

「いつから来るのー？」、「今、清武くんに聞いてるところよー」。

面接だけど、何で働きたいとか、なぜここでとか、聞かれていない。雅さんと貴子さんの間で決まっていたことを、ここで知っただけだった。

リュックから手帳を出し、「7月10日」（くらい）を初出勤日に決定。

「それじゃー、10日に住民票を持ってきてね」、「はい。よろしくお願いします」、「よろしくねー清武くーん」、「うん！またねー。あ…お茶ご馳走さまでした…」「…」「みなさんお邪魔しました…よろしくお願いします…」、「…」。君たち、すっごく楽しそうに戯れていたじゃん！これじゃ、先行き不安じゃねーか！と思った。

靴を履いた。僕が1階のドアを出るまで、いや、見えなくなるくらいまで雅さんは、お見送りをしてくれていた。

僕は、来た道をさっさと歩き、喫煙スペースに戻った。

僕は、SMクラブの受付の入り口に簡単に、だけど、てんやわんやした心境で入っり、ここでやっていけるのかよ馬鹿野郎！という心境で出ていったのだった。

余談

本稿では、人名をアルファベットで表記する方が楽なのですが、彼女たちの名前は大事にしたいと思い、僕が勝手に名前をつけて綴っています。それは、彼女たちにキャスト名があるから始まること、関係が生まれることがあると思ったからでした。

そこで、キャスト名という本名ではない「名」が出てきたので、「匿名」という言葉を使って、本名を隠した名前だからこそ、事の始まりがあるということ触れてみます。

いきなりですが、店側は、女の子の本名を知っているのでスタートは「匿名」ではありません。言い換えれば、本名ではスタートは切らないことが当たり前とされています。この段階は、面接時

期にあたります。

採用が決まり、いよいよ「匿名」段階に入ります。名前の作られ方は、僕が知る限りの風俗店では、店が勝手に決める場合や店側と女の子の間で決めます。女の子が自ら名前を提案をして採用されること、その逆もあります。この段階が、キャスト名決定の瞬間です。

風俗嬢の場合は、名前ができたこと、「匿名」になったことで、公開可能になります（書類手続きは省いています）。「匿名」であるから公開でき、他の人ともかかわり始めることができます。

これらから僕は、「匿名」であるから始められること、ある意味、非公開であるから始まることもあると言えるでしょう。

そしてそれは、名前を隠しているけど、しっかりと「名前」があり、彼女たちは存在しているということだと思います。お店に所属しているけど店の人抜きで客と接する彼女たちですから、「匿名」から生まれる「名前」は、重要な看板だとも言えます。

本名にとらわれず、本名じゃないからこそ進む彼女たちと出会いから、人は、どこからスタートであっても、「名前」があることで社会に出られ、存在すること。それが、戸籍に登録されているという意味で本当であるか、そうではないかにこだわらなくとも、存在することができる社会があり、また、新しい名前を加えることで過ごせる個人もあるのだと思いました。

清武システムズも、そう名前をつけたから始まったことがあることに気づかされている最中です。こちらは、執筆者@短信で少し触れています。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

『清武システムズ限定コース解禁‼ロートーク about 熟女コースー』

綴り人/しすてむ・きよたけ

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。しすてむ・きよたけは、アイディアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。動いて、頼って、甘えるファシリテーター。

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

そうだ、猫に聞いてみよう No.3

小池　英梨子

前回のおさらい

前回までの連載では、猫流の「問題の本質の捉え方」を書かせていただきました。
おさらいすると・・・

☆問題の本質を立体的に捉えるポイント☆

①　悪者探しをしない

②　３つの視点で捉える

- ミクロな視点で見えているものを理解する
- メゾな視点で全体図を捉える
- マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす

③　背後ストーリーを理解する

以上３点のステップが猫流問題の捉え方でした。その中で**「①悪者探しをしない」「②３つの視点で捉える」**を書いてきましたので、今回は、「③背後ストーリーを理解する」ことをメインに書いていきたいと思います。ですが、その前に前回書きそびれてしまった活動を通じた学生の心理的変化や、大学猫活動の教育的意義について少しふれておきたいと思います。

学生の行動変化

2014 年 8 月, RitsCat の餌やりを観察していました。その日は学生４名で餌やりを行っていました。一回生は餌やりの最中，猫が気になり、至近距離で餌を食べる猫を観察しています。すると、猫も人が気になり，パッと食べるのを止め、餌皿から離れてしまいます。するとすかさず，一回生は餌皿を持って「もっとお食べ」と猫に近寄っていきます。それを繰り返して下級生の餌やりはどんどん移動していきます。

「もっとお食べ」という物理的な距離を縮めることで、心理的な距離も縮めようとする一回生の気持ちは，猫にはなかなか届きません。心理的な距離は逆に開いていってしまいます。一方，四回生の餌やりは，餌皿をおいてちょっと離れたところで雑談しながら見守っていました。すると猫も安心して，しっかり食べます。ちょっと休憩してもまた自分で戻って食べ始める。

この猫にとって安心な距離感を RitsCat の学生は無意識に学んでいくのでしょうか。この気づきを四回生に話すと，「確かに」と納得してくれました。ということは，意識して取っている行動ではないようです。でも確かに行動は変化しています。猫との関わりを通して，無意識下に学習している。一回生の行動は猫に対しもっと仲良くなりたい，なれるはずだという“共生”への憧れと自分と同じ感覚を抱いているはずだという“共感”の勘違いを含んだ行動のように感じます。対して，四回生の行動は過干渉にならず，無理に懐かせようとしません。人の感覚で見ると，興味が無い，冷たいなどと捉えられるかもしれませんね。人の願望でいえば、ポケットモンスターにおいてピカチュウがサトシの肩に乗るように，風の谷のナウシカの肩にキツネリスが乗るように，会話はできなくても一緒に冒険し，共に生き共に感じるような，絆で結ばれた関係性に憧れます。しかし，実際は自分の価値観を押し付けず、相手の価値観や世界観、距離感を尊重した行動を取れるようになるという事が必要で、それは対動物だけでなく人間同士の関係においても重要な要素だと思います。これが、日常生活にも般化するためには、こういっ

た無意識の行動変化をフィードバックし、意識化する手伝いをしてくれるような先輩や顧問がたとしたら、大学猫活動を教育的意義を持つ素晴らしい学びの場にすることもできるのではないかと感じます。

背後ストーリーを理解する

猫の問題なんて餌やり禁止したらおしまいでしょ。本当にそうでしょうか。それでいのでしょうか。今起きている現状の問題点だけに焦点を当て判断するのではなく、こういった現状に至るまでの歴史的な経緯を理解することが問題の本質を捉える上で重要なポイントです。餌やりを禁止する理由は大きく分けて２つ。１つめは、餌をあげるから猫が集まり、繁殖し、増える。というもの。もう１つは、ペット以外の生き物にむやみにえさを与えるべきではない。という理由です。

では、猫の背後巣ストーリーを頭に入れてから上記の理由を再検討してみたいと思います。猫の歴史をさかのぼれば、外国から渡ってきた動物であり日本古来の野生動物ではないことが分かります。野生動物であればむやみな干渉や餌付けはNG ですが、猫は事情が違います。また、ノラ猫の問題をさかのぼれば、そもそも猫を捨てた人に大きな問題があります。また、捨て猫は立派な愛護動物遺棄であり犯罪ですが、それを取り締まらなかった警察や行政、施設管理者の問題もあります。それを今現在、餌を与えている人と、猫にすべての責任を負わせることは問題の本質を捉えているとは言い難い。

猫が抱えている背後ストーリーを理解することによって、より現状が見えてくると考えられる・「猫に餌をやらないでください」という看板をよく目にすることがあった。だが、最近は「猫に餌をやるなら不妊手術をしてください」や「餌をやる時は後片付けまで」といった看板や「猫の遺棄虐待は犯罪です」といった看板を目にする機会が増えたと思う。一見同じような内容でも、その言葉が持つメッセージは大きく違いますね。

さて、３回の連載に渡って長々と、どんなふうに問題を見ているのかを書いてきました。本当はやっとここから、具体的なエピソードを綴っていきたいと思っていました。ですが、諸事情によりしばらくは仕事に専念することになりました。したがって、連載は、しばらく休載させていただきます。始まったばかりなのに申し訳ありません。経験を積んでパワーアップして対人援助学マガジンに帰ってきたいと思います！次の頃にはもっと、こう短く簡潔に文章をまとめられるようになりたいです（笑）

では、読んでくださった皆様ありがとうございました！また、紙面でお会いできる日を楽しみにしています。

小池英梨子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2015 年立命館大学応用人間科学研究科修了
現在は、公益財団法人どうぶつ基金に所属。
・・・

題「FAX と猫」

※連載とは何の関係もありません。

東成区の昭和・思い出ほろほろメモ

絵と文：柳たかを
（マンガ家）

「『対人援助マガジン』にあの作品を掲載しませんか？」ある日、本誌の団編集長からそんなメールをもらいました。

（あの作品）とはわたしが 10 年以上前、自分の HP で毎週 2 ～ 3 本ずつアップロード連載していた 4 コマ漫画『東成区の昭和』自分史漫画のことです。

申し遅れました、柳たかをと言います。

私の幼少期、子供の多い時代でした。当時の男の子のおもな遊びは、三角ベース、べったん（めんこ）、ベーゴマ

昭和の遊び「胴馬」

（禁止する地域も）、ラムネ（ビー玉）、コマ回し、胴馬（集団遊び）などでした。体をぶつけあうより、絵とお話が好きな私は、どちらかというとおとなしい子供だったと思います。

近所に 2 歳年上の聴覚障害者の I 少年がいました。いつも僕らの集団遊びをうらやましそうに遠くから眺めていましたが、ある日彼をひどく怒らせる差別的事件がありました。

手指で（聾唖）を意味するサインを送った人がいたのです。

怒る I 君は日頃から、同じようなイジメにあっていたのだと思います。

怒るのは当然です。

意味をしらない私もまねたら、I 君が激怒してつかみかかってきました。

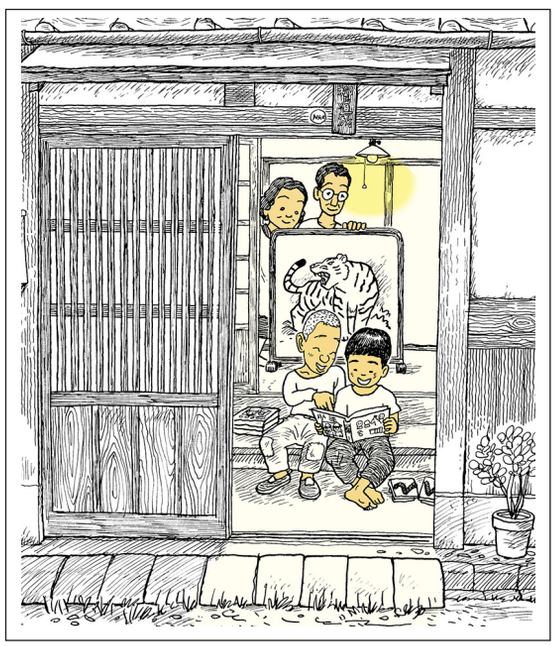
たまたま I 君の肉体労働者の父親が帰宅の途中でした。

その場面を見た為、父親は激怒しイジメ側の私は目から火花が出るほど石のように固い拳骨を一発頭にもらいました。

でも、その事件をきっかけに I 君と急接近しました。

彼の楽しみは漫画を読むことだったのです。夕食のすんだ頃、私の家にマンガ本を数冊もって訪ねて来て、二人で玄関に座り、無言で一緒にページをめくりました。

I 君の「ううう…フフフ」というううめくような笑い声。



聾唖者の I 君と玄関で漫画を読んだ

彼の体温と匂いを感じながら、I 君がとても癒されているのが伝わってきました。

同時に私もしびれるような満ち足りた感動を味わったのです。

この経験から心が通じ合うのは明快に分析する言葉よりも、互いのエネルギーを感じあえるほど近くに身体を寄せ、同じ方向を向いて共にすごす時間を持つほうが効果があると思うようになりました。

『東成区の昭和・思い出ほろほろメモ』は、そんな幼少時代を過ごした昭和の時代を忘れたくなくて描いていった四コマストーリー漫画です。

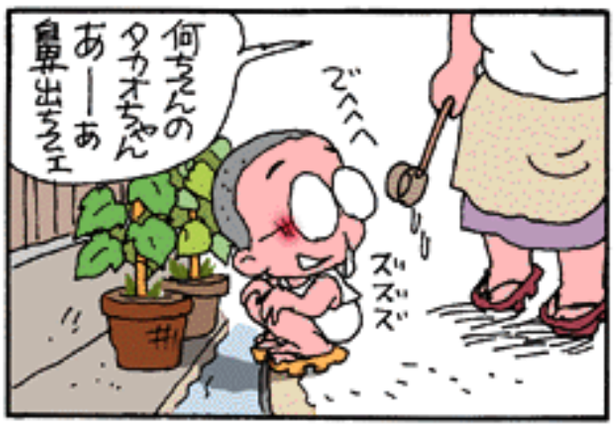
やぶにらみ日記

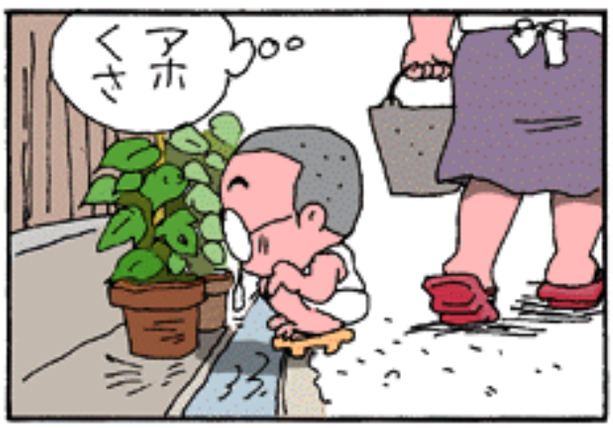
New！東成区の昭和(1)

New！東成区の昭和(2)

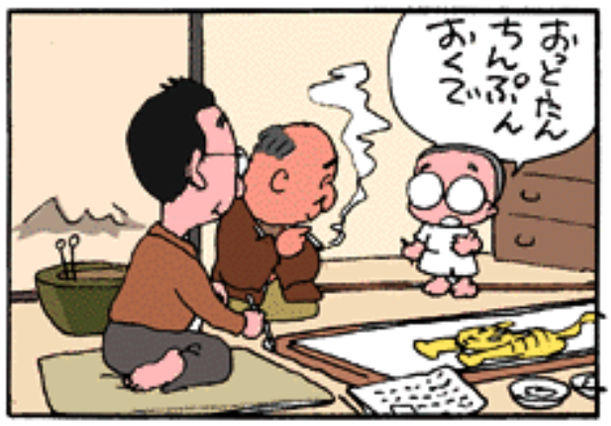
やぶにらみ日記

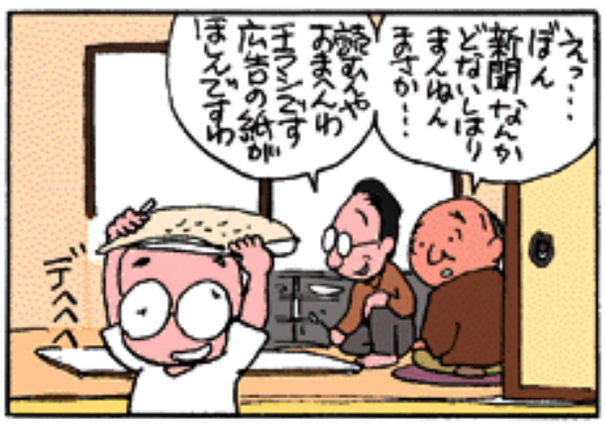
New！東成区の昭和(3)





New！東成区の昭和(4)





やぶにらみ日記

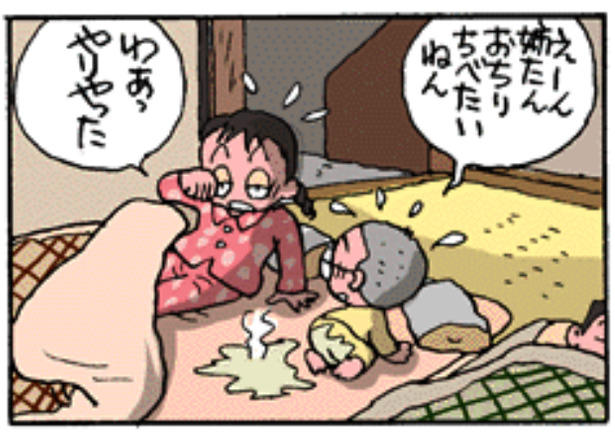
New! 東成区の昭和(5)

やぶにらみ日記

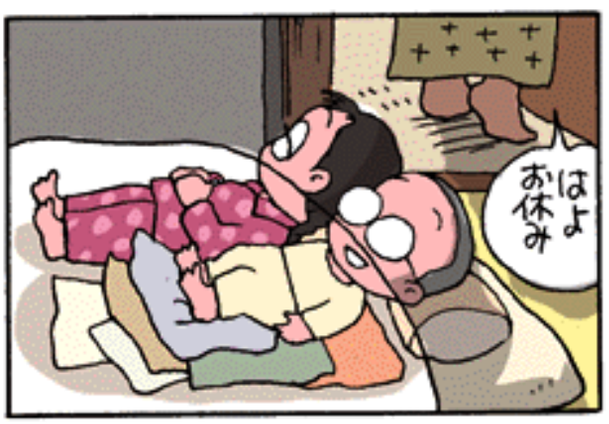
New! 東成区の昭和(6)

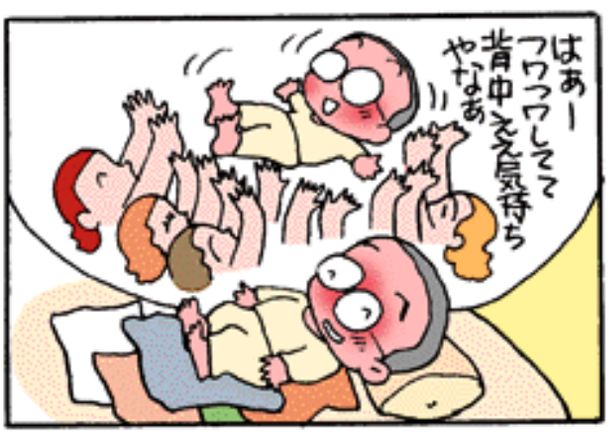
やぶにらみ日記

New!東成区の昭和(7)



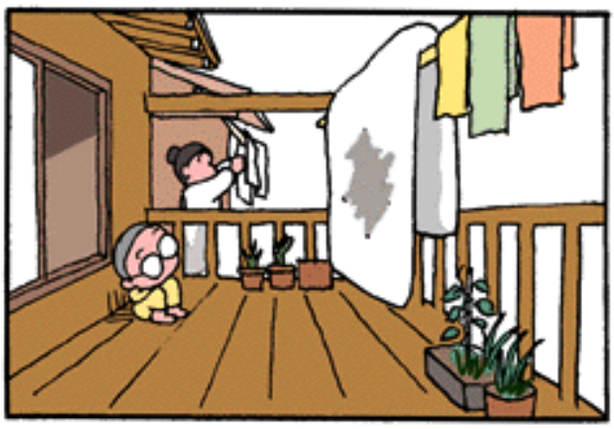
New!東成区の昭和(8)

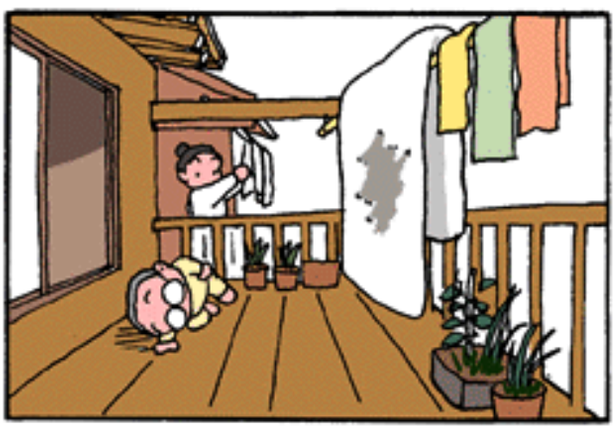




やぶにらみ日記

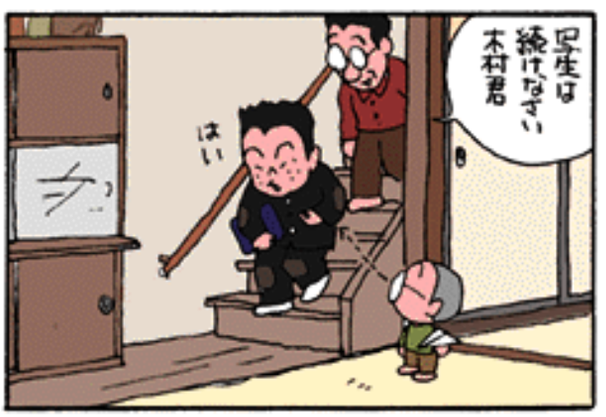
New!東成区の昭和(9)





やぶにらみ日記

New!東成区の昭和(10)



やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(11)

New！東成区の昭和(12)

やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(13)

New! 東成区の昭和(14)

編集後記

編集長（ダン シロウ）

★今号から新連載の柳たかを氏は、四〇年近い友人の漫画家だ。漫画家集団「ぼむ」の月例会で延々と出会い続けているメンバーの一人。

平成が四半世紀以上過ぎた現在、昭和の団塊世代はとっとと退場願いたいと、若い世代から追い立てられていそうだが、昭和には良いものもたくさんあった。東南アジアの国々の下町に行くと、懐かしさいっぱいになる世代の私にとって、あの時代も又、記憶に残し、伝えるべきことは記録しておきたい気がする。

そんな思いにピッタリの素材を、彼がかつて描き続けていたのを思い出した。ローカルがグローバルに繋がっていると言うが、本当にそう思える体験をこのマンガで楽しんで貰いたい。

★「猫」の連載が今号で中断する。以前にも類似のことがあったが、組織に属して活動することと、個人として発言することとの折り合いは簡単ではない。無理を強いるのではなく、成長して、適正発信のデザインも考えられるキャリアを身につけて再開されると良いなと思う。

★楽しんで購読していた文芸誌「エンタクシー」が休刊になった。月刊「クーリエジャポン」も来年二月号で、印刷誌の寿命は終えて、デジタル　コンテンツ有料配信誌になる。愛読誌が消えてしまうのは、思いがけず自分より若い知人が亡くなったことを耳にした時にも似て無常感が漂う。

何事も永遠ではないのは分かっているはずだが、つい勘違いして日常を過ごしていることに気付かされる。やりたいことは今しておこう。

会いたい人には、今会っておこう。無常はお互い様だからね。

編集員（チバ アキオ）

子どもといると話しかけられる。「何歳？」「頑張って歩いているね！」「ばいばーい！」自然と会話が始まる。おじいちゃん、おばあちゃんも話しかけてくる。若い世代も「かわいい！」と声をかけてくる。同世代でも同じところで遊んでいると会話が始まる。子どもが生む良循環な流れは自然とはじまる◆子どもの声が騒音！と市街地での子どもが集まる施設が苦情に対処している。京都にも子どもが利用する基幹となる福祉施設において、子ども用のスペースを作ったけれども近隣からの苦情が…ときく。自分が勤めるところでも子どもの遊べる屋外のスペースとして設計された場所は結局一度も使われず 12 年が過ぎている◆3S を徹底して実践している企業への見学研修に行く機会があった。鉄を扱うその会社では作業での「騒音」はつきもの。周りは住宅地。それでも、過去にはあった苦情が現在はないそうだ。そのきっかけになっていることが 2 つあるそうだ。一つ目は近隣地域の清掃である。週に2回どんな繁忙期でも実施している。現在ではお礼の声をかけられたり、お礼の手紙が届いたり。そして、清掃の範囲を少しずつ広げているそうだ。二つ目は徹底した防音・断熱対策である。そのために建物を改装したことだそうだ。もちろん 2 重サッシを採用。リーマンショックの仕事がない時期に借金をしてでも社員に仕事を与えるために自前でしたそうだ。仕事がないなら、自分たちで作り、社員の首を切らずに堪えたそうだ◆北欧では保育所等の新規設立にも反対運動は少ないという話を聞いた。その一因に厳しい寒さ対策の家づくりがベースにあるそうだ。断熱効果の狙った建物はそのま

ま同時に防音効果にもつながるのである◆私が引っ越して間もないころ隣の家のおばあちゃんに声をかけられた「なるほど、通りでにぎやかな声がするわけだ」といわれた。私は「うるさいですよね、すいません」と謝った。するとそのかたは困った表情をされて「…そういう意味じゃないのよ、にぎやかで元気が出るわよ」とにこり。一瞬、その方の表情を曇らせてしまったことをしてしまい申し訳なかったことをよく覚えている◆正しい答えがあるわけではない。けれども、先日伺った研修でのお話を思い出した。ルールでこうしてください！ではなく、ひとつひとつの案件に関わっていく。その中で、何か違う状況を生むことが可能になることがある、そう私は受け取ったお話だった◆何に関して骨を折り、何に関して骨惜しみをするのか？どちらを向いて仕事をしているかでおのずと決まってくるだろう。対人援助学マガジン自体がどちらを向いているのか？それは明快であり、一つだけではなく、でもそれらの方向性は同じであるように編集をしながら思う。

編集員　オオタニタカシ

早いもので、もう 23 号です。10 号から編集員に加わりましたので、関わってからの期間の方が長くなりました。創刊からはまもなく 6 年。ひとつのことを続けることはそう容易ではありませんが、今のところこのマガジンが続けられなくなる要素は見当たりません。打ち切りの心配がない中、今後どう続けていくのか、新しい試みや展開にも思いを向けられるのが、なんだか贅沢です。個人的に、面白そう、やってみたいと思っている企画が 2 つあります。

1 つは前に一度やった「対談」です。多彩な執筆者がいるマガジンですから、執筆者同士が出会うことで起こる化学反応への期待があります。また、執筆、編集、発行が全て Web で完結しているマガジンで、あえて対面の場を持つ、あえてアナログに対話することの意義もあるのではないかと考えています。ただ、それぞれお忙しく、お住まいも日本各地に渡る執筆者陣ですので、対談の設定が目下一番のハードルです。でも、またやりたいです。

もう 1 つは「リレー連載」です。ある特定のテーマについて、毎号どなたかに、自分が思うことを書いてもらうという企画です。多様なテーマが取り上げられているマガジンですが、あえて共通のテーマを設けることで共通する部分や特異性が浮かび上がって面白いのではないか、と発想しました。単純に、「あの人にこのテーマで話をしてほしい！」という動機もあります。ただ、みなさん通常の連載を抱えておられるので、負担としてどうなのかな…というのが踏み出せない理由の 1 つです。

考えたことが形になるのかならないのか。そこはそれほどこだわってはおらず、必要なものは適当な機会に形になるのだろうと気長に考えています。

■ご意見･ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻23号

第6巻　第三号

２０１５年１２月１５日発行

http://humanservices.jp/

第24号は2016年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2016年2月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

ある月刊誌に一年間、映画のイメージイラストを描いて、それに短文を付ける仕事をしていた。

映画は趣味だから、楽しい仕事だった。掲載がカラーというのでモチベーションが上がった。新聞ではなかなかカラー漫画など載せてもらえない頃で嬉しかった。

評判がどうだったかさっぱり分からないが、ややマニアックな映画の選択になったのは、若気の至り。

一年できっちり終わってしまった理由はそれかもしれないと気がつくのは、随分後のことだ。

ちなみに、このイラストの映画だが、全く思い出せない。それくらいマニアックだった。いやいや、覚えてないんじゃマニアじゃない。

2015/12/5　団士郎